

破れぬ 地のうちにもろもろの民のなかにて遺るものは橄欖の樹のうたれしのちの果の如く葡萄の收穫はてしのちの實のごとし

これらのもの聲をあげてよばはん エホバの稜威のゆゑをもて海より歎びよばはん この故になんぢら東にてエホバをあげめ海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあげむべし われら地の極より歌をきけりいはく榮光はたゞしきものに歸すと

われ云らく我やせおとろへたり我やせおとろへたり 我はわざはひなるかな 欺騙者はあざむき欺騙者はいつはりをもて欺むけり 地にすむものよ恐怖と陷阱と罾とはなんぢに臨めり おそれの聲をのがる者はおとしあなに陥りおとしあなの中よりいづるものは罾にかゝるべし 是は高處の窓ひらけ地の基ふるひうごけばなり 地は碎けにくだけ地はやぶれにやぶれ地は搖にゆれ 地はゑへる者のごとく踏きによるめ假面のごとくふりうごくその罪はそのうへにおもく遂にたふれて再びおくることなし

その日エホバはたかき處にて高きところの軍兵を征め地にて地のもろもろの王を征めたまはん かれらは囚人が阱にあつめらるゝごとく集められて獄中にとざされ多くの日をへてのち刑せらるべし かくて萬軍のエホバ、シオンの山およびエルサレムにて統治めかつその長老たちのまへに榮光あるべければ 月は面あからみ日ははちて色かはるべし

第二十五章

エホバよ汝はわが神なり 我なんぢを崇めなんぢの名をほめたまへん 汝さきに於ける事をおこなひ 古時より定めたることを眞實をもて成たまひたればなり なんぢ邑をかへて石堆となし 堅固なる城を荒墟となし 外人の京都を邑とならしめず永遠にたつることを得ざらしめたまへり この故につよき民はなんぢをあげめ暴びたる國々の城はなんぢをおそるべし 是はなんぢ弱きものの保岩となり 乏しきものの難のときの保岩となり 雨風のふききたりて垣をうつごとく暴ぶるものの荒きたるときは避所となり 熱をさくる

蔭となりたまへり なんぢ外人の喧嘩をおさへて早ける地より熱をとりのぞく如くならしめ暴ぶるものの凱歌をとどめて雲の陰をもて熱をとどむる如くならしめたまはん

萬軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥たるものをもて宴をまうけ 久しくたくはへたる葡萄酒をもて宴をまうけ 隨おほき肥たるもの久しくたくはへたる清るぶだう酒の宴なり 又この山にてもろもろの民のかぶれる面帳ともろもろの國のおほへる外帳をとりのぞき とこしへまで死を吞たまはん 主エホバはすべての面より涙をぬぐひ 全地のうへよりその民の凌辱をのぞき給はん 此はエホバの語りたまへるなり

その日此如いはん 此はわれらの神なり われら俟望めり 彼われらを救ひたまはん 是エホバなり われらまちのぞめり 我儕そのすくひを歎びたのしむべしと エホバの手はこの山にとどまり モアブはその處にてあくたの水のなかにふまるゝ薬のごとく蹂躪られん 彼そのなかにて游者のおよがんとして手をのばすが如く 己が手をのばさん 然どエホバその手の詭計とともにその傲慢を伏たまはん なんぢの垣たかき堅固なる城はエホバかたぶけたふし 地におとして塵にまじへたまはん

第二十六章

その日ユダの國にてこの歌をうたはん われらに堅固なる邑あり 神すくひをもてその垣その藩とやすきをもて心志かたき者をまもりたまふ 彼はなんぢに依頼めばなり なんぢら常盤にエホバによりたのめ 主エホバはとこしへの巖なり たくきに居るものを仕しそびえたる城をふせしめ 地にふせしめて塵にまじへ給へり かくて足これをふまん 苦しむものは足にて之をふみ 貧しき者はその上をあゆまん 義きものの道は直からざるなし なんぢ義きものの途を直く平らかにし給ふ

エホバよ審判をおこなひたまふ道にてわれら汝をまちのぞめり われらの心はなんぢの名となんぢの記念の名をしたふなり わがこゝろ夜なんぢを慕ひたり わがうちなる靈あしたに汝をもとめん 是は汝のさばき

〇 地におこなはるゝとき世にすめるもの正義をまなぶべし 一〇 悪者はめぐまれるれども公義をまなばず直き地にありてなほ不義をおこなひエホバの稜威を見ることをこのます

二 エホバよなんちの手たかく擧れどもかれら顧みず然どなんちが民をすくひたまふ熱心を見ればちをいだかん火なんちの敵をやきつくすべし 三 エホバよ汝はわれらのために平和をまうけたまはん我情のおこなひしことは皆なんちの成たまへるなり 四 エホバわれらの神よなんちにあらぬ他の主ども義にわれらを治めたり然どわれらはたゞ汝によりて汝の名をかたりつけん 五 かれら死たればまたいきす亡霊となりたればまた復らずなんちかれらを糺してこれを滅ぼしその記念の名をさへ悉くうせしめたまへり 六 エホバよなんちこの國民をましたまへり此くにびとを増たまへりなんちは尊ばれたまふなんち地の界をことごとく擴めたまへり

七 エホバよかれら苦難のときに汝をあふぎのぞめり彼等なんちの懲罰にあへるとき切になんちに禱告せり 八 エホバよわれらは孕める婦のうむとき近づきてくるしみその痛みによりて叫ぶがごとく汝のまへに然ありきわれらは孕みまた苦しみたれどその産るところは風ににたりわれら救を地にほどこさず世にすむ者うまれいでざりき 九 なんちの死者はいきわが民の屍はおきん塵にふすもの上醒てうたうたふべしなんちの露は草木をうるほす露のごとく地はなきたまをいださん

一〇 わが民よゆけなんちの室にいり汝のうしろの戸をとちて忿恚のすぎゆくまで暫時かくるべし 視よエホバはその處をいでて地にすむもの不義をたゞしたまはん地はその上なる血をあらはにして殺されたるものをまた掩はざるべし

第二十七章 一 その日エホバは硬く大なるつよき剣をもて疾走るへびレビヤタン曲りうねる蛇レビヤタンを罰しまた海にある鱷をころし給ふべし 二 その日如此うたはんうるはしき葡萄園あり之をうたへよ 三 われエホバこれを護りをりをり水そそぎ

夜も置もまもりて害ふものあらざらしめん 我にいきどほりなし願はくは荆棘のわれと戦はんことを然ばわれすゝみ迎へて皆もろともに焚盡さん 寧ろわが力にたよりて我とやはらぎを結べわれと平和をむすべし 後にいたらばヤコブは根をはりイスラエルは芽をいだして花さきその實せかいの面にみちん 四 ヤコブ主にうたるゝといへども彼をうちしもの主にうたるゝが如きことあらんやヤコブの殺さるゝは彼をころしゝもの殺さるゝが如きことあらんや 汝がヤコブを逐たまへる懲罰は度にかなひぬ東風のふきし日なんちあらし風をもてこれをうつし給へり 斯るがゆゑにヤコブの不義はこれによりて潔められんこれに因てむすぶ果は罪をのぞくことをせん 彼は祭壇のもろもろの石を砕けたる石灰のごとくになしアシラの像と日の像とをふたゝび建ることなからしめん 堅固なる邑はあれてすさまじく棄去れたる家のごとくまた荒野のごとし 積このところにて草をはみ此所にてふし且そこなる樹のえだをくらはん 二 その枝かるゝとき折とらる婦人きたりてこれを焼んこれは無知の民なるが故に之をつくれる者あはれますこれを形づくれるもの恵まざるべし 三 その日なんちらイスラエルの子輩よエホバは打落したる果をあつむることく 大河の流よりエジプトの川にいたるまでなんちらを一つ一つにあつめたまふべし 四 その日大なるラッパ鳴ひゞきアツスリヤの地にさすらひたる者エジプトの地におひやられたる者きたりてエルサレムの聖山にてエホバを拜むべし

第二十八章 一 酔るものなるエフライム人よなんちらの誇の冠ばわさはひなるがな酒におぼるゝものよ肥たる谷の首にある澗んとする花のうるはしき飾はわさはひなるかな 二 みよ主はひとり力ある強剛者をもち給へりそれは巻をまじへたる暴風のごとく壊りそこなふ狂風のごとく大水のあぶれ漲ることく烈しくかれを地になげうつべし 三 酔るものなるエフライム人のほこりの冠は足にて踐にじられん 肥たる谷のかしら

にある洞んとする花のうるはしきかざりは夏こぬに熟したる初結の無花果のごとし見るものこれを見て取る
 手おそしと呑いるゝなり 三〇 その日萬軍のエホバその民ののこれる者のために榮のかんむりとなり美しき冠とな
 り給はん 六一 さばきの席にざするものには審判の靈をあたへ軍を門よりおひかへす者には力をあたへ給ふべし
 然どかれらも酒によりてよろめき濃酒によりてよろほひたり祭司と預言者とは濃酒によりてよろめき
 酒にのまれ濃酒によりてよろほひ 而して黙示をみるときによろめき審判をおこなふときにも瞞けり すべて
 膳には吐たるものと穢とみちて潔きところなし
 かれは誰にをしへて知識をあたへんとするか 誰にしめして音信を曉らせんとするか 乳をたち懐をはなれ
 たる者にするならんか 一〇〇 それは誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度にのりをくはへ度
 くはへ此にもすこしく彼にもすこしく教ふ
 二〇 このゆゑに神あだし唇と異なる舌とをもてこの民にかたりたまはん 二〇一 曩にかれらに言たまひけるは此は
 安息なり疲困者にやすみをあたへよ此は安慰なりとされど彼らは聞ことをせざりき 二〇二 斯るがゆゑにエホバの
 言かれらにくだりて誠命にいましめをくはへ誠命にいましめをくはへ度にのりをくはへ度にのりをくはへ此に
 もすこしく彼にもすこしくをしへんこれによりて彼等すゝみてうしろに仆れそこなはれ宮にかゝりて捕へらるべし
 二〇三 なんぢら此エルサレムにある民をさむるところの輕慢者よエホバの言をきけ 二〇四 なんぢらは云り我ら
 死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり 漲りあふるゝ禍害のすぐるときわれらに來らしそはわれら虚偽をもて
 避所となし欺詐をもて身をかくしたればなりと 二〇五 このゆゑに神エホバかくいひ給ふ 視よわれシオンに一つの
 石をすゑてその基となせりこれは試をへたる石たふとき隅石かたくするたる石なりこれに依頼むものはあわつ
 ることなし 二〇六 われ公平を準繩とし正義を錘とす 斯て是はいつはりにつくれる避所をのぞきさり水はその隠
 れたるところに漲りあふれん 二〇七 汝らが死とたてし契約はきえうせ陰府とむすべるちぎりは成ることなしされば

漲り溢るゝわざはひのすぐるとき汝等はこれに踐たふさるべし 二〇八 その過るごとになんぢらを捕へん朝々
 すぎ置も夜もすぐこの音信をきゝわきまふるのみにても情きをるなり 二〇九 その状は床みじかくして身をのぶる
 ことあたはず食せまくして身をおほふこと能はざるが如し 二一〇 そはエホバ往昔ベラヂムの山にて起たまひしが
 ごとくにたちギベオンの谷にて忿怒をはなちたまひしが如くにいきどほり 而してその所爲をおこなひ給はん
 奇しき所爲なりその工を成たまはん異なる工なり 二一一 この故になんぢら侮るなかれ恐くはなんぢらの縲縛きび
 しくならん 我すでに全地のうへにさだまれる敗亡あるよしを主萬軍のエホバより聞たればなり
 二一二 なんぢら耳をかたぶけてわが聲をきけ懇ろにわが言をきくべし 二一三 農夫たねをまかに何で日々たがへし
 日々その地をすきその土塊をくだくことのみを爲んや 二一四 もし地の面をたひらかにせばいかで豊粟をまき馬片
 の種をおろし小麦をうねにうる大麥をさだめたる處にうる粗麥を畔にうるざらんや 二一五 斯のごときはかれの神
 これに智慧をあたへて教へたまへるなり 二一六 けしは連枷にてうたす馬片はそのうへに車輪をきしらせず豊粟を
 うつには杖をもちひ馬片をうつには棒をもちふ 二一七 麥をくだくか否くるまにきしらせ馬にふませて落すことは
 すれども斷ずしかするにあらずこれを砕くことをせざるべし 二一八 此もまた萬軍のエホバよりいづその謀略は
 くすしくその智慧はすぐれたり

第二十九章
 一 あゝアリエルよアリエルよあゝゲビデの營をかまへたる邑よとしに年をくはへ節會まはりきた
 らば 二 われアリエルをなやまし之にかなしみと歎息とあらしめん 彼をアリエルのごとき者とな
 すべし 三 われ汝のまはりに營をかまへ保砦をきづきて汝をかこみ櫓をたてゝなんぢを攻べし かくてなん
 ぢは卑くせられ地にふしてもいひ塵のなかより低聲をいだしてかたらん 汝のこゑは巫女のこゑのごとく地
 よりいで汝のごとばは塵のなかより囁づるのごとし
 然どなんぢのあたる群衆はこまやかなる塵の如くあらぶるもの群衆はふきさらるゝ糞の如くならん

俄にまたく間にこの事あるべし 萬軍のエホバはいかづち地震おほてを暴風つむじかせ及びやきつくす火の餘をもて臨みたまふべし 斯てアリエルを攻てたゝかふ國々のもろもろアリエルとその城とをせめたゝかひて難ますものはみな夢のごとく夜のまぼろしの如くならん 飢たるもの食ふことを夢みて醒きたればその心なほ空しきがごとく渴けるもの飲ことを夢みて醒きたれば疲れかつ頻にのまんことを欲するがごとくシオン^シの山をせめて戦ふくにぐにの群衆もまた然あらん

なんぢらためらへ而しておどろかんなんぢら放球にせよ而して目くらまんかれらは酔りされど酒のゆゑにあらずかれらはよろめけりされど濃酒のゆゑにあらず 是はエホバ酣睡の靈をなんぢらの上にそゞぎ而してなんぢらの目をとぢなんぢらの面をおほひたまへりその目は預言者そのかほは先知者なり かくるが故にすべての默示はなんぢらには封じたる書のごとくなり 文字しれる人にわたして請これを讀といはん 答へて封じたるがゆゑによむこと能はずといはん また文字しらぬ人にわたして請これをよめといはん ことたへて文字しらざるなりといはん

主いひ給はくこの民は口をもて我にちかづき口唇をもてわれを敬へどもその心はわれに遠かれりそのわれを畏みおそるゝは人の誠命によりてをしへられしのみ この故にわれこの民のなかにて再びくすしき事をおこなはん そのわざは奇しくしていとあやしかれらの中なる智者のちゑはうせ聰明者のさときはかくれん

己がはかりごとをエホバに深くかくさんとする者はわざはひなるかな暗中にありて事をおこなひていよ誰かわれを見んやたれか我をしらんやと なんぢらは曲れりいかに陶工をみて土塊のごとくおもふ可んや造られし者おのれを作れるものをさして我をつくれるにあらずといふをえんや形づくられたる器はかたちづくりし者をさして智慧なしといふを得んや

暫くしてレバノン^{レバ}ははかりて良田となり 良田は林のごとく見ゆるとききたるならずや その日聖者は

この書のことばをきゝ盲者の目はくらきより闇よりみることを得べし 謙だるものはエホバによりてその歡喜をまし人のなかの貧きものはイスラエルの聖者によりて快樂をうべし 暴るものはたゞ侮慢者はうせ邪曲の機をうかゞふ者はことごとく斷滅さるべければなり かれらは訟をきく時まげて人をつみし 邑門にていさむるものを謀略におとしいれ 虚しき語をかまへて義人をしりぞく

この故にむかしアブラハムを贖ひたまひしエホバはヤコブの家につきて如此いひたまふヤコブは今より恥をかうむらすその面はいまより色をうしなはず かれの子孫はその中にわがおこなふ手のわざをみんその時わが名を聖としヤコブの聖者を聖としてイスラエルの神をおそるべし 心あやまれるものも知識をえつぷやけるものも教誨をまなばん

第三〇章

エホバのたまはく 悖れる子衆はわざはひなるかなかれら謀略をすれども我によりてせず 盟をむすべどもわが靈にしたがはず ますます罪につみをくはへん かれらわが口にとはずしてエジプトに下りゆきバロの力をかりておのれを強しエジプトの蔭によらん 巴ロのからは反てなんぢらの恥となりエジプトの蔭によるは反てなんぢらの辱かしめとなるべし かれの君たちはゾアンにありかれの使者たちはハネスにきたれり かれらは皆おのれを益することあたはざる民によりて恥をいだくかの民はたすけとならず益とならずかへりて恥となり誘となれり

南のかたの牲畜にかゝる重負のよげん 曰く

かれらその財貨を若き驢馬のかたにおはせその寶物を駱駝の背におはせて 牝駒 牝駒まひし及びとびかける蛇のいづる苦しみと艱難との國をすぎて 己をえきすること能はざる民にゆかん そのエジプトの助はいたづらにして虚しこのゆゑに我はこれを休みをるラハブとよべり

いま往てこれをその前にて牌にしるし書にのせ 後の世に傳へてとこしへに證とすべし これは悖れる民

いつはりをいふ子輩 エホバの律法をきくことをせざる子輩なり 一〇 かれら見るものに對ひていふ見るなかれと
 獸示をうる者にむかひていふ直きことを示すなかれ 滑かなることをかたれ 虚偽をしめせ 二 なんぢら大道をさ
 り逕をはなれ われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれと 三 此によりてイスラエルの聖者かくいひ
 給ふ なんぢらこの言をあたどり 暴虐と邪曲とをたのみて之にたよれり 四 斯るがゆゑにこの不義なんぢらには
 凸出しておちんとするたかき垣のさけたるところのごとく その破壊にはかに暫しが間にきたらんと 五 主これを
 破りあたかも陶工の瓶をくだきやぶるがごとくして 惜みたまはず その碎のなかに燼より火をとり 池より水を
 くむほどの一片だに見出すことなからん

主エホバ、イスラエルの聖者かくいひたまへり なんぢら立かへりて 靜かにせば 救をえ 平穩にして 依頼ま
 ば力をうべしと 然どなんぢらこの事をこのまさりき 六 なんぢら反ていへり 否われら馬にのりて 逃走らんと
 この故になんぢら 逃走らん 又いへり われら疾きものに乘んと この故になんぢら 追もの疾かるべし 七 ひとり
 叱咤すれば千人にげはしり 五人しつたすればなんぢら 逃走りて その還るものは 僅かに山嶺にある 杆のごとく
 岡のうへにある 旗のごとくならん

エホバこれにより俟てのち 恩恵を汝等にほどこし これにより上りてのち なんぢらを 憐れみたまはん エホ
 バは公平の神にましませり 凡てこれを 俟望むものは 福ひなり 八 シオンにをりエルサレムにをる 民よ なんぢは
 再びなくことあらじ そのよばはる聲に應じて 必ずなんぢに 恵をほどこしたまはん 主きゝたまふとき 直にこたへ
 たまふべし 九 主はなんぢらになやみの糧とくるしみの水とをあたへ給はん なんぢを教ふるもの 再びかくれじ 故
 の目はその教ふるものを 恒にみるべし 一〇 なんぢ右にゆくも 左にゆくも その耳にこれは 道なり これを歩むべしと
 後邊にてかたるをきかん 一一 又なんぢら 白銀をおほひし 刻める像こがねを はりし 鑄たる像を けがれし 禮物の
 ごとく 打棄ていはん 去れと

なんぢが地にまく種に 主は雨をあたへ また地になりいづる 糧をたまふ その土産こえて 豊かならん その
 日なんぢの家畜はひろき牧場に草をはむべし 一二 地をたがへす牛と 驢馬とは 團扇にてあふぎ箕にてとほし 壁をく
 はへたる 飼料をくらはん 一三 大なる殺戮の日やぐらのたふるゝ時 もろもろのたかき山もろもろのそびえたる 嶺に
 河とみづの流とあるべし 一四 かくてエホバその民のきずをつゝみ そのうたれたる 創痕を いやしたまふ日には
 月のひかりは日の光のごとく 日のひかりは七倍をくはへて 七の日のひかりの如くならん

視よエホバの名はとほき所よりきたり そのはげしき怒はもえあがる 燄のごとく その唇はいきどほりにて
 みちその舌は やきつくす火のごとく 一五 その氣息はみなぎりて 項にまでいたる 流のごとし 且ほろびの 鐘にて
 もろもろの國をふるひ 又まどはす 鞴をもろもろの民の口におきたまはん 一六 なんぢらは 歌うたはん 節會をまもる
 夜のごとし なんぢらは 心によろこばん 笛をならしエホバの山にきたり イスラエルの 磐につくときの 如し 一七 エ
 ホバはその稜威のこゑをきかしめ 烈しき怒をはなちて 焼つくす火のほのと 暴風と大雨とをともて その臂の
 くだることを示したまはん 一八 エホバのこゑによりて アッスリヤ人はくじけん 主はこれを答にてうち給ふべし
 一九 エホバの豫じめさだめたまへる 杖をアッスリヤのうへにくはへたまふごとく 鼓をならし 琴をひかん 主は
 うごきふるふ 戦闘をもて かれらとたゝかひ給ふべし 二〇 トベテは 往古よりまうけられ また王のために 備へられ
 たり これを深くし これを廣くし 此に火とおほくの 薪とをつみおきたり エホバの氣息これを 破棄のながれの
 ごとくに 燃さん

助をえんとて エジプトにくだり 馬によりたのむものは 禍ひなるかな 戦車おほきが故にこれに
 第三一章 二一 助をえんとて エジプトにくだり 馬によりたのむものは 禍ひなるかな 戦車おほきが故にこれに
 たのみ 騎兵はなはだ 強きがゆゑに之にたのむされど イスラエルの聖者をあふがす エホバを求るこ
 とをせざるなり 二二 然はあれども エホバもまた 智慧あるべし かならず 禍害をくだして その言をひるがへしたま
 はす 起てあしきものの家をせめ また 不義を行ふ者の助をせめ 給はん 二三 かのエジプト人は人にして 神にあらず

その馬は肉にして靈にあらす エホバその手をのばしたまはゞ助くるものも願きたすけらるゝ者もたふれてみなひとしく亡びん

エホバ如此われにいひたまふ獅のほえ壯獅の獲物をつかみてほえたけれるとき 許多のひつじかひ相呼つどひてむかひゆくともその聲によりて挫けすその喧嘩しきによりて臆せざるごとく 萬軍のエホバくだりてシオンの山およびその岡にて戦ひ給ふべし 鳥の雛をまもるがごとく 萬軍のエホバはエルサレムをまもりたまはんこれを護りてこれをすくひ踰越てこれを援けたまはん イスタエルの子孫よなんぢらさきには甚だしく主にそむけり 今たちかへるべし なんぢらおのが手につくりて罪ををかしし 白銀のぐうさう黄金の偶像をその日のおのなげすてん 爰にアツスリヤびとは劍にてたふれんされど人のつるぎにあらす 劍かれらをほろぼさんされど世の人のつるぎにあらす かれら劍のまへより逃はしりその壯きものは役丁とならん かれらの弊はおそれによりて逝去りその君たちは旗をみてくじけん こはエホバの御言なり エホバの火はシオンにあり エホバの爐はエルサレムにあり

第三十二章

茲にひとり王あり正義をもて統治めその君たちは公平をもて宰さざらん また人ありて風の大なる岩陰の如くならん 見るもの目はくらます 聞もの耳はかたぶけきをうべし 蹠がしきもの心はさとりて知識をえ 吃者の舌はすみやくあさやかに語るをうべし 愚かなる者はふたゝび尊貴とよばるゝことなく 狡猾なる者はふたゝび大人とよばるゝことなるべし 彼は愚なるものは愚なることをかたりその心に不義をかもし 邪曲をおこなひ エホバにむかひて妄なることをかたり 訊たる者のこゝろを空しくし 渴けるもの飲料をつきはてしむ 狡猾なるものを用ゐる器はあしし 彼あしき企圖をまうけ 虚偽のことはをもて苦しむ者をもてなす 忌しき者のかたること 正理なるも尚これに害へり たふとき人はたふとき 謀略をまうけ 恒にたふ

とき事をおこなふ

安逸にをる婦等よおきてわが聲をきけ 思煩ひなき女等よわが言に耳を傾けよ 思煩ひなきをんな

たちよ一年あまりの日をすきて 惜きあわてん そは葡萄の收穫むなく 果ををさむる期きたるまじければなり やすらかにをる婦等よふるひおそれよ おもひわづらひなき者よ 意あわてま衣をぬぎ 裸になりて 塵に塵服をまとへ かれら良田のため 實りゆたかなる葡萄の樹のために 胸をうたん 棘と荊わが民の地には 樂みの邑なるよろこびの家々にもはえん そは殿はすてられにぎはひたる邑はあれすたれ オベルと稱とはとこしへに 洞穴となり 野の驢馬のたのしむところ 羊のむれの草はむところとなるべし されど遂には 靈うへより我儕にそゞきて 荒野はよき田となり 良田は林のごとく 見ゆるとききたらん

そのとき公平はあれのにすみ 正義はよき田にをらん かくて正義のいさをは平和 せいぎのむすぶ果は とこしへの平穩とやすきなり わが民はへいわの家にをり 思ひわづらひなき住所にをり 安らかなる休息所にをらん されどまづ電ふりて 林くだけ 邑もことごとくたふるべし なんぢらもろもの水のほとりに種を おろし 牛および驢馬の足をはなち おく者はさいはひなり

第三十三章

禍ひなるかななんぢ害はれざるに人をそこなひ 欺かれざるに人をあざむけり なんぢが害ふと終らば汝そこなはれ なんぢが欺くことはてなば汝あざむかるべし エホバよわれらを恵み給へ われらなんぢを俟望めり なんぢ朝ごとにわれらの臂となり また患難のときにわれらの救となりたまへ なりとどろく聲によりてもろもの民にげはしり なんぢの起たまふによりてもろもの國はちりうせぬ 盜賊のものをはみつくすがごとく 人なんぢらの財をとり 盡さん また蝗のとびつどふがごとく 人なんぢらの財にとびつどふべし エホバは最たかし 高處にすみたまふなり エホバはシオンに公正と正義とを充せたまひたり なんぢの代はかたくたち 教と智慧と知識とはゆたかにあらん エホバをおそるゝは國の寶なり

視よかれらの勇士は外にありてさけび和をもとむる使者はいたく哭く 大路あれすたれて旅客たえ敵は契約をやぶり諸邑をなみし人をもよかすとせず 地はうれへおとろへレバノンに恥らひて枯れシヤロンはアラバの如くなりバシヤンとカルメルとはその葉をおとす エホバ言給はくわれ今おきん今たゝん今みづからを高くせん なんぢらの孕むところは糞のごとくなんぢらの生ところは藪のごとしなんぢらの氣息は火となりてなんぢらを食ひつくさん もろもろの民はやかれて灰のごとくなり荊のきられて火にもやされたるが如くならん

なんぢら遠にあるものよわが行ひしことをきけなんぢら近にあるものよわが能力をしれ シオンの罪人はおそる戦慄はよこしまなる者にのぞめりゆれらの中たれか焼つくす火に止ることを得んや我儕のうち誰かとしへに焼るなかに止るをえんや 義をおこなふもの直をかたるもの辱げてえたる利をいとひすつるもの手をふりて賄賂をとらざるもの耳をふさぎて血をながす謀略をかざるもの目をとちて悪をみざる者 かくる人はたかき處にすみかたき弊はその槽となりその糧はあたへられその水はともしきことなからん

なんぢの目はうるはしき状なる王を見とほくひろき國をみるべし 汝の心はかの懼しかりしことどもを思ひいでん會計せし者はいつくもありや 貢をはかりし者はいつくもありや 權をかぞへし者はいつくもありや 汝ふたゝび暴民をみざるべし かの民の言語はふかくして悟りがたくその舌は異にして解がたし われらの節會の呂シオンを見よなんぢの目はやすらかなる居所となれるエルサレムを見んエルサレムはうつさるゝことなき幕屋にしてその代はとしへにぬかれずその繩は一すぢだに断れざるなり エホバ我らとともに彼處にいまして稜威をあらはし給はん 斯てそのところはひろき川ひろき流あるところとなりてその中には漕舟もいらす巨艦もすぐるることなかるべし エホバはわれらを騎きたまふもの エホバはわれらに律法をたたまひし者 エホバはわれらの王にましまして我儕をすくひ給ふべければなり なんぢの船はとけたりその桅杆のもと

を結びかたむることあたはず 帆をあぐることあたはず その時おほくの財をわから敗者までも掠物あらん しこに住るものの中われ病りといふ者なし彼處にをる民の咎はゆるされん

第三章

もろもろの國よちかづきてきけもろもろの民よ耳をかたづけよ 地と地にみつるもの世界とせか いより出るすべての者きけ エホバはよろづの國にむかひて怒りそのよろづの軍にむかひて 忿怒りかれらをことごとく滅しかれらを屠らしめたまふ かれらは殺されて拋棄られその屍の臭氣たちのぼり山はその血にて融されん 天の萬象はきえうせもろもろの天は書卷のごとくにまかれんその萬象のおつるは葡萄の葉のおつるがごとく無花果のかれたる葉のおつるが如くならん わが劍は天にてうるほひたり 視よエドムの上にくだり滅亡に定めたる民のうへにくだりて之をさばかん エホバの劍は血にてみち脂にてこえ 小羊と山羊との血 牡羊の腎のあぶらにて肥ゆ エホバはゴヅラにて牲のけものをころしエドムの地にて大にほふることをなし給へり その屠場には野牛こうし牡牛もともに下る そのくには血にてうるほされその塵はあぶらにて肥さるべし

こはエホバの仇をかへしたまふ日にしてシオンの訟のために報をなしたまふ年なり エドムのもろもろの河はかはりて樹脂となりその塵はかはりて硫黄となりその土はかはりてもゆる樹脂となり 晝も夜もきえずその畑つくる期なく上臙らんかくて世々あれすたれ永遠までもその所をすぐる者なかるべし 鶴と刺蝟とそこを己がものとなし鶴と鴉とそこにすまん エホバそのうへに亂をおこす繩をはり空虚をきたらする錘をさげ給ふべし 國をつぐべき者をたてんとて貴者ふたゝび呼集ることをせじもろもろの諸侯はみな失てなくなるべし その殿にはことごとく荊はえ城にはことごとく刺草と薊とはえ野犬のすみか駝鳥の場とならん 野のけものと豺狼とこゝにあひ牡山羊その友をよび 鴉もまた宿りてこゝを安所とせん 蛇こゝに穴をつくり卵をうみてこれを孚しおのれの影の下に子をあつむ 焉もまたその偶とともに此處にあつまらん

なんぢらエホバの書をつまびらかにたづねて讀べしこれらのもの一つも缺ることなく又ひとつもその偶
 をかくものあらじそはエホバの口このことを命じその靈これらを集めたまふべければなり
 ものに鬮をひかせ手づから繩をもて量りこの地をわけあたへて永くかれらに保たしめ世々にいたるまでこゝに
 住しめたまはん

第三章

荒野とうるほひなき地とはたのしみ沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲かじやかん
 に咲かじやきてよろこび且よろこび且うたひレバノンの榮をえカルメルおよびシヤロンの美しき
 を得んかれらはエホバのさかえを見われらの神のうるはしきを見るべし
 なんぢら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ心さわがしきものに對ていへなんぢら雄々
 しかれ懼るゝなけれなんぢらの神をみよ刑罰きたり神の報きたらん神きたりてなんぢらを救ひたまふべし
 そのとき駝者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べしそのとき跛者は鹿の如くにとびはしり啞者の
 舌はうたうたはんそは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなりやけたる沙は池となりうるほひなき
 地はみづの源となり野犬のふしたるすみかは藁草のしげりあふ所となるべしかしこに大路ありそのみちは
 聖道となへられん穢れたるものはこれを過ることあたはずたゞ主の民のために備へらるこれを歩むものは
 おろかなりとも迷ふことなしかしこに獅をらすあらし獸もその路にのぼることなし然ばそこにて之にあふ
 事なかるべしたゞ贖はれたる者のみそこを歩まんエホバに贖ひすくはれし者うたうたひつゝ歸てシオンに
 きたりその首にこしへの歡喜をいたゞき樂とよろこびとをえん而して悲哀となげきとは逃さるべし

第三章

ヒゼキヤ王の十四年にアツスリヤの王セナケリブ上りきたりてユダのよろもろの堅固なる邑をせ
 めとれりアツスリヤ王ラキシよりラプシヤケをエルサレムに遣はし大軍をひきゐてヒゼキヤ王
 のもとに住しむラプシヤケ深工の野のおほちの傍なる上の池の樋にそひてたりこの時ヒルキヤの子なる

家司エリアキム書記セブナアサフの子なる史官ヨア出てこれを迎ふ

ラプシヤケかれらにいひけるはなんぢら今ヒゼキヤにいへ大王アツスリヤの王かくいへりなんぢの侍と
 するその侍むところは何なるか我いふなんぢが説ところの軍のはかりごととそその能力とはたゞ口唇のことば
 のみ今なんぢ誰によりたのみて我にさかふことをなすや視よなんぢエジプトに依頼めりこれ傷める葦の杖
 によりたのめるがごとしもし人これ倚もたればその手をつきさゝれんエジプト王パロがすべて己によりた
 のむものに對するは斯のごとし汝われらはわれらの神エホバに依頼めり我にいはんかそは曩にヒゼキヤ
 が高きところと祭壇とをみな取去てユダとエルサレムとにむかひ汝等こゝなる一つの祭壇のまへにて拜すべしと
 いへる夫ならずやいま請わが君アツスリヤ王に賭をせよわれ汝に二千の馬を與ふべければ汝よりこれに
 乗ものをいだせ果して出しうべしや然ばいかで我君のいとちひさき僕の長一人をだに退くることを得んや
 なんぞエジプトによりたのみて戰車と騎兵とをえんとするやいま我のほりきたりてこの國をせめほるばす
 はエホバの旨にあらざるべけんやエホバわれにいひたまはくのはりゆきてこの國をせめほるばせと

爰にエリアキムとセブナとヨアと共にラプシヤケにいひけるは請スリアの方言にて僕輩にかたれ我儕これ
 をさとりうるなり石垣のうへなる民のきくところにてはユダヤの方言をもてわれらに語るなかれラプシヤケ
 いひけるはわが君はこれらのことをなんぢの君となんぢとにのみ語らんために我をつかはしゝならんやなんぢ
 らと共にのが糞をくらひおのが溺をのまんとする石垣のうへに坐する人々にも我をつかはしゝならずや
 斯てラプシヤケたちてユダヤの方言もて大聲によばはりいひけるはなんぢら大王アツスリヤ王のことは
 をきくべし王かくのたまへりなんぢらヒゼキヤに惑はさるゝなかれ彼なんぢらを救ふことあたはず
 ゼキヤがなんぢらをエホバに頼しめんとする言にしたがふなかれ彼いへらくエホバかならず我儕をすくひこの
 邑はアツスリヤ王の手にわたさるゝことなしとヒゼキヤに聽従ふなかれアツスリヤ王かくのたまへりなんぢら

われと親和をなし出できたりて我にくだれ おのおのその葡萄とその無花果とをくらひおのおのその井の水をのむことを得べし 遂には我きたりて汝等をほかの國にたづさへゆかん その國はなんぢの國のごとき國にして穀物ぶだう酒パンおよび葡萄園あり おそらくはヒゼキヤなんぢらに説てエホバわれらを救ふべしといはん 然どももろもろの國の神等のなかにその國をアッスリヤ王の手より救へる者ありしや ハマテ、アルパデの神等いつこにありや セバルワイムの神等いつこにありや 又わが手よりサマリヤを救出し、神ありや

これらの國のもろもろの神のなかに誰かその國をわが手よりすくひいだし、者ありや さればエホバも何でわが手よりエルサレムを救ひいだし得ん

如此ありければ民は黙して一言をもこたへざりき そは之にこたふるなかれとの王のおほせありつればなり

そのときヒルキヤの子なる家司エリアキム書記セブナおよびアサフの子なる史官ヨアころもを裂てヒゼキヤにゆき之にラブシヤケの言をつげたり

第三章

ヒゼキヤ王これをき、てその衣をさき、龜衣をまとひてエホバの家にゆき 家司エリアキム書記セブナおよび祭司のなかの長老等をして皆あらたへをまとはせてアモツの子預言者イザヤのもとにゆかしむ

かれらイザヤにいひけるはヒゼキヤ如此いへり けふは患難と責と辱かしめの日なり そは子うまれんとして之をうみいだすの力なし

なんぢの神エホバあるひはラブシヤケがもろもろの言をき、たまはん 彼はその君アッスリヤ王につかはされて活る神をそしれり なんぢの神エホバその言をき、て或はせめたまふならん されば請なんぢこの遺れるものために祈禱をさ、げよと

かくてヒゼキヤ王の諸僕イザヤにいたる イザヤかれらに言けるはなんぢらの君につげよ エホバ斯いひたまへり曰くアッスリヤ王のしもべら我をのゝしりけがせり なんぢらその聞しことばによりて懼るゝなかれ 視よわれかれが意をうごかすべければ一つの風聲をき、ておのが國にかへらん かれをその國にて劍に

たふれしむべし

爰にラブシヤケはアッスリヤ王がラクシを離れさりしとき、て歸りけるとき際しも王はラブナを攻をれり

このときエテオピアの王テルハカの事につきてきけり云く かれいでて汝とたゝかふべしとこのことをき、て使者をヒゼキヤに遣していふ なんぢらユダの王ヒゼキヤにつけて如此いへなんぢが頼める神なんぢを歎きてエルサレムはアッスリヤ王の手にわたされじといふを聴ことなかれ 視よアッスリヤの王等もろもろの國に

いかなることをおこなひ如何してこれを悉くほろぼし、かを汝き、しならん されば汝すくはるゝことを得んや

わが先祖たちの滅ぼし、ゴザン、ハラン、レゼフおよびテラタルなるエデンの族など此等のくににの神はその國をすくひたりしや

ハマテの王アルパデの王セバルワイムの都の王ヘナの王およびイソの王はいづこにありやと

ヒゼキヤつかひの手より書をうけて之を讀りしかしてヒゼキヤ、エホバの宮にのぼりゆきエホバの前にこのふみを展ぶ

ヒゼキヤ、エホバに祈ていひけるは ケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバ、イスラエルの神よたゞ汝のみ地のうへなるよろづの國の神なり なんぢは天地をつくりたまへり

エホバよ耳をかたむけて聽たまへ エホバよ目をひらきて視たまへ セナケリブ使者して活る神をそしらしめし言をことごとくき、たまへ

エホバよ實にアッスリヤの王等もろもろの國民とその地とをあらし毀ち かれらの神たちを火になげいれたり これらのものは神にあらず 人の手の工にしてあるひは木あるひは石なり 斯るがゆゑに滅ぼされたり

さればわれらの神エホバよ今われらをアッスリヤ王の手より救ひいだして 地のもろもろの國にたゞ汝のみエホバなることを知しめたまへ

こゝにアモツの子イザヤ人をつかはしてヒゼキヤにいはせけるは イスラエルの神エホバかくいひたまふ 汝はアッスリヤ王セナケリブのことにつきて我にいのれり

エホバが彼のことにつきて語り給へるみことばは

是なり いはくシオンの處女はなんぢを侮りなんぢをあざけり エルサレムの女子はなんぢの背後より頭をふれり
 汝がそしりかつ罵れるものは誰ぞ なんぢが聲をあげ目をたかく向てさからひたるものはたれぞ イスラエルの聖者ならずや
 なんぢその使者によりて主をそしりていふ 我はおほくの戦車をひきゐて山々のいたゞきに登りレバノンの奥にまでいりぬ 我はたけたかき香柏とるるはしき松樹とをきり またその境なるたかき處にゆき
 眠たる地の林にゆかん 我は井をほりて水をのみたり われは足踏をもてエジプトの河々をからさんと
 なんぢ聞せずや これらのことはわが昔よりなす所にしへの日よりさだめし所なり 今なんぢがこの堅城をこぼちあらしめて石堆となすも亦わがきたらしし所なり
 そのなかの民はちから弱くをのゝきて恥をいだし野草のごとく青き菜のごとく屋蓋の草のごとく未だそだたざる苗のごとし
 我なんぢが居ること出入すること又われにむかひて怒りさけべることをしる
 なんぢが我にむかひて怒りさけべると汝がほこれる言とわが耳にいられば我なんぢの鼻に環をはめ汝のくちびるに鏑をつけて汝がきたれる路よりかへらしめん
 ヒゼキヤよ我がなんぢにたまふ徴はこれなり なんぢら今年は落穂より生たるものを食ひ 明年は粟生より出たるものを食はん 三年にあたりては種ごとをなし 牧ことをなし 葡萄ぞのを作りてその果を食ふべし
 ユダの家ののがれて遣れる者はふたゝび下は根をはり上は果を結ぶべし
 そは遺るものはエルサレムよりいで説るものはシオンの山よりいづるなり 萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし
 この故にエホバ、アツスリヤの王については如此いひたまふ 彼はこの城にいらすこゝに箭をはなたす盾を城のまへにならべす壘をきづきて攻ることなし
 かれはそのきたりし道よりかへりてこの城にいらす 我おのれの故によりて僕ダビデの故によりてこの城をまもりこの城をすくはんこれエホバ宣給るなり
 エホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八萬五千人をうちころせり早晨におきいでて見ればみな死てかばねとなれり
 アツスリヤ王セナケリブ起てかへりゆきニネベにとどまる 一日おのが神ニス

ロクのみやにて禮拜をなし居しにその子アデランメクとシヤレゼルと劍をもて彼をころし而してアララテの地にけゆけり
 かれが子エサルハドンつぎて王となりぬ

第三十八章

そのころヒゼキヤやみて死んとせしにアモツの子預言者イザヤきたりて彼にいふ エホバ如此いひたまはくなんぢ家に遺言をとどめよ 汝しにて活ることあたはざればなり
 爰にヒゼキヤ面を壁にむけてエホバに祈りいひけるは あゝエホバよ 願くはわがなんぢの前に眞實をもて一心をもてあゆみなんぢの目によきことを行ひたるをおもひでたまへ 斯てヒゼキヤ甚くなきぬ
 エホバの言イザヤにのぞみて曰く なんぢ往てヒゼキヤにいへ なんぢの祖ダビデの神エホバかくいひ給はく 我なんぢの禱告をきゝなんぢの涙をみたり 我なんぢの齡を十五年ましくはへ
 且なんぢこの城とを救ひてアツスリヤわうの手をのがれしめん又われこの城をまもるべし
 エホバ語りたまひたる此事を成たまふ證にこの徴をなんぢに賜ふ 視よわれアハズの日晷にすゝみたる日影を十度しりぞかしめんといひければ乃ちひばかりにすゝみたる日影十度しりぞきぬ

ユダの王ヒゼキヤ病にかゝりてその病のいえしを記し書は左のごとし
 我いへりわが胎ひの全盛のとき陰府の門にいりわが餘年をうしなはんと
 我いへりわれ再びエホバを見奉ることあらじ再びいけるもの地にてエホバを見奉ることあらじ
 われは無ものの中にいりてふたゝび人を見ることあらじ
 わが住所はうつされて牧人の幕屋をとりさるごとくに我をはなるわがいのちは織工の布をまきをはりて機より翦はなすごとくならん
 なんぢ朝夕のあひだに我をたえしめたまはん
 われは天明におよぶまで己をおさへてしづめたり
 主は獅のごとくに我もろもろの骨を砕きたまふ
 なんぢ朝夕の間にわれを絶しめたまはん
 われは燕のごとく鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめきわが眼はうへを視ておとろふ
 エホバよわれは迫りくるしめらる願くはわが中保となりたまへ
 主はわれとものいひ且そのごとくみづから成たまへりわれ何をいふべきか

二六 わが世にある間 わが靈魂の苦しめる故によりて慎みてゆかん 主よこれらの事によりて人は活るなり わが
 二七 靈魂のいのちも全くこれらの事によるなり 願くはわれを醫しわれを活したまへ 視よわれに甚しき艱苦を
 二八 あたへたまへるは我に平安をえしめんがためなり 汝わがたましひを愛して滅亡の穴をまぬかれしめ給へりそは
 二九 わが罪をことごとく背後にすてたまへり 陰府はなんちに感謝せず 死はなんちを讚美せず 墓にくだる者はな
 三〇 んちの誠實をのぞます 唯いけるもののみ活るものこそ汝にかんしやするなれ わが今日かんしやするが如し
 三一 父はなんちの誠實をその子にらしめん エホバ我を救ひたまはん われら世にあらんかぎりエホバのいへ
 三二 にて琴をひきわが歌をうたはん
 三三 イザヤいへらく無花果の一園をとりきたりて 腫物のうへにつけよ 王かならずいせん ヒゼキヤも亦
 三四 いへらくわがエホバの家にのぼることにつきては何の兆あらんか

第三九章

一 そのころバラダンの子バビロン王メロダクバラダン、ヒゼキヤが病をうれへて愈しことをきくけ
 二 れば書と禮物とおくれり ヒゼキヤその使者のきたるによりて喜びこれに財物金銀香料た
 三 ふとき油ををさめたる家およびすべての軍器ををさめたる家また庫のなかなる物をことごとく見すおほよそ
 四 ヒゼキヤのいへの裏にあるものと全國のうちにあるものと見せざるものは一もあらざりき ことば預言者イザ
 五 ヤ、ヒゼキヤ王のもとに來りていひけるはこの人々はなにをいひしや何處よりなんちのもとに來りしや ヒゼキ
 六 ヤ曰けるはかれらはとほき國よりバビロンより我にきたれり イザヤいふ彼等はなんちの家にてなにを見た
 七 りしやヒゼキヤ答ふかれらはわが家にあるものを皆みたり又わが庫のなかにあるものは一つをもかれらに見せ
 八 ざるものなかりき イザヤ、ヒゼキヤにいふなんち萬軍のエホバの言をきけ みよ日きたらんなんちの家
 九 のものなんちの列祖がけふまで蓄へたるものは皆バビロンにたづさへゆかれて遺るもの一もなかるべし是はエ
 一〇 ホバのみことばなり なんちの身より生れいでん者もとらはれ寺人とせられてバビロン王の宮のうちにあらん

ヒゼキヤ、イザヤにいひけるは 汝がかたるエホバのみことばは善しまた云 わが世にあるほどは太平と眞實
 とあるべしと

第四〇章

一 なんちらの神いひたまはくなぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ 懇ろにエルサレムに語り之
 二 によばはり告よその服役の期すでに終りその咎すでに赦されたりそのもろもろの罪によりてエ
 三 ホバの手よりうけしところは倍したりと
 四 よばはるものの聲きこゆ云くなんちら野にてエホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよ
 五 と もろもろの谷はたかくもろもろの山と岡とはひくせられ 曲りたるはなほく崎嶇はたひらかにせらるべ
 六 し 斯てエホバの榮光あらはれ人みな共にこれを見んこはエホバの口より語りたまへるなり
 七 聲きこゆ云くよばはれ答へていふ何とよばはるべきかいはく人はみな草なりその榮華はすべて野の花
 八 のごとし 草はかれ花はしほむエホバの息そのうへに吹ければなり 實に民はくさなり 草はかれ花はしほ
 九 む然どわれらの神のことばは永遠にたらん
 一〇 よき音信をシオンにつたふる者よなんち高山にのぼれ 嘉おとづれをエルサレムにつたふる者よなんち
 一一 強く聲をあげよこゑを揚ておそるゝなかれ ユダのもろもろの邑につげよなんちらの神きたり給へりと みよ
 一二 主エホバ能力をもちて來りたまはんその臂は統治たまはん 賞賜はその手にありはたらきの値はその前にあり
 一三 主は牧者のごとくその群をやしなひその臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたづさへ乳をふくます
 一四 者をやはらかに導きたまはん

二二 たれか掌心をもてもろもろの水をはかり指をのばして天をはかりまた地の塵を量器にもり天秤をもても
 二三 ろもろの山をはかり權衡をもてもろもろの岡をはかりしや 誰かエホバの靈をみちびきその議士となりて教し
 二四 や エホバは誰とともに議りたまひしやたれかエホバを聴くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたへ明通の

二〇 視よもろの國民は桶のひとしづくのごとく 權衡のちりのごとくに思ひたまふ
 二一 島々はたちのぼる塵埃のごとし レバノンに柴にたらずそのなかの獸は燔祭にたらず エホバの前には
 二二 もろもろの國民みななきにひとし エホバはかれらを無もののごとく空きもののごとく思ひたまふ

二三 然ばなんぢら誰をもて神にくらべいかなる肖像をもて神にたぐふか 偶像はたくみ鑄てつくり 金工
 二四 がねをもて之をおほひ白銀をもて之がために鑄をつくれり かゝる實物をそなへえざる貧しきものは朽まじき
 二五 木をえらみ良匠をもとめてうごくことなき像をたゝしむ なんぢら知るかなんぢら聞ざるか 始よりなんぢ
 二六 らに傳へざりしかなんぢらは地の基をおきしときより悟らざりしか エホバは地球のはるかに上すわり地に
 二七 すむものを蝗のごとく視たまふおほざらる薄絹のごとく布きこれを住ふべき幕屋のごとくはり給ふ 又もろ
 二八 もろの君をなくならしめ地の審士をひなくせしむ かれらは僅かに植られ僅かに播れその幹わづかに地に
 二九 根ざししに神そのうへを吹たまへば即ちかれて葉のごとく暴風にまきさらるべし 聖者いひ給はくさらば
 三〇 なんぢら誰をもて我にくらべ我にたぐふか なんぢら眼をあけて高をみよたれか此等のものを創造せしやを
 三一 おもへ 主は數をしらべてその萬象をひきいだしおのおのの名をよびたまふ 主のいきほひ大なりその力のつよ
 三二 きがゆゑに 一も缺ることなし

三三 ヤコブよなんぢ何故にわが途はエホバにかくれたりといふや イスラエルよ汝なにゆゑにわが説はわが神
 三四 の前をすぎされりとかたるや 汝しらざるか聞ざるかエホバはとしへの神地のはての創造者にして倦たまふ
 三五 ことなくまた疲れたまふことなくその聰明こと測りがたし 疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには
 三六 強きをまし加へたまふ 年少きものもつかれてうみ壯なるものも衰へおとろふ 然はあれどエホバを俟望
 三七 むものは新なる力をえん また驚のごとく翼をはりてのぼらん 走れどもつかれず歩めども倦ざるべし

第四一章

一 もろもろの島よわがまへに黙せもろもろの民よあらたなる力をえて近づききたれ 而して語れ

二 われら寄集ひて論らはん たれか東より人をおこしや われは公義をもて之をわが足下に召しその前にもろ
 三 もろの國を服せしめまた之にもろもろの王ををさめしめかれらの劍をちりのごとくかれらの弓をふきさらるゝ
 四 藁のごとくならしむ 斯て彼はこれらのものを追その足いまだ行ざる道をやすらかに過ゆけり このことは
 五 誰がおこなひしやたが成しやたが太初より世々の人をよびいだしや われエホバなり 我ははじめなり終なり
 六 もろもろの島はこれを見ておそれ地の極はをのゝきて寄集ひきたれり かれら互にその隣をたすけその兄弟
 七 にいひけるはなんぢ雄々しけれ 木匠は鐵工をはげまし 鋤をもて平らぐるものは鐵礮をうつものを勵まして
 八 いふ接合せいとよしとまた釘をもて堅うして揃くことなからしむ

九 然どわが僕イスラエルよわが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ われ地のはてより汝をたづさへ
 一〇 きたり地のはしよりなんぢを召かくて汝にいへり 汝はわが僕われ汝をえらみて棄さりきと おそるゝなかれ
 一一 我なんぢとともにあり 驚くなかれ我なんぢの神なり われなんぢを強くせん 誠になんぢを助けん 誠にわがたゞ
 一二 しき右手なんぢを支へん 視よなんぢにむかひて怒るものはみな恥をえて惶てふためかん なんぢと争ふもの
 一三 は無もののごとくなりて滅じせん なんぢ尋ねるとも汝とたゝかふ人々にはあはざるべし 汝といくさする者は
 一四 なきもののごとくなりて虚しくなるべし 我エホバなんぢの神はなんぢの右手をとりて汝にいふ懼るゝ
 一五 なかれ我なんぢを助けんと またエホバ宣給ふなんぢ虫にひとしきヤコブよイスラエルの人よおそるゝなか
 一六 れ我なんぢをたすけん 汝をわがなふものはイスラエルの聖者なり 視よわれ汝をおほくの鋭齒ある新しき打麥
 一七 の器となさん なんぢ山をうちて細微にし岡を批糠のごとくにすべし なんぢ籐げば風これを巻さり狂風これ
 一八 を吹ちらさん 汝はエホバによりて喜びイスラエルの聖者によりて誇らん

一九 貧しきものと乏しきものと水をもとめて水なくその舌かわきて衰ふるときわれエホバ聽てこたへん 我イ
 二〇 スラエルの神かれらを棄ざるなり われ河をかぶるの山にひらき泉を谷のなかにいだしまた荒野を池となし

乾ける地を水のみなもとと變ん 我あれのに香柏合歡樹もちの樹および油の樹をうゑ沙漠に松杉及び黃楊をともし置ん かくて彼等これを見てエホバの手の作たまふところイスラエルの聖者の造り給ふ所なるをしり且こゝろをとめ且ともどもにさとらん

エホバ言給くなんぢらの道理をとり出せヤコブの王いひたまはく汝等のかたき證をもちきたれ これを持來りてわれらに後ならんとする事をしめせそのいやさきに成るべきことを示せわれら心をとめてその終をしらん或はきたらんとする事をわれらに聞すべし なんぢら後ならんとすることをしめせ我儕なんぢらが神なることを知らんなんぢら或はさいはひし或はわさはひせよ我儕ともに見ておどろかん 視よなんぢらは無ものごとしなんぢらの事はむなしなんぢらを撰ぶものは憎むべきものなり

われ一人を起して北よりきたらせ我が名をよぶものを東よりきたらしむ彼きたりもろもろの長をふみて泥のごとくにし陶工のつちくれを踐がごとくにせん たれか初よりこれらの事をわれらに告てしらしめたりやたれか上古よりわれらに告てこは是なりといはしめたりや一人だに告るものなし一人だに聞するものなし一人だになんぢらの言をきくものなし われ豫じめシオンにいはんなんぢ視よかれらを見よとわれ又よきおとづれを告るものをエルサレムに予へん われ見るに一人だになしかれらのなかに謀略をまうくるもの一人だになし我かれらに問どこたふるもの一人だになし かれらの爲はみな徒然にして無ものごとしその偶像は風なりまた空しきなり

第四章

わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ我わが靈をかれにあたへたり かれ異邦人に道をしめすべし かれは叫ぶことなく聲をあぐることなくその聲を街頭にきこえしめす また

傷める蘆ををることなくほのくらし燈火をけすことなく眞理をもて道をしめさん かれは衰へず喪膽せずして道を地にたてをはらんもろもろの島はその法言をまちのぞむべし

天をつくりてこれをのべ地とそのうへの産物とをひらきそのうへの民に息をあたへその中をあゆむものに靈をあたへたまふ神エホバかく言給ふ 云くわれエホバ公義をもてなんぢを召たり われなんぢの手をとり汝をまもりなんぢを民の契約とし異邦人のひかりとなし 而して替の目を開き俘囚を獄よりいだし暗にすめるものを檻のうちより出さしめん われはエホバなり是わが名なり 我はわが榮光をほかの者にあたへずわがほまれを偶像にあたへざるなり さきに預言せるところはや成れり 我また新しきことをつけん 事いまだ兆さざるさきに我まづなんぢらに聞せん

海にうかぶもの海のなかに充るものもろもろの島およびその民よエホバにむかひて新しき歌をうたひ地の極よりその頌美をたへまつれ 荒野とその中のもろもろの邑とゲダル人のすめるもろもろの村里はこゑをあげよセラの民はうたひて山のいたゞきよりよばはれ 榮光をエホバにかうぶらせ その頌美をもろもろの島にて語りつけよ エホバ勇士のごとく出たまふ また戰士のごとく熱心をおこし 聲をあげてよばはり大能をあらはして仇をせめ給はん

われ久しく聲をいださず黙して己をおさへたり 今われ子をうまんとする婦人のごとく叫ばん 我いきづかしくかつ喘がん われ山と岡とをあらし且すべてその上の本草をからしもろもろの河を島としもろもろの池を涸さん われ醫者をもその未だしらする大路にゆかしめその未だしらする徑をふましめ暗をその前に光となし 曲れるをその前になほくすべし 我これらの事をおこなひて彼らをすてじ 刻みたる偶像にたのみ鑄たる偶像にむかひて汝等はわれらの神なりといふものは退けられて大に恥をうけん

醫者よきけ醫者よ眼をそゞぎてみよ 醫者はたれぞわが僕にあらずや 誰かわがつかはせる使者の如き 聖者あらんや 誰かわが友の如きめしひあらんや 誰かエホバの僕のごときめしひあらんや 汝おほくのことを見れども顧みず 耳をひらけども聞ざるなり エホバのれ義なるがゆゑに大にしてたふとき律法をたまふを

よろこび給へり 然るにこの民はかすめられ奪はれて みな穴中にとらはれ獄のなかに閉こめらる 斯てその

掠めらるゝを助くる者なくその奪はれたるを償へといふ者なし

なんぢらのうち誰かこのことに耳をかたづけん されか心をもちて後のために之をきかん ヤコブを

奪はせしものは誰ぞ かすむる者にイスラエルをわたしゝ者はたれぞ 是エホバにあらすや われらエホバに罪を

をかしたるの道をあゆまず その律法にしたがふことを好まざりき この故にエホバ烈しき怒をかたづけ 猛き

いくさをきたらせ その烈しきこと火の如く四圍にもゆれども彼しらす その身に焚せまれども心におかざりき

ヤコブよなんぢを創造せるエホバいま如此いひ給ふイスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給

ふおそるゝなかれ我なんぢを贖へり 我なんぢの名をよべり汝はわが有なり なんぢ水中をすく

るときは我ともにあらん 河のなかを過るときは水なんぢの上にあふれじ なんぢ火中をゆくとき焚るゝことなく

火焔もまた燃つかじ 我はエホバなんぢの神イスラエルの聖者なんぢの救主なり われエジプトを予へてなん

ぢの贖代となし エチオピアとセバとをなんぢに代ふ われ見てなんぢを賣とし尊きものとし亦なんぢを愛す

この故にわれ人をもて汝にかへ 民をなんぢの命にかへん 懼るゝなかれ我なんぢとともにあり 我なんぢの裔

を東よりきたらせ西より汝をあつむべし われ北にむかひて釋せといひ南にむかひて留るなかれといはん

わが子輩を遠きよりきたらせ わが女らを地の極よりきたらせよ すべてわが名をもて稱へらるゝ者をきたら

せよ 我かれらをわが榮光のために創造せり われ曩にこれを造りかつ成をはれり

目あれども醫者のごとく耳あれども聾者のごとき民をたづさへ出よ 國々はみな相集ひもろもろの民は

あつまるべし 彼等のうち誰かいやさきに成るべきことをつけ之をわれらに聞することを得んや その證人をい

して己の是なるをあらはすべし 彼等きゝて此はまことなりといはん エホバ宣給くなんぢらはわが證人

わがえらみし僕なり 然ばなんぢら知てわれを信じわが主なるをさとりうべし 我よりまへにつくられし神なく我

むることを得んや

なんぢらを贖ふものイスラエルの聖者エホバかく言たまふなんぢらの爲にわれ人をバビロンにつかはし

彼處にあるカルデア人をことごとく下らせ その宴樂の船にのりてのがれしむ われはエホバなんぢらの聖者

イスラエルを創造せしもの又なんぢらの王なり エホバは海のなかに大路をまうけ大なる水のなかに徑をつ

り 戰車および馬軍兵武士をいできたらせ ことごとく仆れて起ることあたはず 皆ほろびて燈火のきえうす

るが如くならしめ給へり エホバ言給くなんぢら往昔のことを思ひいづるなかれ また上古のことをかんがふる

なかれ 視よわれ新しき事をなさん頼ておこるべし なんぢら知るべけんや われ荒野に道をまうけ沙漠に河を

つくらん 野の獸われを崇むべし 野犬および駝鳥もまた然り われ水を荒野にいだし河を沙漠にまうけてわが民

わがえらびたる者にのましむべければなり この民はわが頌美をのべしめんとて我おのれのために造れるなり

然るにヤコブよ汝われを呼たのまさりき イスラエルよ汝われを厭ひたり なんぢ燔祭のひつじを我に

もちきたらず犠牲をもて我をあがめざりき われ汝にそなへもの荷をおはせざりき また乳香をもて汝をわづら

はせざりき なんぢは銀貨をもて我がために萐蒲をかはず 犠牲のあぶらをもて我をあかしめす 反てなんぢの

罪の荷をわれに負せ なんぢの邪曲にて我をわづらはせたり

われこそ我みづからの故によりてなんぢの咎をけし汝のつみを心にとめざるなれ なんぢその是なるを

あらはさんかために己が事をのべて我に記念せしめよ われら相共にあけつらふべし なんぢの遠祖つみを

をかしたる汝をしへの師われにそむけり この故にわれ聖所の長たちを汚さしめヤコブを誑はしめイスラエルを

よりのちにもあることなからん たり我のみ我はエホバなり われの外にすくふ者あることなし われ前に

つけまた救をほどこし また此事をかかせたり 汝等のうちには他神なかりき なんぢらはわが證人なり われは

神なりこれエホバ宣給るなり 今よりわれは主なりわが手より救ひいだし得るものなし われ行はば誰かとい

むることを得んや

なんぢらを贖ふものイスラエルの聖者エホバかく言たまふなんぢらの爲にわれ人をバビロンにつかはし

彼處にあるカルデア人をことごとく下らせ その宴樂の船にのりてのがれしむ われはエホバなんぢらの聖者

イスラエルを創造せしもの又なんぢらの王なり エホバは海

のなかに大路をまうけ大なる水のなかに徑をつ

り 戰車および馬軍兵武士をいできたらせ ことごとく仆

れて起ることあたはず 皆ほろびて燈火のきえうす

るが如くならしめ給へり エホバ言給くなんぢら往昔

のことを思ひいづるなかれ また上古のことをかんがふる

なかれ 視よわれ新しき事をなさん頼ておこるべし なん

ぢら知るべけんや われ荒野に道をまうけ沙漠に河を

つくらん 野の獸われを崇むべし 野犬および駝鳥もまた

然り われ水を荒野にいだし河を沙漠にまうけてわが民

わがえらびたる者にのましむべければなり この民はわが

頌美をのべしめんとて我おのれのために造れるなり

然るにヤコブよ汝われを呼たのまさりき イスラエルよ

汝われを厭ひたり なんぢ燔祭のひつじを我に

もちきたらず犠牲をもて我をあがめざりき われ汝にそ

なへもの荷をおはせざりき また乳香をもて汝をわづら

はせざりき なんぢは銀貨をもて我がために萐蒲をかはず

犠牲のあぶらをもて我をあかしめす 反てなんぢの

罪の荷をわれに負せ なんぢの邪曲にて我をわづらはせ

たり われこそ我みづからの故によりてなんぢの咎をけし

汝のつみを心にとめざるなれ なんぢその是なるを

あらはさんかために己が事をのべて我に記念せしめよ

われら相共にあけつらふべし なんぢの遠祖つみを

をかしたる汝をしへの師われにそむけり この故にわれ

聖所の長たちを汚さしめヤコブを誑はしめイスラエルを

よりのちにもあることなからん たり我のみ我はエホバ

なり われの外にすくふ者あることなし われ前に

つけまた救をほどこし また此事をかかせたり 汝等の

うちには他神なかりき なんぢらはわが證人なり われは

神なりこれエホバ宣給るなり 今よりわれは主なりわが

手より救ひいだし得るものなし われ行はば誰かとい

むることを得んや

なんぢらを贖ふものイスラエルの聖者エホバかく言たま

ふなんぢらの爲にわれ人をバビロンにつかはし

彼處にあるカルデア人をことごとく下らせ その宴樂の

船にのりてのがれしむ われはエホバなんぢらの聖者

イスラエルを創造せしもの又なんぢらの王なり エホバは

海

のなかに大路をまうけ大なる水のなかに徑をつ

り 戰車および馬軍兵武士をいできたらせ ことごとく

仆

れて起ることあたはず 皆ほろびて燈火のきえうす

るが如くならしめ給へり エホバ言給くなんぢら往昔

の

ことを思ひいづるなかれ また上古のことをかんがふる

な

かれ 視よわれ新しき事をなさん頼ておこるべし なん

ぢ

ら知るべけんや われ荒野に道をまうけ沙漠に河を

つ

くらん 野の獸われを崇むべし 野犬および駝鳥もまた

然

り われ水を荒野にいだし河を沙漠にまうけてわが民

わ

がえらびたる者にのましむべければなり この民はわが

頌

美をのべしめんとて我おのれのために造れるなり

然

るにヤコブよ汝われを呼たのまさりき イスラエルよ

のしらしめん

第四章

一 されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ 二 なんちを創造しなんちを胎内につ
くり又なんちを助くるエホバ如此いひたまふわがしもベヤコブよわが撰みたるエシユルンよおそ
るゝなかれ 三 われ渴けるものに水をそゝぎ乾たる地に流をそゝぎわが靈をなんちの子輩にそゝぎわが恩恵を
なんちの裔にあたふべければなり 四 斯てかれらは草のなかにて川のほとりの柳のごとく生ぞだつべし 五 ある
人はいふ我はエホバのものなりとある人はヤコブの名をとなへんある人はエホバの有なりと手にしるしてイス
ラエルの名をなのらん

六 エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなふもの萬軍のエホバ如此いひたまふわれは始なりわれは終
なりわれの外に神あることなし 七 我いにしへの民をまうけしより以來たれかれのごとく後事をしめし父
つげ又わが前にいひつらねんや試みに成んとすること來らんとすることを告よ 八 なんちら懼るゝなかれ憎く
なかれ我いにしへより聞せたるにあらずや告しにあらずやなんちらはわが證人なりわれのほか神あらんや我
のほかには誓あらずわれその一つだに知ことなし

九 偶像をつくる者はみな空しくかれらが慕ふところのものは益なしその證をするものは見ことなく知こと
なし斯るがゆゑに恥をうくべし 一〇 たれか神をつくり又えきなき偶像を鑄たりしや 一一 視よその伴侶はみな
はちんその匠工らは人なりかれら皆あつまりて立ときはおそれどもに恥るなるべし

一二 鐵匠は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鑄もてこれを鍛へつよき腕をもてこれをうちかたむ飢れば
力おとろへ水のをまさればつかれはつべし 一三 木匠はすみなはをひきはり朱にてゑがき鑄にてけつり文回をもて
書き之を人の形にかたどり人の美しき容にしたがひて造り而して家のうちに安置す 一四 あるひは香柏をきり
あるひは榲をとりあるひは榊をとり或ははやし樹のなかにて一をえらびあるひは杉をうる雨をえて長たし

一五 而して人これを薪となし之をもておのが身をあたゝめ又これを燃してパンをやき又これを神につくりて
をがみ偶像につくりてその前にひれふす 一六 その半は火にもやしその半は肉をにて食ひあるひは肉をあぶりて
くひあきまた身をあたゝめていふあゝ我あたゝまれりわれ熱きをおぼゆ 一七 斯てその餘をもて神につくり偶像
につくりてその前にひれふし之ををがみ之にいのりていふなんちは吾神なり我をすくへと

一八 これらの人は知ことなく悟ることなしその眼ふさがりて見えすその心とちてあきらかならず 一九 心の
うちに思ふことをせず知識なく明悟なきがゆゑに我そのなかばを火にもやしその炭火のうへにパンをやき肉を
あぶりて食ひその木のあまりをもて我いかで憎むべきものを作るべけんや 二〇 我いかで木のはしくれに俯伏すこと
をせんやといふ者もなし 二一 かゝる人は灰をくらひ迷へる心にまどはされて己がたましひを毀ふあたはずまた
わが右手にいつはりあるにあらずやとおもはざるなり

二二 ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ汝はわが僕なり我なんちを造れりなんちわが僕なりイ
スラエルよ我はなんちを忘れじ 二三 我なんちの愆を雲のごとくに消しなんちの罪を霧のごとくにちらせりなん
ち我にかへれ我なんちを贖ひたればなり 二四 天ようたうたへエホバのことを成たまへり下なる地よばはれ
もろもろの山よ林およびその中のもろもろの木よこゑを發ちてうたふべしエホバはヤコブを贖へりイスラエル
のうちに榮光をあらはし給はん

二五 なんちを贖ひなんちを胎内につくれるエホバかく言たまふ我はエホバなり我よろづのものを創造した
我のみ天をのべみづから地をひらき 二六 いつはるもの豫兆をむなくしト 者をくるはせ智者をうしろに
退けてその知識をおろかならしむ 二七 われわが僕のごとばを遂しめわが使者のはかりごとを成しめエルサレム
については民また住はんといひユダのもろもろの邑については重ねて建らるべし我その荒廢たるところを舊に
かへさんといふ 二八 また淵に命すかわけ我なんちのもろもろの川をほさんと 二九 又クロスについては彼はわが

牧者すべてわが好むところを成しむる者なりといひエルサレムについてはかさねて建られその宮の基すゑられんといふ

第五章

われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの國をそのまへに降らしめもろもろの王の腰をとき扉をその前にひらかせて門をとづるものなからしめん 二 われ汝のまへにゆきて崎嶇をたひらかにし 鋼の門をこぼちくろがねの關木をたちきるべし 三 われなんちに暗ところの財寶とひそかなるところに藏せるたからとを予へ なんちに我はエホバなんちの名をよべるイスラエルの神なるを知しめん 四 わが僕ヤコブわが探みたるイスラエルのために我なんちの名をよべり 汝われを知すといへどわれ名をなんちに賜ひたり 五 われはエホバなり 我のほかに神なし 一人もなし 汝われをしらすといへども我なんちを固うせん 六 而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかに神なしと知べし 我はエホバなり他にひとりもなし 七 われは光をつくり又くらきを創造す われは平和をつくりまた禍害をさうさうす 我はエホバなり 我すべてこれらの事をなすなり

天ようへより滴らすべし 雲よ義をふらすべし 地はひらけて救を生じ義をもともに蒔いたすべし われエホバ之を創造せり

世人はすゑものの中のひとつの陶器なるに己をつくれる者とあらずはわざはひなるかな 泥塊はすゑものつくりむかひて汝なを作るかといふべけんや 又なんちの造りたる者なんちを手なしといふべけんや 父にむかひて汝なにゆゑに生むことをせしやといひ 婦にむかひて汝なにゆゑに産のくるしみをなしやといふ者はわざはひなるかな

エホバ、イスラエルの聖者イスラエルを造れるもの如此いひたまふ 後きたらんとすることを我にとへまたわが子女とわが手の工につきて汝等われに言せよ 二 われ地をつくりてそのうへに人を創造せり われ自ら

の手をもて天をのべその萬象をさだめたり 三 われ義をもて彼のクロスを起せり われそのすべての道をなほくせん 彼はわが邑をたてわが俘囚を價のためならす報のためならすして釋すべし 此れ萬軍のエホバの聖言なり

エホバ如此いひたまふ エジプトがはたらきて得しものとエチオピアがあきなひて得しものとはなんちの有とならん また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがひ纏につながれて降りなんちのまへに伏しなんちに祈りていはん まことに神はなんちの中にいませり このほかに神なし 一人もなしと 救をほどこし給ふイスラエルの神よ まことに汝はかくれています神なり 偶像をつくる者はみな恥をいだき辱かしめをうけ 諸共にはちあわてゝ退かん 七 されどイスラエルはエホバにすくはれて永遠の救をえん なんちらは世々かぎりなく恥をいだかず辱かしめをうけじ

エホバは天を創造したまへる者にしてすなはち神なり また地をもつくり成てこれを堅くし 徒然にこれを創造し給はず 此れを人の住所につくり給へり 二 エホバかく宣給ふ われはエホバなり 我のほかに神あることなしと 三 われは隠れたるところ地のくらき所にてかたらず 我はヤコブの裔になんちらが我をたづぬるは徒然なり 四 といはず 我エホバはたゞしき事をかたり直きことを告ぐ

汝等もろもろの國より脱れきたれる者よ 一 つどひあつまり共にすゝみきたれ 木の像をになひ教ふことあたはざる神にいのりするものは無知なるなり 二 なんちらその道理をもちきたりて述よ また共にはかれ 此事をたれか上古より示したりや 誰かむかしより告たりしや 此はわれエホバならずや 我のほかに神あることなし われは義をおこなひ救をほどこす神にして我のほかに神あることなし 三 地の極なるもろもろの人よ なんちら我をあふぎのぞめ然ばすくはれん われは神にして他に神なければなり 四 われは己をさして誓ひたり この言はたゞしき口よりいでたれば反ることなし すべての際わがまへに屈み すべて舌はわれに誓をたてん 五 人われに就いてはん正義と力とはエホバにのみありと 人々エホバにきたらん すべてエホバにむかひて怒るものは恥を

いづくべし 三 イスラエルの裔はエホバによりて義とせられ且ほこらん

第四十六章

一 ベルは伏しネボは屈むかれらの像はけものと家畜とのうへにありなんぢらが擡げあるきしものは荷となりて披れおとろへたるけもの負ところとなりぬ 二 かれらは屈みかれらは共にふしその荷となれる者をすくふこと能はずして己とらはれゆく

三 ヤコブの家よイスラエルのいへの遺れるものよ腹をいでしより我におはれ胎をいでしより我にもたげられしものよ皆われにきくべし 四 なんぢらの年老るまで我はかはらず白髪となるまで我なんぢらを負ん我つくりたれば擡ぐべし我また負ひかつ救はん 五 なんぢら我をたれに比べたれに配ひたれに擬らへかつ相くらぶべきか 六 人々ふくろより黄金をかたづけいだし權衡をもて白銀をはかり金工をやとひてこれを神につくらせ之にひれふして拜む 七 彼等はこれをもたげて肩にのせ負ひゆきてその處に安んずすなはち立てその處をはなれず人これにむかひて呼ばれども答ふること能はず又これをすくひて善報のうちより出すことあたはず

八 なんぢら此事をおもひいでて堅くたつべし 九 善報よこのことを心にとめよ 十 我等いにしへより以來のことをおもひいでよ 十一 われは主なり我のほかに神なし われは主なり我のほかに神なし 十二 われは主なることを始めりつけいまだ成ざることを昔よりつけわが謀略はかならず立つといひすべて我がよることを成んといへり 十三 われ東より驚をまねき遠國よりわが定めおける人をまねかん 我このことを語りたれば必ず來らずべし 我このことを謀りたればかならず成すべし

第四十七章

一 なんぢら心かたくなにして義にとほさかるものよ我にきけ 二 われわが義をちかつかしむ可ればその來ること遠からずわが救おそからず 我すくひをシオンにあたへわが榮光をイスラエルにあたへん 三 バビロンの處女よくだりて塵のなかにすわれカルデア人のむすめよ座にすわらずして地にすわれ 汝ふたたび婀娜にして嬌なりとなへらるることなからん 四 鬘をとりて粉をひけ 而帕をとり

五 さり往をぬぎ鬘をあらはして河をわたれ 六 なんぢの肌はあらはれなんぢの恥はみゆべし 七 われ仇をむくいて人をかへりみず 八 われらを贖ひたまふ者はその名を萬軍のエホバ、イスラエルの聖者といふ 九 カルデア人のむすめよなんぢ口をつぐみてすわれ 又くらき所にいりてをれ 汝ふたたびもろもろの國の主母となへらるることなからん 十 われわが民をいきどほりわが産業をけがして之をなんぢの手にあたへたり 汝これに憐憫をほどこさず年老たるものうへに甚だおもき鞭をおきたり 十一 汝いへらく我とこしへに主母たらんと斯てこれらのことを心にとめず亦その終をおもはざりき

十二 なんぢ歡樂にふけり安らかにをり心のうちにたゞ我のみにして我のほかに誰もなく我はやめとなりてをらすまた子をうしなふことを知まじとおもへる者よなんぢ今きけ 十三 子をうしなひ寡婦となるこの二つのこと一日のうちに俄になんぢに來らん 汝おほく魔術をおこなひひろく呪詛をほどこすと雖もみちみちて汝にきたるべし 十四 汝おのれの惡によりたのみていふ我をみるものなしとなんぢの智慧となんぢの聰明とはなんぢを惡せたり 十五 なんぢ心のうちにおもへらくたゞ我のみにして我のほかに誰もなしと 十六 この故にわさはひ汝にきたらんなんぢ呪ひてこれを除くことをしらす 艱難なんぢに落きたらん 汝これをはらふこと能はずなんぢの思ひよらざる荒廢にはかに汝にきたるべし

十七 今なんぢわかきときより勤めおこなひたる呪詛とおほくの魔術とをもて立ちかふべしあるひは益をうることあらん 十八 あるひは敵をおそれしむることあらん 十九 なんぢは謀略おほきによりて倦つかれたりかの天をうらなふもの星をみるもの新月をうらなふ者もし能はざりざたちて汝をきたらんとする事よりまぬかれしむることをせよ 二十 彼らは災のごとなりて火にやかれん おのれの身をほのほの勢力よりすくひいだすこと能はずその火は身をあたゝむべき炭火にあらず又その前にすわるべき火にもあらず 二十一 汝がつとめて行ひたる事は終にかくのごとくならん 汝のわかきときより汝とよりかひしたる者おのその所にさすらひゆきて一人だになんぢを

救ふものなかるべし

第四十八章

ヤコブの家よなんぢら之をきけ 汝らはイスラエルの名をもて稱へられユダの根源よりいで
 ホバの名によりて誓ひイスラエルの神をかたりつくれども 眞實をもてせず正義をもてせざるなり
 二 かれらはみづから聖京のものとてなへイスラエルの神によりたのめり その名は萬軍のエホバといふ
 三 今よりさきに成しことを既にいにしへより告たり われ口よりい出して既にのべつたへたり 我にはかにこの事を
 おこなひ而して成ぬ われ汝がかたくなにして項の筋はくろがねその額はあかゞねなるを知れり このゆゑ
 四 我はやくよりかの事をなんぢにつげその成ざるさきに之をなんぢに聞しめたり 恐くはなんぢ云んわが偶像こ
 れを成せり刻みたるさう鑄たる像これを命じたりと 五 なんぢ既にきけり 凡てこれを視よ 汝ら之をのべつたへ
 六 ざるかわれ今より新なる事なんぢが未だしらすりし秘事をなんぢに示さん 七 これらの事はいま創造せられし
 八 にて上古よりありしにあらすこの日よりさきに汝これを聞ざりき 然らずば汝いはん視よわれこれを知れりと
 九 汝これを聞くともなく知くともなくなんぢの耳はいにしへより開けざりき 我なんぢが欺きあざむきて生れ
 一〇 ながら悖逆者となへられしを知ればなり 一 一 わが名のゆゑによりて我いかりを遅くせん わが頌美のゆゑにより
 一二 我しのびてなんぢを絶滅すことをせじ 一三 視よわれなんぢを煉たり されど白銀の如くせずして患難の爐をもて
 一四 こゝろみたり 一五 われ己のため我おのれの爲にこれを成ん われ何でわが名をけがさしむべき 我わが榮光をほ
 一六 かの者にあたふることをせじ

二二 ヤコブよわが召たるイスラエルよ われにきけ われは是なり われは好また終なり 二二 わが手は地のもと
 二三 ぬを置わが右の手は天をのべたり 我よべば彼等はもろとも立たり 二四 汝ら皆あつまりてきけ エホバの愛する
 二五 ものエホバの好みたまふ所をバビロンに成しその轉はカルデヤ人のうへにのぞまん 彼等のうち誰かこれらの事
 二六 をのべつけしや 二七 我のみ我かたれり 我かれをめし 我かれをきたらせたり その道さかゆべし 二八 なんぢ

二七 我にちかよりて之をきけ 我はじめより之をひそかに語りしにあらすその成しときより我はかしこに在りい
 二八 ま主エホバわれとその靈とをつかはしたまへり

二九 なんぢの 願主イスラエルの聖者エホバかく言給く われはなんぢの神エホバなり 我なんぢに益すること
 三〇 を教へなんぢを導きてそのゆくべき道にゆかしむ 一八 願くはなんぢわが命令にきゝしたがはんことをもし然ら
 三一 ばなんぢの平安は河のごとく 汝の義はうみの波のごとく 二九 なんぢの裔はすなのごとく 汝の體よりいづる者は
 三二 細沙のごとくになりて その名はわがまへより絶ることなく亡さるゝことなからん

三三 なんぢらバビロンより出てカルデヤ人よりのがれよ なんぢら歡の聲をもてのべきかせ地のはてにいたる
 三四 まで語りつたへ エホバはその僕ヤコブをあがなひ給へりといへ 三五 エホバかれらをして沙漠をゆかしめ給へる
 三六 とき彼等はかわきたることなかりき エホバ彼等のために磐より水をながれしめ また磐をさきたまへば水ほどば
 三七 しりいでたり 三三 エホバイひたまはく悪きものには平安あることなし

第四十九章

一 もろもろの島よ我にきけ 遠きところのもろもろの民よ耳をかたひけよ 我うまれいづるよりエホ
 二 バ我を召し われ母の胎をいづるよりエホバわが名をかたりつけたまへり 三 エホバわが口を利劍と
 四 なし我をその手のかげにかくし 我をときすましたる矢となして箝にをさめ給へり 五 また我にいひ給はく 汝は
 五 わが僕なり わが榮光のあらはるべきイスラエルなりと 六 されど我いへり われは徒然にはたらしき益なくむなし
 七 く力をつひやしぬと 然はあれど誠にわが審判はエホバにあり わが報はわが神にあり

八 ヤコブをふたゝび己にかへらしめイスラエルを己のもとにあつませんとて 我をうまれいでしより立て
 九 おのれの僕となし給へるエホバイひ給ふ(我はエホバの前にたふとくせらる 又わが神はわが力となりたまへり)
 一〇 その聖言にいはいはくなんぢわが僕となりてヤコブのもろもろの支派をおこしイスラエルのうちののこりて全う
 一一 せしものを歸らしむることはいと輕し 我また汝をたてゝ異邦人の光となし 我がすくひを地のはてにまで到ら

しむ エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなどるゝもの民にいみきはるゝもの長たちに役せらるゝ者にむかひて如此いひたまふもろもろの王は見てたちもろもろの君はみて拜すべしこれ信實あるエホバ、イスラエルの聖者なんちを選びたまへるが故なり

エホバ如此いひたまふわれ恵のときに汝にこたへ救の日になんちを助けたりわれ汝をまもりて民の契約とし國をおこし荒すたれたる地をまた産業としてかれらにつがしめん われ縛しめられたる者にいでよといひ暗にをるものに顯れよといはん かれら途すがら食ふことをなしもろもろの禿なる山にも牧草をうべし かれらは飢ずかわかず 又やけたる砂もあつき日もうつことなし 彼等をあはれむもの之をみちびきて泉のほとりに和かにみちびき給ふべければなり 我わがもろもろの山を路としわが大路をたかくせん 視よ人々あるひは遠きよりきたりあるひは北また西よりきたらん 或はまたシニムの地よりきたるべし 天ようたへ地よよろこべもろもろの山よ聲をはなちてうたへ エホバはその民をなぐさめその苦むものを憐みたまへばなり

然どシオンはいへりエホバ我をすて主われをわすれたまへりと 婦その乳兒をわすれて己がはらの子をあはれまざることあらんや 縦ひかれら忘るゝことありとも我はなんちを忘るゝことなし われ掌になんちを彫刻めりなんちの石垣はつねにわが前にあり なんちの子輩はいそぎ來りなんちを毀つもの汝をあらす者は汝より出さらん なんち目をあげて環視せよこれらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべし エホバ宣給くわれは活なんち此等をみな身によそほひて飾となし 新婦の帯のごとくに之をまとふべし なんちの荒かつ廢れたるところ毀れたる地はこののち住ふもの多くして狭きをおほえんなんちを呑つくしゝもの遙にはなれ去るべし むかし別れたりしなんちの子輩はのちの日なんちの耳のあたりにて語りあはん云くこゝは我がために狭しなんち外にゆきて我にすむべき所をえしめよと その時なんち心裏にいはん誰かわがために此等のものを生しやわれ子をうしなひて獨居りかつ俵れ且すすらひたり誰かこれを育てしや 視よわれ一人

のこされたり 此等はいづこに居しや

主エホバいひたまはく 視よわれ手をもろもろの國にむかひてあげ 旗をもろもろの民にむかひてたてん 斯てかれらはその懐中になんちの子輩をたづさへその肩になんちの女輩をのせきたらん もろもろの王はなんちの養父となりその後妃はなんちの乳母となり かれらはその面を地につけて汝にひれふしなんちの足の塵をなめん 而して汝わがエホバなるをしり われを俟望むもの恥をかうぶることなきを知るならん 勇士がうばひたる掠物をいかでとりかへし 強暴者がかすめたる虜をいかで救いだすことを得んや 然れどエホバ如此いひたまふ云く ますらをが掠めたる虜もとりかへされ 強暴者がうばひたる掠物もすくひいださるべし 我なんちを攻るものをせめてなんちの子輩をすくふべければなり 我なんちを虐ぐるものにその肉をくらはせ またその血をあたらしき酒のごとくにのませて酔しめん 而して萬民はわがエホバにして汝をすくふ者なんちを贖ふものヤコブの全能者なることを知るべし

第五〇章

エホバかくいひ給ふわがなんちらの母をさりたる難書はいづこにありや 我いづれの債主になんちらを賣わたししや 視よなんちらはその不義のために賣られなんちらの母は汝らの咎戻のために去られたり わがきたりし時なにゆゑ一人もをらざりしや 我よびしとき何故ひとりも答ふるものなかりしや わが手みちかくして贖ひえざるか われ救ふべき力なからんや 視よわれ叱咤すれば海はかれ河はあれのとなり そのなかの魚は水なきによりかわき死て臭氣をいだすなり われ黒きころもを天にきせ 鹿布をもて蔽となす 主エホバは教をうけしもの舌をわれにあたへ言をもて疲れたるものを扶支ふることを知得しめたまふ また朝ごとに醒しわが耳をさまして教をうけし者のごとく聞ことを得しめたまふ 主エホバわが耳をひらき給へり われは逆ふことをせず退くことをせざりき われを縛つものにわが背をまかせ わが鬚をぬくものにわが頬をまかせ 恥と唾とをさくるために面をおほふことをせざりき 主エホバわれを助けたまはん この故にわれ

恥ることなかるべし 我わが面を石の如くして恥しめらるゝことなきを知る われを義とするもの近きあり
 たれか我とあらそはんや われら相共にたつべし わが仇はたれぞや 近づききたれ 主エホバわれを助け給はん
 誰かわれを罪せんや 視よかれらはみな衣のごとくふるび露のためにくひつくされん

汝等のうちエホバをおそれその僕の聲をきくものは誰ぞや 暗をあゆみて光をえざるともエホバの名をた
 のみおのれの神にたよれ 火をおこし火把を帯るものよ 汝等みなその火のほのなかをあゆめ 又なんぢらの
 燃したる火把のなかをあゆめ なんぢら斯のごとき事をわが手よりうけて 悲みのうちに臥べし

第五一章

義をおひ求めエホバを尋ねもとむるものよ 我にきけ なんぢらが研出されたる磐となんぢらの掘
 出されたる穴とおもひ見よ なんぢらの父アブラハム及びなんぢらを生たるサラをおもひ見よ
 われ彼をその唯一人なりしときに召しこれを祝してその子孫をまし加へたり そはエホバ、シオンを慰めまた
 その凡てあれたる所をなぐさめてその荒野をエデンのごとくその沙漠をエホバの園のごとくなしたまへり 斯て
 その中によろこびと歡樂とあり感謝とうたうたふ聲とありてきこゆ

わが民よわが言にこゝろをとめよ わが國人よわれに耳をかたづけよ 律法はわれより出づ われわが途をか
 たく定めてもろもろの民の光となさん わが義はちかづきわが救はずでに出たり わが臂はもろもろの民をさ
 ばかんもろもろの島はわれを俟望み わがかひなに依頼ん なんぢら目をあげて天を觀また下なる地をみよ
 天は烟のごとききえ地は衣のごとくふるびその中にすむ者これとひとしく死んされどわが救はとこしへになが
 らへわが義はくだることなし

義をしるものよ 心のうちにわが律法をたもつ民よ われにきけ 人のそしりをおそるゝなかれ人ののしりに
 憐れなかれ そはかれら衣のごとく露にはまれ羊の毛のごとく露にはまれん されどわが義はとこしへに存
 らへわがすくひ萬代におよぶべし

さめよ醒よエホバの臂よちからを著よ さめて古への時むかしの代にありし如くなれ ラハブをきりころし
 鱈をさしつらぬきたるは汝にあらすや 海をかかし大なる淵の水をかわかし また海のみかきところを贖は
 れたる人のすぐべき路となしは汝にあらすや エホバに贖ひすくはれしもの歌うたひつゝ 歸りてシオンに
 きたり その首にとこしへの歡喜をいたきて 快樂とよろこびとをえん 而してかなしみと歎息とはにげさるべし

我こそ我なんぢらを慰むれ 汝いかなる者なれば死べき人をおそれ草の如くなるべき人の子をおそるゝか
 いかなれば天をのべ地の基をすゑ 汝をつくりたまへるエホバを忘れしや 何なれば汝をばらばさんとて豫備
 する處ぐるもの 憤れるをみて常にひねもす懼るゝか 處ぐるもの 忿怒はいづこにありや 身をかぢめぬる
 俘囚はすみやかに解れて 死ることなく穴にくだることなくその食はつくること無るべし 我は海をふるは
 せ波をなりどよめかす 汝の神エホバなり その御名を萬軍のエホバといふ 我わが言をなんぢの口におき
 わが手のかけにて汝をおほへり かくてわれ天をうゑ地の基をすゑ シオンにむかひて汝はわが民なりといはん

エルサレムよさめよさめよ起よ なんぢ前にエホバの手よりその忿怒のさかづきをうけて 飲みよろめかす
 大杯をのみ且すひほしたり なんぢの生るもろもろの子のなかに汝をみちびく者なく 汝のそだてたるもろも
 ろの子の中にてなんぢの手をたづさふる者なし この二のこと 汝にのぞめり誰かなんぢのために歎んや 荒廢
 の饑饉ほるびの劍なんぢに及べり 我いかにして汝をなくさめんや なんぢの子らは息たえだえにして網にかゝ
 れる 羚羊のごとくして 街衢の口にあらず エホバの忿怒となんぢの神のせめとはかれらに満たり

このゆゑに苦しめるもの 酒にあらで酔たるものよ之をきけ なんぢの主エホバおのが民の訟をあげつら
 ひ給ふ なんぢの神かくいひ給ふ 我よろめかす 酒杯をなんぢの手より 取除きわがいきどほりの大杯をとりのぞ
 きたり 汝ふたゝびこれを飲ことあらじ 我これを汝をなやますものの手にわたさん 彼らは義になんぢの靈魂
 にむかひて云らくなんぢ伏せよわれら越ゆかんと 而してなんぢその背を地のごとくし 衢のごとくし 彼等のこえ

ゆくに任せたり

第五章

シオンよ醒よさめよ 汝の力を衣よ 聖都エルサレムよなんぢの美しき衣をつけよ 今より朝禮をうけざる者および潔からざるものふたゝび汝に在ること無るべければなり なんぢ身の塵をふり

おとせ エルサレムよ起よすわれ 俾れたるシオンのむすめよ 汝がうなじの繩をときすてよ

そはエホバかく言給ふなんぢらは價なくして賣られたり 金なくして贖はるべし 主エホバ如此いひ給ふ

義にわが民エジプトにくだりゆきて 彼處にとゞまれり アツスリヤ人ゆゑなくして 彼等をしへたげたり

ホバ宣給く わが民はゆゑなくして 俾れたり されば我こゝに何をなさん エホバのたまはく 彼等をつかさどる者

さけびよばはり わが名はつねに終日けがさるゝなり 此の故にわが民はわが名をしらん このゆゑにその日に

は彼らの言をかたるもの我なるをしらん 我こゝに在り

よろこびの音信をつたへ 平和をつけ 善おとづれをつたへ 救をつけ シオンに向ひてなんぢの神はすべ治め

たまふといふもの足は山上にありていかに美しきかな なんぢが斥候の聲きこゆ かれらはエホバのシオン

に歸り給ふを目と目とあひあはせて 視るが故に みな聲をあげてもろともうたへり エルサレムの荒廢れたるこ

ろよ聲をはなちて共にうたふべし エホバその民をなぐさめ エルサレムを贖ひたまはればなり エホバその

きよき手をもろの國人の目のまへにあらはしたまへり 地のもろもろの樹までもわれらの神のすくひを見ん

なんぢら去よされよ 彼處をいでて汚れたるものに觸るなかれ その中をいでよ エホバの器をになふ者よ

なんぢら深くあれ なんぢら急ぎいづるにあらず 趨りゆくにあらず エホバはなんぢらの前にゆきイスラエルの

神はなんぢらの軍後となり給ふべければなり

視よわがしもべ智慧をもておこなはん 上りのぼりて 甚だたかくならん 曩にはおほくの人かれを見て

おどろきたり 彼の面貌はそこなはれて人と異なり その形容はおとろへて 人の子とことなれり 後には彼

おほくの國民にそゝがん王たち彼によりて口を緘まんそはかれら未だつたへられざることを見ゆまだ聞ざること

第五章

われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや エホバの手はたれにあらはれしや かれは主のまへ

に芽えのごとく 燦きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり われらが見るべきうるはしき容な

くうつくしき貌はなく われらがしたふべき艶色なし かれは侮られて人にすてられ 悲哀の人に病患を

しれり また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく侮られたり われらも彼をたふとまざりき

まことに彼はわれらの病患をおひ 我儕のかなしみを擔へり 然るにわれら思へらく 彼はせめられ 神にうた

れ苦しめらるゝなりと 彼はわれらの愆のために 俾けられ われらの不義のために 償かめらるゝから 償をう

けてわれらに平安をあたまふ そのうたれし 痲によりてわれらは癒されたり われらはみな羊のごとく迷ひてお

のおの己が道にむかひゆけり 然るにエホバはわれら凡てのもの不義をかれのうへに置たまへり

彼はくるしめらるれどもみづから謙だりて口をひらかず 厚地にひかるゝ羊の如く毛をきる者のまへに

もだす羊の如くしてその口をひらかざりき かれは虐待と審判とによりて 取去れたり その代の人のうち誰か

彼が活るもの地より絶れしことを思ひたりしや 彼はわが民のとの爲にうたれしなり その墓はあしき者

とともに設けられたれど 死るときは富るものともなれり かれは暴をおこなはず その口には虚偽なかりき

されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまへり 新てかれの靈魂とが獻物をなすに

いたらば 彼の末をみるを得 その日は永からん かつエホバの悦び給ふことは 彼の手によりて 榮ゆべし かれ

は己がたましひの煩勞をみて 心たらはん わが義しき僕はその知識によりて おほくの人を義とし 又かれらの不義

をおはん このゆゑに 我かれをして 大なるものとともに物をわかち取しめん かれは強きものとともに 掠物を

わかちとるべし 彼はおのが靈魂をかたぶけて 死にいたらしめ 愆あるものとともに 數へられたればなり 彼はおほく

の人の罪をおひ懲あるものの爲にとりなしをなせり

第五十四章

一 なんち孕ます子をうまさるものよ歌うたふべし産のくるしみなきものよ聲をはなちて謳ひよばはれ 夫なきものの子はとつげるものの子よりおほしと 此はエホバの聖言なり 汝が幕屋のうち

を廣くしなんちが住居のまくをはりひろげて音ひなけれ 汝の綱をながくしなんちの代をかたくせよ 二 そはなんちが右に左にひろがりなんちの裔はもろもろの國をえ 荒廢れたる邑をもすむべき所となさしむべし

三 懼るゝなけれなんち取ることなからん 惶てふためくことなけれ汝はちしめらるゝことなからん 若きときの恥をわすれ寡婦たりしときの恥辱をふたゝび覺ることなからん 四 なんちを造り給へる者はなんちの夫なり

五 その名は萬軍のエホバ なんちを贖ひ給ふものはイスラエルの聖者なり 全世界の神となへられ給ふべし 六 エホバ汝をまねきたまふ 棄られて心うれふる妻また若きとき嫁てさられたる妻をまねくがごとしと 此はなんちの神のみことばなり 七 我しは汝をすてたれど大なる憐憫をもて汝をあつめん 八 わが忿怒あふれて暫くわが面

をなんちに隠したれど 永遠のめぐみをもて汝をあはれまんと 此はなんちをあがなひ給ふエホバの聖言なり 九 このこと我にはノアの洪水のときのごとし 我むかへしノアの洪水をふたゝび地にあふれ流るゝことなからしめんと誓ひしが そのごとく我ふたゝび汝をいきどほらす 再びなんちを實じとちかひたり 一〇 山はうつり 川はうごくとも わが仁慈はなんちよりうつらす 平安をあたふるわが契約はうごくことなからんと 此はなんちを憐

みたまふエホバのみことばなり 一一 なんち苦しみをうけ暴風にひるがへされ 安慰をえざるものよ 我うるはしき彩色をなしてなんちの石をすゑ 青き玉をもてなんちの基をおき 一二 くれなゐの玉をもてなんちの櫓をつくり むらさきの玉をもてなんちの門をつくり なんちの境内はあまねく寶石にてつくるべし 一三 又なんちの子業はみなエホバに教をうけ なんちの子業のやすきは 大ならん 一四 なんち義をもて堅くたち 虐待よりとほざかりて憐ることなく また恐懼よりとほざ

かるべし そは恐懼なんちに近づくことなければなり 一五 縦ひかれら群集ふとも 我によるにあらす 凡てむれつどひて汝をせむる者はなんちの故にたふるべし 一六 みよ炭火をふきおこして用むべき器をいだす 鐵工はわが創造するところ 又あらし滅ぼす者もわが創造するところなり 一七 すべてなんちを攻んとてつくられしうつものは 利あることなし 興起ちてなんちとあらそひ訴ふる舌はなんちに罪せらるべし 一八 これエホバの僕等のうくる産業なり 是かれらが我よりうくる義なりと エホバのたまへり

一九 噫なんちら満ける者ごとく 水にきたれ 金なき者もきたるべし 汝等きたりてかひ求めてくら

第五十五章

一 きたれ 金なく 價なくして 葡萄酒と乳とをかへ 二 なにゆゑ糧にもあらぬ者のために金をいだし

他ことを得ざるもののために勞するや われに聽従へ さらばなんちら美物をくらふをえ脂をもてその靈魂をたの

しますを得ん 三 耳をかたづけ我にきたりてきけ 汝等のたましひは活べし われ亦なんちらととしへの契約

をなしてダビデに約せし 變らざる恵をあたへん 四 視よわれ彼をたてゝもろもろの民の證とし 又もろもろの民の

君となし 命命する者となせり 五 なんちは知る國民をまねかん 汝をしらざる國民はなんちのもとに走りきた

らん 此はなんちの神エホバ、イスラエルの聖者のゆゑによりてなり エホバなんちを尊くしたまへり

六 なんちら遇ことをうる間に エホバを尋ねよ 近くわたまふ間によびもとめよ 七 惡きものはその途をすて

よこしまなる人はその思念をすてゝ エホバに反れ さらば憐憫をほどこしたまはん 我等の神にかへれ 豊に救をあ

たへ給はん 八 エホバ宣給く わが思はなんちらの思とことなり わが道はなんちらのみちと異なれり 九 天の地

よりたかきがごとく わが道はなんちらの道よりも高く わが思はなんちらの思よりもたかし 一〇 天より雨くだり

雪おちて復かへらず 地をうるほして物をえしめ 萌をいださしめて 播ものに種をあたへ 食ふものに糧をあたふ

二 如此わが口よりいづる言もむなしくは 我にかへらず わが喜ぶところを成し わが命に遺りし事をはたさん

三 なんちらは喜びて 出きたり 平穩にみちびかれゆくべし 山と岡とは聲をはなちて 前にうたひ野にある樹はみな

手をうたん 松樹はいばらにかはりてはえ岡枯樹は棘にかはりてはゆべし 此はエホバの頌美となり並とこしへの徴となりて絶ることなからん

第六章

エホバ如此いひ給ふなんぢら公平をまもり正義をおこなふべし わが救のきたるはちかくわが義のあらはるゝは近ければなり 安息日をまもりて汚さすその手をおさへて悪きことをなさず 斯おこなふ人かく堅くまもる人の子はさいはひなり エホバにつらなれる異邦人はいふなかれ エホバ必ず我をその民より分ち給はん 寺人もまたいふなかれ われは枯たる樹なりと エホバ如此いひたまふ わが安息日をまもり わが悦ぶことをえらみて我が契約を堅くまもる寺人には 我わが家のうちにてわが垣のうちに子にも女にもまさる記念のしるしと名とをあたへ 並とこしへの名をたまふて絶ることなからしめん

またエホバにつらなりこれに事へエホバの名を愛しその僕となり安息日をまもりて汚すことなく見てわが契約をかたくまもる異邦人は 我これをわが聖山にきたらせわが祈の家のうちにて樂ましめんかれらの婦祭と犠牲とはわが祭壇のうへに納めらるべし わが家はすべての民のいのりの家となへらるべければなり イエラエラの放逐れたるものを集めたまふ主 エホバのたまはく 我さらに人をあつめて既にあつめたる者も集む 野獸よみなきたりてくらへ 林にをるけものよ皆きたりてくらへ 斥候はみな警者にしてしることをしみな晒なる犬にして吠ることあたはず みな夢みるもの眠ることをこのむ者なり この犬はむさぼること甚だしくして飽くことをしらす かれらは悟ることを得ざる牧者にして皆おのが道にむかひゆき 何れにをる者もおの己の利をおもふ かれら互にいふ請われ酒をたづさへきたらん われら濃酒のみあかんかくて明日もなほ今日のごとく大にみち足はせん

第七章

義者ほろぶれども心にとむる人なく 愛しみ深き人々とりさらるれども義きものの禍害のまへより取去るゝなるを悟るものなし かれは平安にいり直きをおこなふ者はその寐床にやすめり

なんぢら巫女の子淫人また妓女の裔よ 近ききたれ なんぢら誰にむかひて戯れをなすや 誰にむかひて口をひらき舌をのぼすや なんぢらは悖逆の子輩いつはりの黨類にあらずや なんぢらは楹樹のあひだ縁りなる木々のしたに心をこがし谷のなか岩の狭間に子をころせり なんぢは谷のなかの滑かなる石をうくべき嗣業としこれをなんぢが所有とす なんぢ亦これに灌祭をなし之にそなへものを献げたり われ之によりていかで心をなだむべしや なんぢは高くそびえたる山の上になんぢの床をまうけ かつ其處にのぼりゆきて犠牲をさへげたり また戸および柱のうしろに汝の記念をおけり なんぢ我をはなれて他人に身をあらはし 登りゆきてその床をひろくしかれらと誓をなし 又かれらの床を愛しこれがためにその所をえらびたり なんぢ香膏とおほくの薫物とをたづさへて王にゆき 又なんぢの使者をとほきにつかはし陰府にまで己をひくゝせり なんぢ途のながきに疲れたれどなほ望なしといはず なんぢ力をいきかへされしによりて衰弱ざりき

なんぢ誰をおそれ誰のゆゑに憎きていつはりをいひ 我をおもはず亦そのことを心におかさりしや われ久しく黙したれど汝かへりて我をおそれざりしにあらずや 我なんぢの義をつけしめさん なんぢの作はなんぢに益せじ なんぢ呼るときその集めおきたるもの汝をすくへ 風はかれらを悉くあげさり 息はかれらを吹さらん 然どわれに依頼むものは地をつぎわが聖山をうべし

また人いはん 土をもち土をもりて途をそなへよ わが民のみちより 障礙をとりされと 至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此いひ給ふ 我はたかき所きよき所にすみ 亦こゝろ碎けてへりくだる者とともにすみ 謙だるものの靈をいかし碎けたるもの心のいかす われ限なくは争はじ我たえずは怒らじ 然らずば人のこゝろ我がまへにおとろへん わが造りたる靈はみな然らん 彼のむさぼりの罪により我いかりて之をうちまた面をおほひて怒りたり 然るになほ恃りて己がこゝろの途にゆけり されど我その途をみたり 我かれを愈すべし 又かれを導きてふたゝび安慰をかれとその中のかなしめる者とかへすべし 我くちびるの

果をつくれり 遠きものにも近きものにも 平安あれ 平安あれ 我かれをいやさん 此はエホバのみことばなり
 然はあれど悪者はなみだつ海のごとし 静かなること能はずしてその水つねに濁と泥とをいだせり
 神いひたまはく悪きものには平安あることなしと

第五十八章

大によばはりて聲ををしむなかれ 汝のこゑをラツバのごとくあげ わが民にその愆をつけヤコブ
 の家とその罪をつけしめせ かれらは日々われを尋求めわが途をしらんことをこのむ義をおこ
 なひ神の法をすてざる國のごとく 義しき法をわれにもとめ神と相近づくことをこのめり かれらはいふわれら
 断食するになんぢ見たまはず われら心をくるしむるになんぢ知たまはざるは何ぞやと 視よなんぢらの断食の日
 にはおのがこのむ作をなしその工人をことごとく憫めつかふ 視よなんぢら断食するときは相あらそひ相き
 そひ悪の拳をもて人をうつなんぢらの今のだんじきはその聲をうへに聞えしめんとにあらざるなり 斯の
 ごとき断食はわが悦ぶところのものならんや かくのごときは人その靈魂をなやますの日ならんや その首を葉の
 ごとくにふし鹿服と灰とをその下にしくをもて断食の日またエホバに納らるゝ日となふべけんや わが悦ぶ
 ところの断食はあくの繩をほどき腕のつなをとき 虚げらるゝものを放ちさらしめすすべての軛ををるなどの事に
 あらずや また飢たる者になんぢのパンを分かちあたへさすらへる貧民をなんぢの家にいれ裸かなるものを見て
 これに衣せおのが骨肉に身をかくさざるなどの事にあらずや しかる時はなんぢのひかり 曉の如くにあら
 はれいで 汝すみやかに愈さるゝことを得なんぢの義はなんぢの前にゆきエホバの榮光はなんぢの軍後となるべ
 し また汝よぶときはエホバ答へたまはんなんぢ叫ぶときは我こゝに在りといひ給はん
 もし汝のなかより軛をのぞき指點をのぞき悪きことをかたるを除き なんぢの靈魂の欲するものをも
 飢たる者にほどし 苦しむものの心を満足しめばなんぢの光くらきにてりいで なんぢの闇は晝のごとくなら
 ん エホバは常になんぢをみちびき 乾けるところにても汝のこゑを満足しめなんぢの骨をかたうし給はん

なんぢは潤ひたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし 汝よりいづる者はひさしく荒廢れたる所を
 おこし なんぢは累代やぶれたる基をたてん 人なんぢをよびて破隙をおきなふ者といひ 市街をつくらひてすむ
 べき所となす者といふべし
 もし安息日になんぢの歩行をとどめ 我聖日になんぢの好むわざをおこなはず 安息日をとなへて樂日と
 なし エホバの聖日をとなへて尊むべき日となし 之をたふとみて己が道をおこなはずおのが好むわざをなさず
 おのが言をかたらすば その時なんぢエホバを樂しむべし エホバなんぢを地のたかき處にのらしめなんぢが
 先祖ヤコブの産業をもて汝をやしなひ給はんこはエホバ口より語りたまへるなり

第五十九章

エホバの手はみちかくして救ひえざるにあらず その耳はにぶくして聞えざるにあらず 惟なん
 ぢらの邪曲なる業なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり 又なんぢらの罪その面をおほひて
 聞えざらしめたり そはなんぢらの手は血にてけがれなんぢらの指はよこしまにて汚れなんぢらのくちびる
 は虚偽をかたり なんぢらの舌は悪をさしやき その一人だに正義をもてうつたへ眞實をもて論らふものなし
 彼らは虚浮をたのみ虚偽をかたり 悪しきくはだてをばらみ不義をうむ かれらは腹の卵をかへし蛛網をおる
 その卵をくらふものは死るなり 卵もし踐るればやぶれて毒蛇をいだす その織るところは衣になすあたはず
 その工をもて身をおほふこと能はず かれらの工はよこしまの工なり かれらの手には暴虐のおこなひあり か
 れらの足はあくにはしり罪なき血をながすに速し かれらの思念はよこしまの思念なり 殘害と滅亡とその路徑に
 のこれり 彼らは平穩なる道をしらす その過るところに公平なく又まがれる小徑をつくる 凡てこれを踐ものは
 平穩をしらす
 このゆゑに公平はとほくわれらをはなれ正義はわれらに追及す われら光をのぞめど暗をみ 光輝をのぞめ
 ど闇をゆく われらは賢者のごとく 闇をさぐりゆき 目をなき者のごとく 摸りゆき 正午にても日暮のごとくにつま

二 づき強壯なる者のなかにもありても死するものとす 我々はみな死のごとくにほえぬのごとくに甚くうめき
 三 審判をのぞめどもあることなく救をのぞめども遠くわれらを離る われらの愆はなんちの前におほくわれら
 四 のつみは證してわれらを訟へわれらのとがは我らとともに在りわれらの邪曲なる業はわれら自らしれり わ
 五 れら罪ををかしてエホバを棄われらの神にはなれてしたがはず 暴虐と悖逆とをかたり虚偽のことばを心にはら
 六 みて説出すなり 公平はうしろに退けられ正義ははるかに立り 是は眞實は衛間にたふれ正直はいることを得
 七 ざればなり 眞實はかけてなく悪をはなるものは掠めうばはる

二六 エホバこれを見てその公平のなかりしを悦びたまはざりき エホバは人なきをみ中保なきを奇しみたま
 二七 へり 斯てその臂をもてみづから助けその義をもてみづから支たまへり エホバ義をまといて護胸とし救を
 二八 その頭にいたゞきて兜となし仇をまといて衣となし熱心をきて外服となしたまへり かれらの作にしたがひ
 二九 て報をなし敵にむかひていかり仇にむかひて報をなしまた島々にむくいをなし給はん 西方にてエホ
 三〇 をおそれ日のいづる所にてその榮光をおそるべし エホバは堰ぎとめたる河のその氣息にふき潰えたるがごとく
 三一 に来りたまふ可ればなり エホバのたまはく 曠者シオンにきたりヤコブのなかの愆をはなる者につかんと
 三二 エホバいひ給くなんちの上にあるわが聖なんちの口におきたるわがことは 今よりのち永遠になんちの口
 三三 よりなんちの商の口より汝のすゑの商の口よりはなれざるべし わがかれらにたつる契約はこれなりと此はエホ
 三四 バのみことばなり

第六〇章

一 起よひかりを發てなんちの光きたり エホバの榮光なんちのうへに照出たればなり 視よ
 二 くらきは地をおほひ闇はもろもろの民をおほはん されどなんちの上にはエホバ照出たまひてその
 三 榮光なんちのうへに顯はるべし もろもろの國はなんちの光にゆきもろもろの王はてり出るなんちが光輝に
 四 ゆかん

二 なんちの目をあげて環視せかれらは皆つどひて汝にきたり汝の子輩はとほきより來り なんちの女輩は
 三 いだかれて來らん そのときなんち視てよろこびの光をあらはしなんちの心おどろきあやしみ且ひろらかに
 四 なるべしそは海の富はうつりて汝につきもろもろの國の貨財はなんちに來るべければなり おほくの駱駝
 五 ミデアンおよびエバのわかき駱駝なんちの中にあまねくみちシバのもろもろの人こがね乳香をたづさへきたり
 六 てエホバの譽をのべつたへん ケダルのひつじの群はみな汝にあつまりきたり ネバヨラの牡羊はなんちに
 七 事へわが祭壇のうへにのぼりて受納られん 斯てわれわが榮光の家をかじやかすべし 雪のごとくとび鳩の
 八 その窠にとびかへるが如くしてきたる者はたれぞ もろもろの島はわれを俟望み タルシンのふねは首先になん
 九 ちの子輩をとほきより載きたり 並かれらの金銀をとものにせきたりてなんちの神エホバの名にさしげ イエラエ
 一〇 ルの聖者にさしげん エホバなんちを顯かせたまひたればなり

一一 異邦人はなんちの石道をきつきかれらの王等はなんちに事へん 是は我いかりて汝をうちしかどまた
 一二 をもて汝を憐みたればなり なんちの門はつねに開きて夜も日もとさすことなし 人はもろもろの國の貨財
 一三 をなんちに携へきたりその王等をひきむ來らんがためなり なんちに事へざる國と民とはほろびそのくにぐ
 一四 には全くあれすたるべし レバノンの榮はなんちにきたり 松杉黄楊はみな共にきたりて我が聖所をかじや
 一五 かさん われ亦わが足をおく所をたふとくすべし 汝を苦しめたるものの子輩はかじみて汝にきたり 汝をさげ
 一六 しめたる者はことごとくなんちの足下にふし 斯て汝をエホバの都イストラエルの聖者のシオンとなへん
 一七 なんち前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をとこしへの華美よの歡喜
 一八 となさん なんち亦もろもろの國の乳をすひ王たちの乳房をすひ 而して我エホバなんちの救主なんちの贖主
 一九 ヤコブの全能者なるを知るべし われ黄金をたづさへきたりて赤銅にかへ 白銀をたづさへきたりて鐵にかへ
 二〇 赤銅を木にかへ 鐵を石にかへ なんちの施政者をおだやかにしなんちを役するものを義うせん 強暴のこと

再びなんぢの地にきこえず 殘害と敗壞とはふたゝびなんぢの境にきこえず 汝その石垣をすくひととなへその門を聳ととなへん 實は日ふたゝびなんぢの光とならず 月もまた輝きてなんぢを照さず エホバ永遠になんぢの光となり なんぢの神はなんぢの榮となり給はん なんぢの日はふたゝび落す なんぢの月はかくることなるべしそはエホバ永遠になんぢの光となり 汝のかなしみの日暮るべければなり 汝の民はことごとく義者となりてとこしへに地を嗣んかれはわが植たる樹株わが手の工わが榮光をあらはす者となるべし その小きものは干となりその弱きものは強國となるべし われエホバその時いたらば速かにこの事をなさん

第六一章

主エホバの靈われに臨めりこはエホバわれに膏をそそぎて負きものに國音をのべ傳ふることをゆだね 我をつかはして心の傷める者をいやし 囚にゆるしをつけ縛められたるものに解放をつけ エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ 又すべて哀むものをなぐさめ 灰にかへ冠をたまひてシオンの中のかなしむ者にあたへ 悲哀にかへて歡喜のあぶらを予へうれひの心にかへて讚美の歌をあたへしめたまふなり かれらは義の樹 エホバの植たまふ者その榮光をあらはす者となへられん

彼等はひさしく荒たる處をつくり 上古より廢れたる處をおこし荒たる邑々をかさねて新にし世々すられたる處をふたゝび建べし 外人はたちてなんぢらの群をかひ 異邦人はなんぢらの畑をたがへす者となり 葡萄をつくる者とならん 然どなんぢらはエホバの祭司となへられ われらの神の役者とよばれもろもろの國の富をくらひかれらの榮をえて自らほこるべし 曩にうけし恥にかへ倍して賞賜をうけ 凌辱にかへ嗣業をえて樂むべし 而してその地にありて倍したる賞賜をたもち永遠によろこびを得ん われエホバは公平をこのみ邪曲なるかすめごとをにくみ 眞實をもて彼等にむくいをあたへ 彼等ととこしへの契約をたつべければなり かれらの裔はもろもろの國のなかに知れ かれらの子孫はもろもろの民のなかに知れん すべてこれを見るものはそのエホバの祝したまへる裔なるを辨ふべし

われエホバを大によろこび わが靈魂はわが神をたのしまん そは我にすくひの衣をさせ 義の衣服をまとはせて 新郎が冠をいたゞき 新婦が玉こがねの飾をつくるが如くなしたまへばなり 地は芽をいだし 畑はまけるものを生ずるがごとく 主エホバは義と譽とをもろもろの國のまへに生ぜしめ給ふべし

第六二章

シオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし もろもろの國はなんぢの義を見もろもろの王はみななんぢの榮をみん 斯てなんぢはエホバの口にて定め給ふ新しき名をもて稱へらるべし また汝はうるはしき冠のごとく エホバの手にあり 王の冕のごとくなんぢの神のたなごころにあらん 人ふたゝび汝をすてられたる者といはず 再びなんぢの地をあれたる者といはじ 却てなんぢをへフジバ(わが悦ぶところ)となへなんぢの地をへウラ(配偶)となふべし そはエホバなんぢをよろこびたまふなんぢの地は配偶をえん わかきものの處女をめとる如くなんぢの子孫はなんぢを娶らん 新郎の新婦をよろこぶごとくなんぢの神なんぢを喜びたまふべし

エルサレムよ我なんぢの石垣のうへに斥候をおきて 終日終夜たえず 黙すことなからしむなんぢらエホバに記念したまはんことを求むるものよ 自らやすむなかれ エホバ、エルサレムをたて、全地に譽をえしめ給ふまでは息め奉るなかれ エホバその右手をさしその大能の臂をさし 誓ひて宣給く われ再びなんぢの五穀をなんぢの敵にあたへて食はせず 異邦人はなんぢが勢したる酒をのまさるべし 收穫せしものは之をくらひてエホバを讚たゝへ 葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之をのむべし

門よりすゝみゆけ 進みゆけ 民の途をそなへ 土をもち土をもちて 大路をまうけよ 石をとりのぞけ もろもろの民に旗をあげて示せ エホバ地の極にまで告てのたまはく 汝等シオンの女にいへ 視よなんぢの救きたる 視よ主の手にその恩賜ありはたらしきの價はその前にあり 而してかれらはきよき民またエホバにあがなはれ

たる者となへられんなんちは人にもとめ尋らるゝもの棄られざる邑となへらるべし

第六章

このエドムよりきたり緋衣をきてボヅラよりきたる者はたれぞその服飾はなやかに大なる能力をもて厳しく歩みきたる者はたれぞこれは義をもてかたり大にすくひをほどこす我なり なんち

の服飾はなにゆゑに赤くなんちの衣はなにゆゑに酒樽をふむ者とひとしきや 我はひとりにて酒樽をふめり

もろもろの民のなかに我とともにする者なしわれ怒によりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを踏にじりたれば

かれらの血わが衣にそゞわが服飾をことごとく汚したり 是は刑罰の日わが心の中にあり 救贖の歳すでき

たり われ見てたすくる者なく扶る者なきを奇しめり この故にわが臂われをすくひ 我いさどほり我をささへ

たり われ怒によりてもろもろの民をふみおさへ 忿恚によりてかれらを酔しめかれらの血を地に流れしめたり

われはエホバのわれらに施したまへる各種のめぐみとその譽とをかたりつけ 又その憐憫にしたがひ其お

ほくの恩恵にしたがひてイユラエルの家にはどこし給ひたる大なる恩寵をかたり告ん エホバいひたまへり

誠にかれらはわが民なり 虚偽をせざる子輩なりと 斯てエホバはかれらのために救主となりたまへり かれら

の艱難のときはエホバもなやみ給ひてその面前の使をもて彼等をすくひ その愛とその憐憫によりて彼等をあ

がなひ彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまへり

然るにかれらは悖りてその聖靈をうれへしめたる故に エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻たま

へり 爰にその民にしへのモーセの日をおもひいでて曰けるはかれらとその群の牧者とを海より携へあげ

し者はいづこにありや 彼等のなかに聖靈をおきしものは何處にありや 榮光のかひなをモーセの右にゆか

しめ 彼等のまへに水をさきて自らとこしへの名をつくり 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく 曠かで

淵をすぎしめたりし者はいづこに在りや 谷にくだる家畜の如くにエホバの靈かれらをいこはせ給へり 主よ

なんちは斯おのれの民をみちびきて榮光の名をつくり給へり

ねがはくは天より俯視なはしその榮光あるまよき屠屠より見たまへ なんちの熱心となんちの大能あるみ

わざとは今いづこにありや なんちの切なる仁慈と憐憫とはおさへられて我にあらはれず 汝はわれらの父

なり アブラハムわれらを知す イスラエルわれらを認めす されどエホバよ 汝はわれらの父なり 上古よりなんち

の名をわれらの 願主といへり エホバよ何故にわれらをなんちの道より離れまどはしめ我儕のこゝろを頑固

にして汝を畏れざらしめたまふや 願くはなんちの僕等のためになんちの産業なる支派のために歸りたまへ

汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんちの聖所をふみにじれり 我儕はなんちに上古

より治められざる者のごとくなんちの名をもて稱はれざる者のごとくなりぬ

願くはなんち天を裂てくだり給へなんちのみまへに山々ふるひ動かんことを 火の榮をもや

第六四章 火の水を沸すがごとくして降りたまへかくて名をなんちの敵にあらはしもろもろの國をなんち

のみまへに戦慄かしめたまへ 汝われらが逆料あたはざる懼るべき事をおこなひ給ひしときに降りたまへり

山々はその前にふるひうごけり 上古よりこのかた汝のほかに何なる神ありて俟望みたる者にかゝる事をおこ

なひしや いまだ聽すいまだ耳にいらすいまだ目にみしことなし 汝はよろこびて義をおこなひなんちの途に

ありてなんちを記念するものを迎へたまふ 視よなんち怒りたまへり われらは罪をかせりかゝる状なること

既にひさし我儕いかで救はるゝを得んや 我儕はみな潔からざる物のごとくなり われらの義はことごとく

汚れたる衣のごとし 我儕はみな木葉のごとく枯れわれらのよこしまは暴風のごとく我らを吹去れり なんち

の名をよぶ者なくみづから觸みて汝によりすがる者なしなんち面をおほひてわれらを顧みたまはずわれらが

邪曲をもてわれらを消失せしめたまへり されどエホバよ 汝はわれらの父なり われらは泥塊にしてなんちは陶工なり 我らは皆なんちの御手のわざ

なり エホバよいたく怒りたまふなかれ 永くよこしまを記念したまふなかれ 願くは顧みたまへ 我儕はみな

なんぢの民なり 一〇 汝のきよき諸邑は野となりシオンは野となりエルサレムは荒廢れたり 二 我らの先祖が汝を讚たゝへたる榮光ある我儕のきよき宮は火にやかれ我儕のしたひたる處はことごとく荒はてたり 三 エホバよこれらの事あれども汝なほみづから制へたまふや なんぢなほ黙してわれらに深く苦しみを受しめたまふや

第五章

一 我はわれを求めざりしものに問もとめられ我をたづねざりしものに見出されわが名をよばざりし國にわれ曰らくわれは此にあり我はこゝに在と 善らぬ途をあゆみまのが思念にしたがふ悖

れる民をひねもす手をのべて招けり 二 この民はまのあたり恒にわが怒をひき國のうちにて犠牲をさしげ瓦の壇にて香をたき 三 墓のあひだにすわり隠密なる處にやどり猪の肉をくらひ憎むべきものの羹をその器皿にもりて 人にいふなんぢ其處にたちて我にちかづくなかれそは我なんぢよりも聖しと彼らはわが鼻のけぶり終日もゆる火なり 四 視よこの事わが前にしるされたり われ黙さずして報いかへすべし 必ずかれらの懷中に報いかへすべし 五 エホバいひ給くなんぢらの邪曲となんぢらが列祖のよこしまとはともに報いかへすべしかれらは山上にて香をたき岡のうへにて我を汚しゝがゆゑに 我まづその作をはかりてその懷中にかへすべし

六 エホバ如此いひたまふ 人ぶだうのなかに汁あるを見ばいはんこれを壊るなかれ福祉その中になればなりと我わが僕等のために如此おこなひてことごとくは壊らじ 七 ヤコブより一裔をいだしユダよりわれ山々をうけつぐべき者をいださんわが撰みたる者はこれをうけつき我がしもべらは彼處にすむべし 八 シヤロンは羊のむれの牧場となりアコルの谷はうしの群のふす所となりて我をたづねもとめたるわが民の有とならん 九 然どなんぢらエホバを棄わがきよき山をわすれ 机をガド(禍福の神)にそなへ雑合せたる酒をりてメニ(運命の神)にさゝぐる者よ 一〇 われ汝らを剣にわたすべく定めたりなんぢらは皆かゞみて屠らるべし 汝等はわが呼しときこたへずわが語りしとききかずわが目にあしき事をおこなひわが好まざりし事をえらみたればなり

一 一 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す 人さきものを記念することなく之をその心におもひ出ることなし 二 然どなんぢらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ 視よわれはエルサレムを造りてよろこびとしその民を快樂とす 三 われエルサレムを喜びわが民をたのしまん 而して泣聲とさけぶ聲とはふたゝびその中にきこえざるべし 四 日數わづかにして死る嬰兒といのちの日をみたさる老人とはその中にまたあることなかるべし 五 百歳にて死るものも尙わかしとせられ 百歳にて死るものを詛れたる罪人とすべし 六 かれら家をたてゝ之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらふべし 七 かれらが建るところにほかの人がすまされらが造るところの果はほかの人がくらはすそはわが民のいのちの樹の命の如く 我がえらみたる者はその手の工ふるびろするとも存ふべければなり 八 かれらの勤勞はむなしからずその生ところの者はわさはひにかゝらず 彼等はエホバの福祉をたまひしもの裔にしてその子輩もあひ共にをる可ればなり 九 かれらが呼さるさきにわれこたへ彼らが語りをはざるに我きかん 一〇 豺狼とこひつじと食物をともし 獅は牛のごとく藁をくらひ 蛇はちりを糲とすべし 斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん 一 一 エホバの聖言なり

第六章

一 エホバ如此いひたまふ 天はわが位地はわが足凳なり なんぢら我がために如何なる家をたてんとするか 又いかなる處かわが休憩の場とならん 二 エホバ宣給く 我手はあらゆる此等のものを造りてこれらの物ごとく成れり 我はたゞ苦しみをいたため我がことばを畏れをのゝくものを顧みるなりと

牛をほふるものは人をころす者のごとく、羔を犠牲とするものは狗をくびりころす者のごとく、祭物をさぐるものは豚の血をさぐる者のごとく、香をたくものは偶像をほむる者のごとし、彼等はおのが途をえらみその心にむべき者をたのしみとせり。我もまた災禍をえらびて彼等にあたへ、その懼るところの事を彼らに臨ましめん。そは我よびしとき應ふるものなく、我かたりしとき聽くことをせざりき。わが目にあしき事をおこなひわが好まざる事をえらみたればなり。

なんぢらエホバの言をおそれのく者よ、エホバの言をきけ。なんぢらの兄弟なんぢらを憎みなんぢらをわが名のために逐出していふ。願くはエホバその榮光をあらはして我儕になんぢらの歡喜を見せしめよ。然どかれらは恥をうけん。騒亂るこゑ、邑よりきこえ聲ありて、宮よりきこゆ。此はエホバその位にむくいをなしたまふ聲なり。

オンは産のなやみを知らざるさきに、生その働勞きたらざるさきに、男子をうみいだせり。誰がかゝる事をきしや、誰がかゝる類をみしや。一の國はたゞ一日のくるしみにて成げけんや、一の國民は一時にうまるべけんや。然どシオンはくるしむ間もなく、直にその子輩をうめり。エホバ言給く、われ産にのぞましめしに、何でうまざらしめんや。なんぢの神いひたまはく、我はうましむる者なるに、いかで胎をとざさんや。

エルサレムを愛するものよ、皆かれとともに喜べ。かれの故をもてたのしめ、彼のために悲めるものよ、皆かれとともに喜びたのしめ。そはなんぢら乳をすふ如く、エルサレムの安慰をうけて飽くことを得ん。また乳をしぼることく、その豊なる榮をうけておのづから心さわやかならん。エホバ如此いひたまふ。視よ、われ河のごとく、彼に平康をあたへ、漲ぎる流のごとく、彼にもろもろの國の榮をあたへん。而して汝等これをすひ背におはれ、膝におかれ、て樂しむべし。母の子をなくさむることく、我もなんぢらを慰めん。なんぢらはエルサレムにて安慰をうべし。なんぢら見て心よるこばん、なんぢらの骨は若草のさかゆるごとくなるべし。エホバの手はその僕等に

あらはれ、又その仇をばげしく怒りたまはん。

視よ、エホバは火中であらはれて來りたまふ。その車輦ははやちのごとし、烈しき威勢をもて、その怒をもらし、火のほのほをもて、その譴をほどこし給はん。エホバは火をもて、劍をもて、よろづの人を刑ひたまはん。エホバに刺殺さるゝもの多かるべし。エホバ言給く、みづからを深くしみづからを別ちて、國にゆき、その中にある木の像にしたがひ、豚の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせん。

我かれらの作爲とかれらの思念とをしり、時きたらばもろもろの國民ともろもろの族とをあつめん。彼等きたりてわが榮光をみるべし。我かれらのなかに、一つの休徴をたて、逃れたる者をもろもろの國すなはちタルシシよく弓をひく、フル、ルデおよびトバル、ヤワン、又わが聲名をきかずわが榮光をみざる遙かなる諸島に、つかはさん。彼等はわが榮光をもろもろの國にのべつたふべし。エホバいひ給ふ、かれらはイスラエルの子輩が、きよき器にそなへものをもりて、エホバの家にあたづさへきたるが如く、なんぢらの兄弟をもろもろの國の中より、たづさへて、馬車、轎、駱駝にのらしめ、わが聖山エルサレムにきたらせて、エホバの祭物とすべし。エホバいひ給ふ、

我また彼等のうちより人をえらびて、祭司とし、レビ人とせん。エホバ言給く、わが遣らんとする新しき天と、あたらしき地と、わが前にながくとどまる如く、なんぢの商となんぢの名はながくとどまらん。エホバいひ給ふ、新月ごとく、安息日ごとく、よろづの人わが前にきたりて、崇拜をなさん。かれら出て、われに逆きたる人の屍をみん、その蛆しなす、その火きえず、よろづの人にいみきはるべし。イザヤ書をはり。

耶利米亞記

第一章

これはベニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子エレミヤの言なり アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなはちその治世の十三年にエホバの言エレミヤに臨めり その言またヨシヤサレムの民の移されたる時までいたれり

エホバの言我にのぞみて云ふ われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり汝が胎をいでざりし先に汝を聖め汝をたて萬國の預言者となせりと 我こたへけるは噫主エホバよ視よわれは幼少により語ることを知らず

エホバわれにいひたまひけるは汝われは幼少といふ勿れすべて我汝を遺すところにゆき我汝に命するすべてのことを語るべし なんぢ彼等の面を畏る勿れ蓋われ汝と惜にありて汝をすくふべければなりとエホバいひたまへり

エホバ遂にその手をのべて我口につけエホバ我にいひたまひけるは視よわれ我言を汝の口にいたれり 我よ我けふ汝を萬民のうへと萬國のうへにたて汝をして或は抜き或は毀ち或は滅し或は覆し或は建て或は植しめん

エホバの言また我に臨みていふエレミヤよ汝何をみるや我こたへけるは巴旦杏の枝をみる エホバ我にいひたまひけるは汝善く見たりそはわれ速に我言をなさんとすればなり

エホバの言またいひたまひけるは災北よりおこりてこの地に住るすべての者にきたらん エホバいひたまひけるはわれ北の國々のすべての族をよばん彼等きたりてエルサレムの門の入口とその周圍のすべての石垣およびユダのすべての邑々に向ひておのおのその座を設けん われかれらの凡の悪事のために我言をかれにつけん

是はかれら我をすて別の神に香を焚きおのれの手にて作りし物を拜するによる 汝腰に帯して起ちわが汝に命するすべての事を彼等につげよその面を畏る勿れ否らざれば我かれらの前に汝を辱かしめん 視よわれ今日この全國とユダの王とその牧伯とその祭司とその地の民の前に汝を堅き城 鐵の柱 銅の牆となせり 彼等なんちと戦はんとするも汝に勝ざるべしそはわれ汝とともにありて汝をすくふべければなりとエホバいひたまへり

エホバの言我にのぞみていふ ゆきてエルサレムに住る者の耳につげよエホバ斯くいふ我汝に

第二章 つきて汝の若き時の懇切なんちが契をなせしときの愛曠野なる種播ぬ地にて我に従ひしことを憶ゆと イスラエルはエホバの聖物にしてその初に結べる實なりすべて之を食ふものは罰せられ災にあふべしと

エホバ云ひたまへり ヤコブの家とイスラエルの家の諸の族よエホバの言をきけ エホバかくいひたまふ汝等の先祖は我に何

の悪事ありしを見て我に遠かり虚き物にしたがひて虚しくなりしや かれらは我俸をエジプトの地より導き

いだし曠野なる岩穴ある荒たる地 早きたる死の蔭の地 人の過ぎざる地 人の住はざる地を通らしめしエホバは

いづこにあるといはざりき われ汝等を導きて國のごとき地にいれ其實と佳物をくらはしめたり然ど汝等此處

にいり我地を汚し我産業を憎むべきものとなせり 祭司はエホバは何處にいますといはず律法をあつかふ者は

我を知らず牧者は我に背き預言者はバアルによりて預言し益なきものに従へり 故にわれ尙汝等とあらそはん且なんちの子孫とあらそふべしとエホバいひたまふ 汝等キツテムの諸島

にわたりて觀よまた使者をケダルにつかはし斯のごとき事あるや否を詳細に察せしめよ その神を神にあらざる者に易たる國ありや然るに我民はその榮を益なき物にかへたり 天よこの事を驚け懼けいたく怖れよとエホバいひたまふ 蓋わが民はふたつの悪事をなせり 即ち活る水の源なる我をすて自己水溜を掘れりすなはち

壊れたる水溜にして水を有たざる者なり

イスラエルはしもべなるか家にうまれし僕なるかにかにして擄掠となれるや わかき獅子かれにむかひて哮えその聲をあげてその地を荒せりその諸邑は焚れて住む人なし ノフとタバネスの諸子も汝の頭首の髪をくらはん 汝の神エホバの汝を途にみちびきたまへる時に汝これを棄たるによりて此事汝におよぶにあらずや 汝ナイルの水を飲んとてエジプトの路にあるは何ゆゑぞまた河の水を飲んとてアツスリヤの路にあるは何故ぞ 汝の悪は汝をこらしめ汝の背は汝をせめん斯く汝が汝の神エホバをすてたると我を畏るゝことの汝の衷にあらざるとは悪く且つ苦きことなるを汝見てしるべしと主なる萬軍のエホバいひ給ふ

汝昔より汝の鞭ををり汝の縛を截ちていひけるは我つかふることをせじと即ち汝すべての高山のうへと諸の青木の下に妓女のごとく身をかがめたり われ汝を植て佳き葡萄の樹となし全き眞の種となせしにいかれば汝われに向ひて異なる葡萄の樹の悪き枝にかはりしや たとひ囁明をもて自ら濯ひまたおほくの灰汁を加ふるも汝の悪はわが前に汚れなりと主エホバいひ給ふ 汝いかで我は汚れずバアルに従はざりしといふことを得んや汝谷の中のおこなひを觀よ汝のなせしことを知れ汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよへり 汝は曠野になれたる野の牝驢馬なり其欲のために風にあへぐその欲のうごくときは誰かこれをとりめえん凡てこれを探る者は自ら勞するにおよばずその月の中に之にあふべし 汝足をつゝしみて躑足にならざるやうにし喉をつゝしみて渴かぬやうにせよしかるに汝いふ是は徒然なり然りわれ異なる國の者を愛してこれに従ふなりと 盜人の執へられて恥辱をうくるがごとくイスラエルの家恥辱をうくる彼等その王その牧伯その祭司その預言者みな然り 彼等木にむかひて汝は我父なりといひまた石にむかひて汝は我を生たりといふ彼等は背を我にむけて其面をわれに向けずされど彼等災にあふときは起てわれらを救ひ給へといふ 汝がおのれの爲に造りし神はいづこにあるやもし汝が災にあふときかれら汝を救ふを得ば起つべきなりそはユダよ汝の神は汝の邑の數

に同じければなり

汝等なんぞ我とあらそふやなんぢらは皆我に背けりとエホバいひ給ふ 我がなんぢらの衆子を打しは益なかりき彼等は懲治をうけず汝等の劍は猛き獅子のごとく汝等の預言者を滅せり なんぢらこの世の人よエホバの言をきけ我はイスラエルのために曠野となりしや暗き地となりしや何故にわが民はわれら徘徊りて復汝に來らじといふや それ處女はその飾物を忘れんや新婦はその帯をわすれんや然ど我民の我を忘れたる日は數へがたし 汝愛を得んとて如何に汝の途を美しくするぞよさればなんぢの行はあしき事を爲すに慣たり また汝の帯に辜なき貧者の生命の血ありわれ盜人の穿たる所にて之を見ずしてすべて此等の上にてこれを見る されど汝いふわれは辜なし故にその怒はかならず我に臨まじとみよ汝われ罪を犯さざりしといふにより我汝とあらそふべし なんぢ何故にその途を易んとて迅くはしるや汝アツスリヤに恥辱をうけしごとくエジプトにも亦恥辱をうけん 汝兩手を頭に置いてかしくよりも出でらんそはエホバ汝のたのむところの者を棄れば汝彼等によりて望を遂ること無るべければなり

第三章

世にいへるあり人もしその妻をいださんに去りゆきてほかの人の妻とならば其夫たゞ彼に歸るべけんやさすれば其地はおほいに汚れざらんや汝はおほくの者と姦淫を行へりされど汝われに販るアラビヤ人の爲すがごとく路に坐して人をまてり汝は姦淫と惡をもて此地を汚せり この故に雨はとどめられ春の雨はふらざりし然れど汝娼妓の類あれば背て恥す 汝いまより我を呼ていはざらんや我父よ汝はわが少時の交友なり 窮なくその怒を含まんや恒に之を存たんやと視よ汝はかくいへど力をきはめて惡を爲すなり ヨシャ王のときエホバまた我にいひ給ひけるは汝をむけるイスラエルのなせしことを見しや彼はすべての高山にのぼりすべての青木の下にゆきて其處に姦淫を行へり 彼のすべての事を爲せしを我かれに汝われに

歸れと言しかどもわれに歸らざりき其悖れる姉妹なるユダ之を見たり 我に背けるイスラエル姦淫をなせしにより我かれを出して離縁状をあたへたれどその悖れる姉妹なるユダは懼れずして往て姦淫を行ふ我これを見る また其姦淫の噪をもてこの地を汚し且つ石と木とに姦淫を行へり 此諸の事あるも仍其悖れる姉妹なるユダは眞心をもて我にかへらず偽れるのみとエホバいひたまふ

エホバまた我にいひたまひけるは背けるイスラエルは悖れるユダよりも自己を義とす 汝ゆきて北にむかひ此言を宣ていふべしエホバいひたまふ背けるイスラエルよ歸れわれ怒の面を汝らにむけしわれは矜恤ある者なり怒を限なく含みをもることあらじとエホバいひたまふ 汝たゞ汝の罪を認はせそは汝の神エホバにそむき經めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき汝等わが聲をきかざればなりとエホバいひ給ふ エホバいひたまふ背ける衆子よ我にかへれそはわれ汝等を娶ればなりわれ邑より一人支派より二人を取りて汝等をシオンにつれゆかん われ我心に合ふ牧者を汝等にあたへん彼等は知識と明哲をもて汝等を養ふべし エホバいひたまふ汝等地に増して多くなるときは人々復エホバの契約の櫃といはず之を想ひいでず之を憶えずこれを尋ねずこれを作らざるべし その時エルサレムはエホバの座位と稱へられ萬國の民こゝに集るべし即ちエホバの名によりてエルサレムに集り重て其惡き心の剛愎なるにしたがひて行まざるべし その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいで我なんぢらの先祖たちに與へて嗣しめし地に借にきたるべし 我いへり嗚呼われいかにして汝を諸子の中に置き萬國の中にて最も美しき産業なる此美地を汝にあたへんと我またいへり汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと 然にイスラエルの家よ妻の誓に違てその夫を棄るがごとく汝等われに背けりとエホバいひたまふ 鑿山のうへに聞ゆ是はイスラエルの民の悲み祈るなり蓋彼等まがれる途にあゆみ其神エホバを忘るればなり 背ける諸子よ我に歸れわれ汝の退遠をいやさん 視よ我儕なんぢに到る汝はわれらの神エホバなればなり 信に諸の岡とおほくの山に救を望むはいた

づらなり誠にイスラエルの教はわれらの神エホバにあり 羞恥はわれらの幼時より我儕の先祖の産業すなはち其多の羊とおほくの牛および其子その女を吞盡せり われらは羞恥に臥し我らは恥辱に覆はるべしそは我儕とわれらの列祖は我らの幼時より今日にいたるまで罪をわれらの神エホバに犯し我儕の神エホバの聲に違はざればなり

第四章

エホバいひたまふイスラエルよ汝もし歸らば我に歸れ汝もし憎むべき者を我前より除かば流蕩はをうけ彼によりて誇るべし

エホバ、ユダとエルサレムの人々にかくいひたまふ汝等の新田を耕せ荆棘の中に種くなかれ ユダの人々とエルサレムに住める者よ汝等みづから割禮をおこなひてエホバに屬きおのれの心の前の皮を去れ然らざれば汝等の惡行のためわが怒火の如くに發して燃えんこれを滅すものなかるべし

汝等ユダに告げエルサレムに示していへ籐を國の中に吹けとまた大聲に呼はりていへ汝等あつまれ我儕堅き邑にゆくべしと シオンに指示す合圍の旗をたてて上り國々を滅すものは進みきたる彼汝の國を荒さんとて既にその處よりらすればなり 獅子は其森よりいでて上り國々を滅すものは進みきたる彼汝の國を荒さんとて既にその處よりいでたり汝の諸邑は滅されて住む者なきに至らん この故に汝等麻の衣を身にまといて悲み哭けそはエホバの烈き怒いまだ我儕を離れざればなり エホバいひたまひけるはその日王と牧伯等はその心をうしなひ祭司は驚き預言者は異むべし

我いひけるは嗚呼主エホバよ汝はまことに此民とエルサレムを大にあざむきたまふすなはち汝はなんぢら安かるべしと云給ひしに劍命にまでおよべり

その時この民とエルサレムにいふものあらん熱き風曠野の窟山よりわが民の女にふききたると此は驚る

二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

ためにあらず潔むる爲にもあざるなり 二 これよりも猶はげしき風われより來らん今我かれらに鞭を示さん
 一三 みよ彼は雲のごとく上りきたらん其車は颶風のごとくにしてその馬は塵よりも疾し嗚呼われらは禍なるかな
 一四 我儕滅さるべし 一五 エルサレムよ汝の心の惡をあらひ潔めよ然ばすくはれん汝の惡き念いつまで汝のうちにある
 一六 や 一七 ダンより告ぐる聲ありエフライムの山より災を知するなり 一八 なんぢら國々の民に告げまたエルサレムに
 一九 知らせよ攻めかこむ者遠き國より來りユダの諸邑にむかひて其聲を揚ぐと 二〇 彼らは田圃をまもる者のごとくに
 二一 これを圍むは我に従はざりしに由るとエホバいひ給ふ 二二 汝の途と汝の行これを汝に招けりこれは汝の惡
 二三 なり誠に苦くして汝の心におよぶ 二四 嗚呼わが腸よ我腸よ痛苦心の底におよびわが心胸とどろくわれ歎しがたし我靈魂よ汝氣の聲と軍の
 二五 関をきくなり 二六 敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒されわが幕屋は頃刻にやぶられ我幕は忽ち破られたり
 二七 我が旗をみ縮の聲をきくは何時までぞや 二八 それ我民は愚にして我を離らず拙き子等にして曉ることなし
 二九 彼らは惡を行ふに智けれども善を行ふことを知す 三〇 われ地を見るに形なくして空くあり天を仰ぐに其處に光なし 三一 我山を見るに皆震へまた諸の丘も動けり
 三二 我見に入あることなし天空の鳥も皆飛されり 三三 我みるに肥美なる地は沙漠となり且その諸の邑はエホバの
 三四 前にその烈しき怒の前に毀られたり 三五 そはエホバかくいひたまへりすべて此地は荒地とならんされど我ごとくは之を滅さじ 三六 故に地は皆
 三七 哀しみ上なる天は暗くならん我すでに之をいひ且これを定めて悔いすまた之をなす事を止さればなり 三八 邑の人
 三九 みな騎兵と射者の叫喊のために逃て叢林にいり又岩の上に升れり邑はみな棄られて其處に住む人なし 四〇 滅され
 四一 たる者よ汝何をなさんとすや設令汝くれなぬの衣をき金の飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大きくするとも汝が身
 四二 を粧ふはいたづらなり汝の戀人らは汝をいやしめ汝のいのちを索るなり 四三 われ子をうむ婦のごとき聲首子をうむ

者の苦むがごとき聲を聞く是れシオンの女の聲なり 四四 かれ自ら歎き手をのべていふ嗚呼われは禍なるかな我靈魂
 四五 殺す者のために疲はてぬ

第五章

一
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察りその街を尋ねよ汝等もし一人の公義を行ひ眞理を求る
 一 者に逢はざれば(エルサレム)を赦すべし 二 彼らエホバは活くといふとも實は偽りて誓ふなり
 三 エホバよ汝の目は誠實を顧みるにあらずや汝彼らを憐れどもかれら痛苦をおぼえず彼等を滅せどもかれら懲治を
 四 うけず其面を磐よりも硬くして歸ることを拒めり 五 故に我いひけるは此輩は惟いやしき愚なる者なればエホバの途と其神の轉を知ざるなり 六 われ貴人
 七 ゆきて之に語らんかれらはエホバの途とその神の轉を知るなり然に彼らも皆鞭を折り縛を斷り 八 故に林より
 九 いづる獅子は彼らを殺しアラバの狼はかれらを滅し約はその邑をねらふ此處よりいづる者は皆裂るべしそは其罪
 一〇 おほくその背違はなはだしければなり 一一 我な故に汝をゆるすべきや汝の諸子われを棄て神にあらざる神を指して誓ふ我すでに彼らを誓はせられ
 一二 ど彼ら姦淫して娼妓の家に群集る 一三 彼らは肥たる牡馬のごとくに行めぐりおのおの嘶きて蹄の音を慕ふ 一四 エ
 一五 ホバいひたまふ我これら事ののために彼らを罰せざらんや我心はかくの如き民に仇を復さざらんや 一六 汝等その石垣にのぼりて滅せされど悉くはこれを滅す勿れその枝を截除けエホバのものに有さればなり
 一七 イスラエルの家とユダの家は大に我に悖るなりとエホバいひたまふ 一八 彼等はエホバを認すしていふエホバ
 一九 はある者にあらず災われらに來らじ我儕劍と飢饉をも見ざるべし 二〇 預言者は風となり言はかれらの衷にあらず
 二一 斯彼らになるべしと 二二 故に萬軍の神エホバかくいひたまふ汝等この言を語により視よわれ汝の口にある我言を火となし此民を薪
 二三 となさんその火彼らを焚盡すべし 二四 エホバいひ給ふイスラエルの家よみよ我速き國人をなんぢらに來らしめん

其國は強くまた古き國なり汝等その言をしらず其語ることをも曉らざるなり 其の腹は啓きたる墓のごとし彼ら
 にはみな勇士なり 彼らは汝の積れたる物と汝の糧食を食ひ汝の子女を食ひ汝の羊と牛を食ひ汝の葡萄の樹
 と無花果の樹を食ひまた剣をもて汝の頼むところの堅き邑を滅さん されど其時われことごとくは汝を滅さんと
 エホバいひたまふ

汝等何ゆゑにわれらの神エホバ此等の諸のことを我儕になしたまふやといはゞ汝かれらに答ふべし汝ら
 我をすてなんちらの地に於て異なる神に率へしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかふべしと

汝これをヤコブの家へのべまたこれをユダに示していへ 愚にして了知なく目あれども見えず耳あれども
 も聞えざる民よこれをきけ エホバいひ給ふ汝等われを畏れざるか我前に戦慄かざるか我は沙を置て海の界と
 なしこれを永遠の境界となし踰ることをえざらしむ其浪さかまきいたるも勝ことあたはず澎湃もこれを踰るあた
 はざるなり 然るにこの民は背き且悖れる心あり既に背きて去れり 彼らはまた我儕に雨をあたへて秋の雨
 と春の雨の時にしたがひて下し我儕のために収穫の時節を定めたまへる我神エホバを畏るべしと其心にいはざる
 なり 汝等の愆はこれらの事を退け汝等の罪は嘉物を汝らに來らしめざりき 我民のうちに悪者あり網を張
 る者のごとくに身をかゝめてうかゞひ吾を置て人をとらふ 樊籠に鳥の登るがごとく不義の財彼らの家に充つ
 この故に彼らは大なる者となり富る者となる 彼らは肥て光澤あり其悪き行は甚し彼らは訟をたゞす孤
 の訟を糺さずして利達をえ亦貧者の訴を鞠かず エホバいひ給ふわれかくのごときことを罰せざらんや我心
 は是のごとき民に仇を復さざらんや

この地に驚くべき事と憎むべきこと行はる 預言者は偽りて預言をなし祭司は彼らの手によりて治め
 我民は斯る事を愛すされど汝等その終に何をなさんとするや

第六章 ベニヤミンの子等よエルサレムの中より逃れテコアに據をふきベテハケレムに合圍の火をあけよ

そは北より災と大なる敗壞のぞめばなり われ美しき竊窬なるシオンの女を滅さん 牧者は其群を率て此處
 にきたりその周圍に天幕をはらん群はおのおのその處にて草を食はん 汝ら戦端を開きて之を攻べし起よわれ
 ら日午にのぼらん嗚呼惜かな日ははや戻き夕日の影長くなれり 起よわれら夜の間へのぼりてその諸の股合
 を毀たん 萬軍のエホバかくいひたまへり汝ら樹をきりエルサレムに向ひて壘を築け これは罰すべき邑なり
 その中には唯暴逆のみあり 源の水をいだすがごとく彼その惡を流すその中に暴逆と威虐きこゆ我前に愛と
 傷たえず エルサレムよ汝訓戒をうけよ然らざれば我心汝をなれ汝を荒蕪となし住む人なき地となさん
 萬軍のエホバかくいひたまふ彼らは葡萄の遺餘を摘みとるごとくイスラエルの遺れる者を掬とらん汝葡萄
 を摘取者のごとく屢手を筐に入るべし 我たれに語り誰を辱めてかかしめんや視よその耳は割禮をうけざるに
 よりて聴えず彼らはエホバの言を嘲けりこれを悦ばず エホバの怒わが身に充つわれ忍ぶに倦むこれを衝街に
 ある童子と集れる年少者とに泄すべし夫も婦も老たる者も年邁し者も執へらるゝにいたらん 其の家と田地と
 妻はともに他人にわたらん其はわれ手を舉てこの地に住る者を撃ばなりとエホバいひたまふ 夫彼らは少さき
 者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり又預言者より祭司にいたるまで皆謗詐をなす者なればなり かれら
 淺く我民の女の傷を醫し平康からざる時に平康平康といへり 彼らは憎むべき事を爲て恥辱をうくれども羞も
 恥すまた愧を知らずこの故に彼らは傾仆るゝ者と偕にたふれん我來るとき彼ら腹かんとエホバいひたまふ
 エホバかくいひたまふ汝ら途に立て見古き徑に就て何か善道なるを尋ねて其途に行めさらば汝らの靈魂安
 を得ん然ど彼らこたへて我儕はそれに行まじといふ 我また汝らの上に守望者をたて鐵の鑿をきけといへり然
 ど彼等こたへて我儕は聞じといふ 故に萬國の民よきけ會衆よかれらの遇とて之を知れ 地よきけわれ災を
 この民にくださんこは彼らの思の結ぶ果なりかれら我言とわが律法をきかずして之を棄るによる シベより我
 許に乳香きたり遠き國より葛蒲きたるは何のためぞやわれは汝らの燔祭をよるこばず汝らの犧牲を甘しとせず

故にエホバかくいひたまふに我の民の前に贖罪をおく父と子とそれに置き隣人とその友に減ぶべし
 エホバかくいひたまふに民北の國よりきたる大なる民地の極より起る 彼らは弓と槍をとる殘忍にし
 て憫なしその聲は海の如く鳴るシオンの女よかれらは馬に乗り軍人のごとく身をよろひて汝を攻めん 我儕そ
 の風聲をききたれば我儕の手弱り子をうむ婦のごとき苦痛と劬勞われらに迫る なんぢら田地に出る勿れまた
 路に行むなかれ敵の劍と畏怖四方にあればなり 我民の女よ麻衣を身にまとい灰のうちにまろび獅子を養ひ
 しごとくに哀みていたく哭けそは毀滅者突然に我らに來るべければなり

われ汝を民のうちに立て金を融る者のごとくなし又城のごとくなす汝をしてその途を知しめまた試み
 しめんためなり 彼らは皆いたく悖れる者なり歩行て人を誘ふ者なり彼らは鋼のごとく鐵のごとし皆邪なる
 者なり 輔は火に焚け鉛はつき鋸匠はいたづらに鋸す悪者いまだ除かれざればなり エホバ彼らを棄たまふ
 によりて彼等は棄られたる銀と呼ばれん

第七章

エホバよりエレミヤにのぞめる言云ふ 汝エホバの室の門にたち其處にてこの言を宣て言へエ
 ホバを拜まんとてこの門にいりしエダのすべての人よエホバの言をきけ 萬軍のエホバ、イスラ
 エルの神かくいひたまふ汝らの途と汝らの行を改めよさらばわれ汝等をこの地に住しめん 汝らはエホバ
 の殿なりエホバの殿なりエホバの殿なりと云ふ偽の言をたのむ勿れ 汝らもし全くその途と行を改め人と
 人との間を正し轉き 異邦人と孤兒と寡を虐げず無辜者の血をこの處に流さず他の神に従ひて害をまねかずば
 我なんぢらを我汝等の先祖にあたへしこの地に永遠より永遠にいたるまで住しむべし

みよ汝らは益なき偽の言を頼む 汝等は盗み殺し姦淫し妄りて誓ひバアルに香を焚き汝らがしらざる
 他の神にしたがふなれど 我名をもて稱へらるゝこの室にきたりて我前にたち我らはこれらの憎むべきことを
 行ふとも救はるゝなりといふは何にぞや わが名をもて稱へらるゝ此室は汝らの目には盜賊の巢と見ゆるや我

も之をみたりとエホバいひたまふ

汝等わが初めシロに於て我名を置し處にゆき我がイスラエルの民の惡のために其處になせしところのこと
 をみよ エホバいひたまふ今汝ら此等のすべての事をなす又われ汝らに語り頼みにかたりたれども聽かず汝らを
 呼びたれども答へざりき この故に我シロになせしごとく我名をもて稱へらるゝ此室になさんすなはち汝等が
 頼むところ我なんぢらと汝らの先祖にあたへし此處になすべし またわれ汝等のすべての兄弟すなはちエフラ
 イムのすべての裔を棄しごとく我前より汝らをも棄つべし

故に汝この民のために祈る勿れ彼らの爲に歎くなかれ求むるなかれ又我にとりなしをなす勿れわれ汝にき
 かじ 汝かれらがエダの邑とエルサレムの街になすところを見ざるか 諸子は薪を拾め父は火を燃き婦は繩
 を搏ねパンをつくりて之を天后にそなふ又かれら他の神の前に酒をそゞぎて我を怒らす エホバいひたまふ彼
 ら我を怒らすか是れおのが面を辱むるにあらずや 是故に主エホバかくいひたまふ視よわが震怒とわが憤怒
 はこの處と人と獸と野の樹および地の果にそゞがん且然て滅ざるべし

萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らの犠牲に燔祭の物をあはせて肉をくらへ 是はわれ
 汝等の先祖をエジプトより導きいだせし日に燔祭と犠牲とに就てかたりしことなく又命ぜしことなし 惟われ
 この事を彼等に命じ汝ら我聲を聽ばわれ汝らの神となり汝ら我民とならん且わが汝らに命ぜしすべての道を行み
 て福祉をうべしといへり されど彼らはきかず其耳を傾けずおのれの惡き心の謀と剛愎なるにしたがひて
 行みまた後を我にむけて其面を向けざりき 汝らの先祖がエジプトの地をいでし日より今日にいたるまでわれ
 我僕なる預言者を汝らにつかはし日々晨より之をつかはせり されど彼らは我にきかず耳を傾けずして其項を
 強くしその列祖よりも愈りて惡をなすなり 汝彼らに此等のすべてのことばを語るとも汝にきかずかれらと呼ぶとも汝にこたへざるべし 汝かく彼

らに語れこれは其神エホバの聲を聴すその訓を受ざる民なり眞實はうせてその口に絶たり

(シオンの女よ) 汝の髪を剃りてこれを棄て山の上に哀哭の聲をあげよエホバその怒るところの世の人をす

てこれを離れたまへばなり エホバいひたまふユダの民は我前に悪を行へり即ちその憎むべき者を我名をも

て稱へらるゝ室に置いてこれを汚せり 又ベンヒンノムの谷に於てトベテの崇邱を築きてその子女を火に焚

んとせり我これを命ぜすまた斯ることを思はざりし エホバいひたまふ然ば視よ此處をトベテまたはベンヒン

ノムの谷と稱へずして殺戮の谷と稱ふる日きたらん其は葬るべき地所なきまでにトベテに葬るべければなり

この民の屍は天空の鳥と地の獸の食物とならんこれを逐ふものなかるべし その時われユダの邑とエルサ

レムの街に欣喜の聲 歡樂の聲 新婦の聲 新婦の聲なからしむべしこの地荒蕪ればなり

第八章

エホバいひたまふその時人ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨と預言者の骨とエルサレ

ムの民の骨をその墓よりほりいだし 彼等の愛し奉へ従ひ求め且祭れるところの日と月と天の衆群

の前にこれを曝すべし其骨はあつひる者なく葬る者なくして糞土のごとくに地の面にあらん この悪き民の中の

のこれる餘遺の者すべてわが逐やりしところに餘れる者皆生るよりも死ぬることを願ふエホバ云たまふ

汝また彼らにエホバかくいふと語るべし人もし侍るれば起きかへるにあらすやもし離るれば歸り來るに

あらすや 何故にエルサレムに在る此民は恒にわれを離れて歸らざるや彼らは詐偽をかたく執て歸ることを否

めり われ耳を側て聽に彼らは善ことを云す一人もその惡を悔いてわがなせし事は何ぞやといふ者なし彼ら

はみな戰場に馳入る馬のごとくにその途に歸るなり 天空の鶴はその定期を知り斑鳩と燕と鴈はそのきたる時

を守るされど我民はエホバの律法をしらざるなり

汝いかで我ら智慧ありわれらにはエホバの律法ありといふことをえんや視よまことに書記の偽の筆之を

偽とせり 智慧ある者は辱しめられたあわてゝ執へらる視よ彼等エホバの言を棄たり彼ら何の智慧あらん

や 故にわれその妻を他人にあたへ其田圃を他人に嗣しめん彼らは小さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪

者また預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり 彼ら我民の女の傷を深く醫し平康からざる時

に平康平康といへり 彼ら憎むべき事をなして恥辱らる然れど毫も恥すまた恥を知らずこの故に彼らは侍るゝ

者と憎に侍れんわが彼らを罰するときはかれら覆くべしとエホバいひたまふ エホバいひたまふ我彼らをして

とく滅さん葡萄の樹に葡萄なく無花果の樹に無花果なしその葉も摘れたり故にわれ殲滅者を彼らにつかはす

我ら何ぞ此にとどまるやあつまれよ我ら堅き城邑にゆきて其處に滅ん我儕エホバに罪を犯せしによりて我

らの神エホバ我らを滅し毒なる水を飲せたまへばなり われら平康を望めども善こと來らず慰めらるゝ時を望

むにかへつて恐懼きたる その馬の嘶はダンよりきこえこの地みなその強き馬の聲によりて震ふ彼らきたり

て此地とその上にある者および邑とその中に住る者を食ふ 視よわれ呪詛のきかざる蛇腹を汝らのうちに遺さ

ん是汝らを嚙べしとエホバいひたまふ

嗚呼われ憂ふいかにして慰藉をえんや我衷の心悩む みよ遠き國より我民の女の聲ありていふエホバは

シオンに在さるか其王はその中に在ざるかと(エホバいひたまふ) 彼らは何故にその偶像と異邦の虛き物をもて

我を怒らせしやと 収穫の時は過ぎ夏もはや畢りぬされど我らはいまだ救はれず 我民の女の傷によりて我

も傷み且悲しむ恐懼我に迫れり ヤレアデに乳香あるにあらすや彼處に醫者あるにあらすやいかにして我民の

女はいやされざるや

第九章

あゝ我わが首を水となし我目を涙の泉となすことをえんものを我民の女の殺されたる者の爲に晝

夜哭かん 嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを我民を離れてさりゆかん彼らはみな姦淫す

るもの悻れる者の族なればなり 彼らは弓を抜くがごとく其舌をもて偽をいだす彼らは此地において眞實の

ために強からず惡より惡にすゝみまた我を知るなりとエホバいひたまふ 汝らおのおの其隣に心せよ何の

兄弟をも信ずる勿れ兄弟はみな欺きをなし隣はみな論りまはればなり 彼らはおのおの其隣を欺きかつ眞實をいはず其舌に 詭をかけたることを教へ惡をなすに勞る 汝の住居は詭譎の中にあり彼らは詭譎のために我を讒することをいなめりとエホバいひたまふ

故に萬軍のエホバかくいひたまへり視よ我かれらを讒し試むべしわれ我民の女の事を如何になすべきや 彼らの舌は殺す矢のごとしかれら詭をいふまた其口をもて隣におだやかにかたれども其心の中には害をはかるなり エホバいひたまふ我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくのごとき民に仇を復さざらんや われ山のために泣き啼び野の牧場のために悲むこれらは焚れて過る人なしたまふに牛羊の聲をきかず 天空の鳥も獸も皆逃てさりぬ われエルサレムを邱墟とし山犬の巢となさんまたユダの諸の邑々を荒して住む人なからしめん

智慧ありてこの事を曉る人は誰ぞやエホバの口を受てこれを示さん者は誰ぞやこの地滅されまた野のごとく焚れて過る者なきにいたりしは何故ぞ エホバいひたまふ是彼ら我その前に立しところの律法をすて我聲をきかず之に従はざるによりてなり 彼らはその心の剛愎なるとその列祖たちがおのれに教へしバアルとに従へり この故に萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ彼等すなはち斯民に齒を食はせ奉なる水を飲せ 彼らもその先祖たちもしらざりし國人のうちに彼らを散したまた彼らを滅し盡すまで其後に劍をつかはさん

萬軍のエホバかくいひたまふ汝らよく考へ哭婦をよびきたれ又人を遣して智き婦をまねけよ 彼らは速にきたりて我儕のために悲哀し我儕の目に涙をこぼさせ我儕の目蓋より水を溢れしめん シオンより哀の聲きこゆ云く嗚呼われら滅され我ら痛く辱めらる我らは其地を去り彼らはわが住家を毀ちたり 婦たちよエホバの言をきけ汝らの耳に其口の言をいれよ汝らの女に哭ことを教へおのおのその隣に 哀の歌を教ふべし

そは死のぼりてわれらの窓よりいり我らの殿舎に入り外にある諸子を絶し街にある壯年を殺さんとすればなり エホバかくいへりと汝云ふべし人の屍は糞土のごとく田野に墮ちんまた收穫者のうしろに残りて斂めずにある把のごとくならんと

エホバかくいひたまふ智慧ある者はその智慧に誇る勿れ力ある者は其力に誇るなかれ富者はその富に誇ること勿れ 誇る者はこれをもて誇るべし即ち明哲して我を諷する事とわがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行ふ者なるを知る事是なり我これらを悦ぶなりとエホバいひたまふ

エホバいひたまひけるは視よわれすべて陽の皮に割體をうけたる者すなはちエジプトとユダとエドムとアンモンの子孫とモアブと野にをりてその鬚を剃る者とを罰する日きたらんそはすべて異邦人は割體をうけずまたイスラエルの家も心に割體をうけざればなり

第一〇章

イスラエルの家よエホバの汝らに語たまふ言をきけ エホバかくいひたまふ汝ら異邦人の途に效ふ勿れ異邦人は天にあらはるゝ徴を懼るゝとも汝らはこれを懼るゝ勿れ 異邦人の風俗はむなしその崇むる者は林より斫たる木にして木匠の手に斧をもて作りし者なり 彼らは銀と金をもてこれを飾り釘と鍔をもて之を堅めて揺動かざらしむ 此は圓き柱のごとくにして言はずまた歩むこと能はざるによりて人にたづさへらる是は災害をくだし亦は禍祉をくだすの權なきによりて汝らこれを畏るゝ勿れ

エホバよ汝に比ふべき者なし汝は大なり汝の名は其權威のために大なり 汝萬國の主たる者よ誰か汝を畏れざるべきや汝を畏るゝは當然なりそは萬國のすべての博士たちのうちにもその諸國のうちにも汝に比ふべき者なければなり 彼らはみな獸のごとくまた痴愚なり虚しき者の教は惟木のみ タルシより携へ來し銀箔ウバズより携へ來し金は鍛冶と鑄匠の作りし物なり青と紫をその衣となす是はすべて巧なる細工人の工作なり エホバは眞の神なり彼は活る神なり永遠の王なり其怒によりて地は震ふ萬國はその憤怒にあたること能はず

二一 汝等かく彼らにいふべし天地を造らざりし諸神は地の土よりこの天の下より失せざらん

二二 エホバはその能をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明智をもて天を舒べたまへり 二三 かれ聖き

いだせば天に衆の水ありかれ雲を地の極よりいだし電と雨をおこし風をその府庫よりいだし 二四 すべての人

獸の如くにして智なしすべての鑄匠はその作りし像のために辱をとる其鑄るところの像は偽物にしてその中に

靈魂なければなり 二五 是らは虚き者にして迷妄の工作なりその罰せらるるときに滅ぶべし 二六 ヤコブの分は是の

ごとくならず彼は萬物の造化主なりイスラエルはその産業の杖なりその名は萬軍のエホバといふなり

二七 園の中に坐する者よ汝の包を地より取りあげよ 二八 エホバかくいひたまふみよ我この地にすめる者を此度

擲たん且かれらをせめなやまして擄へられしむべし

二九 われ毀傷をうく嗚呼われは禍なるかな我傷は重し我いふこれまことにわが患難なりわれ之を忍べし 三〇 わ

が幕屋はやぶれわが繩索は悉く断れ我衆子は我をすてゆきて居すなりぬ幕屋を張る者なくわが轡をかくる者なし

三一 牧者は怒にしてエホバを求めず故に利達すその群はみな散れり 三二 きけよ風聲あり北の國より大なる騒きたる

三三 是ユダの諸邑を荒して山犬の巢となさん

三四 エホバよわれ知る人の途は自己によらず且歩む人は自らその步履を定むること能はざるなり 三五 エホバ

よ我を懲したまへ但道にしたがひ怒らずして懲したまへおそらくは我無に歸せん 三六 汝を知らざる國人と汝の名を

顛ざる族に汝の怒を誇ぎたまへ彼らはヤコブを嗤ひ之をくらふて滅しその牧場を荒したればなり

三七 我いひけらくなんちら我聲をきよ我汝らに命ぜし諸の事に従ひて行はば汝らは我民となり我は汝らの神とならん

第一章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 二 汝らこの契約の言をきよユダの人とエルサレムにすめ

る者に告よ 三 汝かれらに語れイスラエルの神エホバかくいひたまふこの契約の言に違はざる人は

四 罰はる 五 この契約はわが汝らの先祖をエジプトの地獄の墟の中より導き出せし日にかれらに命ぜしものなり即ち

六 我いひけらくなんちら我聲をきよ我汝らに命ぜし諸の事に従ひて行はば汝らは我民となり我は汝らの神とならん

七 われ汝らの先祖に乳と蜜の流るゝ地を興へんと誓ひしことを成就んと 八 即ち今日のことし 九 その時我こたへて

一〇 アーメン、エホバといへり

一一 またエホバ我にいひたまひけるは汝すべて此等の言をユダの諸邑とエルサレムの衢にしめし汝ら此契約の

一二 言をきよてこれを行へといふべし 一三 われ汝らの列祖をエジプトの地より導き出せし日より今日にいたるまで切

一四 に彼らを戒め頻に戒めて汝ら我聲に遵へといへり 一五 然ど彼らは遵はずその耳を傾けずおのおの其惡き心の剛愎

一六 なるにしたがひて歩めり故にわれ此契約の言を彼等にきたらす是はわがかれらに之を行へと命ぜしかども彼等が

一七 おこなはざりし者なり

一八 またエホバ我にいひたまひけるはユダの人々とエルサレムに住る者の中に叛逆の事あり 一九 彼ら是我言を

二〇 きくことを好まざりしところのその先祖の罪にかへり亦他の神に従ひて之に率へたりイスラエルの家とユダの家

二一 はわがその列祖たちと締たる契約をやぶれり 二二 この故にエホバかくいひ給ふみわれ災禍をかかれらにくださん

二三 彼らこれを免かるゝことをえざるべし彼ら我をよぶとも我聽じ 二四 ユダの邑とエルサレムに住る者はゆきてその

二五 香を焚し神を頼んされど是等はその災禍の時に絶てかれらを救ふことあらじ 二六 ユダよ汝の神の數は汝の邑の數

二七 のごとし且汝らエルサレムの衢の數にしたがひて恥べき者に壇をたてたり即ちバアルに香を焚んとて壇をたつ

二八 故に汝この民の爲に祈る勿れ又その爲に泣きあるひは求る勿れ彼らがその災禍のために我を呼ときわれ彼

二九 らに聽ざるべし 三〇 わが愛する者は我室にて何をなすや惡き謀をなすや願と聖き肉汝に災を脱れしむるや

三一 もし然らば汝よろこぶべし 三二 エホバ汝の名を嘉果ある美しき青橄欖の樹と稱たまひしがおほいなる喧嘩の聲を

三三 もて之に火をかけ且その枝を折りたまふ 三四 汝を植し萬軍のエホバ汝の災をさだめ給へりこれイスラエルの家

三五 とユダの家みづから害ふの惡をなしたるに由るなり即ちバアルに香を焚きてわれを怒らせたり

三六 エホバ我に知せたまひければ我これを知るその時なんち彼らの作爲を我にしめしたまへり 三七 我は棄れて

三八 舊約聖書 エレミヤ記 第一章五節—一九節 一〇七一

宰られにゆく蓋の如く彼らが我をそこなはんとて謀をなすを知らず彼らにふいさ我ら樹とその果とを共に滅さん
 かれを生る者の地より絶てその名を人に忘れしむべしと 義き職をなし人の心腸を察りたまふ萬軍のエホバよ
 我わが訴を汝にのべたればわれをして汝が彼らに仇を報すを見せしめたまへ 是をもてエホバ、アナトテの人
 人につきてかくいひたまふ彼等汝の生命を取んと索めて言ふ汝エホバの名をもて預言する勿れ恐らくは汝我らの
 手に死んと 故に萬軍のエホバかくいひたまふよ我かれらを罰すべし壯丁は剣に死にその子女は飢饉にて
 死なん 餘る者なるべし我災をアナトテの人々にきたらしめわが彼らを罰するの年をきたらしめん
 エホバよわが汝と争ふ時に汝は義し惟われ轉の事につきて汝と言ん悪人の途のさかえ悖れる者の

第二章

みな福なるは何故ぞや

汝かれらを植たり彼らは根づき成長て實を結べりその口は汝に近けども

その心は汝に遠ざかる エホバ汝われを知り我を見またわが心の汝にむかひて何なるかを試みたまふ羊を幸り
 に牽いだすがごとく彼らを牽いだし殺す日の爲にかれらをそなへたまへ いつまでこの地は哭きすすべての畑の
 蔬菜は枯るべけんやこの地に住る者の惡によりて畜獸と鳥は滅さる彼ららふ彼は我らの終をみざるべしと
 汝もし歩行者とともに趨てつかれなばいかで騎馬者と競はんや汝平安なる地を待まばいかでヨルダンの
 傍の叢に居ることをえんや 汝の兄弟となんちの父の家も汝を欺きまた大聲をあげて汝を追ふかれらしたし
 く汝に語るともこれを信する勿れ

われ我家を離れわが産業をすて我靈魂の愛する所の者をその敵の手にわたせり わが産業は林の獅子の
 ごとし我にむかひて其聲を揚ぐ故にわれ之を惡めり 我産業は我におけること班駁ある鳥のごとくならずや鳥
 之を圍むにあらずや野のすべての獸きたりあつまれ来てこれを食へ 衆の牧者わが葡萄園をほろぼしわが地を
 踐踏しわがうるはしき地を荒野となせり 彼らこれを荒地となせりその荒地我にむかひて哭くなり一人もかへ
 りみる者なければこの全地は荒たり 毀滅者は野のすべての童山のうへに來れりエホバの劍地のこの極より

かの極までを滅ぼすすべて血氣ある者は安をえず 彼らは麥を播て荊棘をかる勞れども得るところなし汝らは
 その作物のために恥るにいたらん是エホバの烈き怒によりてなり
 わがイスラエルの民に嗣しむる産業をせむるところのすべてのわが惡き隣にむかひてエホバかくいふみよ
 われ彼等をその地より拔出しまたユダの家を彼らの中より拔出すべし われ彼らを拔出せしちまた彼らを捕
 みておのおのを其産業にかへし各人をその地に歸らしめん 彼等もし我民の道をまなび我名をさしてエホバは
 活くと誓ふこと嘗て我民を救へてバアルを指て誓はしめし如くせば彼らはわが民の中に建らるべし されど
 彼らもし聽かざれば我かならずかゝる民を全く拔出して滅すべしとエホバいひたまふ

第三章

エホバかくいひたまへり汝ゆきて麻の帯をかひ汝の腰にむすべ水に入る勿れ われすなはち

買て腰にむすべる帯を取り起てユフラテにゆき彼處にてこれを誓の穴にかくせと こゝに於てわれエホバの命
 じたまひし如く往てこれをユフラテの涯にかくせり おほくの日を経しちエホバ我にいひたまひけるは起て
 ユフラテにゆきわが汝に命じて彼處にかくさしめし帯を取れと われすなはちユフラテにゆき帯を我腰せしと
 ころより擲取しにその帯は朽て用ふるにたへず

またエホバの言われにのぞみて云ふ エホバかくいふ我かくの如くユダの驕傲とエルサレムの大なる
 驕傲をやぶらん この惡き民はわが言を聽くことをこばみ己の心の剛愎なるにしたがひて行み且他の神に従ひて
 これにつかへ之を拜す彼等は此帯の用ふるにたへざるが如くなるべし エホバいふ帯の人の腰に附がごとくわ
 れイスラエルのすべての家とユダのすべての家を我に附しめ之を我民となし名となし譽となし榮となさんとせり
 然るに彼等はきかざりき
 故に汝この言を彼らに語るべしイスラエルの神エホバかくいふ酒壺には皆酒盈つと彼汝にこたへていはん

我儕豈酒壺に酒の盈ることを知らんやと 其時汝かれらにいふべしエホバかくいふよわれ此地に住るすべての者とダビデの位に坐する王等と祭司と預言者およびエルサレムに住るすべての者に醉を盈せ 彼らと此と彼と打あはせて碎かん父と子をも然すべしわれ彼らを恤まらず惜まらず滅さん

汝らきけ耳を傾けよ驕る勿れエホバかたりたまふなり 汝らの神エホバに其いまだ暗を起したまはざる先汝らの足のくらき山に躓かざる先に榮光を販すべし汝ら光明を望まんエホバ之を死の蔭に變へ之を昏黒となしたまふにいたらん 汝ら若これを聽ずば我靈魂は汝らの驕を隠るところに悲まん又エホバの群の掠めらるゝによりて我目いたく泣て涙をながすべし

なんち王と太后につげよ汝ら自ら謙りて坐せそは汝らの美しき冕なんちらの首より落べければなり

南の諸邑は閉てこれを啓く人なしユダは皆擄移され盡くところへ移さる

汝ら目を擧て北より来る者を見よ汝らが賜はりし群汝のうるはしき群はいづこにあるや かれ汝の親み馴たる者を汝の上にて、首領となさんと汝何のいふべきことあらんや汝の痛は子をうむ婦のごとくならざらんや 汝心のうちに何故にこの事我にきたるやといふか汝の罪の重によりて汝の裾は掲げられなんちの驕はあらはさるゝなり エテオピア人その膚をかへうるか豹その斑駁をかへうるか若これを爲しえば惡に慣たる汝らも善をなし得べし 故にわれ彼らを散して野の風に吹散さるゝ皮壳のごとくせん エホバいひたまふこは汝の得べき分わが量て汝にあたる産業なり汝我をわすれて虚假を依頼ばなり 故にわれ汝の前の裳を剝きて汝の羞恥をあらはさん われ汝の姦淫と汝の嘯と汝が岡のうへと野になせし汝の匱乏の罪と汝の憎むべき行をみたりエルサレムよ汝は 禍なるかな汝の潔くせらるゝには尙いくばくの時を經べきや

第一四章

乾旱の事につきてエレミヤにのぞみしエホバの言は左のごとし

ユダは悲むその門は傾き地にたふれて哭くエルサレムの味は上る 其の侯伯等は僕をつか

はして水を汲しむ彼ら井にいたれども水を見ず空器をもちて歸り恥かつ憂へてその首をおほふ 地に雨ふらずして土燥裂たるにより農夫は恥て首を掩ふ また野にある鷹は子をうみて之を棄つ草なければなり 野の驢馬は童山のうへにたちて山犬のごとく喘ぎ草なきによりて目眩む

エホバよ我儕の罪われらを認へて證をなすとも願くは汝の名の爲に事をなし給へ我儕の違背はおほいな

り我儕汝に罪を犯したり イスラエルの企望なる者その艱るときに救ひたまふ者よ汝いかなれば此地に於て他邦人のごとくし一夜寄宿の旅客のごとくしたまふや 汝いかなれば呆てをる人のごとくし救をなすこと能はざる勇士のごとくしたまふやエホバよ汝は我らの間にいます我儕は汝の名をもて稱へらるゝ者なり我らを棄たまふ勿れ

エホバこの民にかくいひたまへり彼らかく好んでさまよひ其足を禁めざればエホバ彼らを悦ばずいよその愆をおぼえ其罪を罰すべし エホバまた我にいひたまひけるは汝この民のために恩をいひる勿れ 彼ら斷食するとも我その呼饗をきかず精祭と素祭を獻るとも我これをうけず却てわれ劍と饑饉と疫病をもて彼らを滅すべし

われいひけるは嗚呼主エホバよみよ預言者たちはこの民にむかひ汝ら劍を見ざるべし饑饉は汝らにきたらじわれ此處に鞏固なる平安を汝らにあたへんといへり エホバ我にいひたまひけるは預言者等は我名をもて詭を預言せりわれ之を遣さず之に命ぜすまた之にはす彼らは虚誑の獸示と卜筮と虚きことと己の心の詐を汝らに預言せり この故にかの吾が遣さざるに我名をもて預言して劍と饑饉はこの地にきたらじといへる預言者等につきてエホバかくいふこの預言者等は劍と饑饉に滅さるべし また彼等の預言をうけし民は饑饉と劍によりてエルサレムの街に擲棄られんこれに非ざる者なかるべし彼等とその妻および其子その女みな然りそはわれ彼らの惡をその上に斟げばなり 汝この言を彼らに語るべしわが目は夜も晝も晝もたえず涙を流さんそは我民の童女大なる滅と重き傷によりて亡さるればなり われ出て畑にゆくに劍に死者あり我邑に在るに饑饉に艱むもの

あり預言者も祭司もみなその地にさまよひて知ところなし

二九 汝はユダを悉くすてたまふや汝の心はシオンをきらふや汝いかなれば我憐を撃て愈しめざるか我ら平安を望めども善ことあらす又醫さるゝ時を望むに却て驚懼あり 三〇 エホバよ我らはおのれの惡と先祖の愆を知るわれら汝に罪を犯したり 三一 汝の名のために我らを棄たまふ勿れ汝の榮の位を辱めたまふ勿れ汝のわれらに立し契約をおぼえて毀りたまふなかれ 三二 異邦の虚き物の中に雨を降せらるものあるや天みづから白雨をくだすえんや我らの神エホバ汝これを爲したまふにあらすや我ら汝を望むそは汝すべて此等を悉く作りたまひたればなり

第一五章

一 エホバ我にいひたまひけるはたとひモーセとサムエルわが前にたつとも我こゝろは斯民を顧ざるべしかれらを我前より逐ひていでさらしめよ 二 彼らもし汝にわれら何處にいでさらんやといはば

汝彼らにエホバかくいへりといへ死に定められたる者は死にいたり剣に定められたる者は剣にいたり鐵鎗に定められたる者は鐵鎗にいたり房に定められたる者は房にいたるべしと 三 エホバ云たまひけるはわれ四の物をもて彼らを罰せんすなはち劍をもて戮し犬をもて噬せ天空の鳥および地の獸をもて食ひ滅さしめん 四 またユダの王ヒゼキヤの子マナセがエルサレムになせし事によりわれ彼らをして地のすべての國に艱難をうけしめん 五 エルサレムよ誰かなんちを憐まんたれか汝のために嘆かん誰かちかづきて汝の安否を問はん 六 エホバいひたまふ汝われをすてたり汝退けり故にわれ手を汝のうへに伸て汝を滅さんわれ憫に倦り 七 われ風扇をもて我民をこの地の門に煽がんかれらは其途を離れざるによりて我その子を絶ち彼らを滅すべし 八 彼らの寡婦はわが前に海濱の沙よりも多し晝われほろぼす者を携へきたりて彼らと壯者の母とをせめ驚駭と恐懼を突然にかれのうにおこさん 九 七人の子をうみし婦は衰へて氣たえ尙晝なるにその日は早く没る彼辱められて面をあからめん其餘れる者はわれ之をその敵の劍に付さんとエホバいひたまふ

一〇 嗚呼われは禍なるかな我母よ汝なに故に我を生しや全國の人我と争ひ我を攻むわれ人に貸さず人また我に貸さず皆我を誣ふなり

一一 エホバいひたまひけるは我實に汝に益をえせしめんために汝を憐す我まことに敵をして其銀の時と災の時に汝に求むることをなさしめん 一二 鐵いかに北の鐵と鋼を碎かんや 一三 われ汝の資産と汝の資財を擄掠物とならしめ價をうることをなからしめん是汝のすべての罪によるなりすて汝の境のうちにかなさん 一四 われ汝の敵をして汝を汝の識ざる地にとらへ移さしめん夫我怒によりて火燃えなんちを焚んとするなり

一五 エホバよ汝これを知りたまふ我を憐え我をかへりみたまへ我を迫害するものに仇を復したまへ汝の容忍によりて我をとらへられしむる勿れ我汝の爲に辱を受けるを知りたまへ 一六 われ汝の言を得て之を食へり汝の言はわが心の欣喜快樂なり萬軍の神エホバよわれは汝の名をもて稱へらるゝなり 一七 われ嬉笑者の會に坐せずまた喜ばずわれ汝の手によりて獨り坐す汝憤怒をもて我に充したまへり 一八 何故にわが痛は息すわが傷は重くして愈さるか汝はわれにおけること水をたもたずして人を欺く溪河のごとくなるや 一九 是をもてエホバかくいひたまへり汝もし歸らば我また汝をかへらしめて我前に立しめん汝もし歸をすてゝ貴をいださば我口のごとくならん彼らは汝に歸らんされど汝は彼らにかへる勿れ 二〇 われ汝をこの民の前に堅き鋼の鑢となさんかれら汝を攻るとも汝にかたざるべしそはわれ汝と借にありて汝をたすけ汝を救へばなりと

二一 エホバいひたまへり 二二 我汝を惡人の手より救ひとり汝を怖るべき者の手より放つべし

第一六章

一 エホバの言また我にのぞみていふ 二 汝この處にて妻を娶るなかれ子女を得るなかれ 三 此處に生るゝ子女とこの地に之を生む母と之を生む父とに就てエホバかくいひたまふ 四 彼らは慘しき病に死し哀まれず葬られずして糞土のごとくに田地の面にあらんまた劍と鐵鎗に滅されて其屍は天空の鳥と地の獸の食物とならん

エホバかくいひたまへり我ある家に在る勿れまた往て之を哀み嗟く勿れそはわれ我平安と思ふと矜恤をこの民より取ばなりとエホバいひたまへり 大なる者も小なき者もこの地に死べし彼らは葬られずまた彼らのために哀む者なく自ら傷くる者なく髪をそる者なかるべし またその哀むときパンをさきて其死者のために之を慰むるものなく又父あるひは母のために慰むる杯を彼らに飲しむる者なかるべし 汝また筵宴の家にいりて僧に坐して食飲する勿れ 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よ汝の目の前汝の世に在るときにわれ欣喜の聲と歡樂の聲と新娶者の聲と新婦の聲とを此處に絶しめん

汝このすべての言を斯民に告るとき彼ら汝に問ふてエホバわれらを責てこの大なる災を示したまふは何故ぞやまたわれらに何の悪事あるやわが神エホバに背きてわれらのなせし罪は何ぞやといはゞ 汝かれらに答ふべしエホバいひたまふ是汝らの先祖われを棄て他の神に従ひこれに奉へこれを拜しまた我をすてわが律法を守らざりしによる 汝らは汝らの先祖よりも多く惡をなせりみよ汝らはおのおの自己の惡き心の剛愎なるにしたがひて我にきかず 故にわれ汝らを此の地より逐ひて汝らと汝らの先祖の識ざる地にいたらしめん汝らかしこにて晝夜ほかの神に奉へん是わが汝らを憐まざるによるなりと

エホバいひたまふ然ばみよ此後イスラエルの民をエジプトの地より導きいだせしエホバは活くといふことなくして イスラエルの民を北の地とすのすて逐やられし地より導出せしエホバは活くといふ日きたらん我かれらを我その先祖に與へしかれらの地に導きかへるべし

エホバいひたまふみよ我おほくの漁者をよび來りて彼らを漁らせまたその後おほくの漁者を呼來りて彼らを諸の山もろもろの岡および岩の穴より獵いだしめん 我目はかれらの諸の途を覽る皆我にかくるゝところなし又その惡は我目に匿れざるなり われまづ倍して其惡とその罪に報いんそは彼らその汚れたる者の屍をもて我地を汚しその惡むべきものをもて我産業に充せばなり

エホバ我の力 我の城 難の時の逃場よ萬國の民は地の極より汝にきたりわれらの先祖の嗣るところの者は惟誠と虚浮事と益なき物のみなりといはん 人豈神にあらざる者をおのれの神となすべけんや

故にみよわれ此度かれらに知らしむるところあらん 即ち我手と我能をかれらに知らしめん彼らは我名のエホバなるを知るべし

第七章

エダの罪は鐵の筆金剛石の尖をもてしるされその心の碑と汝らの祭壇の角に錫らるゝなり 彼らはその子女をおもふが如くに青木の下と高岡のうへなるその祭壇とアシラをおもふ われ野に在る我山と汝の資産と汝のもろもろの財産および汝の四方の境の内なる汝の罪を犯せる崇邱を擄掠物とならしめん わが汝にあたへし産業より汝手をはなさん又われ汝をして汝の識ざる地に於て汝の敵につかへしめん

そは汝ら我をいからせて限なく燃る火を發したればなり 故にみよわれ此度かれらに知らしむるところあらん 即ち我手と我能をかれらに知らしめん彼らは我名のエホバかくいひたまふおほよそ人を待み肉をその膾とし心にエホバを離るゝ人は詛るべし 彼は荒野に棄られたる者のごとくならん彼は善事のきたるをみず荒野の燥きたる處豊あるところ人の住ざる地に居らん おほよそエホバをたのみエホバを其恃とする人は 禍なり 彼は水の旁に植たる樹の如くならん其根を河にのべ炎熱きたるも恐るゝところなしその葉は青く亢旱の年にも憂へずして絶ず果を結ぶべし

心は萬物よりも偽る者にして甚だ惡し誰かこれを知るをえんや われエホバは心腹を察り腎腸を試みおのおのに其途に順ひその行爲の果によりて報ゆべし 鷓鴣のおのれの生ざる卵をいだが如く不義をもて財を獲る者あり其人は命の半にてこれに離れその終に愚なる者とならん

榮の位上原始より高き者わが聖所たる者 イスラエルの望なるエホバよ見て汝を離るゝ者は辱められん我を棄る者は土に録されん此はいける水の源なるエホバを離るゝによる エホバよ我を誓し給へ然らばわれ愈んわれを救ひたまへさらば我救はれん汝はわが頌るものなり 彼ら我にいふエホバの言は何にあるやいま之

をのぞましめよと われ牧者の職を退かすして汝にしたがひ又禍の日を願はざりき汝これを知りたまふ我
唇よりいづる者は汝の面の前にあり 汝我を懼れしむる者となり給ふ勿れ禍の時に汝は我避場なり 我を
攻る者を辱しめ給へ我を辱しむるなかれ彼らを怖れしめよ我を怖れしめ給ふなかれ禍の日を彼らに來らしめ滅亡
を倍して之を滅し給へ

エホバ我にかくいひ給へり汝ゆきてユダの王等の出入する民の門及びエルサレムの諸の門に立て 彼ら
にいへ此門より入る所のユダの王等とユダのすべての民とエルサレムに住るすべての者よ汝らエホバの言をきけ

エホバかくいひたまふ汝ら自ら慎め安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいる勿れ 汝らの家より荷を出す勿れ諸の仕事をなす勿れ我汝らの先祖に命ぜしごとく安息日を聖くせよ 汝ら自ら
運はず耳を傾けずまたその項を強くして聽す訓をうけざるなり

エホバいひ給ふ汝らもし謹慎て我にきき安息日に荷をたづさへてこの邑の門にいらず安息日を聖くなして
諸の仕事をなさずば ダビデの位に坐する王等牧伯たちユダの民エルサレムに住る者車と馬に乗てこの邑の門
よりいることをえんまた此邑には限なく人すまはん また人々ユダの邑とエルサレムの四周およびベニヤミン
の地と平地と山と南の方よりきたり燔祭 犧牲 素祭 馨香 謝祭を携へてエホバの室にいらん されど汝らもし
我に聽ずして安息日を聖くせず安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいらばわれ火をその門の内に燃して
エルサレムの殿舎を燬んその火は滅ざるべし

第十八章

エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 汝起て陶人の屋にくだれ我かしこに於てわが言を汝に
聞しめんと われすなはち陶人の屋にくだり視るに輪轆をもて物をつくりをりしが その泥を
もて造れるところの器陶人の手のうちに傷ねたれば彼その心のまゝに之をもて別の器をつくれり
時にエホバの言我にのぞみていふ エホバいふイスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になす

ことをえざるかイスラエルの家よ陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり われ急に民あるひは國をぬく
べし敗るべし滅すべしといふことあらんに もし我いひしところの國その惡を離れば我之に災を降さんと
おもひしことを悔ん 我また急に民あるひは國を立てし植べしといふことあらんに もし其國わが目に悪く
見ゆるところの事を行ひわが聲に違はずば我これに福を賜へんといひしことを悔ん 汝いまユダの人々と
エルサレムに住る者にいへエホバかくいへり視よ我汝らに災をくださんと思ひめぐらし汝らをはかる計策を設く
故に汝らおのおの其惡き途を離れ其途と行をあらためよと しかるに彼らいふ是は徒然なりわれらは自己の
圖維ところにしたがひ各自その惡き心の剛愎なるを行はんと

この故にエホバかくいひたまふ汝ら異國のうちに問へ斯の如きことを聞し者ありやイスラエルの處女は
いと驚くべきことをなせり レバノンの雪野野の磐を離れんや遠方より流くる冷なる水豈澗かんや しかる
に我民は我をわすれて虚き物に香を焚り是等の物彼らをもその途すなはち古き途に驅かせたまはれんすなはち備なき道
に行しめ その地を荒して恒に人の笑とならしめん凡て其處を通る者は驚きてその首を挿らん われ東風の
ごとくに彼らをもその敵の前に散さん其滅亡の日にはわれ背を彼らに向て面をむけじ

彼らいふ去來われら計策を設てエレミヤをはからんそれ祭司には律法あり智慧ある者には謀略あり預言者
には言ありて失ざるべし去來われら舌をもて彼を撃ちその諸の言を聽ことをせざらんと

エホバよ我にききたまへ又我と争ふ者の聲をききたまへ 惡をもて善に報ゆべきものならんや彼らはわ
が生命をとらん爲に坑を掘れりわが汝の前に立て彼らを善く言ひ汝の憤怒を止めんとせしを憶えたまへ され
ばかれらの子女を饑饉にあたへ彼らを劍の刃にわたしたまへ其妻は子を失ひ且寡となり其男は死をもて亡され
その少者は劍をもて戦に殺されよかし 汝突然に敵をかれらに臨ませたまふ時號呼をその家の内より聞えし
めよそは彼ら坑を掘りて我を執へんとしたまた機檻を置てわが足を執へんとすればなり エホバよ汝はかれらが

我を殺さんとするすべての謀略を知りたまふ其惡を赦すことなく其罪を汝の前より抹去りたまふなかれ彼らを汝の前に仆れしめよ汝の怒りたまふ時にかく彼らになしたまへ

第一章

エホバかくいひたまふ往て陶人の瓦罏をかひ民の長老と祭司の長老の中より數人をともなひて陶人の門の前にあるベンヒンノムの谷にゆき彼處に於てわが汝に告んところの言を宣よ

ユダの王等とエルサレムに住る者よエホバの言をきけ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よ我災を此處にくだすべし凡そ之をきく者の耳はかならず鳴らん 此は彼ら我を棄てこの處を遺し此にて自己とその先祖およびユダの王等の知る他の神に香を焚き月亭なきものの血をこの處に盈せばなり 又彼らはバアルの爲に崇邱を築き火をもて己の兒子を焚き燔祭となしてバアルにさしけたり此わが命ぜしことにあらず我いひしことにあらず又我心に意はざりし事なり エホバいひたまふさればみよ此處をトベテまたはベンヒンノムの谷と稱すして屠戮の谷と稱ふる日きたらん また我この處に於てユダとエルサレムの謀をむなしうし劍をもて彼らを其敵の前とその生命を來る者の手に仆しまたその屍を天空の鳥と地の獸の食物となし かつ此邑を荒して人の胡盧とならしめん凡そこゝを通る者はその諸の災に驚きて笑ふべし また彼らがその敵とその生命を來る者にとに圍みくるしめらるゝ時我彼らをして己の子の肉女の肉を食はせん又彼らは互にその友の肉を食ふべし 汝ともに行く人の目の前にてその瓦罏を毀ちて彼らにいふべし 萬軍のエホバかくいひ給ふ一回觀てば復全うすること能はざる陶人の器を毀つが如くわれ此民とこの邑を毀たんまた彼らは葬るべき地なきによりてトベテに葬られん エホバいひ給ふ我この處とこの中に住る者にとに斯なし此邑をトベテの如くなすべし 且エルサレムの室とユダの王等の室はトベテの處のごとく汚れん其は彼らすべての室の屋蓋のうへにて天の衆群に香をたき他の神に酒をそゞげばなり

エレミヤ、エホバの己を遣して預言せしめたまひしトベテより歸りきたりエホバの室の庭に立ちすべての

民に語りていひけるは 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ我いひし諸の災をこの邑とその諸の鄉村にくださん彼らその項を強くして我言を聽さればなり

第二章

祭司インメルの子エホバの室の長なるバシユル、エレミヤがこの言を預言するをきけり是に於てバシユル預言者エレミヤを打ちエホバの室にある上のベニヤミンの門の桎梏に繋げり

翌日バシユル、エレミヤを桎梏より釋はならしにエレミヤ彼にいひけるはエホバ汝の名をバシユルと稱すしてマゴルミツサビブ(驚懼周圍にあり)と稱び給ふ 即ちエホバかくいひたまふ視よわれ汝をして汝と汝のすべての友に恐怖をおこさしむる者となさん彼らはその敵の劍に仆れん汝の目はこれを見べし我またユダのすべての民をバビロン王の手に付さん彼は彼らをバビロンに移し劍をもて殺すべし 我またこの邑のすべての貨財と所得たる諸の物とその諸の珍寶とユダの王等のすべての備蓄を其敵の手に付さん彼らはこれを掠めまた民を擄へてバビロンに移すべし 巴シユルよ汝と汝の家にすめる者は悉く擄へ移されん汝はバビロンにいたりて彼處に死にかしこに葬られん汝が偽りて預言せし言を聽し友もみな然らん

エホバよ汝われを勸めたまひてわれ其勸に従へり汝我をとらへて我に勝給へりわれ日々人の笑となり人皆我を嘲りぬ われ語り呼はるることに暴逆殘虐の事をいふエホバの言日々わが身の恥辱となり嘲弄となるなり 是をもて我かさねてエホバの事を宣す又その名をもてかたらじといへり然どエホバのことは我心にありて火のわが骨の中に閉こもりて燃るがごとくなれば忍耐につかれて堪難し 是は我おほくの人の讒をきく驚懼まはりにあり訴へよ彼を訴へん我親しき者はみな我厭ふことあらんかと竊ひて互にいふ彼誘はるることあらんしからは我彼に勝て仇を報ゆることをえんと 然どエホバは強き勇士のごとくにして我と偕にいます故に我を攻る者は厭きて勝ことをえずそのなし遂ざるが爲に大なる恥辱を取ん其羞恥は何時迄も忘れざるべし 我人を試み人の心腸を見たまふ萬軍のエホバよ我汝に訴を申たれば我をして汝が彼らに仇を報すを見せしめよ

二〇 エホバに歌を誦へよエホバを頌めよそは貧者の生命を悪者の手より救ひ給へばなり

二一 あゝ我生れし日は誼はれよ我母のわれを生し日は祝せられされ 二二 わが父に男子汝に生れしと告て父を大に喜ばせし人は誼はれよ 其人はエホバの憫ますして滅したまひし邑のごとくなれよ彼をして朝に號呼をきかしめ午間に鬨聲をきかしめよ 彼我を胎のうちに殺さず我母を我の墓となさず常にその胎を大ならしめざりしが故なり 我何なれば胎をいでて艱難と憂患をかうむり恥辱をもて日を送るや

第二章

一 ゼデキヤ王マルキヤの子バシユルと祭司マアセヤの子ゼバニヤをエレミヤに遣し 二 バビロンの王ネブカデネザル我らを攻むれば汝われらの爲にエホバに求めよエホバ恒のごとくそのもろもろの奇なる跡をもて我らを助けバビロンの王を我らより退かしめたまふことあらんと曰しむ其時エホバの言エレミヤに臨めり

三 エレミヤ彼らにこたへけるは汝らゼデキヤにかく語ふべし 四 イスラエルの神エホバかくいひたまふ觀よわれ汝らがこの邑の外にありて汝らを攻め圍むところのバビロン王およびカルデア人とたゝかひて手に持ところのその武器をかへし之を邑のうちに聚めん 五 われ手を伸べ臂をつよくし震怒と憤恨と烈き怒をもて汝らをしむべし 六 我また此邑にすめる人と畜を撃ん皆重き疫病によりて死べし 七 エホバいひたまふ此後われユダの王ゼデキヤとその諸臣および民此邑に疫病と劍と饑饉をまぬかれて遺れる者をバビロンの王ネブカデネザルの手と其敵の手および凡そその生命を索る者の手に付さんバビロンの王は劍の刃をもて彼らを撃ちかれらを惜まず顧みず恤れまざるべし

八 汝また此民にエホバかくいふと語るべし視よわれ生命の道と死の道を汝らの前に置く 九 この邑にとどまる者は劍と饑饉と疫病に死べしされど汝らを攻め圍むところのカルデア人に出降る者はいきん其命はおのれの掠取物となるべし 一〇 エホバいひたまふ我この邑に面を向しは福をあたる爲にあらず禍をあたへんが爲なり

この邑はバビロンの王の手に付されん彼火をもて之を焚くべし

一一 またユダの王の家に告べし汝らエホバの言をきけ 一二 ダビデの家よエホバかくいふ汝朝ごとくに我く物をかし物を奪はるゝ人をその暴逆者の手より救へ否されば汝らの行の惡によりて我怒火のごとくに發で燃て滅ざるべし 一三 エホバいひたまふ谷と平原の祭とにすめる者よみよ我汝に敵す汝らは誰か降て我儕を攻んや誰かわれらの居處にいらんやといふ 一四 我汝らをその行の果によりて罰せん又其林に火を起し其四周をことごとく焚つくすべしとエホバいひたまふ

第二章

一 エホバかくいひたまへり汝ユダの王の室にくだり彼處にこの言をのべていへ 二 ダビデの位に坐するユダの王よ汝と汝の臣および此門よりいる汝の民エホバの言をきけ 三 エホバかくいふ汝ら公道と公義を行ひ物を奪はるゝ人をその暴虐者の手より救ひ異邦人と孤子と廢婦をなやまし慮ぐる勿れまた此處に無辜の血を流す勿れ 四 汝らもし此言を眞に行はゞダビデの位に坐する王とその臣および其民は車と馬に乗てこの室の門に在ることをえん 五 然ど汝らもし此言を聽すばわれ自己を指して誓ふ此室は荒地となるべしとエホバいひたまふ 六 エホバ、ユダの王の室につきてかく曰たまふ汝は我におけることギレアデのごとくレバノン

の嶺のごとし然どわれかならず汝を荒野となし人の住はざる邑となさん 七 われ破壊者をまふけて汝を攻めしめん彼ら各人その武器を執り汝の美しき香柏を斫てこれを火に投いれん 八 多の國の人此邑をすぎ互に語てエホバ何なれば此大なる邑にかく爲せしやといはん 九 人こたへて是は彼等其神エホバの契約をすて、他の神を拜し之に奉へしに由なりといはん 一〇 死者の爲に泣くことなくまた之が爲に嗟くこと勿れ寧據へ移されし者の爲にいたく嗟くべし彼は再び歸てその故園を見ざるべければなり 一一 ユダの王ヨシヤの子シャルム即ちその父に繼いで王となりて遂に此處をいでたる者につきてエホバかくいひたまへり彼は再び此處に歸らじ 彼はその移されし處に死んふたゝび此地を見ざる

不義をもて其室をつくり不法をもて其樓を造り其隣人を備へず其價を拂はざる者は
 なるかな 彼いふ我己の爲に廣厦と涼しき樓をつくり又己の爲に窓を造り香柏をもて之を蔽ひ赤く之を
 塗んと 汝香柏を争ひもちふるによりて王たるを得るか汝の父は食飲せざりしや公義と公道を行ひて嗣を
 得ざりしや 彼は貧者と患難者の訟を理して群をえたりかく爲すは我を識ことに非ずやとエホバいひ給ふ
 然ど汝の目と心は惟貪をなさんとし無辜の血を流さんとし虐遇と暴逆をなさんとするのみ 故に
 エホバ、ユダの王ヨシヤの子エホヤキムにつきてかく曰たまふ衆人は哀しいかな我兄かなしいかな我姉といひて
 嗟かず又哀しいかな主よ哀しいかな其榮と曰て嗟かじ 彼は驢馬を埋るがごとく埋られん即ち曳れてエルサレ
 ムの門の外に投棄らるべし

汝レバノンに登りて呼ばはりバシヤンに汝の聲を揚げアバリムより呼ばれ其は汝の愛する者悉く滅され
 たればなり 汝の平康なる時我なんちに誦しかども汝は我にきかじといへり汝いとけなき時よりわが聲を聴す
 これ汝の故習なり 汝の牧者はみな風に香つくされ汝の愛する者はとらへ移されん其時汝はおのれの 諸の惡
 のために痛く恥べし 汝レバノンにすみ巢を香柏につくる者よ汝の幼勞子を産む婦の痛苦のごとくにきたらん
 とき汝の哀慘はいかにぞや

エホバいひたまふ我は活くユダの王エホヤキムの子エホヤキムは我右の手の指環なれども我これを抜ん
 われ汝の生命を索る者の手および汝が其面を畏る者の手すなはちバビロンの王ネブカデネザルの手とカル
 デヤ人の手に汝を付さん われ汝と汝を生し母を汝等がうまれざりし他の地に逐やらん汝ら彼處に死べし
 彼らの靈魂のいたく歸らんことを願ふところの地に彼らは歸ることをえず この人エホヤキムは賤むべき地
 れたる器ならんや好ましからざる器具ならんや如何なれば彼と其子孫は逐出されてその職をなさざる地に投棄らるべし

地よ地よ地よエホバの言をきけ エホバかくいひたまふこの人を子なくして其生命の中に榮えざる人と
 録せそはその子孫のうち榮えてダビデの位に坐しユダを治る人かかねてなかるべければなり

第二章

エホバいひ給ひけるは嗚呼わが養ふ群を滅し散す牧者は 禍なるかな 故にイスラエルの神エ
 ホバ我民を養ふ牧者につきて斯いふ汝らはわが群を散しこれを逐はなちて顧みざりき視よわれ汝ら
 の惡き行によりて汝等に報ゆべしとエホバいふ われ我群の遺餘たる者をその逐はなちたる諸の地より集め
 再びこれを其牢に歸さん彼らは子を産て多くなるべし 我これを養ふ牧者をその上に立ん彼等はふたゝび深か
 ず懼すまた失じとエホバいひたまふ

エホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き杖を起す日來らん彼王となりて世を治め榮え公道と
 公義を世に行ふべし 其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん其名はエホバ我儕の義と稱らるべし この
 故にエホバいひ給ふ視よイスラエルの民をエジプトの地より導出せしエホバは活くと人衆復いはすして
 スラエルの家の裔を北の地と其諸て逐やりし地より導出せしエホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地に居
 るべし

預言者衆のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震ふ且エホバとその聖言のためにわれは醉る人の
 ごとく酒に勝るゝ人のごとし この地は姦淫をなすもの盈ち地は呪詛によりて憂へ曠野の神は枯る彼らの途は
 あしく其力は正しからず 預言者と祭司は僭に邪惡なりわれ我家に於てすら彼等の惡を見たりとエホバいひた
 まふ 故にかれの途は暗に在る滑なる途の如くならん彼等推れて其途に仆るべし我災をその上にのぞまし
 めん是彼らが刑罰らるゝ年なりとエホバいひたまふ

われサマリヤの預言者の中に愚昧なる事あるをみたり彼等はバアルに託りて預言し我民イスラエルを惑は
 せり 我エルサレムの預言者の中にも憎むべき事あるを見たり 彼等は姦淫をなし 詐偽をおこなひ惡人の手を

堅くして人をその惡に離れざらしむ彼等みな我にはソドムのごとく其民はゴモラのごとし 此の故に萬軍のエホバ預言者につきてかくいひたまふ視よわれ南蘭を之に食はせ毒水をこれに飲せんそは邪惡エルサレムの預言者よりいでて此全地に及べばなり

萬軍のエホバかくいひたまふ汝等に預言者の言を聴く勿れ彼等はなんぢらを救きエホバの口よりいでざるおのが心の默示を語るなり 常に彼らは我を藐忽する者にむかひて汝等平安をえんとエホバいひたまへりといひ又己が心の剛愎なるに循ひて行むところのすべての者に向ひて災汝らに來らじといへり 誰かエホバの議會に立て其言を見聞せし者あらんや誰か其耳を傾けて我言を聴し者あらんや 小よエホバの暴風あり怒と旋轉風いでて惡人の首をうたん エホバの怒はかれがその心の思を行ひてこれを遂げ給ふまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん 預言者等はわが遣さざるに趨り我告ざるに預言せり 彼らもし我議會に立ちしならば我民にわが言をきかして之をその惡き途と其の惡き行に離れしめしならん

エホバいひ給ふ我はたゞ近くにおいてのみ神たらんや遠くに於ても神たるにあらんや エホバいひたまふ人我に見られざる様に密なる處に身を匿し得るかエホバいひたまふ我は天地に充るにあらんや われ我名をもて 誠を預言する預言者等がわれ夢を見たりと曰ふをきけり 誠を預言する預言者等はいつまで此心をいだくや彼らは其心の詐偽を預言するなり 彼らは其先祖がバアルによりて我名を忘れしごとく互に夢をかたりて我民にわが名を忘れしめんと思ふや 夢をみし預言者は夢を語るべし我言を受し者は誠實をもて我言を語るべし鐵いかにて麥に比擬ことをえんやとエホバいひたまふ エホバ言たまはく我言は火のごとくならずや又磐を打碎く槌の如くならずや 故に視よわれ我言を相互に竊める預言者の敵となるとエホバいひたまふ 視よわれは彼いひたまへりと舌をもて語るところの預言者の敵となるとエホバいひたまふ エホバいひたまひけるは視よわれ偽の夢を預言する者の敵となる彼らは之を語りまたその 誠と其誇をもて我民を惑

はす我かれらを遣さずかれらに命ぜざるなり故に彼らは斯民に益なしとエホバいひたまふ

この民或は預言者又は祭司汝に問てエホバの重負は何ぞやといはゞ汝彼等にこたへてエホバの重負は我汝等を棄んとエホバの云たまひし事是なりといふべし エホバの重負といふところの預言者と祭司と民には我その人と其家にこれを降さん 汝らはおのおの斯互に言ひその兄弟にいふべしエホバは何と應へたまひしやエホバは何と云たまひしやと 汝ら復びエホバの重負といふべからず人の重負となる者は其人の言なるべし汝らは活る神萬軍のエホバなる我らの神の言を枉るなり 汝かく預言者にいふべしエホバは汝に何と答へたまひしやエホバは何といひたまひしやと 汝らもしエホバの重負といはゞエホバそれにつきてかくいひたまふ我人を汝らに遣して汝等エホバの重負といふべからずといはしむるも汝らはエホバの重負といふ此言をいふによりてわれ必ず汝らを忘れ汝らと汝らの先祖にあたへし此邑と汝らとを我前より棄ん 且われ永遠の辱と永遠なる忘らるゝことなき恥を汝らにかうむらしめん

第二章

バビロンの王ネブカデネザル、ユダの王エホヤキムの子エコニヤおよびユダの牧伯等と木匠と示したまへり 一の筐には始に熱せしがごとき至佳き無花果ありその一の筐にはいと惡くして食ひ得ざるほどなる惡き無花果あり エホバ我にいひたまひけるはエレミヤよ汝何を見しや我答へけるは無花果なりその佳き無花果はいと佳しその惡きものは至惡くして食ひ得ざるほどに惡し

エホバの言また我にのぞみていふ イスラエルの神エホバかくいふ我わが此處よりカルデア人の地に逐やりしユダの虜人を此佳き無花果のごとくに願みて惠まん 我彼等に目をかけて之をめぐみ彼らを此地にかへし彼等を建て侍さず植て拔じ 我彼らに我のエホバなるを識るの心をあたへん彼等我民となり我彼らの神とならん彼等は一心をもて我に歸るべし

エホバかくいひたまへり我ユダの王ゼデキヤとその牧伯等およびエルサレムの人の遺りて此地にをる者ならびにエジプトの地に住る者とを此悪くして食はれざる悪き無花果のごとくになさん 我かれらをして地のもろもろの國にて唐遇と災害にあはしめん又彼らをしてわが逐やらん諸の處にて辱にあはせ諺となり嘲と詛に遭しめん われ劍と饑饉と疫病をかれらの間におくりて彼らをしてわが彼らとその先祖にあたへし地に絶るにいたらしめん

第二十五章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年バビロンの王ネブカデネザルの元年にユダのすべての民に於てはる言エレミヤにのぞめり 預言者エレミヤの言をユダのすべての民とエルサレムにすめるすべての者に告ていひけるは ユダの王アモンの子ヨシヤの十三年より今日にいたるまで二十三年のあひだエホバの言我にのぞめり我これを汝等に告げ頻にこれを語りしかども汝らをかざりし エホバその僕なる預言者を汝らに遣し頻に遣したまひけれども汝らはきかず又きかんとて耳を傾けざりき 彼らいへり汝等おののいま其惡き途とその惡き行を棄よ然ばエホバが汝らと汝らの先祖に與へたまひし地に永遠より永遠にいたるまで住ことをえん 汝ら他の神に従ひこれに事へこれを拜み汝らの手にて作りし物をもて我を怒らす勿れ然ば我汝らを害はじ 然ど汝らは我にきかず汝等の手にて作りし物をもて我を怒らせて自ら害へりとエホバいひたまふ この故に萬軍のエホバかく云たまふ汝ら我言を聽ざれば 視よ我北の諸の族と我僕なるバビロンの王ネブカデネザルを招きよせ此地とその民と其四圍の諸國を攻滅さしめて之を詭異物となし人の嗤笑となし永遠の荒地となさんとエホバいひたまふ またわれ欣喜の聲 歡樂の聲 新夫の聲 新婦の聲 鬚髯の音および燈の光を彼らの中にたえしめん この地はみな空曠となり詭異物とならん又その諸國は七十年の間バビロンの王につかふべし

エホバいひたまふ七十年のをはりし後我バビロンの王と其民とカルデヤの地をその罪のために罰し永遠の空曠となさん 我かの地につきて我かたりし諸の言をその上に臨しめん是エレミヤが萬國の事につきて預言したる者にて皆この書に録さるゝなり 多の國々と大なる王等は彼らをして己につかへしめん我かれらの行爲とその手の所作に循ひてこれに報いん

イスラエルの神エホバかく我に云たまへり我手より此怒の杯をうけて我汝を遺すところの國々の民に飲しめよ 彼らは飲てよろめき狂はんこは我かれらの中に劍をつかはすに上りてなり 是に於てわれエホバの手より杯をうけエホバのわれを遣したまふところの國々の民に飲しめたり 即ちエルサレムとユダの諸の邑とその王等およびその牧伯等に飲せてこれをほろぼし詭異物となし人の嗤笑となし詛るゝ者となせり今日のことし またエジプトの王パロと其臣僕その牧伯等その諸の民と 諸の雜種の民およびウズの諸の王等およびベリシテ人の地の諸の王等アシケロン、ガザ、エタロン、アシドドの遺餘の者 エドム、モアブ、アンモンの子孫 ツロのすべての王等シドンのすべての王等海のかなたの島々の王等 デダン、テマ、ブスおよびすべてをそる者 アラビアのすべての王等曠野の雜種の民の諸の王等 ジムリの諸の王等エラムの諸の王等メデアのすべての王等 北のすべての王等その彼と此とにおいて或は遠者或は近きもの凡地の面にある世の國々の王等は此の杯を飲んせシヤク王はこれらの後に飲べし

故に汝かれらに語ていへ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我汝等の中に劍を遺すに上りて汝らは飲みまた酔ひまた吐き又仆て再び起ざれと 彼等もし汝の手より此杯を受けて飲ずば汝彼らにいへ萬軍のエホバかくいひたまふ汝ら必ず飲べし 視よわれ我名をもて稱へらるゝこの邑にすら災を降すなり汝らいかで罰を免るゝことをえんや汝らは罰を免れじ蓋われ劍をよびて地に住るすべての者を攻べければなりと萬軍のエホバいひたまふ

汝彼等にこの諸の言を預言していふべしエホバ高き所より呼號り其聖宮より聲を出し己の住家に向てよば

はり地に住る諸の者にむかひて葡萄を踐む者のごとく、咄たまはん。 號咄地の極まで開け蓋エホバ列國と争ひ萬民を審き悪人を劍に付せば也とエホバ曰たまへり。

萬軍のエホバかく曰たまふ視よ災いでて國より國にいたらん大なる暴風地の極よりおこるべし。 其日

エホバの戮したまふ者は地の此極より地の彼の極に及ばん彼等は哀まれず殮められず葬られずして地の面に糞土とならん。 牧者よ哭き叫べ群の長等よ汝ら灰の中に轉ぶべし蓋汝らの屠らるゝ日滿れば也我汝らを散すべければ汝らは貴き器のごとく墮べし。 牧者は避場なく群の長等は逃る處なし。 牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭

きこゆ蓋エホバ其牧場を滅したまへば也。 エホバの烈き怒によりて平安なる牧場は滅さる。 彼は獅子の如く其巢を出たり滅す者の怒と其烈き忿によりて彼らの地は荒されたり。

第二十六章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言いでていふ。 エホバかくい

ふ汝エホバの室の庭に立我汝に命じていはしむる諸の言をユダの邑々より來りてエホバの室に拜する人々に告よ一言をも漏す勿れ。 彼等聞ておのおの其惡き途を離るゝことあらん然ば我これらの行の惡がために災を彼らに降さんとせることを悔べし。 汝彼等にエホバかくいふといへ汝等もし我に聽すわが汝らの前に置し律法を行はず。 我汝らに遣し切に遣せし我僕なる預言者の言を聽すば(汝らは之をかきざりき) 我

この室をシロの如くになし又この邑を地の萬國に誼はるゝ者となすべし。 祭司と預言者及び民みなエレミヤがエホバの室に立てこの言をのぶるをきけり。 エレミヤ、エホバに命ぜられし諸の言を民に告畢りしとき祭司と預言者および諸の民彼を執へいひけるは

汝は必ず死べし。 汝何故にエホバの名をもて預言し此室はシロの如くなりこの邑は荒蕪となりて住む者なきにいたらんと云しやと民みなエホバの室にあつまりてエレミヤを攻む。 ユダの牧伯等この事をききて王の家をいでエホバの室にのぼりてエホバの家の新しき門の入口に坐せり

祭司と預言者等牧伯等とすべての民に訴ていふ此人は死にあたる者なり是は汝らが耳に聽しごとくこの邑にむかひて惡き預言をなしたるなり。 是に於てエレミヤ牧伯等とすべての民にいひけるはエホバ我を遣し汝らが聽る諸の言をもて此宮とこの邑にむかひて預言せしめたまふ。 故に汝らいま汝らの途と行爲をあらためて汝らの神エホバの聲にしたがへ然ばエホバ汝らに災を降さんとせしことを悔たまふべし。 みよ我は汝らの手にあり汝らの目に善とみゆるところ義とみゆることを我に行へ。 然ど汝ら善くこれを知れ汝らもし我を殺さば必ず無辜ものの血なんぢらの身とこの邑と其中に住る者に歸せんエホバ我を遣してこの諸の言を汝らの耳につけしめたまひしなればなり。

牧伯等とすべての民すなはち祭司と預言者にいひけるは此人は死にあたる者にあらず是は我らの神エホバの名によりて我儕に語りしなりと。 時にこの地の長老數人立て民のすべての集れる者につけていひけるは

ユダの王ヒゼキヤの代にモレシテ人ミカ、ユダの民に預言して云けらく萬軍のエホバかくいひ給ふシオンは田地のごとく耕されエルサレムは邱墟となり此室の山は樹深き崇邱とならんと。 ユダの王ヒゼキヤとすべてのユダ人は彼を殺さんとせしことありしやヒゼキヤ、エホバを畏れエホバに求ければエホバ彼らに降さんと告給ひし災を悔給ひしにあらずや我儕かく爲すは自己の靈魂をそこなふ大なる惡をなすなり。

又前にエホバの名をもて預言せし人あり即ちキリアヤリムのシマヤの子ウリヤなり彼エレミヤの見ていへるごとく此邑とこの地にむかひて預言せり。 エホヤキム王と其すべての勇士とすべての牧伯等その言を聽り是において王彼を殺さんと欲ひしがウリヤこれをきく懼てエジプトに逃ゆきしかば。 エホヤキム王人をエジプトに遣せり即ちアクポルの子エルナタンに數人をそへてエジプトにつかはしければ。 彼らウリヤをエジプトより引出しエホヤキム王の許に携きたりしに王劍をもて之を殺し其屍骸を賤者の墓に棄させたりと。 時にシヤパンの子アヒカム、エレミヤをたすけこれを民の手にわたして殺さざらしむ。

第二十七章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言エレミヤに臨みていふ
 なはちエホバかく我に云たまへり汝索と鞭をつくりて汝の項に置き 之をエルサレムにきたりて
 ゼデキヤ王にいたるところの使臣等の手によりてエドムの王モアブの王安モニ人の王ツロの王シドン王に送
 るべし 汝彼らに命じて其主にはしめよ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝ら其主にかく告べ
 し われ我大なる能力と伸たる臂をもて地と地の上を人と獸とをつくり我心のまゝに地を人にあたへたり
 いま我この諸の地を我僕なるバビロンの王ネブカデネザルの手にあたへ又野の獸を彼にあたへてかれにつかへ
 しむ かれの地の時期いたるまで萬國民は彼と其子とその孫につかへん其時いたらばおほくの國と大なる王は
 彼を己に事へしむべし 〆バビロンの王ネブカデネザルに事へすバビロンの王の鞭をその項に負さる國と民は我
 彼の手をもて悉くこれを滅すまで剣と饑饉と疫病をもてこれを罰せんとエホバいひたまふ 故に汝らの預言者
 なんぢらの占筮師汝らの夢みる者汝らの法術士汝らの魔法士汝らに告て汝らはバビロンの王に事ふることあらじ
 といふとも聽なかれ 彼らは 汝らに預言して汝らその國より遠く離れしめ且我をして汝らを逐しめ汝
 らを滅さしむるなり 然どバビロンの王の鞭とその項に負ふて彼に事ふる國々の人は我これをその故土に存し
 其處に耕し住しむべしとエホバいひたまふ
 我この諸の言のごとくユダの王ゼデキヤに告ていひけるは汝らバビロンの王の鞭を汝らの項に負ふて彼と
 其民につかへよ然ば生べし 汝と汝の民なんぞエホバがバビロンの王につかへざる國につきていひたまひし
 如く剣と饑饉と疫病に死ぬべけんや 故に汝らはバビロンの王に事ふることあらじと汝等に告る預言者の言を
 聽なかれ彼らは 汝らに預言するなり 〆エホバいひたまひけるは我彼らを遣さるに彼らは我名をもて 汝
 を預言す是をもて我汝らを逐はなち汝らと汝らに預言する預言者等を滅すにいたらん
 我また祭司とこのすべての民に語りていひけるはエホバかくいひたまふ視よエホバの室の器皿いま速に

バビロンより持歸さるべしと汝らに預言する預言者の言をきく勿れそは彼ら 汝らに預言すればなり 汝
 ら彼らに聽なかれバビロンの王に事へよ然ば生べしこの邑を何ぞ荒蕪となすべけんや 〆もし彼ら預言者にし
 てエホバの言かれらの衷にあらばエホバの室とユダの王の家とエルサレムとに餘れるところの器皿のバビロンに
 移されざることを萬軍のエホバに求むべきなり 萬軍のエホバは海と臺およびこの邑に餘れる器皿につきて
 かくいひたまふ 〆是はバビロンの王ネブカデネザルがユダの王エホヤキムの子エホニヤおよびユダとエルサレ
 ムのすべての牧伯等をエルサレムよりバビロンにとらへ移せしときに掠ざりし器皿なり 〆すなはち萬軍のエホ
 バ、イスラエルの神エホバの室とユダの王の室とエルサレムとに餘れる器皿につきてかくいひたまふ 〆これら
 はバビロンに携へゆかれ我これを顧る日まで彼處にあらん其後我これを此處にたづさへ歸らしめんとエホバいひ
 たまふ

第二十八章

この年すなはちユダの王ゼデキヤが位に即し初その四年の五月ギベオンのアズルの子なる預言者
 ハナニヤ、エホバの室にて祭司と凡の民の前にて我に語りいひけるは 萬軍のエホバ、イスラエル
 の神かくいひたまふ我バビロンの王の鞭を擡けり 二年の内にバビロンの王ネブカデネザルがこの處より取て
 バビロンに携へゆきしエホバの室の器皿を再び悉くこの處に歸らしめん 我またユダの王エホヤキムの子エ
 コニヤおよびバビロンに往しユダのすべての擡 人をこの處に歸らしめんそは我バビロンの王の鞭を擡くべけれ
 ばなりとエホバいひたまふ

是に於て預言者エレミヤ、エホバの家に立る祭司の前とすべての民の前にて預言者ハナニヤと語ふ 預
 言者エレミヤすなはちいひけるはアメン願くはエホバかくなし給へ願くはバビロンに携へゆかれしエホバの室
 の器皿及びすべて擡へうつされし者をエホバ、バビロンより復びこの處に歸らしめたまはんと汝の預言せし言の
 成んことを 然ど汝いま我なんぢの耳と諸の民の耳に語らんとする此言をきけ 我と汝の先にいでし預言者は

命ぜざる 誠の言をわが名をもて語りしによる我これを知りまた證すとエホバいひたまふ

二四 汝ネヘラミ人シマヤにかく語りいふべし 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝おのれの名をもて書をエルサレムにある諸の民と祭司マアセヤの子ゼバニヤおよび諸の祭司に送りていふ エホバ汝を祭司エホヤダに代て祭司となし汝らをエホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且みづから預言者なりといふ者を獄と桎梏につながしめんためなり 然るに汝いま何故に汝らにむかひてみづから預言者なりといふところのアナトテのエレミヤを斥責めざるや 二五 そは彼バビロンにをる我儕に書を送り時尙長ければ汝ら家を建て之に住ひ圖をつくりてその實をくらへといへり 二六 祭司ゼバニヤこの書を預言者エレミヤに讀ませたり 時にエホバの言エレミヤにのぞみていふ 諸の俘虜人に書をおくりて云べしネヘラミ人シマヤの事につきてエホバかくいふ我シマヤを遣さるに彼汝らに預言し汝らに 誠を信ぜしめしによりて 二七 エホバかくいふ視よ我ネヘラミ人シマヤと其子孫を罰すべし彼エホバに逆くことを教へしによりて此民のうちに彼に屬する者一人も住ふことなからん且我民に吾がなさんとする善事をみざるべしとエホバいひたまふ

第三〇章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 二 イスラエルの神エホバかく告ていふ我汝に言し言をこごとく書に録せ 三 エホバいふわれ我民イスラエルとユダの俘虜人を返す日きたらんエホバこれをいふ我彼らをその先祖にあたへし地にかへらしめん彼らは之をたもたん

四 エホバのイスラエルとユダにつきていひたまひし言は是なり 五 エホバかくいふ我ら戦慄の聲をきく驚懼あり平安あらず 汝ら子を産む男あるやを尋ね觀よ我男が皆子を産む婦のごとく手をその腰におき且その面色皆青く變るをみるは何故ぞや 六 哀しいかなその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤコブの患難の時なり 七 然ど彼はこれより救出されん 八 萬軍のエホバいふ其日我なんぢの項よりその轆をくだきはなし汝の繩目をとかん異邦人は復彼を使役はざるべし 九 彼らは其神エホバと我彼らの爲に立んところの其王ダビデにつかふべし

一〇 エホバいふ我僕ヤコブよ懼るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ我汝を遠方より救ひかへし汝の子孫を其とらへ移されし地より救ひかへさんヤコブは歸りて平穩と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 一一 エホバいふ我汝と併にありて汝を救はん汝を散せし國々を悉く滅しつくすと汝をば滅しつくされど我道をもて汝を懲さん汝を全く罰せずにはおかざるべし

一二 エホバかくいふ汝の創は愈す汝の傷は重し 一三 汝の訟を理す者なく汝の創を蓋む膏藥あらず 一四 汝の愛する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我仇敵の聲がごとく汝を撃ち厳く汝を懲せばなり 一五 何ぞ汝の創のために叫ぶや汝の患は愈ることなし汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我これを汝になすなり 一六 然どすべて汝を食ふ者は食はれずすべて汝を處ぐる者は皆とらはれ汝を掠むる者は掠められん 一七 凡て汝の物を奪ふ者は我これをして奪はるゝ事にあはしむべし 一八 エホバいふ我汝に膏藥を貼り汝の傷を醫さんそは人汝を棄られし者とよび尋る者なきシオンといへばなり

一九 エホバかくいふ視よわれかの據移されたるヤコブの天幕をかへし其住居をあはれまん斯邑はその故の丘極に建られん城には宜き様に人住はん 二〇 感謝と歡樂の聲とその中よりいでん我かれらを増ん彼ら少からじ我彼らを崇せん彼ら貌められじ 二一 其子は噉昔のごとくあらん其集會は我前に固く立ん凡かれを處ぐる者は我これを罰せん 二二 其首領は本族よりいで其督者はその中よりいでん我彼をちかづけ彼に近かん誰かその生命を奪て我に近くものあらんやとエホバいふ 二三 汝等は我民となり我は汝らの神とならん 二四 我は汝らの神とならん 二五 我は汝らの神とならん 二六 我は汝らの神とならん 二七 我は汝らの神とならん 二八 我は汝らの神とならん 二九 我は汝らの神とならん 三〇 我は汝らの神とならん 三一 我は汝らの神とならん 三二 我は汝らの神とならん 三三 我は汝らの神とならん 三四 我は汝らの神とならん 三五 我は汝らの神とならん 三六 我は汝らの神とならん 三七 我は汝らの神とならん 三八 我は汝らの神とならん 三九 我は汝らの神とならん 四〇 我は汝らの神とならん 四一 我は汝らの神とならん 四二 我は汝らの神とならん 四三 我は汝らの神とならん 四四 我は汝らの神とならん 四五 我は汝らの神とならん 四六 我は汝らの神とならん 四七 我は汝らの神とならん 四八 我は汝らの神とならん 四九 我は汝らの神とならん 五〇 我は汝らの神とならん 五一 我は汝らの神とならん 五二 我は汝らの神とならん 五三 我は汝らの神とならん 五四 我は汝らの神とならん 五五 我は汝らの神とならん 五六 我は汝らの神とならん 五七 我は汝らの神とならん 五八 我は汝らの神とならん 五九 我は汝らの神とならん 六〇 我は汝らの神とならん 六一 我は汝らの神とならん 六二 我は汝らの神とならん 六三 我は汝らの神とならん 六四 我は汝らの神とならん 六五 我は汝らの神とならん 六六 我は汝らの神とならん 六七 我は汝らの神とならん 六八 我は汝らの神とならん 六九 我は汝らの神とならん 七〇 我は汝らの神とならん 七一 我は汝らの神とならん 七二 我は汝らの神とならん 七三 我は汝らの神とならん 七四 我は汝らの神とならん 七五 我は汝らの神とならん 七六 我は汝らの神とならん 七七 我は汝らの神とならん 七八 我は汝らの神とならん 七九 我は汝らの神とならん 八〇 我は汝らの神とならん 八一 我は汝らの神とならん 八二 我は汝らの神とならん 八三 我は汝らの神とならん 八四 我は汝らの神とならん 八五 我は汝らの神とならん 八六 我は汝らの神とならん 八七 我は汝らの神とならん 八八 我は汝らの神とならん 八九 我は汝らの神とならん 九〇 我は汝らの神とならん 九一 我は汝らの神とならん 九二 我は汝らの神とならん 九三 我は汝らの神とならん 九四 我は汝らの神とならん 九五 我は汝らの神とならん 九六 我は汝らの神とならん 九七 我は汝らの神とならん 九八 我は汝らの神とならん 九九 我は汝らの神とならん 一〇〇 我は汝らの神とならん

第三一章

一 エホバいひたまふ其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん 二 エホバかくいひたまふ劍をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たりわれ往て彼イスラエルに安息をあたへん

我をしるべければなりとエホバいひたまふ我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし

エホバかく言すなはち是日をあたへて晝の光となし月と星をさだめて夜の光となし海を激してその濤を鳴しむる者その名は萬軍のエホバと言なり
エホバいひたまふもし此等の規律我前に廢らばイスラエルの子孫も我前に廢りて永遠も民たることを得ざるべし
エホバかくいひたまふ若し上の天量ることを得下地の基探ることをえば我またイスラエルのすべての子孫を其もろもろの行のために棄べしエホバこれをいふ

エホバいひたまふ視よ此邑ハナネルの塔より隅の門までエホバの爲に建つ日きたらん
量繩ふたゞび直ちにガレブの岡をこえゴアテの方に轉るべし
屍と灰の谷またケデロンの溪にいたるまでと東の方の馬の門の隅にいたるまでの諸の田地皆エホバの聖き處となり永遠におよぶまで再び拔れまた覆さるゝ事なかるべし

第三章

ユダの王ゼデキヤの十年即ちネブカデネザルの十八年の頃エホバの言エレミヤにのぞめり
その時バビロンの軍勢エルサレムを攻環み居て預言者エレミヤはユダの王の室にある獄の庭の内に禁錮られたり
ユダの王ゼデキヤ彼を禁錮していひけるは汝何故に預言してエホバかく云たまふといふや云く

視よ我この邑をバビロン王の手に付さん彼之を取るべし
またユダの王ゼデキヤはカルデア人の手より脱れず必ずバビロン王の手に付され口と口とあひ語り目と目あひ觀るべし
彼ゼデキヤをバビロンに携きゆかんゼデキヤはわが彼を顧る時まで彼處に居んとエホバいひたまふ汝らカルデア人と戦ふとも勝ことを得じと
エレミヤいふエホバの言われに臨みていはく
みよ汝の叔父シャルムの子ハナメル汝にきたりていはん

汝アナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ふ事は汝の分なればなりと
かくてエホバの言のごとく我叔父の子ハナメル獄の庭にて我に來り云けるは願くは汝ベニヤミンの地のアナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ぎこれを贖ふことは汝の分なれば汝みづからこれを買ひとれとこゝに於てわれ此はエホバの言なりと知りたれば我叔父の子ハナメルがアナトテにもてる田地をかひて彼に銀十七シケルを稱てあたふ
すなはち我その契券

を書てこれに封印し證人をたて權衡をもて銀を稱て與ふ
而してわれその約定をのするところの封印せし契券とその開きたるものを取り
わが叔父の子ハナメルと契券に印せし證人の前および獄の庭に坐するユダ人の前にてその契券をマアセヤの子なるネリヤの子バルクに與へ
彼らの前にてわれバルクに命じていひけるは

萬軍のエホバ、イスラエルの神かく云たまふ汝これらの契券すなはち此契券の封印せし者と開きたるものを取り之を瓦器の中に貯へて多の日の間保たしめよ
萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふそは此地に於て人復屋と田地と葡萄園を買ふにいたらんと

われ契券をネリヤの子バルクに付せしものちエホバに祈りて云けるは
嗚呼主エホバよ汝はその大なる能力と伸たる腕をもて天と地を造りたまへり汝には爲す能はざるところなし
汝は恩寵を千萬人に施し又父の罪をその後の子孫の懐に報いたまふ汝は大なる全能の神にいまして其名は萬軍のエホバとまうすなり
汝の謀略は大なり汝は事をなすに能あり汝の目は人のこともらの諸の途を窺はしおのおのの行に循ひその行爲の果によりて之に報いたまふ
汝休徵と奇跡をエジプトの地に行ひたまひて今日にまでいたるまたイスラエルと

他の民の中にも然りかくして今日のごとくに汝の名を揚たまへり
汝は休徵と奇跡と強き手と伸たる腕と大なる怖しき事をもて汝の民イスラエルをエジプトの地より導きいだし
この地を彼らにたまへり是即ち汝がこれらの先祖等に與へんと誓ひたまひし乳と蜜の流るゝ地なり
彼等すなはち入てこれを獲たりしかども汝の聲に遵はず汝の例典を行はず凡て汝がなせと命じたまひし事を爲ざりしによりて汝この災を其上にくだらしむ

みよ壘成れり是の邑を取んとて來れるなり劍と饑饉と疫病のためにこの邑は之を攻るカルデア人の手に付さる汝のいひたまひしことば既に成れり汝之を見たまふなり
主エホバよ汝われに銀をもて田地を買へ證人を立よといひたまへり然るにこの邑はカルデア人の手に付さる

時にエホバの言エレミヤに臨みていふ
みよ我はエホバなりすべて血氣ある者の神なり我に爲す能はざる

二八 ところあらんや 故にエホバかくいふ視よわれ此邑をカルデヤ人の手とバビロンの王ネブカデネザルの手に
 二九 付さん彼これを取るべし 此の邑を攻るところのカルデヤ人きたり火をこの邑に放ちて之を焚ん屋蓋のうへに
 三〇 て人がバアルに香を焚き他の神に酒をそそぎて我を怒らせしその屋をも彼ら亦焚ん 是はイスラエルの子孫と
 三一 ユダの子孫はその幼少時よりわが前に悪き事のみをなしたまはすイスラエルの民はその手の作爲をもて我をいからす
 三二 る事のみをなしたればなりエホバ之をいふ 此邑はその建し日より今日にいたるまで我を怒らせし我を憤恨をお
 三三 こすところの者なれば我前よりわれ之を除かんとするなり 此はイスラエルの民とユダの民諸の悪を行ひて
 三四 我を怒らせしによりてなり彼らその王等その牧伯等その祭司その預言者およびユダの人々とエルサレムに住る者
 三五 皆然なせり 彼ら背を我にむけて面を我にむけずわれ彼らををしへ頻に教ふれどもかれらは教をきかずしてう
 三六 けざるなり 彼らは憎むべき物をわが名をもて稱へらるゝ室にたてゝ之を汚し 又ベンヒノムの谷にある
 三七 バアルの崇邱を築きその子女をモロクに獻げたりわれは彼らにこの憎むべきことを行ひてユダに罪を犯さし
 三八 むることを命ぜず斯る事は我心におこらざりしなり

三九 いまイスラエルの神エホバこの邑すなはち汝らが剣と饑饉と疫病のためにバビロン王の手に付されんとい
 四〇 ひし所の邑につきて斯いひたまふ みよわれ我を震怒と憤恨と大なる怒をもて彼らを逐やりし諸の國より彼ら
 四一 を集め此處に導きかへりて安然に居らしめん 彼らは我民となり我は彼らの神とならん われ彼らに一の
 四二 心と一の途をあたへて常に我を畏れしめんこは彼らと其子孫とに福をえせしめん爲なり われ彼らを棄ずして
 四三 恩を施すべしといふ永遠の契約をかれらにたて我を畏るゝの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん わ
 四四 れ悦びて彼らに恩を施し心を盡し精神をつくして誠に彼らを此地に植べし エホバかくいひたまふわれ此諸
 四五 の大なる災をこの民に降せしごとくわがかれらに言し諸の福を彼等に降さん 人衆この地に田野を買はん
 四六 是汝等が荒て人も畜もなきにいたりカルデヤ人の手に付されしといへる地なり 人衆ベニヤミンの地とエルサ

レムの四周とユダの邑々と山の邑々と平地の邑々と南の方の邑々において銀をもて田野をかひ契券を書きてこれ
 に封印し又證人をたてんそは我が囚囚者を歸らしむればなりとエホバいひたまふ

第三章

一 エレミヤ尙獄の庭に禁錮されてをる時エホバの言ふたゞび彼に臨みていふ 事をおこなふエホ
 二 バ事をなして之を成就するエホバ其名をエホバと名る者かく言ふ 汝我に懇求めよわれ汝に應へん
 三 又汝が知る大なる事と秘密たる事とを汝に示さん イスラエルの神エホバと剣によりて毀れたる此邑の
 四 室とユダの王の室につきてかくいひ給ふ 彼らカルデヤ人と戦はんとて來る是には我震怒と憤恨をもて殺すと
 五 ころの人々の屍體充るにいたらん我かれらの 諸の悪のためにわが面をこの邑に蔽ひかくせり 視よわれ卷布
 六 と良藥をこれに持きたりて人々を醫し平康と眞實の豐厚なるをこれに示さん 我ユダの囚囚人とイスラエルの
 七 囚囚人を歸らしめ彼ら而建て從前のごとくなすべし われ彼らが我にむかひて犯せし一切の罪を潔め彼らが
 八 我にむかひて犯し且行ひし一切の罪を赦さん 此邑は地のもろもろの民の中において我がために欣喜の名とな
 九 り頌美となり榮耀となるべし彼等はわが此民にほどこところの 諸の恩恵を聞ん而してわがこの邑にほどこと
 一〇 ころの 諸の恩恵と 諸の福祿のために發振へ且身を動搖さん
 一一 エホバかくいひ給へり汝らが荒れて人もなく畜もなしといひしこの處即ち荒れて人もなく住む者もなく
 一二 畜もなきユダの邑とエルサレムの街に 再び欣喜の聲 歡樂の聲 新娶者の聲 新婦の聲および萬軍のエホバを
 一三 あがめよエホバは善にしてその矜恤は窮なしといひて其感謝の祭物をエホバの室に携ふる者の聲聞ゆべし蓋われ
 一四 この地の囚囚人を返らしめて初のごとくなすべければなりエホバ之をいひたまふ
 一五 萬軍のエホバかくいひたまふ荒れて人もなく畜もなきこの處と其すべての邑々に再び牧者のその群を伏し
 一六 する牧場あるにいたらん 山の邑と平地の邑と南の方の邑とベニヤミンの地とエルサレムの四周とユダの邑に
 一七 おいて群ふたゞびその之を核ふる者の手の下を過らんとエホバいひたまふ

エホバ言たまはく視よ我イスラエルの家とユダの家に語りし善言を成就する日きたらん 二二
 いたらばわれダビデの爲に一の義き杖を生ぜしめん彼は公道と公義を地に行ふべし 二六
 サレムは安らかに居らんその名はエホバ我儕の義と稱へらるべし 二七
 エホバかくいひたまふイスラエルの家の位
 に坐する人ダビデに缺ることなかるべし 二八
 また我前に燔祭をさしけ素祭を燃し恒に犠牲を献ぐる人レビ人なる
 祭司に絶ざるべし

エホバのことばエレミヤに臨みていふ 二九
 エホバかくいふ汝らもし我輩につきての契約と我夜につきての
 契約を破りてその時々にも夜もなからしむることをえば 三〇
 僕ダビデに吾が立し契約もまた破れその子はかれ
 の位に坐して王となることをえざらんまたわが我に事ふるレビ人なる祭司に立し契約も破れん 三一
 天の星は數へ
 られず濱の沙は量られずわれその如く我僕ダビデの裔と我に事ふるレビ人を増ん

エホバの言またエレミヤに臨みていふ 三二
 汝この民の語りてエホバはその選みし二の族を棄たりといふを
 聞ざるか彼らはかく我民を藐じてその眼にこれを國と見なさざるなり 三三
 エホバかくいひ給ふもしわれ晝と夜と
 についての契約を立すまた天地の律法を定めずば 三四
 われヤコブと我僕ダビデとの裔をすて、再びかれの裔の中
 よりアブラハム、イサク、ヤコブの裔を治むる者を取ざるべし我その俘囚し者を返らしめこれを恤れむべし

第三章

バビロンの王ネブカデネザルその全軍および己の手の下に屬するところの地の列國の人および
 諸の民を率てエルサレムとその諸邑を攻めて戦ふ時エホバの言エレミヤに臨みていふ 三五
 エルの神エホバかくいふ汝ゆきてユダの王ゼデキヤに告ていふべしエホバかくいひたまふ視よわれ此邑をバビ
 ロン王の手に付さん彼火をもて之を焚べし 三六
 汝はその手を脱れず必ず捕へられてこれが手に付されん汝の目は
 バビロン王の目を見又かれの口は汝の口と語ふべし汝はバビロンにゆくにいたらん 三七
 然どユダの王ゼデキヤよ
 エホバの言をきけエホバ汝の事につきてかくいひたまふ汝は劍に死じ 三八
 汝は安らかに死なん民は汝の先祖たる

汝の先の王等の爲に香を焚しごとく汝のためにも香を焚き且汝のために嘆て嗚呼主よといはん我この言をいふと
 エホバいひたまふ

預言者エレミヤすなはち此言をことごとくエルサレムにてユダの王ゼデキヤにつけたり 三九
 時にバビロン
 王の軍勢はエルサレムおよび存れるユダの諸の邑を攻めラキシとアゼカを攻て戦ひる其はユダの諸邑のうち
 是等の城の邑尙存りぬればなり

ゼデキヤ王エルサレムに居る諸の民と契約を立てて彼らに釋放の事を宣示せし後エホバの言エレミヤに臨
 めり 四〇
 その契約はすなはち人をしておのおの其僕婢なるヘブルの男女を釋たしめその兄弟なるユダヤ人を
 奴隸となさしむる者なりき 四一
 この契約をなせし牧伯等とすべての民は人おのおのその僕婢を釋ちて再び
 之を奴隸となすべからずといふをききて遂にそれに聽したがひてこれを釋ちしが 四二
 後に心をひるがへしてその
 釋ちし僕婢をひきかへりて再び之を伏従はしめて僕婢となせり

是故にエホバの言エホバよりエレミヤにのぞみて云 四三
 イスラエルの神エホバかくいふ我汝らの先祖を
 エジプトの地その奴隸たりし宅より導きいだせし時彼らと契約を立ていひけらく 四四
 汝らの兄弟なるヘブル人の
 身を汝らに賣たる者せば七年の終に汝らおのおのこれを釋つべし彼六年汝につかへたらば之を釋つべしと然るに
 汝らの先祖等は我に聽ず亦その耳を傾けざりし 四五
 然ど汝らは今日心をあらためておのおの其鄰人に釋放の事を
 示してわが目に正とみゆる事を行ひ且我名をもて稱へらるゝ室に於て我前に契約を立たり 四六
 然るに汝ら再び心
 をひるがへして我名を汚し各自釋ちて其心に任せしめたる僕婢をひき歸り再び之を伏従はしめて汝らの僕婢
 となせり

この故にエホバかくいひたまふ汝ら我に聽ておのおの其兄弟とその鄰に釋放の事を示さざりしによりて視
 よわれ汝らの爲に釋放を示して汝らを劍と饑饉と疫病にわたさん我汝らをして地の諸の國にて艱難をうけしむ

一八 べし。エホバこれを云ふ權を兩にさきて其二個の間を過り我前に契約をたて、却つて其言に従はずわが契約を
 一九 ヤぶる人々。即ち兩に分ちし横の間を過りしユダの牧伯等エルサレムの牧伯等と寺人と祭司とこの地のすべて
 二〇 の民を。われ其敵の手とその生命を索る者の手付さんその屍體は天空の鳥と野の獸の食物となるべし。且
 二一 われユダの王ゼデキヤとその牧伯等をその敵の手其生命を索むる者の手汝らを離れて去しバビロン王の軍勢の手
 二二 に付さん。エホバいひたまふ視よ我彼らに命じて此邑に歸らしめん彼らこの邑を攻て戦ひ之を取り火をもて焚
 二三 くべしわれユダの諸邑を住人なき荒地となさん

第三章五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時エレミヤにのぞみしエホバの言いふ。汝レカブ人の家に往
 二 て彼らとかたり彼らをエホバの室の一房に携きたりて酒をのませよと。是に於てわれハバジヤ
 三 の子なるエレミヤの子ヤザニヤとその兄弟とその諸子およびレカブ人の全家を取り。これをエホバの室にある
 四 ハナンの諸子の房につれたたりハナンはイグダリヤの子にして神の人なり其房は牧伯等の房の次にして門を守
 五 るシヤレムの子マアセヤの房のうへに在り。我すなはちレカブ人の家の諸子の前に酒を満したる盃と杯を置
 六 き彼らに告て汝ら酒を飲めといひければ。彼らこたへけるは我儕は酒をのみす蓋レカブの子なる我らの先祖ヨ
 七 ナダブ我らに命じて汝等と汝らの子孫はいつまでも酒をのむべからず。また汝ら屋を建す種をまかず葡萄園を
 八 植ざれ亦これを有べからず汝らの生存ふるあひだ幕屋にをれ然らば汝らが寄寓ところの地に於て汝らの生命長か
 九 らんと云たればなり。斯我らはレカブの子なるわれらの先祖ヨナダブの凡て命ぜし言に遵ひて我儕とわれらの
 一〇 妻と子女は生存ふるあひだ酒を飲ず。我らは住べき屋を建す葡萄園も田野も種も有らずして。幕屋にをりす
 一一 べて我儕の先祖ヨナダブが我らに命ぜしごとく行へり。然どバビロンの王ネブカデネザルがこの地に上り來り
 一二 しとき我ら云けるは我らカルデア人の軍勢とスリア人の軍勢を畏るれば去來エルサレムにゆかんとすなはち我ら
 一三 はエルサレムに住へり

二二二 二二一 二二〇 二一九 二一八 二一七 二一六 二一五 二一四 二一三 二一二 二一一 二一〇 二〇九 二〇八 二〇七 二〇六 二〇五 二〇四 二〇三 二〇二 二〇一 二〇〇 一九九 一九八 一九七 一九六 一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 一八九 一八八 一八七 一八六 一八五 一八四 一八三 一八二 一八一 一八〇 一七九 一七八 一七七 一七六 一七五 一七四 一七三 一七二 一七一 一七〇 一六九 一六八 一六七 一六六 一六五 一六四 一六三 一六二 一六一 一六〇 一五九 一五八 一五七 一五六 一五五 一五四 一五三 一五二 一五一 一五〇 一四九 一四八 一四七 一四六 一四五 一四四 一四三 一四二 一四一 一四〇 一三九 一三八 一三七 一三六 一三五 一三四 一三三 一三二 一三一 一三〇 一二九 一二八 一二七 一二六 一二五 一二四 一二三 一二二 一二一 一二〇 一一九 一一八 一一七 一一六 一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一一〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九九 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇〇

一 時にエホバの言エレミヤにのぞみていふ。萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひ汝ゆきてユダの人々
 二 とエルサレムに住る者と共に告よエホバいひたまふ汝ら我言を聽て教を受ざるか。レカブの子ヨナダブがその
 三 子孫に酒をのむべからずと命ぜし言は行はる彼らは今日に至るまで酒をのみす其先祖の命令に遵ふなり然るに汝
 四 らは吾汝らに語り頻に語れども我にきかざるなり。我また我儕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣して
 五 いはせけるは汝らいまおのおの其惡き道を離れて歸り汝らの行をあらためよ他の神に従ひて之に奉ふる勿れ然らば
 六 汝らはわが汝らと汝らの先祖に與へたるこの地に住ことをえんと然ど汝らは耳を傾けず我にきかざりき。レカ
 七 ブの子ヨナダブの子孫はその先祖が彼らに命ぜしところの命令に遵ふなり然ど此民は我に聽ず。この故に萬軍
 八 の神エホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれユダとエルサレムに住る者と共に我彼らにつきていひし所の災を降
 九 さん我かれらに語れども聽ずかれらを召ども應へざればなり

一〇 茲にエレミヤ、レカブ人の家にいひけるは萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らはその先祖
 一一 ヨナダブの命に遵ひその凡の誠を守り彼が汝らに命ぜしことを行ふ。是によりて萬軍のエホバ、イスラエルの
 一二 神かくいひたまふレカブの子ヨナダブには我前に立つ人いつまでも飲ることあらじ

第三章六章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にこの言エホバよりエレミヤに臨みていふ。汝巻物をと
 二 り我汝に語りし日即ちヨシヤの日より今日に至るまでイスラエルとユダと萬國とにつきてわが汝に
 三 語りしすべての言を之に録せ。ユダの家わが降さんと擬るところの災をききて各自その惡き途をはなれて轉る
 四 こともあらん然ばわれ其愆とその罪を赦すべし

五 是に於てエレミヤ、ネリヤの子バルクを召べりバルクすなはちエレミヤの口にしたがひエホバの彼に告た
 六 まひし言をことごとく巻物に録せり。エレミヤ、バルクに云けるはわれは禁錮られたればエホバの室に往くこ
 七 とを得ず。故に汝ゆきて汝が私の口にしたがひて巻物に録したるエホバの言をよみ斷食の日にエホバの室に於

民の耳にこれを聴しめよまた之を讀みてユダの人々のその邑々より來れる者の耳に聴しむべし 彼らエホバの前にその祈禱を獻り各自其惡き途をはなれて轉ることもあらんエホバの此民につきてのべたまひし怒と憤は大なり 斯てネリヤの子バルクは凡て預言者エレミヤが己に命ぜしごとくエホバの室にてその卷物よりエホバの言を讀り

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月エルサレムの諸の民およびユダの諸邑よりエルサレムに來れる諸の民にエホバの前に斷食を行ふべきこと宣示さる バルク、エホバの室の上庭に於てエホバの室の新しき門の入口の旁にあるシャバンの子なる書記ゲマリヤの房にてその書よりエレミヤの言を民に讀ませたり

シャバンの子なるゲマリヤの子ミカヤその書のエホバの言を盡くきして 王の宮にある書記の房にくだりいたるに諸の牧伯等即ち書記エリシヤマ、シマヤの子デラヤ、アカホルの子エルナタン、シャバンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよび諸の牧伯等そこに坐せり ミカヤ、バルクが書を讀て民の耳に聴せしときに己が聴し所のすべての言を彼らに告げれば 牧伯等クシの子シレミヤの子なるネタニヤの子エホデをバルクに遣していはせけるは汝が民に讀みかせしその卷物を手に取て來れとネリヤの子バルクすなはち手に卷物を取りて彼らの許にきたりたれば 彼らバルクにいひけるは請ふ坐して心を我らに讀みかせよとバルクすなはち彼らに讀聞せたり 彼らその諸の言をきいて俱に懼れバルクにいひけるは我ら必ずこの諸の言を王に告んと またバルクに問ていひけるは請ふ汝いかにこの諸の言をかれの口にしがひて錄せしや我らに告よ バルク答へけるは彼その口をもてこの諸の言を我に述べたればわれ墨をもて之を書に錄せり 牧伯等バルクにいひけるは汝ゆきてエレミヤとともに身を匿し在所を人に知しむべからずと

すなはち卷物を書記エリシヤマの房に置きて庭にいり王に詣りてこの諸の言を王につげければ 王その卷物を持來らせんとてエホデを遣せりエホデすなはち書記エリシヤマの房より卷物を取來りて之を王と王の側に立るすべての牧伯等に讀みきかせたり 時は九月にして王冬の室に坐せり其前に火の燃る爐あり エホデ三枚か四枚を讀けるとき王小刀をもてその卷物を切割き爐の火に投入れて之を盡く爐の火に焚り 王とその臣僕等はこの諸の言をきけども懼れず亦その衣を裂ざりき エルナタン、デラヤ、ゲマリヤ等王にその卷物を焚たまふ勿れと求めたれども聽ざりき 王ハンメレクの子エラメルとアヅリエルの子セラヤとアブデルの子シレミヤに書記バルクと預言者エレミヤを執へよと命ぜしがエホバかれらを匿したまへり

王卷物およびバルクがエレミヤの口にしがひて記せし言を焚しのうちエホバの言エレミヤに臨みていふ 汝また他の卷物をとリユダの王エホヤキムが焚しところの前の卷物の中の言をことごとく其に錄せ 汝またユダの王エホヤキムに告よエホバかくいふ汝かの卷物を焚ていへり汝何なれば此卷物に錄してバビロンの王必ず來りてこの地を滅し此に人と畜を絶さんと云しやと この故にエホバ、ユダの王エホヤキムにつきてかくいひ給ふ彼にはダビデの位に坐する者無にいたらん且かれの屍は棄られて晝は熱氣にあひ夜は寒氣にあはん 我また彼とその子孫とその臣僕等とその惡のために罰せんまた彼らとエルサレムの民とユダの人々には我わが彼らにつきて語りしかども彼らが聽ことをせざりし所の禍を降すべし 是に於てエレミヤ他の卷物を取てネリヤの子書記バルクにあたふバルクすなはちユダの王エホヤキムが火に焚たるところの書の諸の言をエレミヤの口にしがひて之に録し外にまた斯る言を多く之に加へたり

第三十七章

ヨシヤの子ゼデキヤ、エホヤキムの子コニヤに代りて王となるバビロンの王ネブカデネザル彼を示したまひし言を聽ざりき 彼もその臣僕等もその地の人々もエホバが預言者エレミヤによりて

ゼデキヤ王シレミヤの子ユカルとマアセヤの子祭司ゼバニヤを預言者エレミヤに遣して請ふ汝我らの爲に我らの神エホバに祈れといはしむ エレミヤは民の中に入らせりそはいまだ獄に入られざればなり 巴ロの

軍勢のエジプトより来りしかばエルサレムを攻圍みたるカルデヤ人は其音信をききてエルサレムを退けり
 時にエホバの言預言者エレミヤにのぞみていふ イスラエルの神エホバかくいふ汝らを遣して我に求め
 シユダの王にかくいへ汝らを救はんとして出きたりしバロの軍勢はおのれの地エジプトへ歸らん カルデヤ人再
 び来りてこの邑を攻て戦ひこれを取り火をもて焚べし エホバかくいふ汝らカルデヤ人は必ず我らをはなれて
 去んといひて自ら欺く勿れ彼らは去ざるべし 設令汝らおのれを攻て戦ふところのカルデヤ人の軍勢を悉く
 撃ちやぶりてその中に負傷人のみを遺すとも彼らはおのの其幕屋に起ちあがり火をもて此邑を焚かん
 茲にカルデヤ人の軍勢バロの軍勢を懼れてエルサレムを退きければ エレミヤ、ベニヤミンの地にゆき
 彼處にて其分を民の中に分ち取らんとてエルサレムをいでんとせしが ベニヤミンの門にいりし時そこにハナ
 ニヤの子シレミヤの子なるイリヤと名くる門守を預言者エレミヤを執へて汝はカルデヤ人に降るなりといふ
 エレミヤいひけるは詐なり我はカルデヤ人に降るにあらずと然どイリヤこれを離すエレミヤを執へて侯伯等
 の許に引ゆけり 侯伯等すなはち怒りてエレミヤを捕ちこれを書記ヨナタンの室の獄にいれたり蓋この室を
 となしければなり
 エレミヤ獄にいり士卒に入てそこに多の日を送りしうち ゼデキヤ王人を遣して彼をひきいださしむ而
 して王室にて竊にかくれにいひけるはエホバより臨める言あるやとエレミヤ答へていひけるは有り汝はバビロン王
 の手に付されん エレミヤまたゼデキヤ王にいひけるは我汝あるひは汝の臣僕或はこの民に何なる罪を犯した
 れば汝ら我を獄にいれしや 汝らに預言してバビロンの王は汝らにも此地にも攻来らじといひし汝らの預言者
 はいま何處にあるや されば王わが君よ願くはいま我に聽たまへ請ふわが願望を受納れたまへ我を書記ヨナタ
 ンの家に歸らしめたまふなかれ恐くは我彼處に死なんと 是においてゼデキヤ王命じてエレミヤを獄の庭にい
 れしめ且邑のパンの悉く盡るまでパンを製る者の街より日々に一片のパンを彼に與へしむ即ちエレミヤは獄の
 庭にをる

第三十八章

マツタンの子シバチャ、バシユルの子グダリヤ、シレミヤの子ユカル、マルキヤの子バシユル、エ
 レミヤがすべての民に告たるその言を聞き 云くエホバかくいひたまふこの邑に留るものは剣と
 饑饉と疫病に死べし然どいでてカルデヤ人に降る者は生んすなはちその生命をおのれの掠取物となして生べし
 エホバかくいひたまふこの邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん彼之を取べしと 是をもてかの牧伯等
 王にいひけるは請ふこの人を殺したまへ彼はかくの如き言をのべて此邑に遺れる兵卒の手と民の手を弱くす夫人
 は民の安を求めずして其害を求むるなりと ゼデキヤ王いひけるは視よ彼は汝らの手にあり王は汝らに遺ふ
 こと能はざるなりと 彼らすなはちエレミヤを取て獄の庭にあるハンメレクの子マルキヤの隣に投いる即ち索
 をもてエレミヤを縫下せしがその隣は水なくして汚泥のみなりければエレミヤは汚泥のなかに沈めり
 王の室の寺人エテオピア人エベデメレク彼らがエレミヤを隣にないれしを聞き時に王ベニヤミンの門に
 坐しむたれば エベデメレク王の室よりいでゆきて王にいひけるは 王わが君よかの人々が預言者エレミヤ
 に行ひし事は皆好らず彼らこれを隣にない入たり邑の中に食物なければ彼はその居るところに餓死せん 王エ
 テオピア人エベデメレクに命じていひけるは汝こより三十人を携へて預言者エレミヤをその死ざる先に隣
 より曳あげよと エベデメレクすなはちその人々を携へて王の室の庫の下にいり其處より破れたる舊き衣の
 布片をとり索をもてこれを隣にをるエレミヤの所に縫下せり 而してエテオピア人エベデメレク、エレミヤに
 告て汝この破れたる舊き衣の布片を汝の腋の下にはさみて索に當よと云ければエレミヤ然なせり 彼らすなは
 ち索をもてエレミヤを隣より曳あげたりエレミヤは獄の庭にをる
 かくてゼデキヤ王人を遣して預言者エレミヤをエホバの室の第三の門につれたらしめ王エレミヤにいひ
 けるは我汝に問ことあり毫もわれに隠す勿れ エレミヤ、ゼデキヤにいひけるは我もし汝に示さば汝かならず

二六 我を殺さざらんや假令われ汝を勤むるとも汝われに聴じ 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

我を殺さざらんや假令われ汝を勤むるとも汝われに聴じ 二六
ゼデキヤ王密にエレミヤに誓ひていひけるは我らに
この靈魂を造りあたへしエホバは活く我汝を殺さず汝の生命を索むる者の手に汝を付さじ
二七
エレミヤ、ゼデキヤにいひけるは萬軍の神イスラエルの神エホバかくいひたまふ汝もしまことにバビロン
王の牧伯等に降らば汝の生命活んまた此邑は火にて焚れず汝と汝の家は火に焼くべし 然ど汝もし出てバビロ
ンの王の牧伯等に降らば此邑はカルデア人の手に付されん彼らは火をもて之を焚ん汝はその手を脱れざるべし
二八
ゼデキヤ王エレミヤに云けるは我カルデア人に降りしところのユダ人を恐る 恐くはカルデア人我をかれらの
手に付さん彼ら我を辱しめん 二九
エレミヤいひけるは彼らは汝を付さじ願くはわが汝に告しエホバの聲に聴した
がひたまへさらば汝祥をえん汝の生命いきん 然ど汝もし降ることを否まばエホバこの言を我に示し給ふ
三〇
すなはちユダの王の室に遺れる婦は皆バビロンの王の牧伯等の所に曳いだされん其婦等いはん汝の朋友等は
汝を誘ひて汝に勝り汝の足は泥に沈む彼らは退き去る 汝の妻たちと汝の子女等はカルデア人の所に曳出され
ん汝は其手を脱れじバビロンの王の手に執られん汝此邑をして火に焚しめん
三一
ゼデキヤ、エレミヤにいひけるは汝この事を人に知する勿れさらば汝殺されじ 三二
もし牧伯等わが汝と語
りしことを我儕に告げよ我らに隠す勿れ然ば我ら汝を殺さじ又王の汝に語りしことを告よといはじ 汝彼らに
答へて我王に求めて我をヨナタンの家に歸して彼處に死しむること勿れといへりといふべし かくて牧伯等
エレミヤにきたりて問けるに彼王の命ぜし言のごとく彼らに告たればその事露はれざりき是をもて彼ら彼とも
いふことを罷たり 三三
エレミヤはエルサレムの取る、日まで獄の庭に居りしがエルサレムの取れし時にも彼處に
をれり

第三十九章

ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロンの王ネブカデネザルその全軍をひきみエルサレムにきたりて之を攻圍みけるが 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

牧伯等即ちネルガルシヤレゼル、サムガルネボ 寺人の長サルセキム 博士の長ネルガルシヤンゼルおよびバビロ
ンの王の外の牧伯等皆ともに入て中の門に坐せり
一
ユダの王ゼデキヤおよび兵卒ども之を見て逃げ夜の中に王の國の途より兩の石垣の間の門より邑をいでて
アラバの途にゆきしが 二
カルデア人の軍勢これを追ひエリコの平地にてゼデキヤにおひつき之を執へてハマテ
の地リブラにをるバビロンの王ネブカデネザルの許に曳ゆきければ王かしこにて彼の罪をさだめたり 三
すなは
ちバビロンの王リブラにてゼデキヤの諸子をかれの目の前に殺せりバビロンの王またユダのすべての牧伯等を殺
せり 四
王またゼデキヤの目を抉さしめ彼をバビロンに曳ゆかんとて銅索に縛けり 五
またカルデア人火をもて
王の室と民の家を焼き且エルサレムの石垣を毀てり 六
かくて侍衛の長ネブザラダンは邑の中に餘れる民とおの
れに降りし者およびその外の遺れる民をバビロンに移せり 七
されど侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧しく
して所有なき者等をユダの地に遺し葡萄園と田地とをこれにあたへたり
八
二
爰にバビロンの王ネブカデネザル、エレミヤの事につきて侍衛の長ネブザラダンに命じていひけるは 九
我
を取りて善く待へよ寄をくはふる勿れ彼が汝に云ふごとくなすべしと 一〇
是をもて侍衛の長ネブザラダン寺人の
長ネブシヤス博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロンの王の牧伯等 一一
人を遣してエレミヤを獄の庭よ
りたづさへ來らしめシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤに付して之を家につれゆかしむ斯彼民の中に居る
一二
エレミヤ獄の庭に禁錮られをる時エホバの言彼にのぞみていふ 一三
汝ゆきてエテオピア人エベデメレクに
告よ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふわれ我語しところの禍を此邑に降さん禍はこれに降さじその日に
一四
の事なんちの目前にならん 一五
エホバいひたまふその日にはわれ汝を救はん汝はその長るところの人衆の手に
一六
付されじ 一七
われ必ず汝を救はん汝は劍をもて殺されじ汝の生命は汝の掠取物とならん汝われに倚頼めばなり
一八
とエホバいひたまふ

第四〇章

侍衛の長ネブザダンのバビロンにとらへ移さるゝエルサレムとユダの人々の中にエレミヤを
 鍵につなぎおきてこれを執へゆきけるが途にこれを放ちてラマを去しめたりその後エホバの言
 ミヤにのぞめり 茲に侍衛の長エレミヤを召てこれにいひけるは汝の神エホバ此處にこの災あらんことを言
 エホバこれを降しその云し如く行へり汝らエホバに罪を犯しその聲に聽したがはざりしによりてこの事汝らに
 來りしなり 視よ我今日汝の手の鍵を解て汝を放つ汝も我とともにバビロンにゆくことを善とせば來れわれ
 汝を善くあしらはん汝も我と偕にバビロンにゆくを惡とせば留れ視よこの地は皆汝の前に在り汝の善とする所
 なんちの心に合ふところに往べし エレミヤいまだ答へざるに彼またいひけるは汝バビロンの王がユダの諸
 の上にたてて有司となせしシヤバンの子アヒカムの子なるゲダリヤの許に歸り彼とともに民の中に居れ或は汝の
 善とおもふところにゆくべしと侍衛の長に食糧と禮物をとらせて去しめたり エレミヤすなはちミヅバに往
 きてアヒカムの子ゲダリヤに詣りその地に遺れる民のうちに彼と偕にをる

茲に田舎にある軍勢の長等および彼らに屬する人々バビロンの王がアヒカムの子ゲダリヤを立てこの地の
 有司となし男女嬰孩および國の中のバビロンに移されざる貧者を彼にあづけたることをきしかば 即ち
 ネタニヤの子イシマエルとカレヤの子ヨハナンとヨナタンおよびタンホメテの子セラヤとネトバ人なるエバイの
 諸子と或マアカ人の子ヤザニヤおよび彼らに屬する人々ミヅバにゆきてゲダリヤの許にいたる シヤバンの子
 アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに屬する人々に誓ひていひけるは汝らカルデア人に事することを怖るゝ勿れ
 この地に住てバビロンの王に事へば汝ら幸福ならん 我はミヅバに居り我らに來らん所のカルデア人に事へ
 ん汝らは葡萄酒と果物と油とをあつめて之を器に蓄へ汝らが獲る所の諸邑に住めと 又モアブとアンモン人の
 中およびエドムと諸の邦にをる所のユダヤ人はバビロンの王がユダに人を遣したるとシヤバンの子アヒカムの
 子なるゲダリヤを立てこれが有司となしたることを聞き 是においてそのユダヤ人皆その追やられし諸の處

よりかへりてユダの地のミヅバに來りゲダリヤに詣り而して多の葡萄酒と果物をあつむ

父カレヤの子ヨハナンおよび田舎にをりし軍勢の長たちミヅバにきたりてゲダリヤの許にいたり 彼に
 いひけるは汝アンモン人の王バリスが汝を殺さんとてネタニヤの子イシマエルを遣せしを知るやと然どアヒカ
 ムの子ゲダリヤこれを信ぜざりしかば カレヤの子ヨハナン、ミヅバにて密にゲダリヤに語りて言けるは請ふ
 われゆきて人知すにネタニヤの子イシマエルを殺さんいかで彼汝を殺し汝に集れるユダ人を散しユダの遺れる者
 を滅すべけんやと 然るにアヒカムの子ゲダリヤ、カレヤの子ヨハナンにいひけるは汝この事をなすべからず
 汝イシマエルにつきて偽をいふなり

第四一章

七月ごろ王の血統なるエリシヤマの子ネタニヤの子イシマエル王の十人の牧伯等とともにミヅバ
 にゆきてアヒカムの子ゲダリヤにいたりミヅバにて偕に食をなせしが ネタニヤの子イシマエル
 および偕にをりし十人の者起上りバビロンの王がこの地の有司となせしシヤバンの子アヒカムの子なるゲダリヤ
 を刀にて殺せり イシマエルまたミヅバにゲダリヤと偕にをりし諸のユダヤ人と彼處にをりしカルデア人の
 兵卒を殺したり

彼がゲダリヤを殺してより二日の後いまだ誰も之を知ざりし時 ある人八十人その鬚を薙り衣を裂き身
 に傷つけ手に素祭の物と香を携へてシケム、シロ、サマリヤよりきたりてエホバの室にいたらんとせしかば ネ
 タニヤの子イシマエル、ミヅバよりいでて哭きつゝ行て彼らを迎へ彼等に逃てアヒカムの子ゲダリヤの許に來れ
 といへり 而して彼ら邑の中に入しときネタニヤの子イシマエル已と偕にある人々とともに彼らを殺してその
 屍を阱に投げられたり 但しその中の十人イシマエルにむかひ我らは田地に小麦製麥油および蜜を藏し有り
 我らをころすなかれと言たれば彼らをその兄弟と偕に殺さずして已ぬ イシマエルがゲダリヤの名をもて殺せ
 し人々の屍を投入し阱はアサ王がイスラエルの王バアシャを怖れて鑿し阱なりネタニヤの子イシマエルその

殺せし人々を之に充せり。イシマエルはミヅバに遣りて諸の民即ち王の諸女と侍衛の長ネブザラダンがアヒカムの子グダリヤに交付しところのミヅバに遣れる諸の民とを據にせり。ネタニヤの子イシマエルすなはち彼らを據にしアンモン人に往んとて去れり。

二 カレヤの子ヨハナンおよび彼と在る軍勢の長たちネタニヤの子イシマエルの爲し諸の悪事を聞ければ、その衆卒を率てネタニヤの子イシマエルと戦はんとて出でギベオン池の旁にて彼に遇ふ。イシマエルと借に在る人々はカレヤの子ヨハナンおよび彼とともに在る軍勢の長たちを見て欣べり。是をもてイシマエルがミヅバより據へきたりし所の人々身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンの許にゆけり。ネタニヤの子イシマエルは八人の者と借にヨハナンを避け逃てアンモン人に往り。カレヤの子ヨハナンおよび彼とともに在る軍勢の長等はネタニヤの子イシマエルがアヒカムの子グダリヤを殺してミヅバより據へゆけるところの彼遣れる民すなはち兵卒婦人兒女寺人等を其手より取りかへして之をギベオンより携かへりしが、進てエジプトにいたらんとてベツレヘムの近傍にあるキムハムの住處に往て留れり。これはネタニヤの子イシマエルがバビロンの王の此地の有司となしたるアヒカムの子グダリヤを殺せしによりカルヂヤ人を懼たればなり。

第四章

茲に軍勢の長たちおよびカレヤの子ヨハナンとホシャヤの子エザニヤ並に民の至微者より至大者にいたるまで、皆預言者エレミヤの許に來りて言けるは、汝の前に我らの求の受納られんことを願ふ。請ふ我ら遣れる者の爲に汝の神エホバに祈れ。今汝の目に見がごとく我らは衆多の中の遣れる者にして寡なり。さらば汝の神エホバ我らの行むべき途となすべき事を示したまはん。預言者エレミヤ彼らに云けるは、我汝らに聽り汝らの言に循ひて汝らの神エホバに祈らん。凡そエホバが汝らに應へたまふことはわれ豫す所なく汝らに告べし。彼らエレミヤにいひけるは、願くはエホバ我儕の間にありて眞實なる信すべき證者となりたまへ。我らは汝の神エホバの汝を遣して我らに告しめたまふ諸の事に遵ひて行ふべし。我らは善にまれ惡にまれ

我らが汝を遣すところの我らの神エホバの聲に遵はん。斯我らの神エホバの聲に遵ひてわれら、福をうけん。

十日の後エホバの言エレミヤにのぞみしかば、エレミヤ、カレヤの子ヨハナンおよび彼と借に在る軍勢の長たち並に民の至微者より至大者までを悉く招きて、これにいひけるは、汝らが我を遣して汝らの祈を獻げしめしところのイシマエルの神エホバかくいひ給ふ。汝らもし信に此地に留らばわれ汝らを建てて倒さず。汝らを植て拔じそは我汝らに災を降せしを悔ればなり。エホバいひたまふ汝らが長るゝ所のバビロンの王を長るゝ勿れ彼をおそるゝ勿れわれ汝らとともにありて汝らを救ひ彼の手より汝らを拯ふべし。われ汝らを恤みまた彼をして汝らを恤ませ汝らを故土に歸らしめん。然ど汝らもし我らはこの地に留らじ汝らの神エホバの聲に遵はじと言ひ、また然りわれらのはかの戦争を見ず、籬の壁をきかず食物に乏しからざるエジプトの地にいたりて彼處に住はんといはば、汝らユダの遣れる者よエホバの言をきけ。萬軍のエホバ、イシマエルの神かくいひたまふ。汝らもし強てエジプトにゆきて彼處に住はば、汝らが懼るゝところの劍エジプトの地に於て汝らに臨み汝らが恐るゝところの饑饉エジプトにて汝らにおよばん而して汝らは彼處に死べし。凡そエジプトにおもむき至りて彼處に住はんとする人々は劍と饑饉と疫病に死べし。その中には我彼らに降さんところの災を脱れて遣る者無るべし。

萬軍のエホバ、イシマエルの神かくいひたまふ我震怒と憤恨のエルサレムに在る者に注ぎし如くわが憤恨が汝らにエジプトにいらん時に汝らに注がん。汝らは呪詛となり詭異となり罵詈雑言となり。汝らは再びこの處を見ざるべしと。ユダの遣れる者よエホバ、汝らにつきていひたまへり。汝らエジプトにゆく勿れと汝ら今日わが汝らを警めしことを確に知れ。汝ら我を汝らの神エホバに遣して言へり。我らの爲に我らの神エホバに祈り我らの神エホバの汝に示したまふ事をことごとく我らに告よ。我ら之行はんと斯なんちら自ら欺けり。われ今日汝らに告たれど汝らは汝らの神エホバの聲に遵はず。汝らはエホバが我を遣して命ぜしめたまひし事には都て遵は

ざりき 然ば汝らはその往て住んとねがふ處にて剣と饑饉と疫病に死ることを今確に知るべし

第四章

一 エレミヤの言を宣をはりし時 二 ホシャヤの子アザリヤ、カレヤの子ヨハナンおよび屬する人皆エレミヤに語りていひけるは汝は誠をいふ我らの神エホバはエジプトにゆきて彼處に住む勿れと汝をつかはして云せたまはざるなり 三 ネリヤの子バルク汝を唆して我らに逆はしむ是我らをカルヂヤ人の手に付して殺さしめバビロンに移さしめん爲なり 四 斯カレヤの子ヨハナンと軍勢の長等および民皆エホバの聲に逆はすしてユダの地に住ことをせざりき 五 斯てカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等はユダに遣れる者即ちその逐やられし國々よりユダの地に住んとて販りし者 六 男女嬰孩王の女たちおよび凡て侍衛の長ネブザラダンがシャパンの子なるアヒカムの子グダリヤに付し置し者並に預言者エレミヤとネリヤの子バルクを取て 七 エジプトの地に至れり彼ら斯エホバの聲に逆はざりき而して遂にタバネスに至れり

八 エホバの言タバネスにてエレミヤに臨みていふ 九 汝大なる石を手に取りユダの人々の目の前にてこれをタバネスに在るバロの室の入口の旁なる確密の泥土の中に藏して 一〇 彼らにいへ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ使者を遣してわが僕なるバビロンの王ネブカデネザルを召きその位をこの藏したる石の上に置しめん彼鐘鏑をその上に敷べし 一一 かれ來りてエジプトの地を擊ち死に定まれる者を死しめ虜に定まれる者を虜にし劍に定まれる者を劍にかけん 一二 われエジプトの諸神の室に火を燃さんネブカデネザル之を焚きかれらを虜にせん而して羊を牧ふ者のその身に衣を纏ふがごとくエジプトの地をその身に纏はん彼安然に其處をさるべし 一三 彼はエジプトの地のベテシメシの偶像を毀ち火をもてエジプト人の諸神の室を焚べし

第四章

一 エジプトの地に住るところのユダの人衆すなはちミグドル、タバネス、ノフ、パテロスに居る者之事につきてエレミヤに臨みし言に曰く 二 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝らはい

エルサレムとユダの諸邑に降せしところの災をみたり視よこれらは今日すでに空曠となりて住む人なし 三 是彼ら惡をなして我を怒らせしによる即ちかれらは己も汝らも汝らの先祖等も識ざるところの他の神にゆきて香を焚き且これに奉へたり 四 われ我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣して請ふ汝らわが嫌ふところの此憎むべき事を行ふ勿れといはせけるに 五 彼ら聽かず耳を傾けず他の神に香を焚きてその惡を離れざりし 六 是によりて我靈怒とわが憤恨ユダの諸邑とエルサレムの街にそゞぎて之を焚たれば其等は今日のごとく荒れかつ傾圮たり 七 萬軍の神イスラエルの神エホバいまかくいふ汝ら何なれば大なる惡をなして己の靈魂を害しユダの中より汝らの男と女と孩童と乳哺子を絶て一人も遺らざらしめんとするや 八 何なれば汝ら其手の行爲をもて我を怒らせ汝らが往て住ふところのエジプトの地に於て他の神に香を焚きて己の身を滅し地の萬國の中に呪詛となり凌辱とならんとするや 九 ユダの地とエルサレムの街にて行ひし汝らの先祖等の惡ユダの王等の惡其妻等の惡および汝らの身の惡汝らの妻等の惡を汝ら忘れしや 一〇 彼らは今日にいたるまで悔いすまた畏れず汝らと汝らの先祖等の前に立たる我律法とわが典例に循ひて行まさざるなり 一一 是故に萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれ面を汝らにむけて災を降しユダの人衆を悉く絶ん 一二 又われエジプトの地にすまんとてその面をこれにむけて往しところの彼ユダの遣れる者を取らん彼らは皆滅されてエジプトの地に仆れん彼らは劍と饑饉に滅され微者も大者も劍と饑饉によりて死べし而して呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん 一三 われエルサレムを罰せし如く劍と饑饉と疫病をもてエジプトに住る者を罰すべし 一四 是をもてエジプトの地に往て彼處に住るところのユダの遣れる者の中に一人も逃れまたは遺りてその心にしたひて歸り住はんとながふところのユダの地に歸るもの無るべし逃るゝ者の外には歸る者無るべし 一五 是に於てその妻が香を他の神に焚しことを知れる人々および其處に立てる婦人等の大なる群衆並にエジプトの地のパテロスに住るところの民エレミヤに答へて云けるは 一六 汝がエホバの名をもてわれらに述し言は我ら

二七 聽かじ 我らは必ず我らの口より出る言を行ひ我らが素なせし如く香を天后に焚きまた酒をその前に灌ぐべし
 二八 即ちユダの諸邑とエルサレムの街にて我らと我らの先祖等および我らの王等と我らの牧伯等の行ひし如くせん
 二九 當時われらは糧に飽き福をえて災に遇ざりし 我ら天后に香を焚くことを止め酒をその前に灌がすなりし時
 三〇 より諸の物に乏しくなり劍と饑饉に滅されたり 我らが天后に香を焚き酒をその前に灌ぐに方りて之に歎りて
 三二 パンを製り酒を灌ぎしは我らの夫等の許せし事にあらずや

三三 エレミヤ即ち男女の諸の人衆および此言をもて答へたる諸の民にいひけるは ユダの諸邑とエルサレ
 三四 ムの街にて汝らと汝らの先祖等および汝等の王等と汝らの牧伯等および其地の民の香を焚くことはエホバ之を憶
 三五 えまた心に思ひたまふにあらずや エホバは汝らの惡き爲のため汝らの憎むべき行の爲に再び忍ぶことをえ
 三六 せざりきこの故に汝らの地は今日のごとく荒地となり詫異となり呪詛となり住む人なき地となれり 汝ら香を
 三七 焚きエホバに罪を犯しエホバの聲に聽したがはずその律法と憲法と証詞に循ひて行まさりしに由て今日のごとく
 三九 此災汝らにおよべり

四〇 エレミヤまたすべての民と婦等にいひけるはエジプトの地に居るユダの子孫よエホバの言をきけ 萬軍
 四一 のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らと汝らの妻等は口をもていひ手をもて成し我ら香を天后に焚き酒
 四二 を灌ぎて立しところの誓を必ず成就んといふ汝ら必ず誓をたてかならず其誓を成就んとす この故にエジプト
 四三 の地に住るユダの人々よエホバの言をきけエホバいひたまふわれ我大なる名を擧て誓ふエジプトの全地にユダの
 四四 人々一人もその口におほいし言をきけといひて再び我名を擧ることなきにいたらん 我らわれ彼ららうかどは
 四五 ん是をあたふる爲にあらず福をくださん爲なりエジプトの地に居るユダの人々は劍と饑饉に滅びて居るに
 四六 いたらん 然ど劍を逃るゝ僅少の者はエジプトの地を出てユダの地に歸らん又エジプトの地にゆきて彼處に
 四七 寄寓れるユダの遺れる者はその立どころの言は我のなるか彼らのなるかを知るにいたるべし エホバいひ給ふ

わがこの處にて汝らを罰する兆は是なり我かくして我汝らに禍をくださんといひし言の必ず立ことを知しめん
 四八 すなはちエホバかくいひたまふ視よわれユダの王ゼデキヤを其生命を棄むる敵なるバビロンの王ネブカデネ
 四九 ザルの手に付せしが如くエジプトの王パロホフラを其敵の手にその生命を棄むる者の手に付さん

第五十章 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年ネリヤの子バルクが其等の言をエレミヤの口にし給ひて
 五二 書に録せしとき預言者エレミヤこれに語りていひけるは バルクよイスラエルの神エホバ汝にか
 五三 くいひ給ふ 汝會ていへり嗚呼我は禍なるかなエホバ我憂に 悲を加へたまへり我は歎きて寝れ安きをえずと
 五四 汝かく彼に語れエホバかくいひたまふ視よわれ我建しところの者を毀ち我植しところの者を拔ん是の全地な
 五五 り 汝己れの爲に大なる事を求むるかこれを求むる勿れ視よわれ災をすべての民に降さん然ど汝の生命は我
 五六 汝のゆかん諸の處にて汝の掠物とならしめんとエホバいひたまふ

第四十六章 茲にエホバの言預言者エレミヤに臨みて諸國の事を論ふ
 六二 先エジプトの事すなはちユフラテ河の邊なるカルケミシの近傍に在るところのエジプト王パロネコ
 六三 の軍勢の事を論ふ是はユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にバビロンの王ネブカデネザルが撃やぶりし者なり
 六四 其言にいはいはく

六五 汝ら大楯小干を備へて進み戦へ 馬を車に繋ぎ馬に乗り盔を被りて立て戈を磨き甲を著よ われ見る
 六六 に彼らは懼れて退きその勇士は打敗られ狼狽遁て後をかへりみずは何故ぞや畏懼かれらのまはりにはありとエホバ
 六七 いひたまふ 快足なる者も逃えず強者も遁れえず皆北の方にてユフラテ河の旁に蹶き仆れん かのナイルの
 六八 ごとくに湧あがり河のごとくに其水さかまく者は誰ぞや エジプトはナイルの如くに湧あがりその水は河の如
 六九 くに逆まくなり而していふ我上りて地を蔽ひ邑との中に住る者とを滅さん 汝等馬に乗り車を驅馳らせよ勇
 七〇 士よ盾を執るエチオピア人および弓を張り挽くルデ人よ進みいづべし 此は主なる萬軍のエホバの復仇

二一 日即ちその敵に仇を復し給ふ日なり劍は食ひて飽きその血に酔はん主なる萬軍のエホバ北の地にてユフラテ河の旁に宰ることをなし給へばなり 二二 處女よエジプトの女よギレアデに上りて乳香を取れ汝多の藥を用ふるも益なし汝は愈ざるべし 二三 汝の恥辱は國々にきこえん汝の號泣は地に満てり勇士は勇士にうち觸てともに仆る 二四 バビロンの王ネブカデネザルが來りてエジプトの地を撃んとする事につきてエホバの預言者エレミヤに告たまひし言

二五 汝らエジプトに宣べミグドルに示し又ノフ、タバネスに示しいふべし汝ら堅く立ちて自ら備よ劍なんぢの四周を食ひたればなり 二六 汝の力ある者いかにして拂ひ除かれしやその立ざるはエホバこれを仆したまふに由るなり 二七 彼多の者を駈かせたまふ人其友の上に仆れかさなり而していふ起よ我ら滅すところの劍を避てわが國にかへり故土にいたらんと 二八 人彼處に叫びてエジプトの王パロは滅されたり彼は機會を失へりといふ 二九 萬軍のエホバと名りたまふところの王いひたまふ我は活く彼は山々の中のタホルのごとく海の傍のカルメルのごとく來らん 三〇 エジプトに住る女よ汝移轉の器皿を備へよそはノフは荒蕪となり焼れて住む人なきにいたるべければなり 三一 エジプトは至美しき牝の犢のごとく蠶吐きたり北の方より來る 三二 また其中の備人は肥たる犢のごとし彼ら轉向てともに逃げ立ちことをせず是を滅さるゝ日いたり其罰せらるゝ時來りたればなり 三三 彼は蛇の如く聲をいだし彼ら軍勢を率ゐて來り樵夫の如く斧をもて之にのぞめり 三四 エホバいひ給ふ彼らは探りえざるに由りて彼の林を砍せり彼等は蝗蟲よりも多して敷へがたし 三五 エジプトの女は辱められ北の民の手に付されん 三六 萬軍のエホバ、イスラエルの神いひ給ふ視よわれノのアモンとパロとエジプトとその諸神とその王等すなはちパロとかれを頼むものとを罰せん 三七 われ彼らを其生命を索むる者の手とバビロンの王ネブカデネザルの手とその臣僕の手につすべしその後この地は昔のごとく人の住むところとならんとエホバいひたまふ 三八 我僕ヤコブよ怖るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ視よわれ汝を遠方より救ひきたり汝の子孫をその地に移され

二九 たる地より救ひとるべしヤコブは歸りて平安と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 三〇 エホバいひたまふ我僕ヤコブよ汝怖るゝ勿れ我汝と偕にあればなり我汝を逐やりし國々を悉く滅すべけれど汝をば悉くは滅さじわれ道をもて汝を懲し汝を全くは罪なき者とせざるべし

第七章

一 パロがガザを撃ざりし先にベリシテ人の事につきて預言者エレミヤに臨みしエホバの言 二 エホバかくいひたまふ視よ水北より起り溢れながれて此地と其中の諸の物とその邑と其中に住る者とに溢れかゝるべしその時人衆は叫びこの地に住る者は皆哭くべし 三 その逞しき馬の蹄の蹴たつる音のため其車の響のため其輪の轟のためには父は手弱りて己の子女を顧みざるなり 四 是ベリシテ人を滅しつくしツロとシドンにのこりて助力をなす者を悉く絶やす日來ればなりエホバ、カフトルの地に遺れるベリシテ人を滅したまふべし 五 ガザには髪を剃るの事はじまるアシケロンと其剩餘の平地は滅さる汝いつまで身に傷くるや 六 エホバの劍よ汝いつまで息まざるや汝の鞘に歸りて息み静れ 七 エホバこれに命じたるなればいかで息むことをえんやアシケロンと海邊を攻ることを定めたまへり

第八章

一 萬軍のエホバ、イスラエルの神モアブの事につきてかくいひたまふ嗚呼ネホは禍なるかな是滅されたりキリアタイムは辱められて取られミスガブは辱められて毀たる 二 モアブの榮譽は失さりぬヘシボンにて人衆モアブの害を謀り去來之を絶ちて國をなさざらしめんといふマデメンよ汝は滅されん劍汝を追はん 三 ホロナイムより號咷の聲きこゆ毀敗と大なる滅亡あり 四 モアブ滅されてその嬰孩等の號咷聞ゆ彼らは哭き哭きてルヒテの坂に登る敵はホロナイムの下り路にて滅亡の號咷をきけり 五 逃て汝らの生命を救へ曠野に棄られたる者の如くなれ 六 汝は汝の工作与財寶を頼むによりて汝も執へられん又ケモシは其祭司およびその牧伯等と偕に據へうつさるべし 七 殘害者諸の邑に來らん一の邑も免れざるべし谷は滅され平地は荒されんエホバのいひたまひしが如し 八 翼をモアブに予へて飛さらしむ其諸邑は荒て住者なからん 九 エホバの事を

行ふて怠る者は誼はれ又その剣をおさへて血を流さざる者は誼はる

二一 モアブはその幼時より安然にして酒の其滓のうへにとゞまりて此器よりの器に斟うつされざるが如くなりき彼擄うつされざりしに由て其味尙存ちその香氣變らざるなり 二二 エホバいひたまふ此故にわがこれを傾くる者を遣す日來らん彼らすなはち之を傾け其器を破くべし 二三 モアブはケモシのために羞をとらん是イスラエルの家がその恃めるところのベテルのために羞をとりしが如くなるべし 二四 汝ら何ぞ我らは勇士なり強き軍人なりといふや 二五 モアブはほろぼされその諸邑は騰りその選擇の壯者は下りて殺さる萬軍のエホバと名する王これをいひ給ふ 二六 モアブの滅亡近けりその禍速に來る 二七 凡そ其四周にある者よ彼ののために歎けその名を知る者よ強き華美しき杖いかにして折しやといへ 二八 デボンに住る女よ榮をはなれて下り燥ける地に坐せよモアブを敗る者汝にきたりて汝の城を滅さん 二九 アロエルに住る婦よ道の側にたちて聞ひ逃きたる者と説れいとる者に事いかんと問へ 三〇 モアブは敗られて羞をとる汝ら呼はり嘆びモアブは滅されたりとアルノンに告よ 三一 曠野平地に臨みホロン、ヤハズ、メバアテ、デボン、ネボ、ベテデブラタイム、キリヤタイム、ベテガムル、ベテメオン、ケリオテ、ボツラ、モアブの地の諸邑の遠き者にも近き者にも臨めり 三二 モアブの角は碎け其臂は折たりとエホバいひたまふ

三三 汝らモアブを醉はしめよ彼エホバにむかひて罵ればなりモアブは其吐たる物に轉びて笑柄とならん 三四 イスラエルは汝の笑柄にあらざりしや彼強人の中にありしや汝彼の事を語ることに首を擡たり 三五 モアブに住る者よ汝ら邑を離れて磐の間にすめ穴の口の側に巢を作る斑鳩の如くせよ 三六 われらモアブの驕傲をきけり其驕傲は甚し即ち其驕傲誇高驕誇およびその心の自ら高くするを聞り 三七 エホバいひたまふ我モアブの驕傲とその言の虚きとを知る彼らは偽を行ふなり 三八 この故に我モアブの爲に嘆びモアブの全地の爲に呼はるキルハレスの人々の爲に嘆歎あり 三九 シンマの葡萄の樹よわれヤゼルの哭泣にこえて汝の爲になげくべし汝の葉は海を臨

え延てヤゼルの海にまでいたる掠奪者來りて汝の果と葡萄をとらん 四〇 欣喜と歡樂園とモアブの地をはなれ去る我酒樽に酒無らしめん呼はりて葡萄を踐もの無るべし其喚呼は葡萄をふむ喚呼にあらざらん 四一 シンボンよりエレアレとヤハズにいたりゾアルよりホロナイムとエグララシリヤにいたるまで入聲を揚ぐそはユムリムの水までも絶たればなり 四二 エホバいひたまふ我祭物を康邱に獻げ香をその精神に焚くところの者をモアブの中に滅さんと

四三 この故に我心はモアブの爲に驚のごとく歎き我心はキルハレスの人衆のために驚のごとく歎く是其獲たるところの財うせたればなり 四四 人みなその髪を剃り皆その鬚をそり皆その手に傷け腰に麻布をまとはん 四五 モアブにては家蓋の上と街のうちに遍く悲哀ありそはわれ心に適ざる器のごとくにモアブを碎きたればなりとエホバいひたまふ 四六 嗚呼モアブはほろびたり彼らは嘆ぶ嗚呼モアブは羞て面を背けたりモアブはその四周の者の笑柄となり恐懼となれり 四七 エホバかくいひたまふ視よ敵黨のごとくに飛來りて翼をモアブのうへに舒ん 四八 ケリオテは取られ城はみな奪はるその日にはモアブの勇士の心子を産む婦のごとくなるべし 四九 モアブはエホバにむかひて傲りしゆゑに滅ぼされて再び國を成さるべし 五〇 エホバいひたまふモアブにすめる者よ恐怖と陷阱と罟なんちに随めり 五一 恐怖をさけて逃るものは陷阱におちいり陷阱より出るものは罟にとらへられん其はわれモアブにその罰をうくべき年をのぞましむればなりエホバこれをいふ

五二 遁逃者は力なくしてヘシボンの蔭に立つ是は火ヘシボンより出で火始シボンのうちより出てモアブの地および喧鬧をなす者の首の頂を焼ばなり 五三 嗚呼禍なるかなモアブよケモシの民は亡びたり即ち汝の諸子は擄へうつされ汝の女等は執へゆかれたり 五四 然と末の日に我モアブの擄移されたる者を返さんとエホバいひ給ふ此まではモアブの駒をいへる言なり

第四十章

五五 アンモン人の事につきてエホバかくいひたまふイスラエルに子なからんや嗣子なからんや何なれば彼らの王ガドを受嗣ぎ彼の民その邑々に住や 五六 エホバいひたまふ是故に視よわが戦闘の號呼を

アンモン人のラバに聞えしむる日いたらんラバは荒塚となりその女等は火に焚れんその時イスラエルはおのれの嗣者となりし者等の嗣者となるべしエホバこれをいひたまふ
 一八 へシボンよ咄べアイは滅びたりラバの女たちよ呼ばれ麻布を身にまとひ嗟て離のうちに走れマルカムとその祭司およびその牧伯等は借に擄へ移されたり
 一九 何なれば谷の事を誇るや背ける女よ汝の谷は流るゝなり汝財貨に倚頼みていふ誰か我に來らんやと
 二〇 萬軍のエホバいひたまふ視よ我畏懼を汝の四周の者より汝に來らしめん汝らおのおの逐れて直にすゝまん逃る者を集むる人無るべし
 二一 然と後にいたりてわれアンモン人の擄移されたる者を返さんとエホバいひたまふ
 二二 エドムの事につきて萬軍のエホバかくいひたまふテマンの中には智慧あることなきにいたりしや明哲者には謀略あらずなりしやその智慧は盡はてしや
 二三 デダンに住る者よ逃よ逃れよ深く窺れよ我ニサウの滅亡をかれの上のぞませ彼を罰する時をきたらしむべし
 二四 葡萄を飲むる者もし汝に來らば少許の果をも餘さざらんもし夜間盗人きたらばその飽まで滅さん
 二五 われニサウを裸にし又その隱處を露にせん彼は身を匿すことをえざるべしその裔も兄弟も隣舍も滅されん而して彼は在すなるべし
 二六 汝の孤子を遣せわれ之を生存へしめん汝の裔は我に倚頼むべし
 二七 エホバかくいひ給ふ視よ杯を飲べきにあらざる者もこれを飲ざるをえざるなれば汝まつた罰を免るゝことをえんや汝は罰を免れし汝これを飲ざるべからず
 二八 エホバいひたまふ我おのれを指して誓ふボヅラは詫異となり羞辱となり荒地となり呪詛とならんその諸邑は永く荒地となるべし
 二九 われエホバより音信をきけり使者遣されて萬國にいたり汝ら集りて彼に攻めきたり起て戦へよといへり
 三〇 視よわれ汝を萬國の中に小者となし人々の中に藐めらるゝ者となせり
 三一 磐の隠場にすみ山の高處を占る者よ汝の恐ろしき事と汝の心の驕傲汝を欺けり汝厥のごとくに巢を高き處に作りたれどもわれ其處より汝を取り下さんとエホバいひたまふ
 三二 エドムは詫異とならん凡そ其處を過る者は驚きその災害のために笑ふべし
 三三 エホバいひたまふソドムとゴモラとその隣の邑々の滅しがごとく其處に住む人なく其處に住る人の子なかるべし

視よ敵獅子のヨルダンの藪より上るがごとく堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼を其處より逐奔らせわが選みたる者その上に立てん誰か我のごとき者あらん誰か我爲に時期を定めんや孰の牧者か我前にたつことをえん
 一 さればエドムにつきてエホバの謀りたまひし御謀とテマンに住る者につきて思ひたまひし思をきけ驕の弱者はかならず曳ゆかれん彼かならずかれらの住居を滅すべし
 二 その傾圮の響によりて地は震ふ號咷ありその聲紅海にきこゆ
 三 みよ彼處のごとくに上り飛びその翼をボヅラの上に舒べんその日エドムの勇士の心は子を産む婦の心の如くならん
 四 ダマスコの事ハマテとアルバデは羞づそは凶き音信をきけばなり彼らは心を喪へり海の上に恐懼あり安き者なし
 五 ダマスコは弱り身をめぐらして逃んとす恐懼これに及び憂愁と痛劬子を産む婦にあるごとくこれにおよぶ
 六 頌美ある邑我欣ぶところの邑を何なれば棄さらざるや
 七 さればその日に壯者は御に侍れ兵卒は悉く滅されんと萬軍のエホバいひたまふ
 八 われ火をダマスコの石垣の上に燃しベネハダデの殿舎をことごとく焚くべし
 九 バビロンの王ネブカデネザルが攻め撃たるケダルとハヅルの諸國の事につきて
 一〇 エホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ
 一一 その幕屋とその羊の群は彼等これを取りその幕とその諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひとらん人これに向ひ憎懼四方にありと呼るべし
 一二 エホバいひたまふハヅルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居れバビロンの王ネブカデネザル汝らをせむる謀略を運らし汝らをせむる術計を設けたればなり
 一三 エホバいひ給ふ汝ら起て穩なる安かに住める民の所に攻め上れ彼らは門もなく關もなくして獨り居ふなり
 一四 その駱駝は擄掠とせられその多の畜は奪はれん我かの毛の角を剪る者を四方に散しその滅亡を八方より來せんとエホバいひたまふ
 一五 ハヅルは山犬の窟となり何までも荒蕪となりをらん彼處に住む人なく彼處に住る人の子なかるべし

ユダの王ゼデキヤが位に即し初のころエホバの言預言者エレミヤに臨みてエラムの事をいふ 萬軍のエホバかくいひたまふ視よわれエラムが權能として頼むところの弓を折らん われ天の四方より四方の風をエラムに來らせ彼らを四方の風に散さんエラムより追出さるゝ者のいたらざる國はなかるべし エホバいひたまふわれエラムをしてその敵の前とその生命を索むるもの前に懼れしめん我災をくだし我烈しき怒をその上にいたらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし われ我位をエラムに居る王と牧伯等を其處より滅したゝんとエホバいひたまふ 然ど末の日にいたりてわれエラムの擄移されたる者を返すべしとエホバいひたまふ

第五〇章

エホバ預言者エレミヤによりてバビロンとカルデア人の地のことを語りたまひし言

汝ら國々の中に告げたまふ宣示せ盡を樹上隠すことなく宣示して言へバビロンは取られべしは辱められメロダクは碎かれ其像は辱められ其木像は碎かると 是は北の方より一の國人きたりて之を攻めその地を荒して其處に住む者無らしむればなり人も畜も皆逃去れり エホバいひたまふその日その時イスラエルの子孫かへり來らん彼らと偕にユダの子孫かへり來るべし彼らは哭きつゝ行てその神エホバに請求むべし 彼ら面をシオンに向てその路を問ひ來れ我らは永遠わするゝことなき契約をもてエホバにつらならんといふべし 我民は迷へる羊の群なりその牧者之をいさなひて山にふみ迷はしめられたれば山より岡とゆきめぐりて其休息所を忘れたり 之に遇ふもの皆之を食ふその敵いへり我らは罪なし彼らエホバなはち義きの在所その先祖の望みしところなるエホバに罪を犯したるなり 汝らバビロンのうちより逃よカルデア人の地より出よ群の前にゆくところの牡山羊のごとくせよ 視よわれ大なる國々より人を起しあつめて北の地よりバビロンに攻め來らしめん彼ら之にむかひて備をたてん是すなはち取るべし彼らの矢は空しく返らざる狡き勇士の矢のごとくなるべし 〇カルデア人は人に掠められん之を掠むる者は皆飽ことをえんとエホバ曰たまふ

我産業を掠る者よ汝らは喜び樂み穀物を破す積のごとくに躍り牡馬のごとく嘶けども 汝らの母は痛く辱められん汝らを生しものは恥べし視よ國々の中の終末の者荒野となり燥ける地となり沙漠とならん エホバの怒りの爲に之に住む者なくして 悉く荒地となるべしバビロンを通る者は皆その 驢に驚き且嘯はん 凡そ弓を張る者よバビロンの四周に備をなして攻め矢を惜まらずして之を射よそは彼エホバに罪を犯したればなり 〇その四周に喊き叫びて攻めかゝれ是手を伸ぶその城は倒れその石垣は崩る是エホバ仇を復したまふなり汝らこれに仇を復せ是の行ひしごとく是に行へ 播種者および種收時に鎌を執る者をバビロンに絶せその滅すところの劍を怖れて人おのおの其民に歸り各その故土に逃べし

イスラエルは散されたる羊にして獅子之を追ふ初にアツスリヤの王之を食ひ後にこのバビロンの王ネブカデネザルその骨を碎けり 〇この故に萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれアツスリヤの王を罰せしごとくバビロンの王とその地を罰せん われイスラエルを再びその牧場に歸さん彼カルメルとベシヤンの上に草をくらはんまたエフライムとギレアデの山にてその心を飽すべし 〇エホバいひたまふ其日その時にはイスラエルの怒を尋るも有らず又ユダの罪を尋るも遇しそはわれ我存せしところの者を赦すべければなり

エホバいひたまふ汝ら上りて悖れる國罰を受べき民を攻めその後より之を荒し全くこれを滅せ我汝らに命ぜしごとく行ふべし 〇その地に戰闘の味と大なる敗壞あり 嗚呼全地を摧きし錘折れ碎くるかな嗚呼バビロン國々の中に荒地となるかな 〇バビロンよわれ汝をとるために器を置けり汝は擄へらるれども知す汝エホバに敵せしにより辱られて獲へらるゝなり 〇エホバ庫を啓きてその怒りの武器をいたしたまふ是主なる萬軍のエホバ、カルデア人の地に事をなさんとしたまへばなり 汝ら終の者にいたるまで來りてこれを攻めその庫を啓き之を積て塵煙のごとくせよ 盡くこれを滅して其處に遺る者なからしめよ 〇その牡牛を悉く殺せこれを屠場にくだらしめよ其等は 綱なるかな其日その罰を受べき時來れり 〇バビロンの地より逃げて遁來し者の聲

ありて我らの神エホバの仇復その殿の仇復をシオンに宣ふ

射者をバビロンに召集めよ凡そ弓を張る者よその四周に陣どりて之を攻め何人をも逃す勿れその作爲に
循ひて之に報いそのすべて行ひし如くこれに行へそは彼イスラエルの聖者なるエホバにむかひて驕りたればな
り 是故にその日壯者は獨に踏れその兵卒は悉く絶されんとエホバいひたまふ 主なる萬軍のエホバいひ
たまふ驕傲者よ視よわれ汝の敵となる汝の日わが汝を罰する時きたれり 驕傲者は驕きて仆れん之を扶け起す
者なかるべしわれ火をその諸邑に燃しその四周の者を燒盡さん

萬軍のエホバかくいひたまふイスラエルの民とユダの民は借に辱げらる彼らを擄にせし者は皆固くこれを
守りて釋たざるなり 彼らを贖ふ者は強しその名は萬軍のエホバなり彼必ずその訴を理してこの地に安を興
へバビロンに住る者を戰慄しめたまはん エホバいひたまふカルデア人の上バビロンに住る者の上およびその
牧伯等とその智者等の上に劍あり 劍傷る者の上にあり彼ら愚なる者とならん劍その勇士の上にあり彼ら懼
れん 劍その馬の上に入り其車の上に入り又その中にあるすべての援兵の上に入り彼ら婦女のごとくにならん
劍その實の上に入り是掠めらるべし 旱その水の上に入り是涸かん斯は偶像の地にして人々偶像に迷へばなり
是故に野の獸彼處に山犬と偕に居り駝鳥も彼處に棲べし何時までも其地に住む人なく世々こゝに住む人な
るべし エホバいひたまふ神のソドム、ゴモラとその近隣の邑々を滅せしごとく彼處に住む人なく彼處に宿る
人の子なかるべし

視よ北の方より民きたるあらん大なる國の人とおほくの王たち地の極より起らん 彼らは弓と槍をとる
情なく矜恤なしその聲は海のごとくに鳴るバビロンの女よ彼らは馬に乗り戦士のごとくに備へて汝を攻ん
ピロンの王その風聲をきよしかば其手弱り苦痛と子を産む婦の如き幼幼彼に迫る 視よ敵獅子のヨルダンの
叢より上るが如く堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼等を其處より逐奔らせわが選みたる者をその上に立ん誰か

我のごとき者あらんや誰かわが爲に時期を定めんや何の牧者か我前に立ことをえん さればバビロンにつきて
エホバの謀りたまひし御謀とカルデア人の地につきて思ひたまひし思想をきけ群の弱者必ず曳ゆかれん彼必ず
かれらの住居を滅すべし 巴ビロンは取れたりとの聲によりて地震へその號咷國々の中に聞ゆ

第五章

エホバかくいひたまふ視よわれ滅すところの風を起してバビロンを攻め我に憚る者の中に住む者
を攻べし われ強者をバビロンに遣さん彼らこれを経てその地を空くせん彼らすなはちその禍の
日にこれを四方より攻むべし 弓を張る者に向ひまた鎧を被て立あがる者に向ひて射者の者其弓を張らん汝ら
その壯者を憫まず其軍勢を悉く滅すべし 然ば殺さるる者カルデア人の地に踏れ刺るる者その街に踏れん

イスラエルとユダはその神萬軍のエホバに棄てられず彼らの地にはイスラエルの至聖者にむかひて犯せる
ところの罪充つ 汝らバビロンのうちより逃げいでておのおの其生命をすくへ其の罪のために滅さるる勿れ今
はエホバの仇をかへしたまふ時なれば報をそれになしたまふなり 巴ビロンは金の杯にしてエホバの手にあり
諸の地を酔せたり國々その酒を飲めり是をもて國々狂へり 巴ビロンは忽ち踏れて壊るるがために哭けその傷
のために乳香をとれ是或は愈ん われらバビロンを醫さんとすれども愈す我らこれをすて、各その國に歸る
べしそはその罰天におよび雲にいたればなり エホバわれらの義をあらはしたまふ來れシオンに於て我らの神
エホバの作爲をのべん

矢を磨ぎ楯を取れエホバ、メデア人の王等の心を激發したまふエホバ、バビロンをせめんと謀り之を滅さん
としたまふ是エホバの復仇その殿の復仇たるなり 巴ビロンの石垣に向ひて藪を樹て圍を堅くし番兵を設け
伏兵をそなへよ蓋エホバ、バビロンに住める者をせめんとて謀りその言しごとく行ひたまへばなり おほくの
水の傍に住み多の財寶をもてる者よ汝の終汝の食袋の限來れり 萬軍のエホバおのれを指して誓ひいひ給ふ
我まことに人を蛇のごとくに汝の中に充さん彼ら汝に向ひて鯨波の聲を揚ぐべし

二五 エホバその能力をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒たまへり 彼聲を發
 二六 したまふ時は天に衆の水いづかれ雲を地の極より起らしめ電光と雨をおこし風をその庫よりいだしたまふ す
 二七 べての人は獸のごとくにして智慧なし諸の鑄物師はその作りし像のために辱を取る其鑄るところの像は偽の者
 二八 にしてその中に靈なし 其等は空しき者にして迷妄の工作なりわが臨むとき其等は滅べし ヤコブの分は
 二九 此の如くならず彼は萬物およびその産業の族の造化主なりその名は萬軍のエホバといふ

三〇 汝はわが鎚にして戰の器具なりわれ汝をもて諸の邦を碎き汝をもて萬國を滅さん われ汝をもて馬とそ
 三一 の騎る者を推き汝をもて車とその御する者を碎かん われ汝をもて男と女をくだき汝をもて老たる者と幼き
 三二 者をくだき汝をもて壯者と童女をくだくべし われ汝をもて牧者とその群をくだき汝をもて農夫とその轆を負
 三三 ふ牛をくだき汝をもて方伯等と督宰等をくだかん 汝らの目の前にて我バビロンとカルデヤに住るすべての者
 三四 がシオンになせし諸の悪きことに報いんとエホバいひたまふ

三五 エホバ言ひたまはく余地を滅したる滅す山よ視よわれ汝の敵となるわれ手を汝の上に伸て汝を巖より轉ば
 三六 し汝を焚山となすべし エホバいひたまふ人汝より石を取て隅石となすことあらじ亦汝より石を取て基礎と
 三七 なすことあらじ汝はいつまでも荒地となりをらん

三八 鐵を地に樹て鐵を國々の中に吹き國々の民をあつめて之を攻めアララテ、ミンニ、アシケナズの諸國を擧ぎ
 三九 て之を攻め軍長をたて、之を攻め恐ろしき蝗のごとくに馬をすゝめよ 國々の民をあつめて之を攻めメデア人
 四〇 の王等とその方伯等とその督宰等およびそのすべての領地の人をあつめて之を攻めよ 是は我バビロン
 四一 軍の意旨をバビロンになしバビロンの地をして住む人なき荒地とならしめたまふべければなり 巴比ロン
 四二 の勇者は 戰をやめて其城にこもりその力失せて婦のごとくにならん其宅は焼けその門は折れん 耶は越て
 四三 耶にあひ使者は越て使者にあひバビロンの王につけて邑は盡く取られ 渡口は取られ沼は焼れ兵卒は怖ると

いはん

四四 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふバビロンの女は禾場のごとしその踏るゝ時きたれり暫くあ
 四五 りてその刈るゝ時いたらん 巴ビロンの王ネブカデネザル我を食ひ我を滅し我を空き器のごとくなし龍の如く
 四六 に我を呑みわが珍饈をもて其腹を充し我を運出せし 耶に居る者はいはんわがうけし運と我肉はバビロン
 四七 にかゝるべしエルサレムいはん我血はカルデヤに住る者にかゝるべしと さればエホバかくいひたまふ視よ
 四八 われ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん我その海を濶かし其泉を乾かすべし 巴ビロンは積疊となり山犬の
 四九 巢窟となり詫異となり嗤笑となり人なき所とならん 彼らは獅子のごとく共に吼え小獅のごとくに吼ゆ 彼
 五〇 らの怒の燃る時にわれ筵を設けてかれらを酔せ彼らをして喜ばしめながき寝にいらりて目を醒すことなからしめ
 五一 んとエホバいひたまふ われ屠る羔羊のごとく又牡羊と牡山羊のごとくにかれらをくだらしめん

五二 セシヤクイかにして取られしや全地の人の頌美者いかにして執へられしや國々の中にバビロンいかにして
 五三 詫異となりしや 海バビロンに溢れかゝりその多の波濤これを覆ふ その諸邑は荒て燥ける地となり沙漠と
 五四 なり住む人なき地とならん人の子そこを過ることあらじ われベルをバビロンに罰しその呑たる者を口より取
 五五 出さん國々はまた川の如くに彼に來らじバビロンの石垣踏れん

五六 我民よ汝らその中よりいで各エホバの烈しき怒をまぬかれてその命を救へ 汝ら心を弱くする勿れ此
 五七 地にてきく所の浮言によりて畏るゝ勿れ浮言は此年も來り次の年も亦きたらん此地に強暴あり宰者と宰者とおひ
 五八 攻ることあらん 故に視よ我バビロンの偶像を罰する日來らんその全地は辱められ其殺さるゝ者は悉くそ
 五九 の中に踏れん 然して天と地とその中にあるところのすべての者はバビロンの事の爲に歎び歌はんそは敗壞者
 六〇 北の方より此處に來ればなりエホバこれをいひたまふ 巴ビロンがイスラエルの殺さるゝ者を踏せし如く全地
 六一 の殺さるゝ者バビロンに踏るべし

一の海と藪の下なる十二の銅の牛を取れりこのもろもろの銅の重は稱る可らず この柱は高さ十八キュビト
 なり又紐をもてその周囲を測るに十二キュビトあり指四本の厚にして空なり その上に銅の頂ありその頂の
 高さは五キュビトその周囲は銅の網子と石榴にて飾れり他の柱とその石榴も之におなじ その四方に九十六
 の石榴あり網子の上なるすべての石榴の数は百なり

侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼバニヤと三人の門守を執へ また兵卒を督する一人の寺人と
 王の前にはべるものうち城邑にて遇しとる者七人とその地の民を募る軍勢の長なる書記と城邑の中にて遇
 しとる者六十人の者を邑よりとらへされり 侍衛の長ネブザダンこれらを執へてリブラに居るバビロンの
 王の許にいたれり バビロンの王ハマテの地のリブラにこれを撃ち殺せりかくユダはおのれの地よりとらへ移
 されたり

ネブカデネザルがとらへ移せし民は左の如し第七年にユダ人三千二十三人 またネブカデネザルその十
 八年にエルサレムより八百三十二人をとらへ移せり ネブカデネザルの二十三年に侍衛の長ネブザダン、ユ
 ダ人七百四十五人をとらへ移したり其總ての数は四千六百八人なり

ユダの王エホヤキンがとらへ移されたる後三十七年の十二月二十五日バビロンの王エビルメロダクその
 治世の一年にユダの王エホヤキンを獄よりいだしてその首をあげしめ 善言をもて彼を慰めその位をバビロン
 に備に居るところの王等の位よりもたかくし 其獄の衣服を易へしエホヤキンは一生の間つねに王の前に食
 せり かれ其死る日まで一生の間たえず日々を分をバビロンの王よりたまはりて其食物となせり
 エレミヤ記をばり

耶利米亞の哀歌

第一章

一 あゝ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑 いまは凄しき様にて坐し寡婦のごとくになれ
 り 嗟もろもろの民の中にて大いなりし者もろもろの州の中に女王たりし者 いまはかへつて貢を
 いる者となりぬ 彼よもすがら痛く泣きかなしみて涙面になる その戀人の中にはこれを慰むる者ひとり
 だに無くその朋はこれに背きてその仇となれり ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて據
 はれゆきもろもろの國に住ひて安息を得ずこれを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ シオンの道路は節
 會に上り來る者なきがために哀しみ その門はことごとく荒れその祭司は歎きその處女は憂へシオンもまた自
 から苦しむ その仇は首となりその敵は亨ゆ その愆の多きによりてエホバこれをなやませたまへるなりその
 わかき子等は據はれて仇の前にゆけり シオンの女よりはその榮華ごとごとく離れされりまたその牧伯等は草
 を得ざる鹿のごとくに成りおのれを追ふもの前に力つかれて歩みゆけり エルサレムはその艱難と窘迫の時
 むかしの代にありしもろもろの樂しき物を思ひ出づ その民仇の手におちいり誰もこれを助くるものなき時 仇人
 これを見てその荒はてたるを笑ふ エルサレムははなはだしく罪ををかしたれば汚穢たる者のごとくなれり
 前にこれを尊とびたる者もその裸體を見しによりて皆これをいやしむ是もまたみづから嗟き身をそむけて退ぞ
 けり その汚穢これが裾にあり彼の終局をおもはざりき 此故に驚ろくまでに零落たり 一人の慰さむる者だ
 に無しエホバよわが艱難をかへりみたまへ 敵は勝ほこれり 敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひ
 たり汝さきに異邦人等はなんぢの公會にいるべからずと命じおきたまひしに 彼らが聖所に使しいるをシオンは
 見たり 二 その民はみな哀きて食物をもとめその生命を支へんがために財寶を出して食にかへたり エホバよ
 見そなはし我のいやしめらるゝを願りみたまへ 三 すべて行路人よなんぢら何ともおもはざるかエホバその

烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや考がへ見よ
 エホバ上より火をくだしわが骨にいでて之を克服せしめ網を張りわが足をとらへて我を後にむかしめ我を
 して終日心さびしくかつ疾わづらはしめたまふ わが愆尤の鞭は主の御手にて結ばれ諸の愆あひ纏はりてわが
 項にのれり是はわが力をしておとろへしむ主われを敵たりがたき者の手にわたしたたまへり 主われの中なる
 勇士をことごとく除き節會をもよほして我を攻めわが少き人を打ほろぼしたまへり 主酒樽をふむがごとくに
 ユダの處女をふみたまへり これがために我なげくわが目やわが目には水ながるわがたましひを活すべき慰
 さむるものわれに遠ければなりわが子等は敵の勝るによりて滅びうせにき シオンは手をのぶれども誰もこ
 れを慰さむる者なしヤコブにつきてはエホバ命をくだしてその周圍の民をこれが敵とならしめたまふ エルサレ
 ムは彼らの中にありて汚れたる者のごとくなりぬ エホバは正し我その命令にそむきたるなり 一切の民よ
 われに聽けわが憂苦をかへりみよわが處女もわかき男も俘囚て往り われわが戀人を呼たれども彼らはわれ
 を欺むけりわが祭司およびわが長老は生命を繋がんとて食物を求むる間に都邑の中に氣息たえたり
 エホバよかへりみたまへ我はなやみてをりわが腸わきかへりわが心わが裏に顛倒す我甚しく侍りたればなり
 外には劍ありてわが子を殺し内には死のごとき者あり かれらはわが嗟歎をきけり我をなくさむるもの一人
 だに無しわが敵みなわが艱難をきよおよび汝のこれを爲たまひしを喜こべり汝はさきに告しらせしその日を
 來らせたまはん而して彼らもつひに我ごとくに成るべし ねがはくは彼等が與へし艱難をことごとくなんぢ
 の御前にあらはし前にわがもろもの罪愆のために我におこなひし如く彼らにも行なひたまへわが嗟嘆は多く
 わが心はうれひかなしむなり

第二章

あゝエホバ震怒をおこし黒雲をもてシオンの女を蔽ひたまひイスラエルの榮光を天より地に
 としその震怒の日に己の足蹠を心にとめたまはざりき 主ヤコブのすべての住居を呑つくして

あはれます 震怒によりてユダの女の保壁を毀ちこれを地にたふしその國とその牧伯等を辱かしめ 烈しき
 震怒をもてイスラエルのすべての角を絶ち敵の前にて己の右の手をひきちぎりめ四面を焚きつくす燃る火のごと
 くヤコブを焚き 敵のごとく弓を張り 仇のごとく右の手を挺て立ち 見て目に喜こばしきものを滅しシオン
 の女の幕屋に火のごとくその怒をそぎたまへり 主敵のごとくに成たまひてイスラエルを呑ほろぼしその
 諸の殿を呑ほろぼしそのもろもの保壁をこぼち ユダの女の上に憂愁と悲哀を増くはへ 國のごとく己の
 幕屋を荒しその集會の所をほろぼしたまへり エホバ節會と安息日とをシオンに忘れしめ 烈しき怒によりて王
 と祭司とをいやしめ棄たまへり 主その祭壇を忌棄てその聖所を嫌ひ憎みてその 諸の殿の石垣を敵の手に
 わたしたまへり 彼らは節會の日のごとくエホバの室にて聲をたつ エホバ、シオンの女の石垣を毀たんと思ひ
 さだめ繩を張りこぼち進みてその手をひかず 壕と石垣とをして哀しましめたまふ 是らは共に愛ふ その門
 は地に埋もれ エホバその關木をこぼちくだきその王ともろもの牧伯は律法なき國人の中にありその預言者
 はエホバより異象を蒙らず シオンの女の長老等は地に坐りて黙し首に灰をかむり身に麻をまとふ エルサレ
 ムの處女は首を地に低る わが目は涙の爲に潰れんとしわが腸は沸かへりわが肝は地に塗るわが民の
 女ほろぼされ 幼少ものや哺乳子は瘦れはてし邑の街衢に氣息たへなんとすればなり かれらは疵を負る者の
 如く邑のちまたにて氣息たえなんとし 母の懷にその靈魂をそがんとし 母にむかひて言ふ穀物と酒とはいづく
 にあるやと エルサレムの女よ 我なにをもて汝にあかしし 何をもちて汝にならべんや シオンの處女よ われ何
 をもちて汝になぞらへて汝をなくさめんや 汝のやぶれば海のごとく大なり 嗟たれか能く汝を醫さんや なんぢ
 の預言者は虚しき事と思ふなることをなんぢに預言し かつて汝の不義をあらはしてその俘囚をまぬかれしめんと
 はせざりきその預言するところは惟むなしき重荷および追放たるゝ根本となるべき事のみ すべて往來の人
 なんぢにむかひて手を拍ち エルサレムの女にむかひて嘲りわらひ かつ頭をふりて言ふ 美麗の極全地の欣喜と

二六 となへたりし邑は是なるかと 二六 なんちのもろもろの敵はなんちに對ひて口を開けあざけり笑ひて切齒をなす
 二七 斯て言ふわれら之を呑つくしたり 是われらが望みたりし日なりわれら巴に之にあへり我らすでに之を見たりと
 二七 エホバはその定めたまへることを成しいにしへより其命じたまひし言を果したまへり エホバはほろぼして
 二八 憐れまず敵をして汝にかちほこらしめ汝の仇の角をたかくしたまへり 二八 かれらの心は主にむかひて呼はれり
 二九 シオンの女の墳垣よなんぢ夜も晝も河の如く涙をながせみづから安んずることをせず 汝の腫子を休むること
 二九 なかれ 二九 なんぢ夜の初更に起いでて呼さけべ 主の御前に汝の心を水のごとく灌げ 街衢のほとりに饑たふるよ
 三〇 なんちの幼兒の生命のために主にむかひて兩手をあげよ 三〇 エホバよ視たまへ 汝これを誰におこなひしか
 三〇 願はくは顧みまたへ 婦人おのが實なるその懐き育てし孩兒を食ふべけんや 祭司預言者等主の聖所において殺さ
 三二 るべけんや 三二 をさなきも老たるも街衢にて地に臥しわが處女も若き男も刃にかゝりて斃れたり なんちはその
 三三 震怒の日にこれを殺しこれを屠りて恤れみたまはざりき 三三 なんぢ節會の日のごとくわが懼るゝところの者を
 三四 四方より呼あつめたまへり エホバの震怒の日には通れたる者なく又のこりたる者なかりき わが懐き育てし者は
 三五 みなわが敵のためにほろぼされたり

第三章

一 我はかれの震怒の咎によりて艱難に遭たる人なり 二 かれは我をひきて黑暗をあゆませ光明にゆ
 三 かしめたまはず 三 ことに屢々その手をむけて終日われを攻なやまし 四 わが肉と肌膚をおとる
 五 へしめわが骨を摧き 六 われにむかひて患苦と艱難を築きこれをもて我を圍み 七 われをして長久に死し者のご
 八 とく暗き處に住しめ 九 我をかこみて出ること能はざらしめわが鍊索を重くしたまへり 一〇 我さけびて助をもと
 一一 めしとき彼わが祈禱をふせぎ 一二 斫たる石をもてわが道を塞ぎわが途をまけたまへり 一三 その我に對することは
 一四 伏て伺がふ熊のごとく潜みかくるゝ獅子のごとし 一五 われに路を離れしめ我をひきさきて獨くるしましめ 一六 弓
 一七 を張りてわれを矢先の的となし 一八 矢筒の矢をもてわが腰を射ぬきたまへり 一九 われはわがすべての民のあざけ

二五 りとなり終日うたひそしらる 二六 かれ我をして苦き物に飽かしめ茵蔯を飲しめ 二七 小石をもてわが齒を摧き灰をも
 二八 て我を蒙ひたまへり 二九 なんぢわが靈魂をして平和を遠くはなれしめたまへば我は福祉をわすれたり 三〇 是にお
 三一 いて我みづから言りわが氣力うせゆきぬ エホバより何を望むべきところ無しと 三二 ねがはくは我が艱難
 三三 と苦楚茵蔯と膽汁とを心に記たまへ 三四 わがたましひは今なほ是らの事を想ひてわが衷に鬱ぐ 三五 われこの事を
 三六 心におもひ起せりこの故に望をいだくなり 三七 われらの尙ほろびざるはエホバの仁愛によりその憐憫の盡ざる
 三八 に因る 三九 これは朝ごとに新なりなんちの誠實はおほいなるかな 四〇 わが靈魂は言ふエホバはわが分なりこの
 四一 ゆゑに我彼を待ち望まん 四二 エホバはおのれを待ち望む者とおのれを尋ねもとむる人に恩恵をほどこしたまふ
 四三 エホバの救拯をのぞみて靜にこれを待は善し 四四 人わかき時に軛を負は善し 四五 エホバこれを負せたまふ
 四六 なれば獨坐して黙すべし 四七 口を塵につけよあるひは望あらん 四八 おのれを擧つ者に頰をむけ充足れるまでに
 四九 恥辱をうけよ 五〇 そは主は永久に棄ることを爲たまはざるべければなり 五一 かれは患難を與へ給ふといへども
 五二 その慈悲おほいなればまた憐憫を加へたまふなり 五三 心より世の人をなやましかつ苦しめ給ふにはあらざるなり
 五四 世のもろもろの俘囚人を脚の下にふみにじり 五五 至高者の面の前にて人の理を枉げ 五六 人の詞訟を屈むる
 五七 ことは主のよろこび給はざるところなり 五八 主の命じ給ふにあらずば誰か事を述んにその事即ち成んや 五九 禍
 六〇 も禍もともに至高者の口より出るにあらずや 六一 活る人なんぞ怨言べけんや 六二 人おのれの罪の罰せらるゝをつぶ
 六三 やくべけんや 六四 我等みづからの行をしらべかつ省みてエホバに歸るべし 六五 我ら天にいます神にむかひ
 六六 て手とともに心をも舉べし 六七 われらは罪ををかし我らは叛きたりなんぢこれを赦したまはざりき 六八 なんぢ
 六九 震怒をもてみづから蔽ひ我らを追攻め殺してあはれまず 七〇 雲をもてみづから蔽ひ祈禱をして通ぜざらしめ
 七一 もろもろの民の中にわれらを塵埃となしたまへり 七二 敵は皆われらにむかひて口を張れり 七三 恐懼と陷阱
 七四 また暴行と滅亡我らに來れり 七五 わが民の女の滅亡によりてわが眼には涙の河ながる 七六 わが目は斷ず涙をそゝ

二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

ぎて止す 天よりエホバの臨み見て顧みたまふ時にまで至らん わが邑の一切の女の故によりてわが眼は
わが心をいたましむ 故なくして我に敵する者ども鳥を追ごとくにいたく我をおひ わが生命を坑の中にほ
ろぼしわが上に石を投げかけ また水わが頭の上に溢る 我みづから言ひ滅びうせぬと エホバよ われ深
き坑の底より汝の名を呼び なんぢ我が聲を聴たまへり わが哀歎と祈求に耳をおほひたまふなかれ わが
汝を顧たりし時なんぢは近よりたまひて恐るゝなかれと宣へり 主よなんぢはわが靈魂の訴を助け伸べわが
生命を贖ひ給へり エホバよなんぢは我がかうむりたる不義を見たまへり 願はくは我に正しき審判を與へた
まへ なんぢは彼らが我を怨みわれを害せんとはかるを見て見たまへり エホバよなんぢは彼らが我を罵り
我を害せんとはかるを見て聞たまへり かの立て我に逆らふ者等の言語およびその終日われを攻んとて運らす
謀計もまた汝これを聞たまへり ねがはくは彼らの起居をかんがみたまへ 我はかれらに歌ひせしらる エ
ホバよなんぢは彼らが手に爲すところに循がひて報をなし かれらをして心くからしめたまはんなんぢの
呪詛かれらに歸せよ なんぢは震怒をもてかれらを追ひ エホバの天の下よりかれらを行ろぼし絶たまはん
第四章 = あゝ黄金は光をうしなひ純金は色を變じ 聖所の石はもろもろの街衢の口に投すてられたり
あゝ精金にも比ぶべきシオンの愛子等は陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る 山犬
さへも乳房をたれてその子に乳を哺す 然るにわが民の女は殘忍荒野の鴛鴦のごとくなれり 乳哺兒の舌は漏
きて上唇にひたと貼き 幼兒はパンをもとむるも辱てあたふる者なし 肥甘物をくらひ居りし者はおちぶれて
街衢にあり 紅の衣服にて育てられし者も今は塵堆を抱く 今我民の女のうるる怨の罰はソドムの罪の罰より
もおほいなり ソドムは古昔人に手を加へらるゝことなくして瞬く間にほろぼされしなり わが民の中なる貴き
人は従前には雪よりも皎潔に乳よりも白く 珊瑚よりも鮮紅色にしてその形貌のうるはしきこと藍玉のごとくな
りしが いまはその面くろきが上に黒く 街衢にあるとも人にしられず その皮は骨にひたと貼き乾きて枯木の

九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

ごとくなれり 劍にて死者は饑て死者よりもさいはひなり 是は斯る者は田圃の産物の幣るによりて漸々
におとろへゆき刺れし者のごとくに成ばなり わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき婦女等さへも手づから
己の子等を煮て食となせり エホバその憤恨をことごとく洩し 烈しき怒をそまき給ひ シオンに火をもや
してその基礎までも焼しめ給へり 地の諸王も世のもろもろの民もすべてエルサレムの門に仇や敵の打いらん
とは信ぜざりき 斯なりしはその預言者の罪によりその祭司の愆によれり かれらは即ち正しき者の血をその
邑の中にながしたりき 今かれらは盲人のごとく街衢にさまよひ 身は血にて汚れれば人その衣服にふるゝ
あたはず 人かれらにむかひて呼はり言ふ 去れよ穢らはし 去れ去れ 觸るなかれと 彼らはしり去りて流離は
異邦人の中間にても人々また言ふ 彼らは此に寓るべからずと エホバ怒れる面をもてこれを散し給へり 再び
これを顧みたまはじ 人々祭司の面をも辱ばず 長老をもあはれまざりき われらは頼まれぬ救援を望みて
目つかれおとろふ 我らは俵ひたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待をりぬ 敵われらの脚をうかどへば
我らはおのれの街衢をも歩くことあたはず 我らの終ちかつけり 我らの日つきたり 即ち我らの終きたりぬ 我
らを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し 山にて我らを追ひ野に伏てわれらを伺ふ かの我らが鼻の氣息たる者
エホバに膏そゝがれたるものは陷阱にて執へられにき 是はわれらが異邦にありてもこの蔭に住んとおもひたり
し者なり ウズの地に住むエドムの女よ悦び樂しめ 汝にもまたつひに 杯めぐりゆかん なんぢも酔て裸
になるべし シオンの女よなんぢが愆の罰はをはれり 重ねてなんぢを擡へゆきたまはじ エドムの女よなんぢ
の愆を罰したまはん 汝の罪を露はしたまはん

第五章 = エホバよ我らにありし所のおもひたまへ 我らの恥辱をかへりみ觀たまへ 我らの産業は
外國人に歸し われらの家屋は他國人の有となれり われらは孤子となりて父あらず われらの母
は寡婦にひとし われらは金を出して自己の水を飲み おのれの薪を得るにも價をはらふ われらを追ふ者

われらの頸に迫る 我らは疲れて休むことを得ず 食物を得て饑を凌がんとて エジプト人およびアッスリヤ人に
 手を與へたり われらの父は罪ををかして己に世にあらす 我らその罪を負ふなり 奴僕等われらを制するに
 誰ありて我らを之が手よりすくひ出すものなし 荒野の刀兵の故によりて我ら死を胃して食物を得 饑饉の
 烈しき熱氣によりてわれらの皮膚は燼のごとく熱し シオンにて婦女等をかされユダの邑々にて處女等けがさ
 る 侯伯たる者も敵の手にて吊され 老たる者の面も尊とばれず 少き者は石磨を擔はせられ 童子は薪を
 負ふてよるめき 長老は門にあつまることを止め少き者はその音楽を廢せり 我らが心の快樂はすでに罷み
 われらの跳舞はかはりて悲哀となり われらの冠冕は首より落たり われら罪ををかしたれば 禍なるかな
 これが爲に我らの心うれへこれらのために我らが目くらくなれり シオンの山は荒はて山犬その上を歩く
 なり エホバよなんぢは永遠に在すなんぢの御位は世々かぎりなし 何とて我らを永く忘れわれらを
 斯ひさしく棄おきたまふや エホバよねがはくは我らをして汝に歸らしめたまへ われら歸るべし 我らの目を
 新にして昔日の日のごとくならしめたまへ さりとも汝まつたく我らを棄てたまひしや 痛くわれらを怒り
 たまふや
 エレミヤの哀歌 をはり

以西結書

第一章

第三十年四月の五日に我ケバル河の邊にてかの據うつされたる者の中にをりしに天ひらけて我神
 の異象を見たり 是エコニヤ王の據ゆかれしより第五年のその月の五日なりき 時にカルデア
 人の地に於てケバル河の邊にてエホバの言祭司の子エゼキエルに臨めりエホバの手かしこにて彼の上になり
 我見しに視よ烈き風大なる雲および燃る火の團塊北より出きたる又雲の周圍に輝光ありその中よりして火
 の中より熱たる金族のごときもの出づ 其火の中に四箇の生物にて成る一箇の形あり其狀は是のごとし即ち人
 の象あり 各四の面あり 各四の翼あり その足は直なる足その足の跖は横牛の足の跖のごとくにして廣
 ける銅のごとくに光れり その生物の四方に翼の下に人の手ありこの四箇の物皆面と翼あり その翼はた
 がひに相つらなれりその往とときに回轉すして各その面の向ふところに行く その面の形は人の面のごとし四箇
 の者右には獅子の面あり四箇の者左には牛の面あり又四箇の者驚の面あり その面とその翼は上にて分るその
 各箇の翼二箇は彼と此と相つらなり二箇はその身を覆ふ 各箇その面の向ふところへ行き靈のゆかんとする方
 に行く又行にまはることなし その生物の形は熱る炭の火のごとく松明のごとし火生物の中に此彼に行き火輝
 きてその火の中より電光いづ その生物奔りて電光の如くに往來す
 我生物を觀しに生物の近邊にあたりてその四箇の面の前に地に輪あり 其輪の形と作は黄金色の玉
 のごとしその四箇の形は皆同じその形と作は輪の中に輪のあるごとくなり その行く時は四方に行く行にま
 はることなし その輪軸は高くして長擡かり輪軸は四箇ともに皆遍く目あり 生物の行く時は輪その傍に
 行き生物地をはなれて上る時は輪もまた上る 凡て靈のゆかんとする所には生物その靈のゆかんとする方に往
 く輪またその傍に上る是生物の靈輪の中にあればなり 此の行く時は彼もゆき此の止る時は彼も止り此地を

はなれて上る時は輪も共にあがる是生物の靈輪の中にあればなり

生物の首の上に長しき水晶のごとき穹蒼ありてその首の上に展開る 穹蒼の下に其翼直く開きて此と彼とあひ連る又各二箇の翼ありその各の二箇の翼此方彼方にありて身をおほふ 我その行く時の羽聲を聞に大水の聲のごとく全能者の聲のごとし其聲音の響は軍勢の聲のごとしその立どまる時は翼を垂る 其の首の上なる穹蒼の上より聲ありその立どまる時は翼を垂る

首の上なる穹蒼の上に青玉のごとき寶位の狀式ありその寶位の狀式の上に人のごとき者在す 又われその中と周圍に磨きたる銅のごとく火のごとくなる者を見る其人の腰より上も腰より下も火のごとくに見ゆ其周圍に輝光あり 其の周圍の輝光は雨の日に雲にあらはるゝ虹のごとしエホバの榮光かくのごとく見ゆ我これを見て俯伏したるに語る者の聲あるを聞く

第二章

彼われに言たまひけるは人の子よ起あがれ我なんぢに語はんと 斯われに言給ひし時靈われにきたりて我を立あがらしむ爰に我その我に語りたまふを聞くに われに言たまひけるは人の子よ我なんぢをイスラエルの子孫に遺すなはち我に叛ける叛逆の民につかはさん彼等とその先祖我に悖りて今日にいたる その子女等は厚顔にして心の剛愎なる者なり我汝をかれらに遺す汝かれらに主エホバかくいふと告べし 彼等は悖逆る族なり彼等は之を聽も之を拒むも預言者の己等の中にあらしを知ん 汝人の子よたとひ爾と棘汝の周圍にあるとも亦汝蠅の中に住ともこれを懼るゝなかれその言をおそるゝなかれ夫かれらは悖逆る族なり汝その言をおそるゝなかれ其面に慄くなかれ 彼等は悖逆る族なり彼らこれを聽もこれを拒むも汝吾言をかれらに告よ

人の子よわが汝に言ところを聽け汝かの悖逆る族のごとく悖るなかれ汝の口を開きてわが汝にあたふる者をくらふべし 時に我見に吾方に伸たる手ありて其中に卷物あり 彼これわが前に開けり卷物は裏と表に

文字ありて上に嗟嘆と悲哀と憂患とを録す

第三章

彼また我に言たまひけるは人の子よ汝獲るところの者を食へ此卷物を食ひ往てイスラエルの家に多きの重き民につかはすにあらすイスラエルの家につかはすなり 汝がその言語をしらざる唇の深き舌の重き多くの國人に汝をつかはすにあらす我もし汝を彼らに遺さば彼等なんぢに聽べし 然どイスラエルの家は我に聽ことを好まざれば汝に聽ことをせざるべしイスラエルの全家は厚顔にして心の剛愎なる者なればなり 視よ我かれらの面のごとく汝の面をかたくしかれらの額のごとく汝の額を堅くせり 我なんぢの額を金剛石のごとくし磐よりも堅くせり彼らは背逆る族なり汝かれらを懼るゝなかれ彼らの面に戰慄くなかれ 又われに言たまひけるは人の子よわが汝にいふところの凡の言をなんぢの心にをさめ汝の耳にきけよ 往てかの據へ移されたる汝の民の子孫にいたりこれに語りて主エホバかく言たまふと言へ彼ら聽も拒むも汝然すべし

時に靈われの上に擧しが我わが後に大なる響の音ありてエホバの榮光のその處より出る者は讚べきかなと云ふを聞けり 又また生物の互にあひ連る響の聲とその傍にある輪の聲および大なる響の音を聞く 靈われを上にあけて携へゆけば我苦々しく思ひ心を熱くして往てエホバの手強くわが上にあり 爰に我ケバル河の邊にてテラアビブに居るかの據移れたる者に至り驚きあきれてその坐する所に七日俱に坐せり

七日すぎし後エホバの言われにのぞみて言ふ 人の子よ我なんぢを立てイスラエルの家の爲に守望者となす汝わが口より言を聽き我にかはりてこれを警むべし 我惡人に汝かならず死べしと言んに汝かれを警めず

彼をいましめ語りその悪き道を離れしめて之が生命を救はずばその悪人はおのが悪のために死なれど其血をば我なんちの手に要むべし 然ど汝悪人を警めん彼その惡とその惡き道を離れずば彼はその惡の爲に死ん汝はおのれの靈魂を救ふなり 又義人その義事をすて惡を行はんに我贖をその前におかば彼は死べし汝かれを警めざれば彼はその罪のために死てそのおこなひし義き事を記ゆる者なきにいたらん然ば我その血を汝の手に要むべし 然ど汝もし義き人をいましめ義き人に罪をかさしめずして彼罪を犯すことをせずば彼は警戒をうけたるがためにかならずその生命をたまたん汝はおのれの靈魂を救ふなり

茲にエホバの手かしてわが上にあり彼われに言たまひけるは起て平原にいで我そこに汝にかたらん 我すなはち起て平原に往にエホバの榮光わがケバル河の邊にて見し榮光のごとく其處に立ければ俯伏たり 時に靈われの中にいりて我を立あがらせ我にかたりていふ往て汝の家にかたれ 人の子よ彼等汝に繩をうちかけ其をもて汝を縛らん汝はかれらの中に出ゆくことを得ざるべし 我なんちの舌を上唇に堅く著しめて汝を晒となし彼等を警めざらしむべし彼等は悖逆る族なればなり 然ど我汝に語る時は汝の口をひらかん汝彼らにいふべし主エホバかく言たまふ聽者は聽べし拒む者は拒むべし彼等は悖逆る族なり

第四章

人の子よ汝磚瓦をとりて汝の前に置きその上にエルサレムの邑を畫け 而して之を取圍み之にむかひて雲梯を建て壘を築き陣營を張り邑の周圍に破城槌を備へて之を攻めよ 汝また鐵の鍋を取り汝と邑の間に置いて鉄の石垣となし汝の面を之に向よ斯この邑圍まる汝之を圍むべし是すなはちイスラエルの家にあたふる徴なり

又汝左側を下にして臥しイスラエルの家の罪を其上に置よ汝が斯臥ところの日の數は是なんちがその罪を負ふ者なり 我かれらが罪を犯せる年を算へて汝のために日の數となす即ち三百九十日の間汝イスラエルの家の罪を負ふべし 汝これを終なば復右側を下にして臥し四十日の間ユダの家の罪を負ふべし 我汝のために

一日を一年と算ふ 汝エルサレムの圍に面を向け腕を袒して其の事を預言すべし 觀よ我來を汝にかけて汝の圍の日の終るまで右左に動くことを得ざらしめん

汝小麦大豆扁豆粟および裸麥を取て之を一箇の器にいれ汝が横はる日の數にしたがひてこれを食とせよ即ち三百九十日の間これを食ふべし 汝食を糶りて一日に二十シケルを食へ時々これを食ふべし 又汝水を量りて一ヒンの六分一を飲め時々これを飲むべし 汝大麥のパンの如くにして之を食へ即ち彼等の目のまへにて人の糞をもて之を烘べし 又エホバいひ給ふ是のごとくイスラエルの民はわが追やらんところの國々においてその汚穢たるパンを食ふべし 是において我いふ嗚呼主エホバよわが魂は絶て汚れし事なし我は幼少時より今にいたるまで自ら死し者や裂殺れし者を食ひし事なし又絶て汚れたる肉わが口にいりしことなし 又エホバ我にいひ給ふ我牛の糞をもて人の糞にかふることを汝にゆるす其をもて汝のパンを調ふべし 又われに言たまふ人の子よ觀よ我エルサレムに於て人の杖とするパンを打碎かん彼等は食をはかりて惜みて食ひ水をはかりて驚きて飲まん 斯食と水と乏しくなりて彼ら互に面を見あはせて駭きその罪に亡びん

第五章

人の子よ汝利き刀を執り之を剃刀となして汝の頭と頰をそり横衝をとりてその毛を分てよ 而ち三分の一を風に散すべし我刀をぬきて其後を追ん 汝その毛を少く取りて褌に包み 又その中を取りてこれを火の中になげいれ火をもて之をやくべし火その中より出てイスラエルの全家におよばん

主エホバかくいひ給ふ我このエルサレムを萬國の中におき列邦をその四圍に置けり 又エルサレムは異邦よりも悪くわが律法に悖り其四圍の國々よりもわが法憲に悖る即ち彼等はわが律法を蔑如にしわが法憲に歩行まざるなり 故に主エホバかくいひたまふ汝等はその周圍の異邦人よりも甚だしく噪きたち吾憲にあゆまず吾法をおこなはず又汝らの周圍なる異邦人の法のごとくに行ふことすらもせざるなり 是故に主エホバかくいひ

たまたま視よ我われは汝を攻め異邦人の目の前にて汝の中に鞫をおこなはん なんぢの爲せし諸の惡むべき事のために我わが未だ爲ざりしところの事此後ふたゞ其ごとく爲さるべきところの事を汝になさん 是がために汝の中に父たる者はその子を食ひ子たる者はその父を食はん我汝の中に鞫をおこなひ汝の中の餘れる者を盡く四方の風に散さん 是故に主エホバいひたまふ我は活く汝その惡むべき物とその憎むべきところの事とをもてわが聖所を穢したれば我かならず汝を滅さん我目なんぢを惜み見す我なんぢを憐まざるべし 汝の三分の一は汝の中において疫病にて死に饑饉にて滅びん又三分の一は汝の四周にて刀に仆れん又三分の一をば我四方の風に散し刀をぬきて其後をおはん

斯我怒を洩し盡しわが憤を彼らの上にかうむらせて心を安んぜん我わが憤を彼らの上に洩し盡す時は彼ら我エホバの熱心をもてかたりたる事をしるに至らん 我汝を荒地となし汝の周囲の國々の中に汝を笑柄となし凡て往來の人の目に斯あらしむべし 我怒と憤と重き責をもて鞫を汝に行ふ時は汝はその周囲の邦々の笑柄となり嘲となり警戒となり驚懼とならん我エホバこれを言ふ 即ち我饑饉の惡き矢を彼等に放たん是は滅亡すための者なり我汝らを滅さんために之を放つべし我なんぢらの上に饑饉を増しくはへ汝らが杖とするところのパンを打碎かん 我饑饉と惡き獸を汝等におくらん是汝をして子なき者とならしめん又疫病と血なんぢの間に往たらん我刀を汝にのぞましむべし我エホバこれを言ふ

第六章

エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ汝の面をイスラエルの山々にむけて預言して言ふべし イスラエルの山よ主エホバの言を聴け主エホバ山と岡と谷と平原にむかひて斯いひたまふ視よ我劍を汝等に遣り汝らの崇邱を滅す 汝等の壇は荒され日の像は毀たれん我汝らの中の殺さるゝ者をして汝らの偶像の前に仆れしむべし 我イスラエルの子孫の尸骸をその偶像の前に置ん汝らの骨をその壇の周圍に散さん 凡て汝らの住るところにて邑々は滅され崇邱は荒されん斯して汝らの壇は壊れて荒れ汝らの偶像は毀たれて滅び

汝等の日の像は斫たふされ汝等の作りし者は絶されん 又殺さるゝ者なんぢらの中に仆れん汝等これに由て吾エホバなるを知るにいたらん

我或者を汝らにのこす即ち劍をのがれて異邦の中にをる者國々の中にちらさるゝ者は是なり 汝等の中の逃れたる者はその據ゆかれし國々において我を記念ふに至らん是は我かれらの我をはなれたるその姦淫をなす心を挫き且かれらの姦淫を好みてその偶像を慕ふところの目を挫くに由てなり而して彼等はその諸の憎むべき者をもて爲たるところの惡のために自ら恨むべし 斯彼等はわがエホバなるを知るにいたらん吾がこの災害をかれらになさんと語しことは徒然にならざるなり

主エホバかく言たまふ汝手をもて躡ち足を踏ならして言へ嗚呼凡てイスラエルの家の惡き憎むべき者は禍なるかな皆刀と饑饉と疫病に仆るべし 遠方にある者は疫病にて死に近方にある者は刀に仆れん又生存りて身を全うする者は饑饉に死ぬべし斯我わが憤怒を彼等に洩しつくすべし 彼等の殺さるゝ者その偶像の中にありその壇の周圍にあり諸の高岡にあり諸の山の頂にあり諸の青樹の下にあり諸の茂れる橡樹の下にあり彼等が馨しき香をその諸の偶像にさし上げたる處にあらん其時汝等はわがエホバなるを知るべし 我手をかれらの上に伸べ凡てかれらの住居とて其地を荒してデブラの野にもまさる荒地となすべし是によりて彼らはわがエホバなるを知るにいたらん

第七章

エホバの言また我にのぞみて言ふ 汝人の子よ主エホバかくいふイスラエルの地の末期いたる此國の四方の境の末期來れり 今汝の末期いたる我わが忿怒を汝に洩し汝の行にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべき物のために汝を罰せん わが目は汝を惜み見す我なんぢを憫ます汝の行の爲に汝を罰せん汝のなせし憎むべき事の報汝の中にあるべし是によりて汝等はわがエホバなるを知らん 主エホバかくいひたまふ視よ災禍あり非常災禍きたる 末期きたる其末期きたる是起りて汝に臨む視よ

來る 此地の人よ汝の命數いたる時いたる日ちかし山々には擾亂のみありて喜樂の聲なし 今我すみやかに
 吾憤恨を汝に蒙らせわが怒氣を汝に洩しつくし汝の行爲にしたがひて汝を鞠き汝の諸の憎むべきところの事
 ために汝を罰せん わが目は汝を惜み見ず我汝をあはれまらず汝の行ののために汝を罰せん汝の爲し憎むべき事
 の果報汝の中にあるべし是によりて汝等は我エホバの汝を棄るを知る

視よ日きたる視よ來れり命數いたりのぞむ杖花咲き驕傲苗す 暴逆おこりて惡の杖と成る彼等もその群
 衆もその驕者も皆失んかれらの中には何も残る者なきにいたるべし 時きたる日ちかづけり買者は喜ぶなけれ
 賣者は思ひわづらふなけれ怒その群衆におよぶべければなり 賣者は假令その生命ながらふるともその賣たる
 者に歸ることあたはじ此地の全の群衆をさすところの預言は廢らざるべければなり其惡の中において生命を全う
 する者なかるべし

人衆ラッパを吹て凡て預備をなせども戰にいづる者なし其はわが怒その全の群衆におよべばなり 外
 には劍あり内には疫病と饑饉あり田野にをる者は劍に死なん邑の中にをる者は饑饉と疫病これをほろぼすべし
 その中の逃るゝ者は逃れて谷の鳩のごとくに山の上をりて皆その罪のために悲しまん 手みな弱くなり
 膝みな水となるべし 彼等は麻の衣を身にまとはん恐懼かれらを蒙まん諸の面には羞あらはれ諸の首は髪をそ
 りおとされん 彼等その銀を銜にすてん其金はかれらに塵芥のごとくなるべしエホバの怒の日にはその金銀も
 かれらを救ふことあたはざるなり是等はその心魂を満足せしめず其腹を充たさず唯彼等をつまづかせて惡におとし
 いるゝ者なり 彼の美しき飾物を彼等驕傲のために用ひ又これをもてその憎べき偶像その憎むべき物をつくれ
 り是をもて我これを彼らに芥とならしむ 我これを外國人にわたして奪はしめ地の惡人にわたして掠めしめん
 彼等すなはちこれを汚すべし 我かれらにわが面を背くべければ彼等わが密たる所を汚さん強暴人其處にいり
 てこれを汚すべし

汝鍵束を作れよ死にあたる罪國に滿ち暴逆邑に充たり 我國々の中の惡き者等を招きて彼らの家を奪し
 めん我強者の驕傲を止めんその聖所は汚さるべし 滅亡きたれり彼等平安を求むれども得ざるなり 災害
 に災害くはより注進に注進くはより彼等預言者に默示を求めん律法は祭司の中に絶え謀略は長老の中に絶べし
 王は哀き牧伯は驚惶を身に纏ひ國の民の手は慄へん我その行爲に備ひて彼らを處置ひその審判に備ひて彼ら
 を罰せん彼等は我エホバなるを知にいたるべし

第八章 爰に六年の六月五日に我わが家に坐しをりユダの長老等わがまへに坐りし時主エホバの手われ
 の上に降り 我すなはち視しに火のごとくに見ゆる形象あり腰より下は火のごとく見ゆ腰より上
 は光輝て見え燒たる金屬の色のごとし 彼手のごとき者を伸て吾が頭髮を執りしかば靈われを地と天の間に曳
 あげ神の異象の中に我をエルサレムに携へゆき北にむかへる内の門の口にいたらしむ其處に嫉妬をおこすところ
 の嫉妬の像たてり 彼處にイスラエルの神の榮光あらはる吾が平原にて見たる異象のごとし

彼われに言たまふ人の子よ目をあけて北の方をのぞめと我すなはち目をあけて北の方を望むに視よ壇の門
 の北にあたりてその入口に此嫉妬の像あり 彼また我にいひたまふ人の子よ汝かれらが爲ところ即ちイスラ
 エルの家が此にてなすところの大なる憎むべき事を見るや我これがために吾が聖所をはなれて遠くさるべし汝
 身を轉らせ復大なる憎むべき事等を見ん

斯て彼われを領て庭の門にいたりたまふ我見しに其壁に一の穴あり 彼われに言たまふ人の子よ壁を穿
 てよと我すなはち壁を鑿つに一箇の戸あるを視る 茲に彼われにいひ給ひけるは入て彼等が此になすところの
 惡き憎むべき事等を見よと 便ち入りて見るに諸の爬蟲と憎むべき獸畜の形およびイスラエルの家の諸の
 偶像その周圍の壁に畫きてあり 一イスラエルの家の長老七十人その前に立てりシヤパンの子ヤザニヤもかれら
 の中に立ちてあり 各手に香爐を執るその香の煙雲のごとくにのぼれり 彼われに言たまひけるは人の子よ汝

イスラエルの家の長老等が暗におこなふ事即ちかれらが各人その偶像の間におこなふ事を見るや彼等いふエホバは我儕を見ずエホバこの地を棄てたりと 又また我に言たまはく汝身を轉らせ復かれらが爲すところの大なる憎むべき事等を見ん

斯て彼我を携てエホバの家の北の門の入口にいたるに其處に婦女等坐してタンムズのために哭をる 彼われに言たまふ人の子よ汝これを見るや又身を轉らせよ汝これよりも大なる憎むべき事等を見ん

彼また我を携てエホバの家の内庭にいたるにエホバの宮の入口にて廊と壇の間に二十五人ばかりの人その後をエホバの宮にむけ面を東にむけ東にむかひて日の前に身を鞠めをる 彼われに言たまふ人の子よ汝これを見るやユダの家はその此におこなふところの憎むべき事等をもて瑣細き事となすにや亦暴逆を國に充して大に我を怒らす彼等は枝をその鼻につくるなり 然ば我また怒をもて事をなさん吾目はかれらを惜み見ず我かれらを憫まじ彼等大聲にわが耳に呼はるとも我かれらに聴じ

第九章 斯て彼大聲に吾耳に呼はりて言たまふ邑を主どる者等各々剪滅の器具を手にとりて前み來れと即ち北にむかへる上の門の路より六人の者おのおの打壞る器具を手にとりて來る其中に一人布の衣を着筆記人の墨盃を腰におぶる者あり彼等來りて銅の壇の傍に立てり

爰にイスラエルの神の榮光その居るところのケルビムの上より起あがりて家の間にいたり彼の布の衣を着て腰に筆記人の墨盃をおぶる者を呼ぶ 時にエホバかれに言たまひけるは邑の中エルサレムの中を巡れ而して邑の中に行はるところの諸の憎むべき事のために歎き哀しむ人々の類に記號をつけよと 我聞に彼またその他の者等にいひたまふ彼にしたがひて邑を巡りて擊てよ汝等の目人を惜み見るべからず憐れむべからず 老少も童女も童子も婦人も悉く殺すべし然ど身に記號ある者には觸べからず先わが聖所より始めよと彼等すなはち家の前にをりし老人より始む 彼またかれらに言たまふ家を汚し死人をもて庭に充せよ汝等住けよと

彼等すなはち出ゆきて邑の中に人を擊つ 彼等人を擊ちける時我遺されたれば俯伏て叫び言ふ嗚呼主エホバよ汝怒をエルサレムにもらしてイスラエルの殘餘者を悉くほろぼしたまふや

彼われに言たまひけるはイスラエルとユダの家の罪甚だ大なり國には血盈ち邑には邪曲充つ即ち彼等いふエホバは此地を棄てたりエホバは見ざるなりと 然ば亦わが目かれらを惜み見ず我かれらを憐まじ彼らの行ふところを彼等の首に報いん 時にかの布の衣を着て腰に筆記者の墨盃をおぶる人復命まうして言ふ汝が我に命じたまひしごとく爲たりと

第一〇章 茲に我見しにケルビムの首の上なる穹蒼に青玉のごとき者ありて寶位の形に見ゆ彼のケルビムに入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

入る時ケルビムは家の右に立をり雲その内庭に盈り 茲にエホバの榮光ケルビムの上より昇りて家の間にいたる又家には雲滿ちその庭にはエホバの榮光の輝光盈てり 時にケルビムの羽背外庭に開ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし 彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに 一のケルプその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をか

の布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルプの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが 其人の

ケルビムすなはち昇れり是わがケバル河の邊にて見たるところの生物なり
ケルビム行く時は輪もその傍に行きケルビム翼をあげて地より飛上る時は輪またその傍を離れず
その立つときは立ちその上る時は俱に上れりその生物の靈は其等の中にあり

時にエホバの榮光家の園より出ゆきてケルビムの上に立ちければ
ケルビムすなはちその翼をあげ出ゆきてわが目の前にて地より飛のぼれり輪はその傍にあり而して遂にエホバの家の東の門の入口にいたりて止る
イスラエルの神の榮光その上にあり

是すなはち吾がケバル河の邊にてイスラエルの神の下に見たるところの生物なり吾そのケルビムなるを知れり
是等には各々四宛の面あり各箇四の翼あり又人の手のごとき物その翼の下にあり
その面の形は吾がケバル河の邊にて見たるところの面なりその姿も身も然り各箇その面にしたがひて行けり

第二章

茲に靈我を擧げてエホバの室の東の門に我を携へゆけり門は東に向ふ視るにその門の入口に二十五人の人あり我その中にアズルの子ヤザニヤおよびベナヤの子ペラテア即ち民の牧伯等を見る
彼われに言たまひけるは人の子よ此邑において惡き事を考へ惡き計謀をめぐらす者は此人なり
彼等いふ家を建てることは近からず此邑は鋼にして我儕は肉なりと
是故にかれらに預言せよ人の子よ預言すべし

時にエホバの靈わが上に降りて我にいひたまひけるはエホバかく言ふと言べしイスラエルの家よ汝等は斯いへり汝等の心におこる所の事は我これを知るなり
汝等は此邑に殺さるゝ者を増し死人をもて街衢に充せり
是故に主エホバ斯いふ汝等が邑の中に置くところのその殺されし者はすなはち肉にして邑は鋼なり然ど人邑の中より汝等を曳いだすべし
汝等は刀劍を懼る我劍を汝等にのぞましめんと主エホバいひたまふ
我なんぢらを其中よりひき出し外國人の手に付して汝等に罰をかうむらすべし
汝等は劍に踏れん我イスラエルの境にて汝等を罰すべし汝等は是によりてわがエホバなるを知るにいたらん
是は汝らの鋼とならず汝らはその中の

肉たることを得ざるなりイスラエルの境にて我汝らに罰をかうむらすべし
汝ら即ちわがエホバなるを知にいたらん汝らはわが憲法に遵はずわが律法を行はずしてその周圍の外國人の慣例のごとくに事をなせり
斯てわが預言しをる時にベナヤの子ペラテア死たれば我俯向に伏て大聲に叫び嗚呼主エホバよイスラエルの遺餘者を盡く滅ぼさんとしたまふやといふに

エホバの言われに臨みていふ
人の子よ汝の兄弟汝の兄弟たる者は汝の親族の人々にして即ちイスラエルの全家全族なりエルサレムに居る人々は是にむかひて汝等は遠くエホバをはなれて居れ此地はわれらの所有としてあたへらると言ふ
是故に汝言ふべしエホバかく言ひたまふ我かれらを遠く逐やりて國々に散したればその往る國々に於て暫時の間かれらの聖所となると
是故に言ふべし主エホバかく言たまふ我なんぢらを諸の民の中より集へ汝等をその散されたる國々より聚めてイスラエルの地を汝らに與へん
彼等は彼處に到りその諸の汚たる者とその諸の憎むべき者を彼處より取除かん
我かれらに唯一の心を與へ新しき靈を汝らの衷に賦けん我かれらの身の中より石の心を取さりて肉の心を與へ
彼らをしてわが憲法に遵はしめ吾律法を守りて之を行はしむべし彼らはわが民となり我はかれらの神とならん
然どその汚れたる者とその憎むべき者の心をもておのれの心となす者等は我これが行ふところをその首に報ゆべし主エホバこれを言ふ

茲にケルビムその翼をあぐ輪その傍にありイスラエルの神の榮光その上に在す
エホバの榮光つひに邑の中より昇りて邑の東の山に立てり
時に靈われを擧げ神の靈に由りて異象の中に我をカルデヤに携へゆきて俘囚者の所にいたらしむ吾見たる異象すなはちわれを離れて昇れり
かくて我エホバの我にしめしたまひし言を盡く俘囚者に告たり

第二章

エホバの言また我にのぞみて云ふ
人の子よ汝は背展る家の中に居る彼等は見る目あれども見ず聞く耳あれども聞かず背展る家なり
然ば人の子よ移住の器具を備へかれらの目の前にて靈の中に

移れ彼らの目の前にて汝の處より他の處に移るべし彼等は背戻る家なれども或は見て考ふことあらん
汝移住の器具のごとき器具を彼等の目の前にて晝の中に持たせ而して移住者の出ゆくごとく彼等の目の
前にて宵の中に出ゆくべし 即ちかれらの目の前にて壁をやぶりて之を其處より持たせ 彼らの目の前に
てこれを肩に負ひ黑暗中の中にこれを持たすべし汝の面を掩へ地を見るなれ我汝を豫兆となしてイスラエルの
家に示すなり

我すなはち命ぜられしごとく爲し移住の器具のごとき器具を晝の中に持たせ又宵に手をもて壁をやぶり
黑暗中の中にこれを持たせし彼らの目の前にてこれを肩に負り

明日におよびてエホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ背戻る家なるイスラエルの家汝にむかひて汝
なにを爲やと言しにあらすや 汝かれらに言ふべし主エホバかく言たまふこの負荷はエルサレムの君主および
彼等の中なるイスラエルの全家に當るなり 汝また言ふべし我は汝等の豫兆なりわが爲るごとく彼等然なるべ
し彼等は據へうつされん 彼らの中の君主たる者黑暗中のうちに物を肩に載て出ゆかん彼等壁をやぶりて其處よ
り物を持たすべし彼はその面を覆ひて土地を目に見ざらん 我わが網を彼の上に打かけん彼はわが羅にかゝ
るべし我かれをカルデヤ人の地に曳ゆきてバビロンにいたらしめん然れども彼はこれを見ずして其處に死べし

凡て彼の四周にありて彼を助くる者およびその軍兵は皆我これを四方に散じ刀刃をぬきて其後をおふべし
吾がかれらを諸の民の中に散し國々に撒布さん時にいたりて彼らは我のエホバなるをしるべし 但し我か
れらの中に僅少の人を遺して剣と鐵鎗と疫病を免かれしめ彼らをしてそのおこなひし諸の憎むべき事をその到
るところの民の中に述しめん彼等はわがエホバなるを知るにいたらん

エホバの言また我にのぞみて言ふ 人の子よ汝發震て食物を食ひ戰慄と恐懼をもて水を飲め 而して
この地の民に言べし主エホバ、エルサレムの民のイスラエルにをる者に斯いひたまふ彼等は懼れて食物を食ひ驚

きて水を飲にいたるべし是はその地凡てその中に住る者の暴逆のために富饒をうしなひて荒地となるが故なり
人の住る邑々は荒はて國は滅亡ぶべし汝等すなはち我がエホバなるを知ん

エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よイスラエルの國の中に汝等いふ日は延び黙示はみな空しくなれ
りとは何の言ぞや 是故に汝彼等に言べし主エホバかくいひ給ふ我この言を止め彼等をして再びこれをイスラ
エルの中に言ことなからしめん即ち汝かれらに言へ其日とその諸の黙示の言は近づけりと イスラエルの家に
は此後重ねて空浮き黙示と虚偽の占卜あらざるべし 夫我はエホバなり我わが言をいださん吾いふところは必
ず成んかかねて延ることあらじ背戻る家よ汝等が世にある日に我言を發して之を成すべし主エホバこれを言ふ

エホバの言また我にのぞみて言ふ 人の子よ視よイスラエルの家言ふ彼が見たる黙示は許多の日の後の
事にして彼は遙後の事を預言するのみと 是故にかれらに言ふべし主エホバかくいひたまふ我言はみな重ねて
延す吾がいへる言は成べしと主エホバこれを言ふなり

第一三章
エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ預言を事とするイスラエルの預言者にむかひて預言せ
よ彼のおのれの心のまゝに預言する者等に言ふべし汝らエホバの言を聴け 主エホバかくいひ給
ふ彼の何をも見ずして己の心のまゝに行ふところの愚なる預言者は 禍なるかな イスラエルよ汝の預言者は
荒地にをる狐のごとくなり 汝等は破壤口を守らずまたイスラエルの家の四周に石垣を築きてエホバの日に防
ぎ戦はんともせざるなり 彼らは虚浮物および虚妄の占卜を見る彼等はエホバいひたまふと言ふといへどもエ
ホバはかれらを遺さざるなり然るに彼らその言の成らんことを望む 汝らは空しき異象を見虚妄の占卜を宣べ
吾が言ふことあらざるにエホバいひ給ふと言ふにあらすや

是故に主エホバかくいひたまふ汝等空虚き事を言ひ虚偽の物を見るによりて我なんぢらを罰せん主エホバ
これをいふ 我手はかの虚浮き事を見虚偽の事をトひいふところの預言者等に加はるべし彼等はわが民の會に

なきに至らん時には 主エホバ言ふ我は活く此三人そこをるもその子女を救ふことをえず只その身を救ふことを得るのみ國は荒野となるべし 又は我劍を國に臨ませて劍よ國を行めぐるべしと言ひ人と畜をそこより絶さん時には 主エホバ言ふ我は活く此三人そこをるもその子女をすくふことをえず只その身をすくふことを得るのみ 又はわれ疫癘を國におくり血をもてわが怒をその上にそゞぎ人と畜をそこより絶さん時には 主エホバ言ふ我は活くノア、ダニエル、ヨブそこをるもその子女を救ふことをえず只その義によりて己の生命を救ふことを得るのみ

主エホバかくいひたまふ然ばわが四箇の嚴き罰すなはち劍と饑饉と悪き獸と疫癘をエルサレムにおくりて人と畜をそこより絶さんとする時は如何にぞや 其中に逃れて遺るところの男子女子あり彼等携へ去らるべし彼ら出ゆきて汝等の所にいたらん汝らかれらの行爲と舉動を見れば吾がエルサレムに災をくだせし事につきて心をやすむるにいたるべし 汝ら彼らの行爲と舉動を見ればこれがためにその心をやすむるにいたりわがこれに爲たる事は皆故なくして爲たるにあらざるなるをしるにいたらん主エホバこれを言ふ

第一章

エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ葡萄の樹森の中にあるところの葡萄の枝なんぞ他の樹に勝るところあらんや 其木物をつくるに用ふべけんや又人これを用て器をかくる木釘を造らんや 視よ是は火に投いれられて燃ゆ火もしその兩の端を焼くあり又その中間焦たらば争でか物をつくるに勝べけんや 是はその全かる時すらも物を造るに用ふべからざれば況て火のこれを焚焦したる時には争で物をつくるに用ふべけんや 是故に主エホバかく言たまふ我森の樹の中なる葡萄の樹を火になげいれて焚く如くにエルサレムの民をも然するなり 我面をかれらに向て攻む彼らは火の中より出たれども火なほこれを焼つくすべし我面をかれらにむけて攻むる時に汝らは我のエホバなるをしらん 彼等悖逆の事をおこなひしに由て我かの地を荒地となすべし主エホバこれを言ふ

第一章

エホバの言また我にのぞみて言ふ 人の子よエルサレムに其憎むべき事等を示して 言ふべし主エホバ、エルサレムに斯いひたまふ汝の起本汝の誕生はカナンの地なり汝の父はアモリ人汝の母はヘテ人なり 汝の誕生を言んに汝の生れし日に汝の臍帯を断ことなく又水にて汝を洗ひ潔むることなく鹽をもて汝を擦ることなく又布に裹むことなかりき 一人も汝を憐み見憫をもて是等の事の一をも汝になせし者なし汝の生れたる日に人汝の生命を忌て汝を野原に棄たり

第二章

我汝のかたはらを通りし時汝が血の中をりて踐るゝを見汝が血の中にある時汝に生よと言ひ即ち我なんぢが血の中にある時に汝に生よといへり 我野の百卉のごとくになんぢを増して千萬となせり汝は生長て大きくなり美しき姿となるにいたり乳は堅くなり髪は長たりしが衣なくして裸なりき 茲に我汝の傍を通りて汝を見に今は汝の時汝の愛せらるべき時なりければ我衣服の裾をもて汝を覆ひ汝の恥るところを蔽し而して汝に誓ひ汝に契約をたてたり汝すなはち吾所屬となれり主エホバこれを言ふ 斯て我水をもてなんぢを洗ひ汝の血を滌きおとして膏を汝にぬり 文繡あるものを著せ皮の鞋を穿たしめ細布を蒙らせ絹をもて汝の身を罩めり 而して飾物をもて汝をかざり腕環をなんぢの手にはめ金索を汝の項にかけしめ 鼻には鼻環耳には耳環首には華美なる冠冕をほどこせり 汝すなはち金銀をもて身を飾り細布と絹および文繡をその衣服となし麥粉と蜜と油とを食へり汝は甚だ美しくして遂に榮えて王の權勢に進みいたる 汝の美貌のために汝の名は國國にひろまれり是わが汝にほどこせしわれの飾物によりて汝の美麗極りたればなり主エホバこれを言ふ 然るに汝その美麗を恃み汝の名によりて姦淫をおこなひ凡て其傍を過る者と姦淫をなしたり是そ

の人の所屬となる 汝おれの衣服をとりて崇邱を彩り作りその上に姦淫をおこなへり是爲べからず有べからざる事なり 汝はわが汝にあたへし金銀の飾の品を取り男の像を造りて之と姦淫をおこなひ 汝の繡衣を取りて之に纏ひ吾の膏と香をその前に陳へ 亦わが汝にあたへし我の食物我が川ひて汝をやしなふところの

三〇 麥粉油および蜜を其前に陳へて馨しき香氣となせり是事ありしと主エホバいひたまふ 汝またおのれの我に生
三二 たる男子女子をとりてこれをその像にそなへて食はしむ汝が姦淫なほ小き事なるや 汝わが子等を殺し亦火の
三三 中を通らしめてこれに獻ぐ 汝その諸の憎むべき事とその姦淫とおこなふに當りて汝が若かりし日に衣なく
三四 して裸なりしことおよび汝が血のうちにをりて蹈れしことを想はざるなり

三五 主エホバまた言たまふ汝は禍なるかな禍なるかな 汝その諸の悪をおこなひし後街衢街衢に樓を
三六 しつらひ臺を造り また路の辻々に臺をつくりて汝の美麗を汚辱むることを爲し凡て 傍を通るところの者に
三七 足をひらきて大に姦淫をおこなふ 汝かの肉の大なる汝の隣人エジプトの人々と姦淫をおこなひ大に姦淫をな
三八 して我を怒らせたれば 我手を汝の上のべて汝のたまはる分を減し彼の汝を惡み汝の淫なる行爲を羞るとこ
三九 ろのペリシテ人の女等の心に汝をまかせたり 然るに汝は厭ことなければ亦アツスリヤの人々と姦淫をおこな
四〇 ひしが之と姦淫をおこなひたるも尙厭ことなかりき 汝また大に姦淫をおこなひてカナンの國カルテヤに迄お
四一 よびしが是にても尙厭ことなし

四二 主エホバいひたまふ汝の心如何に戀煩ふにや汝この 諸の事を爲り是氣隨なる遊女の行爲なり 汝道の
四三 辻々に樓をしつらひ衢々に臺を造りしが金錢を輕んじたれば娼妓のごとくならずき 夫淫婦はその夫のほ
四四 かに他人と通するなり 人は凡て娼妓に物を贈るなるに汝はその 諸の戀人に物をおくり且汝と姦淫せんとて
四五 四方より汝に來る者に報金を與ふ 汝は姦淫をおこなふに當りて他の婦と反す即ち人汝を戀求むるにあらざる
四六 なり汝金錢を人にあたへて人金錢を汝にあたへざるは是の相反する所なり

四七 然ば娼妓よエホバの言を聴け 主エホバかく言たまふ汝金銀を撒散し且汝の戀人と姦淫して汝の恥處を
四八 露したるに由り又汝の憎むべき 諸の偶像と汝が之にさへけたる汝の子等の血の故により 視よ我なんぢが交
四九 れる諸の戀人および凡て汝が戀たる者並に凡て汝が惡みたる者を集め四方よりかれらを汝の所に集め汝の恥處

五〇 を彼らに現さん彼ら汝の恥處を悉く見るべし 我姦淫を爲せる婦および血をながせる婦を鞠くがごとくに
五二 汝を鞠き汝をして忿怒と嫉妬の血とならしむべし 我汝を彼等の手に付せば彼等汝の樓を毀ち汝の臺を倒し
五三 なんぢの衣服を褰取り汝の美しき飾を奪ひ汝をして衣服なからしめ裸にならしむべし 彼等群衆をひきゐて汝
五四 の所にのぼり石をもて汝を撃ち劍をもて汝を切さき 火をもて汝の家を焚き多くの婦女の目の前にて汝を鞠か
五五 ん斯われ汝をして姦淫を止しむべし汝は亦たよび金錢をあたふることなからん 我こゝに於て汝に對するわ
五六 が怒を息め汝にかゝはるわが嫉妬を去り心をやすんじて復怒らざらん 主エホバいひたまふ汝その若かりし日
五七 の事を記憶えずしてこの 諸の事をもて我を怒らせたれば視よ我も汝の行ふところを汝の首に報ゆべし汝その
五八 諸の憎むべき事の上に此惡事をなしたるにあらざるなり

五九 視よ諺語をもちふる者みな汝を指てこの諺を用ひ言ん母のごとくに女も然りと 汝の母はその夫と子女
六〇 を棄たり汝はその女なり汝の姉妹はその夫と子女を棄たり汝はその姉妹なり汝の母はヘテ人汝の父はアモリ人な
六一 り 汝の姉はサマリヤなり彼その女子等とともに汝の左に住む汝の妹はソドムなり彼その女子等とともに汝の
六二 右に住む 汝は只少しく彼らの道に歩み彼らの憎むべきところの事等を行ひしのみならず汝の爲る事は皆か
六三 れらのよりも惡かりき 主エホバ言たまふ我は活く汝の妹ソドムと其女子らが爲しところは汝とその女子らが
六四 爲しところの如くはあらざりき 汝の妹ソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽きその女子らとともに安泰にを
六五 り而して難める者と貪き者を助けざりき かれらは傲りわが前に憎むべき事をなしたれば我見てかれらを掃ひ
六六 除けり サマリヤは汝の罪の半分ほど罪を犯さざりき汝は憎むべき事等を彼らよりも多く行ひ増し汝の爲た
六七 る 諸の憎むべき事のために汝の姉妹等をして義きが如くならしめたり 然ば汝が曾てその姉妹等の義るべき
六八 者と定めたるところの恥辱を汝もまた蒙れよ汝が彼等よりも多くの憎むべき事をなしたるその罪の爲に彼等は汝
六九 よりも義くなれり然ば汝も辱を受け恥を蒙れ是は汝その姉妹等を義き者となしたればなり

三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

我ソドムとその女等の俘囚をかへしサマリヤとその女等の俘囚をかへさん時に其と同じく擄はれたる汝の俘囚人を歸し 汝をして恥を蒙らしめ汝が凡て爲たるところの事を羞しむべし汝かく彼らの慰とならん 汝の姉妹ソドムとその女子等は舊の様に歸りサマリヤとその女子等は舊の様に歸らん又汝と汝の女子等も舊の様にかへるべし 汝はその驕傲れる日には汝の姉妹ソドムの事を口に述ざりき 汝の惡の露れし時まで即ちスリアの女子等と凡て汝の周圍の者ベリシテ人の女等が四方より汝を擄りて辱しめし時まで汝は是のこことくなりき エホバいひたまふ汝の淫なる行爲と汝のもろもろの憎むべき事とは汝みづからこれを身に負ふなり 主エホバかく言たまふ誓言を輕んじて契約をやぶりたるところの汝には我汝の爲る所にしたがひて爲べし 我汝の若かりし日に汝になせし契約を記憶え汝と限りなき契約をたてん 汝その姉妹の汝より大なる者と小き者とを得る時にはおのれの行爲をおぼえて羞ん彼等は汝の契約に屬する者にあらざれども我かれらを汝にあたへて女となさしむべし 我汝と契約をたてん汝すなはち吾のエホバなるを知にいたらん 我なんぢの凡て行ひし所の事を赦す時には汝憶えて羞ぢその恥辱のために再び口を開くことなかるべし主エホバこれを言ふ

第一七章 爰にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よ汝イスラエルの家に謎をかけ誓言を語りて 言の梢を探り 其芽の巔を摘みカナンの地にこれを持ちたりて商人の邑に置きけるが 又その地の種をとりて之を種田に播けりすなはち之を水の多き處にもちゆきて柳のごとくにこれを樹しに 成長ちて文車き垂さがりたる葡萄樹となり其枝は驚にむかひその根は驚の下にあり遂に葡萄樹となりて芽をふき葉を出す 此に又大なる翼多くの羽ある一箇の大鷲ありしがその葡萄樹根をこれにむかひて張り枝をこれにむかひて伸べ之をしてその植りたる地の外より水を灌がしめんとす 抑是を善き圖に多くの水の旁に植たるは根を張り實をむすびて盛なる葡萄樹とならしめんためなりき なんぢ主エホバかく言ふといふべし是は旺盛になるや

一〇 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三

驚その根を抜きその果を絶ちて之を枯しめざらんや其芽の若葉は皆枯ん之を根より擧るには強き腕と多くの人をを用ふるにおよばざるなり 是は植られたれども旺盛にならんや東風これに當らば枯果ざらんや是はその生たるところの地に枯べし

二一 エホバの言また我にのぞみて言ふ 背ける家に言ふべし汝等此の何たるを知ざるかと又言へ視よバビロンの王エルサルムに來りその王とその牧伯等を執へてこれをバビロンに曳ゆけり 彼また王の族の一人を取てこれと契約を立て誓言をなさしめ又國の強き者等を執へゆけり 是はこの國を卑くして自ら立つことを得ざらしめその人をして契約を守りてこれを堅うせしめんがためなりき 然るに彼これに背きて使者をエジプトに遣し馬と多くの人を己におくらしめんとせり彼旺盛にならんや是を爲る者逃るゝことをえんや彼その契約をやぶりたり争で逃るゝことを得んや 主エホバいひたまふ我は活く必ず彼は己を王となしたる彼王の處に借にをりてバビロンに死べし彼その王の誓言を輕んじ其契約を破りたるなり 夫壘を築き雲梯を建て衆多の人を殺さんとする時にはバロ大なる軍勢と衆多の人をもて彼のために戦争をなさじ 彼は誓言を輕んじて契約を破る彼手を與へて却て此等の事をなしたれば逃るゝことを得ざるべし 故に主エホバかく言たまふ我は活く彼が我の誓言を輕んじ我の契約をやぶりたる事を必ずかれの首にむくいん 我わが網をかれの上のうちかけ彼をわが羅にとらへてバビロンに曳ゆき彼が我にむかひて爲しところの叛逆につきて彼を鞠くべし 彼の諸の軍隊の逃脱者は皆刀に仆れ生残れる者は八方に散ざるべし汝等是我エホバがこれを言しなるを知にいたらん

二三 主エホバかく言たまふ我高き香柏の梢の一を取てこれを樹あるその芽の巔より若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹べし イスラエルの高山に我これを植ん是は枝を生じ果をむすびて榮華なる香柏となり 諸の類の鳥皆その下に棲ひその枝の蔭に住はん 是に於て野の樹みな我エホバが高き樹を卑くし卑き樹を高くし線なる樹を枯しめ枯木を緑ならしめしことを知ん我エホバこれを言ひ之を爲なり

第一章

エホバの言また我にのぞみて言ふ 汝等なんぞイスラエルの地に於て此諺語を用ひ父等酸き葡萄を食ひたれば子等の齒齧くと云ふや 主エホバいふ我は生く汝等ふたゝびイスラエルに於てこの諺語をもちふることなかるべし 夫凡の靈魂は我に屬す父の靈魂も子の靈魂も我に屬するなり罪を犯せる靈魂は死べし

若人正義して公道と公義を行ひ 山の上に食をなさず目をあけてイスラエルの家の偶像を仰がず人の妻を犯さず穢れたる婦女に近づかず 何人をも虐げず質物を還し物を奪はずその食物を飢る者に與へ裸なる者に衣を著せ 利を取て貸さず息を取す手をひきて悪を行はず眞實の判断を人と人の間になし わが法憲にあゆみ又吾が律例を守りて眞實をおこなはば是義者なり彼は生べし主エホバこれを言ふ

然ど彼子を生んにその子暴き者にして人の血をながし是の如き事の一箇を行ひ 是をば凡て行はずして山の上に食をなし人の妻を犯し 惱める者と貧き者を虐げ物を奪ひ質物を還さず目をあけて偶像を仰ぎ憎むべき事をおこなひ 利をとりて貸し息を取ば彼は生べきや彼は生べからず彼の諸の憎むべき事をなしたれば必ず死べしその血はかれに歸せん

又子生れんに其子父のなせる諸の罪を視しかども視て斯有ことを行はず 山の上に食をなさず目をあけてイスラエルの家の偶像を仰がず人の妻を犯さず 何人をも虐げず質物を存留めず物を奪はず飢る者にその食物を與へ裸なる者に衣を著せ 其の手をひきて惱める者を苦めず利と息を取すわが律法を行ひわが法度に歩まば彼はその父の惡のために死ことあらじ必ず生べし 其の父は甚だしく人を掠めその兄弟を痛く虐げその民の中に善らぬ事をなしたるに由てその惡のために死べし

しかるに汝等は子なんぞ父の惡を負ざるやと言ふ夫子は律法と公義を行ひわが凡ての法度を守りてこれを行ひたれば必ず生べし 罪を犯せる靈魂は死べし子は父の惡を負はず父は子の惡を負ざるなり義人の義はその人に歸し惡人の惡はその人に歸すべし

然ど惡人もしその凡て行ひしところの惡を離れわが諸の法度を守り律法と公義を行ひなばかならず生んぞざるべし 其の爲しところの咎は皆記念られざるべし其の爲し義き事のために彼は生べし 主エホバ言たまふ我争で惡人の死を好まんや事彼がその道を離れて生んことを好まざらんや 若義人その義をはなれて惡を行ひ惡人の爲る諸の憎むべき事をなさば生べきや其なせし義き事は皆記念られざるべし彼は其の爲る咎とその犯せる罪とのために死べし

然るに汝等主の道は正しからずと言ふ然ばイスラエルの家よ聽け吾道正しからざるやその正しからざる者は汝らの道にあらずや 若義人その義をはなれて惡を爲し其がために死ることあらば是の爲る惡のために死るなり 若惡人その爲る惡をはなれて律法と公義を行はば其の靈魂を生しむることをえん 彼もし視てその行ひし諸の咎を離れなば必ず生ん死ざるべし 然るにイスラエルの家は主の道は正しからずといふイスラエルの家よわが道正しからざるやその正しからざる者は汝らの道にあらずや 主エホバいひたまふ是故に我汝ら

をば各その道にしたがひて審くべし汝らその諸の咎を悔改めよ然らば惡汝らを覆かせて滅すことなかるべし 汝等その行ひし諸の罪を棄去り新しき心と新しき靈魂を起すべしイスラエルの家よ汝らなんぞ死べけんや 我は死者の死を好まざるなり然ば汝ら悔て生よ主エホバこれを言ふ

汝イスラエルの君等のために哀の詞をのべて 言ふべし汝の母なる牝獅は何故に牝獅の中に人を食へり 國々の人これの事を聞きこれを陷阱にて執へ鼻環をほどこしてこれをエジプトの地にひきいたれり 牝獅姑く待しがその望を失ひしを見れば又一個の子を取てこれを小獅とならしむ 是すなはち牝獅の中に歩みて小獅となり食を攫ことを學ひしが亦人を食ひ 其寡婦をしりその邑々を滅せりその咆哮聲によりて

第一章

汝イスラエルの君等のために哀の詞をのべて 言ふべし汝の母なる牝獅は何故に牝獅の中に人を食へり 國々の人これの事を聞きこれを陷阱にて執へ鼻環をほどこしてこれをエジプトの地にひきいたれり 牝獅姑く待しがその望を失ひしを見れば又一個の子を取てこれを小獅とならしむ 是すなはち牝獅の中に歩みて小獅となり食を攫ことを學ひしが亦人を食ひ 其寡婦をしりその邑々を滅せりその咆哮聲によりて

その地とその中に盈る者荒たり 是をもて四方の國人その國々より攻來り網をこれにうちかけ陷阱にてこれを執へ 鼻環をほどこして籠にいれ之をバビロンの王の許に曳いたりて城の中に携へ入れ其聲を再びイスラエルの山々に聞えざらしむ

汝の母は汝の血にして水の側に植たる葡萄樹のごとし水の多きがために結實多く葉はびこり 是に強き枝ありて君王等の杖となすべし是の長は雲に至りその衆多の枝のために高く聳えて見えたり 然るに是怒をもて抜れて地に擲たる東風その實を吹乾かしその強き枝は折れて枯れ火に焚る 今これは荒野にて乾ける水なき地に植りてあり 其の枝の芽より火いでてその果を焼けば復強き枝の君王等の杖となるべき者其になし是哀の詞なり 哀の詞となるべし

第二〇章

七年の五月十日にイスラエルの長老の中の人々エホバに問んとて來りてわが前に坐しけるに 言ふ汝等我に問んとて來れるや主エホバいふ我は活く我汝らの問を容じと 汝かれらを鞫かんとするや人の子よ汝かれらを鞫かんとするや彼等の先祖等のなしたる憎むべき事等をかれらに知しめて 言べし主エホバかくいふ我イスラエルを選びヤコブの家の裔にむかひてわが手をあげエジプトの地にて我をかれらに知せかれらにむかひて吾手をあげて我は汝らの神エホバなりと言し日 其の日に我かれらにむかひて吾手をあげエジプトの地よりかれらをいだし吾がかれらのために求め得たるその乳と蜜の流るゝ地に導かんとせり是諸の地の中の美しき者なり 而して我かれらに言けらく各人その目にあるところの憎むべき事等を棄てよエジプトの偶像をもてその身を汚すなかれ我は汝らの神エホバなりと 然るに彼らは我に背きて我に聽したがふことを好まさりき 彼等一人もその目にあるところの憎むべき者を棄てずエジプトの偶像を棄てざりしかば我エジプトの地の中において吾憤恨をかれらに注ぎわが忿怒をかれらに洩さんと語り 然れども我わが名のために事をなして彼らをエ

ジプトの地より導きいだせり是吾名の異邦人等の前に汚されざらんためなりその異邦人等の中に彼等居り又その前にて我おのれを彼等に知せたり

すなはち我エジプトの地より彼等を導き出して曠野に携ゆき わが法憲をこれに投げわが律法をこれに示せり是は人の行ひて之に由て生べき者なり 我また彼らに安息日を與へて我と彼らの間の徴となしかれらをして吾エホバが彼らを聖別しを知しめんとせり 然るにイスラエルの家は曠野にて我に背き人の行ひて之によりて生べき者なるわが法度にあゆまず吾が律法を輕んじ大に吾が安息日を汚したれば曠野にてわが憤恨をかれらに注ぎてこれを滅さんと言ひたりしが 我わが名のために事をなせり是わが彼らを導きいだして見せしところの異邦人等の目のまへにわが名を汚されざらしめんためなりき 但し我曠野にて彼らにむかひて吾手をあげ彼らをわが與へしその乳と蜜の流るゝ地に導かじと誓へり是は諸の地の中の美しき者なり 是かれら心にその偶像を慕ひてわが律法を輕んじ棄てわが法憲にあゆまずわが安息日を汚したればなり 然りとはいへども吾かれらを惜み見てかれらを滅さず曠野にて彼らを絶えりき

我曠野にてかれらの子等に語り汝らの父の法度にあゆむなかれ汝らの律法を守るなかれ汝らの偶像をもて汝らの身を汚すなかれ 我は汝らの神エホバなり吾法度にあゆみ吾律法を守りてこれを行ひ わが安息日を聖くせよ是は我と汝らの間の徴となりて汝らをして我が汝らの神エホバなるを知しめんと 然るにその子等我にそむき人の行ひてこれによりて活べき者なるんが法度にあゆまず吾律法をまもりて之をおこなはずわが安息日を汚したれば我わが憤恨を彼らにそゞ曠野にてわが忿怒をかれらに洩さんと言たりしが 吾手を翳してわが名のために事をなせり是わが彼らを導き出して見せしところの異邦人等の目のまへにわが名を汚されざらしめんためなりき 但し我汝らを國々に散し處々に撒んと曠野にてかれらにむかひて我手を舉たり 是かれらわが律法を行はずわが法度を輕んじわが安息日をけがしその父の偶像を目に慕ひたればなり 我かれらに善らぬ

法度を與へかれらが由て活べからざる律法を與へ 彼らをしてその禮物によりて己の身を汚さしむ即ちかれら
その長子をして火の中を通過しめたり是は我彼らを滅し彼らをして我のエホバなるを知しめんためなり

然ば人の子よイスラエルの家につけて之にいふべし主エホバかくいひたまふ彼らの父等は更にまた不忠の
罪をかし我を演せり 我わが彼らに與へんと手をあげし此地にかれらを導きいれしに彼ら諸の高丘と諸の茂
樹を奪ね得てその權性を其處に供へその憤らしき禮物をそこに獻げその馨しき佳氣をそこに奉つりその神酒を
そこに灌げり 我かれらに語り汝らが往ところの崇き處は何なるやと其名は今日にいたるまでバマと言ふなり

この故にイスラエルの家にいふべし主エホバかくいひたまふ汝らの先祖の途をもて汝らはその身を汚し彼等
の憎むべき物をしたひてこれと姦淫を行ふにあらすや 汝等はその禮物を獻げその子女に火の中を通らしめて
今日にいたるまで汝らの諸の偶像をもてその身を汚すなり然ばイスラエルの家よ我なんぢらの間を容べけんや
主エホバいふ我は活く我は汝らの間を容ざるなり 汝ら我儕は木と石に事へて異邦人の如くなり國々の宗族の
ごとくならんと言は汝らの心に起るところの事は必ず成ざるべし

主エホバいふ我は生く我かならず強き手と伸たる腕をもて怒を注ぎて汝らを治めん 我強き手と伸たる
腕をもて怒を注ぎて汝らを國々より曳いだし汝らが散されたる處々より汝らを集め 國々の曠野に汝らを集め
其處にて面をあはせて汝らを鞫かん 主エホバいふ我エジプトの曠野にて汝らの先祖等を鞫しごとくに汝ら
を鞫くべし 我なんぢらをして杖の下を通らしめ契約の索に汝らを入しめ 汝らの中より背ける者および我
に悖れる者を別たんその寓れる地より我かれらをいだすべし彼らはイスラエルの地に來らざるべし汝らすなはち
我のエホバなるを知ん 然ばイスラエルの家よ主エホバかくいふ汝等のおの往てその偶像に事へよ然ど後に
は汝らかならず我に聽て重てその禮物と偶像をもてわが名を汚さざるべし
主エホバいふ吾が聖山の上イスラエルの高山の上にてイスラエルの全家その地の者皆我に事へん其處にて

我かれらを悦びて受納ん其處にて我なんぢらの獻物および初成の禮物すべて汝らが聖別たる者を求むべし 我
汝らを國々より導き出し汝らが散されたる處々より汝らを集むる時馨しき香氣のごとくに汝らを悦びて受納れ汝
らによりて異邦人等の目のまへに我の聖ことをあらはすべし 我が汝らをイスラエルの地すなはちわが汝らの
先祖等にあたへんと手をあげしところの地にいたらしめん時に汝等は我のエホバなるを知るにいたらん 汝ら
は其身を汚したるところの汝らの途と汝らのもろもの行爲を彼處にて憶え其なしたる 諸の悪き作爲のために
自ら恨み視ん イスラエルの家よ我汝らの悪き途によらず汝らの邪なる作爲によらずして吾名のために汝等を
待はん時に汝らは我のエホバなるを知るにいたらん主エホバこれを言ふなり

エホバの言また我にのぞみて言ふ 人の子よ汝の面を南方に向け南にむかひて言を垂れ南の野の森の事
を預言せよ すなはち南の森にいふべしエホバの言を聽け主エホバかく言ふ視よ我なんぢの中に火を燃さん
是なんぢの中の諸の青樹と諸の枯木を焚べしその烈しき火焰消ることなし南より北まで諸の面これがために燃ん
肉ある者みな我エホバのこれを焼しなるを見ん是は消ざるべし 我是において語り嗚呼主エホバよ人われ
を指て言ふ彼は醫言をもて語るにあらすやと

第二章

エホバの言われにのぞみて言ふ 人の子よ汝の面をエルサレムに向け聖き處々にむかひて言を
垂れイスラエルの地にむかひて預言し イスラエルの地に言ふべしエホバかく言ふ視よ我汝を責
め吾刀を鞘より拔はなし 義者と悪者とを汝の中より絶ん 我義者と悪者とを汝の中より絶んとすればわが
刀鞘より脱出て南より北までの凡て肉ある者を責ん 肉ある者みな我エホバのその刀を鞘より拔はなしをし
らん是は歸りをさまらざるべし 人の子よ腰の碎くるまでに歎き彼らの目のまへにて痛く歎け 人汝に何て
歎くやと言は汝言べし來るところの風聞のためなり心みな鈍け手みな癱へ 魂みな弱り膝みな水とならん視よ事
いたれりかならず成ん主エホバこれを言ふ

三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

この故に主エホバかく言ふアホリバよ我汝が心に疎んずるに至りしところの戀人等を激して汝を攻しめ彼らをして四方より汝に攻きたらしむべし 即ちバビロンの人々およびカルデアの諸の人々ベコデ、シヨワ、コア並にアツスリヤの諸の人々美しき秀たる人々牧伯等および督宰等大君および名高き人凡て馬に騎る者 録車および輪を持ち衆多の民をひきゐて汝に攻め來り大楯小楯および兜をそなへて四方より汝に攻からん我裁判をかれらに委ぬべし彼らすなはち其律法によりて汝を鞠かん 我汝にむかひてわが嫉妬を發すれば彼ら怒をもて汝を待ひ汝の鼻と耳を切るとるべし汝のうちの存れる者は劍に仆れん彼ら汝の子女を奪ふべし汝の中の残れる者は火に焼ん 彼ら汝の衣を剝脱り汝の美しき妝飾を取べし 我汝の淫行を除き汝がエジプトの地より行ひ來れるところの邪淫を除き汝をして重て彼らに目をつけざらしめ再びエジプトの事を憶はざらしめん 主エホバかく言ふ我汝が惡む者の手汝が心に疎する者の手に汝を付せば 彼ら怨憎をもて汝を待ひ汝の得たる物を盡く取り汝を赤裸に成おくべし是をもて汝が淫をおこなへる陰所露にならん汝の淫行と邪淫もしかり

汝異邦人を慕ひて淫をおこなひ彼らの偶像をもて身を汚したるに由て是等の事汝におよぶなり 汝その姉の途に歩みたれば我かれの杯を汝の手に交す 主エホバかく言ふ汝その姉の深き大なる杯を飲べし是は笑と嘲を充す者なり 醉と憂汝に滿ちん汝の姉サマリヤの杯は駭異と滅亡の杯なり 汝これを飲み乾しこれを吸つくしその碎片を咬み汝の乳房を摘去ん我これを言ふと主エホバ言ふ 然ば主エホバかく言ふ汝我を忘れ我を後に棄たれば汝またその淫行と邪淫の罪を負べし

斯てエホバ我にいひたまふ人の子よ汝アホラとアホリバを鞠かんとするや然らば彼らにその憎むべき事等を示せ 夫彼らは姦淫をおこなへり又血その手にあり彼らその偶像と姦淫をおこなひ又その我に生たる男子等に火の中をとほらしめてこれを焼り 加之また是をなせり即ち彼ら同日にわが聖處を汚しわが安息日を犯せり 彼らその偶像のために男子等を宰りしその日にわが聖處に來りてこれを汚し斯わが家の中に事をなせり

四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

且又彼らは使者をやりて遠方より人を招きて至らしむ其人々のために汝身を洗ひ目を畫き妝飾を著け華美なる床に坐し臺盤をその前に備へその上にわが香とわが膏を置り 斯て群衆の喧噪の中に靜りしがその多衆の人々の上にまた曠野よりサバ人を招き寄たり彼らは手に腕環をはめ首に美しき冠を戴けり

我かの姦淫のために衰弱たる女の事を云り今は早彼の姦淫その姦淫をなしをはらんかと 彼らは遊女の所にいるごとくに彼の所に入りたり斯かれらすなはち淫婦アホラとアホリバの所に入ぬ 義人等姦婦の律法に照し故殺の律法に照して彼らを鞠かん彼らは姦婦にしてまたその手に血あればなり 主エホバかく言ふ我群衆を彼等に攻きたらしめ彼らを是に付して 虐と掠にあはしめん 群衆かれらを石にて撃ち劍をもて斬りその子女を殺し火をもてその家を焼べし 斯我この地に邪淫を絶さん婦女みな自ら誓めて汝らのごとくに邪淫をおこなはざるべし 彼ら汝らの邪淫の罪を汝らに報いん汝らはその偶像の罪を負ひ而して我の主エホバなるを知んたるべし

九年の十月十日にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よ汝此日すなはち今日の名を書せバビロン王今日エルサレムを攻るなり 汝背ける家に醫藥をかたりて之に言へ主エホバかく言たまふ釜を居居えてこれに水を斟いれ 其肉の凡て佳き所を集めて股と肩とを之に入れ佳き骨をこれに充し 羊の選擇者を取れ亦薪一束を取り下に入れて骨を煮釜を善く煮たて亦その中の骨を煮よ

是故に主エホバかく言ふ禍なるかな血の流るゝ邑鏽のつきたる釜その鏽これを離れざるなり肉を一箇一箇に取りだせ之がために釜を撃べからず 彼の血はその中にあり彼乾ける磐の上にこれを置りこれを土にそそぎて塵に覆はれしめす 我怒を來らせ仇を復さんがためにその血を乾ける磐の上に置て塵に覆はれざらしめたり 是故に主エホバかく言ふ禍なるかな血の流るゝ邑我またその薪の束を大にすべし 薪を積かさね火を燃し肉を善く煮てこれを煮つくしその骨をも焼しむべし 而して釜を空にして炭火の上に置きその銅をして

熱くなりて焼しめ其汚穢をして中に銷しめその鏽を去しむべし 既に手を盡したれどもその大なる鏽さらさればその鏽を火に投棄べし 汝の汚穢の中に淫行あり我汝を淨めんとしたれども汝淨まらざりに因てわが怒を汝に洩しつくすまでは汝その汚穢をはなれて淨まることあらじ 我エホバこれを言ひ是に至る我これを爲べし止す惜まず悔ざるなり汝の道にしたがひ汝の行爲にしたがひて彼ら汝を鞫かん主エホバこれを言ふ

エホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ我頓死をもて汝の目の喜ぶ者を取去ん汝哀かす泣す涙をながすべからず 聲をたてずして哀け死人のために哀哭をなすなかれ冠物を戴き足に鞋を穿べし鬚を掩ふなかれ人のおくれる食物を食ふべからず 朝に我人々に語りしが夕にわが妻死ねり明朝におよびて我命ぜられしごとくなせり

茲に人々我に言けるは此汝がなすところの事は何の意なるや我らに告ざるや 我かれらに言けるはエホバの言我にのぞみて言ふ イスラエルの家にいふべし主エホバかく言ふ視よ我汝らの勢力の榮汝らの目の喜愛汝らの心の望なるわが聖所を汚さん汝らが遺すところの子女等は劍に仆れん 汝らもわが爲るごとくなし鬚を覆はず人のおくれる食物を食はず 首に冠物を戴き足に履を穿き哀かす泣すその罪の中に瘦衰へて互に呻かん 斯エゼキエル汝らに兆とならん彼がなしたること汝ら爲ん是事の至らん時に汝ら我の主エホバなるを知べし

人の子よわが彼らの力かれらの榮むところの榮その目の喜愛その心の望その子を取去る日 その日に逃亡者汝の許に來り汝の耳に告ることあらん その日に汝逃亡者にむかひて口を啓き語りて再び黙せざらん 斯汝かれらに兆となるべし彼らは遂に我のエホバなるを知ん

第二十五章

エホバの言我に臨みて言ふ 人の子よ汝の面をアンモンの人々に向けこれに向ひて預言しアンモンの人々に言べし汝ら主エホバの言を聴け主エホバかく言ひたまふ汝わが聖處の汚さるゝ

事につきイスラエルの地の荒さるゝ事につき又ユダの家の擡へ移さるゝことにつきて嗚呼心地善しと言ひ 是故に視よ我汝を東方の人々に付して所有と爲しめん彼等汝の中に畜園を設け汝の中にその住宅を建て汝の作物を食ひ汝の乳を飲ん 汝をば我駱駝を繋ふ地となしアンモンの人々の地をば羊の臥す所となすべし汝ら我のエホバなるを知にたらん 主エホバかく言ひたまふ汝イスラエルの地の事を見て手を拍ち足を踏み傲慢を極めて心に喜べり 是故に視よ我わが手を汝に伸べ汝を國々に付して掠奪に遭しめ汝を國民の中より絶ち諸國に斷し滅すべし汝我のエホバなるを知にたらん

主エホバかく言ひたまふモアブとセイル言ふユダの家は他の諸の國と同じと 是故に我モアブの肩を擡くべし即ちその邑々その最遠の邑にして國の莊嚴なるベテエシモテ、パアルメオンおよびキリアタイムよりこれを擡き 之をアンモンの人々に添て東方の人々に與へその所有となさしめアンモンの人々をして國々の中に記憶らるゝこと無しめん 我モアブに鞫を行ふべし彼ら我のエホバなるを知にたらん

主エホバかく言ひたまふエドムは怨恨をふくんでユダの家に事をなし且これに怨を復して大に罪を得たり 是故に主エホバかく言ひたまふ我エドムの上にはわが手を伸して其中より人と畜を絶去り之をアマンより荒地となすべしテダンの者は劍に仆れん 我わが民イスラエルの手をもてエドムにわが仇を報いん彼らわが怒にしたがひわが憤にしたがひてエドムに行ふべしエドム人すなはち我が仇を復すなるを知ん主エホバこれを言ふ

主エホバかく言ひたまふベリシテ人は怨を含みて事をなし心に傲りて仇を復し舊き恨を懐きて滅すことをなせり 是故に主エホバかく言ひたまふ視よ我ベリシテ人の上に手を伸べケレテ人を絶ち海邊に遺れる者を滅すべし 我怒の罰をもて大なる復仇を彼らに爲ん我仇を彼らに復す時に彼らは我のエホバなるを知べし

第二十六章

十一年の月の首の日にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よツロはエルサレムの事につきて言ひ嗚呼心地よし諸の國民の門破る是我に移るならん我は豊滿になるべし彼は荒はてたりと

故に主エホバかく言たまふツロよ我汝を攻め海のその波濤を起すが如く多の國人を汝に攻きたらしむべし 彼らツロの石垣を毀ちその櫓を倒さん我その塵を拂ひ去りて是を乾ける磐と爲べし 是は海の中の網を張る處とならん我これを言はなりと主エホバいひたまふ是は諸の國人に掠めらるべし その野にをる女子等は劍に殺されん彼らすなはち我のエホバなるを知べし

主エホバかく言たまふ視よ我王の王なるバビロンの王ネブカデネザルをして馬車騎兵群衆および多くの民を率て北よりツロに攻きたらしむべし 野にをる汝の女子等をば彼劍にかけて殺し又汝にむかひて雲梯を建て汝にむかひて壘を築き汝にむかひて干を備へ 破城槌を汝の石垣に向けその斧をもて汝の櫓を打碎かん その衆多の馬の煙塵汝を覆はん彼等敵れたる城に入るごとくに汝の門々に入らん時その騎兵と輪と車の聲のために汝の石垣震動べし 彼の馬の蹄をもて汝の諸の櫓を踏あらし劍をもて汝の民を殺さん汝の榮光の柱地に仆るべし 彼ら汝の財寶を奪ひ汝の商貨を掠め汝の石垣を打崩し汝の樂き館を毀ち汝の石と木と土を水に沈めん 我汝の歌の聲を止めん汝の琴の音は復聞えざるべし 我汝を乾ける磐となさん汝は網を張る處となり再び建ことなかるべし我エホバこれを言ふと主エホバ言たまふ

主エホバツロにかく言たまふ島々汝の仆るゝ聲手負の呻吟および汝の中の殺戮によりて震動ざらんや海の君主等皆その座を下り朝服を脱ぎ纏ある衣を去り恐懼を身に纏ひ地に坐し時となく怖れ汝の事を驚かん 彼ら汝の爲に哀の詞を擧て汝に言ふべし汝海より出たる住處名の高き邑自己もその居民も共に海に於て勢力ある者その凡の居民に己を恐れしむる者よ汝如何にして亡びたるや され島々は汝の仆るゝ日に震ひ海の島々は汝の亡ぶるに驚くなり

主エホバかく言たまふ我汝を荒たる邑となし人の住はざる邑々のごとく爲し洋海を沸あがらしめて大水に汝を掩没しめん時 汝を墓に往る者等の所昔時の民の所に下し汝をして下の國に住しめ士昔よりの墟址に於て

彼の墓に下れる者等とともに居しめ汝の中に復人の住こと无らしむべし而して我活る人の地に榮を創造いざさん 我汝をもて人の戒懼となすべし汝は復有ことなし人汝を尋るも終に汝を看ざるべし主エホバこれを言ふなり

第二十七章

エホバの言また我に臨みて言ふ 人の子よ汝ツロのために哀の詞を宣べ ツロに言べし汝海の口に居りて 諸の國人の商人となり多衆の島々に通ふ者よ主エホバかく言たまふツロよ汝言ふ 我の美は極れりと 汝の國は海の中にあり汝を建る者汝の美を盡せり 人セニルの櫓をもて船板を作りレバノンより香柏を取て汝のために櫓を作り 巴シヤンの櫓をもて汝の櫓を作りキツテムの島より至れる黃楊に象牙を嵌て汝の坐板を作り 汝の帆はエジプトより至れる文布にして旗に用ふべし汝の天遮はエリシヤの島より至れる藍と紫の布なり 汝の水手はシドンとアルワデの人なりツロよ汝の中にある賢き者汝の舵師となる ぐバルの老人等およびその賢き者汝の中にをりて汝の漏を繕ひ海の諸の船およびその舟子汝の中にありて汝の貨物を交易す べルシヤ人ルデ人フテ人汝の軍にありて汝の戰士となる彼等汝の中に干と光を懸け汝に光輝を與ふ アルワデの人々および汝の軍勢汝の四周の石垣の上により勇士等汝の櫓にあり彼等汝の四周の石垣にその櫓をかけ汝の美を盡せり

その諸の貨物に富るがためにタルシ汝と商をなし銀鉄錫および鉛をもて汝と交易を爲り ヤワン、トバルおよびメセクは汝の商賈にして人の身と銅の器をもて汝と貿易を行ふ トガルマの族馬と騎馬および驢をもて汝と交易し デダンの人々汝と商をなせり衆の島々汝の手にありて交易し象牙と黒檀をもて汝と貿易せり 汝の製造品の多がためにスリア汝と商をなし赤玉紫貨織貨細布珊瑚および瑪瑙をもて汝と交易す ユダとイスラエルの地汝に商をなしミンニテの麥と菓子と蜜と油と乳香をもて汝と交易す 汝の製造物の多がために諸の貨物の多がためにダマスコ、ハルボンの酒と曝毛をもて汝と交易せり ウザルのベダンとヤワン熱鐵をもて汝と交易す肉桂と葛蒲汝の市にあり デダン車の毛氈を汝に商へり アラビヤ

とケダルの君等とは 汝の手に在りて商をなし 羔羊と牡羊と牡山羊をもて 汝と交易す シバとラアマの商人
 汝と商をなし 諸の貴き香料と諸の寶石と金をもて 汝と交易せり ハランとカンネとエデンとシバの商賈と
 アツスリヤとキルマデ汝と商をなし 華美なる物と紫色なる繡の衣服と香柏の箱の鍍を盛て紐にて結たる
 者をもて 汝の市にあり タルシンの船汝のために往來して 商賈を爲す 汝は海の中にありて 豊滿にして榮あり
 水手汝を瀆て 大水の中にいたるに 海の中に東風汝を打破る 汝の財貨 汝の商貨物 汝の交易の物
 汝の舟子 汝の舵師 汝の漏を繕ふ者 汝の貨物を商ふ者 汝の中にあるところの凡の軍人 並に 汝の中の乗者みな
 汝の壞るゝ日に 海の中に陥るべし 汝の舵師等の叫號の聲に その處々震ふ 凡て棹を執る者 舟子および凡て
 海の舵師その船より下りて 陸に立ち 汝のために 聲を擧て 痛く哭き 塵を首に蒙り 灰の中に轉び 汝のため
 に 髪を剃り 麻布を纏ひ 汝のために 心を痛めて 泣き 甚く哭くべし 彼等悲みて 汝のために 哀の詞を宣べ 汝を
 弔ひて 言ふ 孰かツロの如くなる 海の中に 滅びたる者 の如くなると 汝の商貨の海より 出時は 汝衆多の國民
 を 厭しめ 汝の衆多の財貨と貨物をもて 世の王等を 富しめたりしが 汝海に壞れて 深き水にあらん時は 汝の貨物
 汝の乗人みな 陥らん 島々に 住る者 皆汝に 駭かん その君等大に 恐れて その面を 振はずべし 國々の商賈 汝の
 ために 嘶かん 汝は人の 戒懼となり 限りなく 失果ん

第二十八章

エホバの言われに 臨みて 言ふ 人の子よ ツロの君に 言ふべし 主エホバかく言たまふ 汝の心に 高
 き心を 懷くなり 夫汝は ダニエルよりも 賢かり 隠れたる事として 汝に 明ならざるは 無し 汝の智慧と 明哲
 によりて 汝富を 獲金銀を 汝の庫に 收め 汝の大なる 智慧と 汝の貿易をもて 汝の富有を増し その富有のために 心
 に 高ぶれり 是故に 主エホバかく言ふ 汝神の心のごとき 心を 懷くに 因り 視よ 我異國人を 汝に 攻きたらしめ
 ん 是國々の 暴き人々なり 彼ら 劍を 拔て 汝が 智慧をもて 得たる ところの 美しき者に向ひ 汝の美を 汚し 汝を 穴に

投いれん 汝は 海の中に 殺さるゝ者のごとき 死を 遂べし 汝は 人にして 神に あらず 汝を 殺す者 の手に あるも 尙
 その 己を 殺す者 の前に 我は 神なりと 言んとするや 汝は 刑禮を 受けざる者 の死を 異國人の手に 遂べし 我これを
 言ばなりと 主エホバ言たまふ

エホバの言我に のぞみて 言ふ 人の子よ ツロの王のために 哀の詞を 述べ これに 言べし 主エホバかく言
 たまふ 汝は 全く 整へたる 者の 印 智慧の 充ち美の 極れる 者なり 汝神の 園エデンに 在りき 諸の 寶石 赤玉 黃玉
 金剛石 青綠玉 葱新碧玉 青玉 紅玉 瑪瑙 および 金 汝を 覆へり 汝の 立ちるゝ日に 手 腕と 脚 汝のために 備へ
 らる 汝は 膏を 塗がれ し ケルビムにして 掩ふことを 爲り 我汝を 斯なせしなり 汝神の 聖山に 在り 又 火の石の 間
 に 歩めり 汝はその 立ちし 日より 終に 汝の中に 惡の見ゆるに いたるまでは 其行 全かりき 汝の 交易の
 多きが ために 汝の中には 暴逆 滿ちて 汝罪を 犯せり 是故に 掩ふことを 爲す ところの ケルビムよ 我神の 山より 汝を 汚し
 出し 火の石の 間より 汝を 滅し去べし 汝その 美麗のために 心に 高ぶり 其榮耀のために 汝の 智慧を 汚したれば 我
 汝を 地に 擲ち 汝を 王等の 前に 置て 觀物とならしむべし 汝正しからざる 交易を なして 犯したる 多くの 罪を以て
 汝の 聖所を 汚したれば 我なんぢの中より 火を出して 汝を 燒き 凡て 汝を見る者 の目の 前にて 汝を 地に 灰となさん
 國々の中にて 汝を知る者 は 皆汝に 驚かん 汝は 人の 戒懼となり 限りなく 失果ん

エホバの言我に のぞみて 言ふ 人の子よ 汝の面を シドンに 向け これに向ひて 預言し 言べし 主エホバ
 かく言たまふ シドンよ 視よ 我汝の 敵となる 我汝の中において 榮耀を得ん 我彼らを 鞠き 我の 聖き事を 彼らに 顯す時
 彼ら 我のエホバなるを 知ん われ 疫病を 是に おくり その 衛に 血あらしめん その 四方より 是に 來るところの 劍に
 殺さるゝ者 その中に 仆るべし 彼らすなはち 我のエホバなるを 知ん イスラエルの 家には その 周圍に ありて 之を
 踐むる者 の所より 重て 惡き 荊棘 苦き 芒 刺來ることなし 彼らは 我の主エホバなるを 知に いたらん
 主エホバかく言ふ 我イスラエルの 家とその 散されたる 國々より 集めん時 彼らに 由りて 我の 聖き事を 異國人

の目の前にあらはさん彼らはわが僕ヤコブに與へたるその地に住ん 彼ら彼處に安然に住み家を建て葡萄園を作らん彼らの周圍にありて彼らを藐視する者を悉く我が鞠かん時彼らは安然に住み我エホバの己の神なるを知らん十年の十月の十二日にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よ汝の面をエジプトの王パロにむ

第二十九章

け彼とエジプト全國にむかひて預言し 語りて言べし主エホバかく言たまふエジプトの王パロよ

視よ我汝の敵となる汝その河に臥すところの鱈よ汝いふ河は我の所有なり我自己のためにこれを造れりと 我を汝の鰓に釣り汝の河の魚をして汝の鱈に附しめ汝および汝の鱈に附る諸の魚を汝の河より曳いだし 汝と汝の河の諸の魚を曠野に投ずてん汝は野の面に仆れん汝を取あぐる者なく集むる者なかるべし我汝を地の獸と天の鳥の餌に與へん エジプトの人々皆我のエホバなるを知らん彼等のイスラエルの家におけるは葦の杖のごとくなりき イスラエル汝の手を執ば汝折れてその肩を盡く裂き又汝に倚ば汝破れてその腰を盡く振へしむ 是故に主エホバかく言ふ視よ我劍を汝に持きたり人と畜を汝の中より絶ん エジプトの地は荒て空曠なるべし彼らすなはち我のエホバなるを知らん彼河は我の有なり我これを作れりと言ふ 是故に我汝と汝の河々を削しエジプトの地をミグドルよりスエネに至りエテオビアの境に至るまで 盡く荒して空曠くせん 人の足此を渉らず獸の足此を渉らじ四十年の間此に人の住ことなかるべし 我エジプトの地を荒して荒たる國々の中にあらしめんその曠々は荒て四十年の間荒たる邑々の中にあるべし我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん

但し主エホバかく言たまふ四十年の後我エジプト人をその散されたる諸の民の中より集めん 即ちエジプトの俘囚人を歸しその生れし國なるパタロス之地にかへらしむべし彼らは其處に卑き國を成ん 是は諸の國よりも卑くして再び國々の上にいづることなかるべし我かれらを小さくすれば彼らは重て國々を治むることなし 彼らは再びイスラエルの家の恃とならじイスラエルはこれに心をよせてその罪をおもひ出さしむることなかるべし彼らすなはち我の主エホバなるを知らん

茲に二十七年の一月の一日にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よバビロンの王ネブカデネザルその軍勢をしてツロにむかひて大に働かしむ皆首禿げ皆肩破る然るに彼もその軍勢もその爲るところの事業のためにツロよりその報を得ず 是故に主エホバかくいふ視よ我バビロンの王ネブカデネザルにエジプトの地を與へん彼その衆多の財寶を取り物を掠め物を奪はん是はその軍勢の報たらん 彼の勞動る値として我エジプトの地をかれに與ふ彼わがために之をなしたればなり主エホバこれを言ふ 當日に我イスラエルの家に一の角を生ぜしめ汝をして彼らの中に口を啓くことを得せしめん彼等すなはち我がエホバなるを知べし

第三十章

エホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よ預言して言へ主エホバかく言たまふ汝ら叫べ其日は禍なるかな その日近しエホバの日近し是雲の日これ異邦人の時なり 劍エジプトに臨まん

殺さるゝ者のエジプトに仆るゝ時エテオビアに痛苦あるべし敵その財寶を奪はんその基址は毀たるべし エテオビア人フテアル人凡て加勢の兵およびクブ人ならびに同盟の國の人々彼らとともに劍にたふれん 主エホバかく言ふエジプトを扶くる者は仆れ其處るところの勢力は失せんミグドルよりスエネにいたるまで人劍によりて己の中に仆るべし主エホバこれを言なり 其は荒て荒地の中にあり其邑々は荒たる邑の中にあるべし 我火をエジプトに降さん時又是を助くる者の皆ほろびん時は彼等我のエホバなるを知らん その日には使者船にて我より出てかの心強きエテオビア人を懼れしめんエジプトの日にありし如く彼等の中に苦痛あるべし 視よ是は至る

主エホバかく言たまふ我バビロンの王ネブカデネザルをもてエジプトの喧嘩を止むべし 彼および彼にしたがふ民即ち國民の中の暴き者を召來りてその國を滅さん彼ら劍をぬきてエジプトを攻めその殺せる者を國に

満すべし 我その河々を濁し國を悪き人の手に賣り外國人の手をもて國とその中の物を荒すべし我エホバこれを言り

主エホバかく言たまふ我偶像を毀ち神々をノフに絶さんエジプトの國よりは再び君のいづることなかるべし我エジプトの國に畏怖を蒙らしめん 我バテロスを荒しゾアンに火を擧げノに鞠を行ひ わが怒をエジプトの要害なるシンに洩しノの群衆を絶つべし 我火をエジプトに降さんシンは苦痛に悶えノは打破られノフは日中敵をうけん アベンとビベセテの少者は劍に仆れ其中の人々は擄ゆかれん ンバネスに於ては吾がエジプトの輓を其處に推く時に日暗くならんその誇るところの勢力は失せん雲これを覆はんその女子等は擄へゆかれん かく我エジプトに鞠をおこなはん彼等すなはち我のエホバなるを知べし

十一年の一月の七日にエホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ我エジプトの王パロの腕を折れり是は再び東へて藥を施し裏布を巻て之を裏み強く爲して劍を執にたへしむること能はざるなり 是故に主エホバかく言たまふ視よ我エジプトの王パロを罰し其強き腕と折たる腕とを俱に折り劍をその手より落しむべし 我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん 而してバビロンの王の腕を強くして我劍をこれに授けん然ど我パロの腕を折れば 彼は刺透されたる者の呻くが如くにその前に呻かん 我バビロンの王の腕を強くせんパロの腕は弱くならん我わが劍をバビロンの王の手に授けて彼をしてエジプトにむかひて之を伸しむる時は人衆我のエホバなるを知ん 我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん彼らすなはち我のエホバなるを知るべし

第三章

十一年の三月の一日にエホバの言我に臨みて云ふ 人の子よエジプトの王パロとその群衆に言へ汝はその大なること誰に似たるや アッスリヤはレバノンの香柏のごとし其枝美しくして生長りその丈高くして其嶺雲に至る 水これを大ならしめ大水これを高からしむ其川々その植れる處を環りその

流を野の諸の樹に及ぼせり 是によりてその長野の諸の樹よりも高くなりその生長にあたりて多の水のために枝葉茂りその枝長く伸たり 其の枝葉に空の諸の鳥巢をくひ其枝の下に野の諸の獸子を生みその蔭に諸の國民住ふ 是はその大なるとその枝の長きとに由て美しかりき其根多の水の傍にありたればなり 神の國の香柏これを蔽ふことあたはず概もその枝葉に及ばず概もその枝に如す神の國の樹の中その美しき事これに如ものあらざりき 我これが枝を多してこれを美しくなせりエデンの樹の園にある者皆これを羨めり

是故に主エホバかく言ふ汝その長高くなれり是は其嶺雲に至りその心高く驕れば 我これを萬國の君たる者の手に付さん彼これを處置せん其惡のために我これを打棄たり 他國人國々の暴き者これを截倒して棄つ其枝葉は山々に谷々に墮ち其枝は碎けて地の諸の谷川にあり地の萬民その蔭を離れてこれを遺つ 其倒れたる上に空の諸の鳥止まり其枝の上に野の諸の獸居る 是水の邊の樹その高のために誇ることなくその嶺を雲に至らしむることなからんためまた水に漏ふ者の高らかに自ら立ことなからんためなり夫是等は皆死に付されて下の國に入り他の人々の中にあり墓に下る者等と憎なるべし

主エホバかく言たまふ彼が下の國に下れる日に我哀哭あらしめ之がために大水を蓋ひその川々をせきとめたれば大水止まれり我レバノンをして彼のために哭かしめ野の諸の樹をして彼のために瘦衰へしむ 我かれを陰府に投くだして墓に下る者と共ならしむる時に國々をしてその墮る響に震動しめたり又エデンの諸の樹レバノンの勝れたる最良しき者凡て水に漏ふ者皆下の國に於て慰を得たり 彼等も彼とともに陰府に下り劍に刺れたる者の處にいたる是すなはちその助者となりてその蔭に坐し萬國民の中にをりし者なり

エデンの樹の中にありて汝は其榮とその大なること孰に似たるや汝は斯エデンの樹とともに下の國に投下され劍に刺透されたる者とともに刑體を受ざる者の中にあるべしパロとその群衆は是のごとし主エホバこれを言ふ

第三二章

茲にまた十二年の十二月の一日にエホバの言我にのぞみて言ふ 人の子よエジプトの王パロの
ために哀の詞を述べて彼に言ふべし汝は自ら萬國の中の獅子に擬へたるが汝は海の鱷の如くなり汝
河の中に跳起き足をもて水を濁しその河々を踏みだす 主エホバかく言たまふ我衆多の國民の中に
汝に打掛け彼らをしてわが網にて汝を引あげしめん 而して我汝を地上に投ずて汝を野の面に擲ち空の諸の
鳥をして汝の上にとらしめ全地の獸をして汝に飽しむべし 我汝の肉を山々に遺て汝の屍を堆くして谷々
を埋むべし 我汝の溢るゝ血をもて地を濕し山にまで及ぼさん谷川には汝盈べし 我汝を滅する時は空を蔽
ひその星を暗くし雲をもて日を掩はん月はその光を發たざるべし 我空の照る光明を盡く汝の上に暗くし汝
の地を黑暗となすべし主エホバこれを言ふ 我なんぢの滅亡を諸の國民の知ざる國々の中に知しめて衆多の
民をして心を傷ましめん 我衆多の民をして汝に驚かしめんその王等はわが其前にわれの劍を振ふ時に戰慄か
ん汝の作るゝ日には彼ら各人その生命のために絶す發振ん

即ち主エホバかく言たまふバビロンの王の劍汝に隨まん 我汝の群衆をして勇士の劍に仆れしめん彼
等は皆國々の暴き者なり彼らエジプトの驕傲を絶さん其の群衆は皆ほろぼさるべし 我その家畜を盡く多の
水の傍より絶去ん人の足再び之を濁すことなく家畜の蹄これを濁すことなかるべし 我すなはちその水を清
しめ其河々をして油のごとく流れしめん主エホバこれを云ふ 我エジプトの國を荒地となしてその國荒てこれ
が畜を失ふ時また我その中に住る者を盡く撃つ時人々我のエホバなるを知ん 是哀の詞なり人悲みてこれ
を唱へん國々の女等悲みて之を唱ふべし即ち彼等エジプトとその諸の群衆のために悲みて之を唱へん主エホバ
これを言ふ

十二年の月の十五日にエホバの言また我に臨みて言ふ 人の子よエジプトの群衆のために哀き是と大なる
國々の女等とを下の國に投ぐだし墓にくだる者と共ならしめよ 汝美しき事誰に勝るや下りて割禮なき

者とともに臥せよ 彼らは劍に殺さるゝ者の中に仆るべし劍已に付してあり是とその諸の群衆を曳下すべし
勇士の強き者陰府の中より彼にその助者と共に言ふ割禮を受ざる者劍に殺されたる者彼等下りて臥す
彼處にアッスリヤとその凡の群衆をりその周圍に之が墓あり彼らは皆殺され劍に仆れたる者なり かれ
の墓は穴の奥に設けてありその群衆墓の四周にあり是皆殺されて劍に仆れたる者生者の地に畏怖をおこせし者
なり

彼處にエラムありその凡の群衆その墓の周圍にあり是皆ころされて劍に仆れ割禮を受ずして下の國に下り
し者生者の地に畏怖をおこせし者にて夫穴に下れる者等とともに恥辱を蒙るなり 殺されたる者の中にその床
を置きてその凡の群衆と共にすその墓周圍にあり彼等は皆割禮を受ざる者にして劍に殺さる彼ら生者の地に畏怖
をおこしたれば穴に下れる者とともに恥辱を蒙るなり彼は殺されし者の中に置る

彼處にメセクとバルおよびその凡の群衆ありその墓周圍にあり彼らは皆割禮を受ざる者にして劍に殺さ
る是生者の地に畏怖をおこしたればなり 彼らは割禮を受ずして仆れたる勇士とともに臥さす是等は其の武器
を持って陰府に下りその劍を枕にすその罪は骨にあり是生者の地に於て勇士を畏れしめられたればなり 汝は割禮を
受ざる者の中に打碎け劍に殺されたる者とともに臥ん

彼處にエドムとその王等とその諸の君等あり彼らは勇力もちながら劍に殺さるゝ者の中に入り割禮なき
者および穴に下れる者とともに臥すべし 彼處に北の君等皆あり又シドン人皆あり彼らは殺されし者等とともに
下り人を怖れしむる勇力もちて羞辱を受く彼處に彼らは割禮を受ずして劍に殺されたる者とともに臥し穴に
下れる者とともに恥辱を蒙る

パロかれらを見その諸の群衆の事につきて心を安めんパロとその軍勢皆劍に殺さる主エホバこれを言ふ
我かれをして生者の地に畏怖をおこさしめたりパロとその諸の群衆は割禮をうけざる者の中にありて劍に

殺されし者とともに臥す主エホバこれを言ふ

第三章

爰にエホバの言われに臨みて言ふ 人の子よ汝の民の人々に告て之に言へ我剣を一の國に臨ま

しめん時その國の民おのれの國人の中より一人を選みて之を守望人となさんにかれ國に劍の臨

むを見ラッパを吹てその民を警むることあらん 然るに人ラッパの音を聞て自ら警めず劍つひに臨みて其人を

失ふにいたらばその血はその人の首に歸すべし 彼ラッパの音を聞て自ら警むることを爲さればその血は己に

歸すべし然どもし自ら警むることを爲ばその生命を保つことを得ん 然れども守望者劍の臨むを見てラッパを

吹す民警戒をうけざるあらんに劍のぞみて其中の一人を失はば其人は己の罪に死るなれど我その血を守望者の手

に討問めん 然ば人の子よ我汝を立てイスラエルの家の守望者となす汝わが口より言を聞き我にかはりて彼等を警むべ

し 我惡人に向ひて惡人よ汝死ざるべからずと言んに汝その惡人を警めてその途を離るゝやうに語らば惡人

はその罪に死なれどその血をば我汝の手に討問むべし 然ど汝もし惡人を警めて翻へりてその途を離れしめ

んとしたるに彼その途を離れずば彼はその罪に死ん而して汝はおのれの生命を保つことを得ん 然ば人の子よイスラエルの家に言へ汝らは斯語りて言ふ我らの愆と罪は我らの身の上であり我儕はその中

にありて消失ん争でか生ることを得んと 汝かれらに言べし主エホバ言たまふ我は活く我惡人の死るを悦ばず

惡人のその途を離れて生るを悦ぶなり汝ら翻へりてその惡き道を離れよイスラエルの家よ汝等なんぞ死べ

けんや 人の子よ汝の民の人々に言べし義人の義はその人の罪を犯せる日にはその人を救ふことあたはず惡人

はその惡を離れたる日にはその惡のために仕るゝことあらじ義人はその罪を犯せる日にはその義のために生るこ

とを得じ 我義人に汝かならず生べしと言んに彼その義を待みて罪をかさばその義は悉く忘らるべし其をか

せる罪のために彼は死べし 我惡人に汝かならず死べしと言んに彼その惡を離れ公道と公義を行ふことあらん

即ち惡人質物を歸しその奪ひし者を還し惡をなますして生命の憲法にあゆみんば必ず生ん死ざるべし 其の

犯したる各種の罪は記憶らるゝことなるべし彼すでに公道と公義を行ひたれば必ず生べし 汝の民の人々は主の道正しからずと言ふ然ど實は彼等の道の正しからざるなり 義人もしその義を離れ

て罪をかさば是がために死べし 惡人もしその義を離れて公道と公義を行ひなば是がために生べし 然るに汝らは主の道正しからずといふイスラエルの家よ我各人の行為にしたがひて汝等を鞠くべし 我らが據へうつされし後すなはち十二年の十月の五日にエルサレムより脱逃者きたりて邑は撃敗られたりと言ふ 其の逃亡者の來る前の夜エホバの手我に臨み彼が朝におよびて我に來るまでに我口を開けり斯わが口開けたれば我また黙せざりき 即ちエホバの言われに臨みて言ふ 人の子よイスラエルの地の彼の墟地に住る者語りて云ふアブラハムは一人にして此地を有てり我等は衆多し此地はわれらの所有に授かると 是故に汝かれらに言ふべし主エホバかく言ふ汝らは血のまゝに食ひ汝らの偶像を仰ぎ且血を流すなれば尙此地を有つべけんや 汝等は劍を待み憎むべき事を行ひ各々人の妻を汚すなれば此地を有つべけんや 汝かれらに斯言べし主エホバかく言ふ我は活くかの荒場に居る者は劍に仆れん野の表にをる者をば我獸にあたへて噬はしめん要害と洞穴とにをる者は疫病に死ん 我この國を全く荒さん其誇るところの權勢は終に至らんイスラエルの山々は荒て通る者なかるべし 彼らが行ひたる諸の憎むべき事のために我その國を全く荒さん時に彼ら我のエホバなるを知ん 人の子よ汝の民の人々垣の下家の門にて汝の事を論じ互に語りあひ各々その兄弟に言ふ去來われら如何なる言のエホバより出るかを聽んと 彼ら民の集會のごとくに汝に來り吾民のごとくに汝の前に坐して汝の言を聞ん然ども之を行はじ彼らは口に悅ばしきところの事をなし其心は利にしたがふなり 彼等には汝悅ばしき歌美しき聲美く奏る者のごとし彼ら汝の言を聞ん然ど之をおこなはじ 觀よその事至る其事のいたる時には彼ら